

---

# 魔法少女リリカルなのは Brave

mebius

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは Brave

### 【Nコード】

N9104G

### 【作者名】

m e b i u s

### 【あらすじ】

なのはの二次創作です。オリキャラが出てくるので、それが嫌な人は引き返して下さい。初投稿なので文章は下手だと思えますがよろしく願います。

## プロローグ（前書き）

何故か一話の後にプロローグを投稿することになってしまいました。それに約半月も間が空いてしまいました。誠に申し訳ございません。次話の投稿も期末テストが近いので7月に入ってからになるかもしれませんが、なるべく早く投稿できる様にかんばる所存です。

## プロローグ

時刻は午前二時、海鳴湾の沖に五人の人影が浮かんでいた。

? 1

「ここに例のロストロギアが眠っているんだな？」

? 2

「はい。そのはずですよ」

? 3

「これを使えば私達の世界も……」

? 4

「お姉ちゃん、泣くのはまだ早いよ」

? 3

「なっ！泣いてないわよ！」

? 5

「目に涙が溜まってたぞ」

? 3

「だから！泣いてないってば！」

? 4 / 5

「ははははははー！」

? 1

「2人ともその辺にしておけ。( ? 3の名前) がデバイスを取り出したぞ」

? 3

「いい加減にしないと私の剣の錆にするわよ?」

? 4

「お姉ちゃん、ごめんなさい!」

? 5

「すまん!許してくれ!」

? 1

「ほら。2人とも謝ってるんだ。許してやれ」

? 3

「仕方ないわね。わかったわよ」

ピッ (通信が入る音)

? 6

「相変わらず仲が良いね。君達兄弟は」

? 2

「D。お久しぶりです」D

「久しぶりだね。さて、それでは本題に入ろうか。例のロストロギアは見つかったかな?」

? 1

「はい。見つかりました」

D  
「それは良かったね。これで漸く君達の世界が復活するね。おめでとぅ」

? 1  
「ありがとうございます。Dがいなければ私達は今頃次元世界をさまよっていたでしょう」

D  
「気にすることはないよ。ところで例のロストロギアを起動するには莫大な魔力が必要だがそれはどうするのかね？」

? 1  
「それは私達自身の魔力を使おうと思っています」

D  
「まあ君達の魔力は五人共Aランク越えだしからね。でも、それでもまだ足りないんだ。少なくともAランク以上の魔導師二人分はいるんだよ」

? 2  
「！本当ですか!？」

D  
「ああ、本当だよ。例のロストロギアについて書かれた文献によるとAランク以上の魔導師七人分の魔力が必要なんだ」

? 2  
「どうしましょう、お兄様」

? 1

「……仕方ない。時間はかかるが他の次元世界に生息する魔法生物から魔力を奪おう」

? 2

「そうですね。時間はかかりますが、それが確実だと思います」

D

「それがそうもいかないんだよ。そのロストロギアには起動できる周期があつてね。10年に一度、その周期がくるんだか……」

? 3

「どづしたのよ?」

D

「それが5日後なんだ」

? 1 / 2 / 3 / 4 / 5

「……なつ!?!」「……」

D

「いくら君達が強くてもAランク以上の魔導師2人分の魔力を集めるには短くても10日はかかるだろう?つまりそのロストロギアを起動するにはAランク以上の魔導師2人から魔力を奪わなければならないんだ」

? 4

「でも!そんな簡単にAランク以上の魔導師を2人見つけられる訳がないんだよ」……え?」

D  
「君達が今いる海鳴市にAランク以上の魔導師が5人以上いるんだ  
よ」

? 5

「だ、だとしても見ず知らずの人から魔力を奪うのは…」

D

「君達の事情を知ればその人たちも許してくれるさ」

? 3

「で、でも…」

? 1

「…仕方ない。Dの言う通り魔導師から魔力を奪うぞ」

? 4

「に、兄さん!?!」

? 1

「魔力を奪った魔導師には全てが終わってから謝ろう。いざという  
時には俺が全ての責任を負う」

? 3

「兄さんがそこまで言うのなら私も兄さんに従うわ」

? 5

「俺も兄貴に従うぜ」

? 4

「わ、私も」

? 2

「私もお兄様に従います」

? 1

「みんな……。ありがとうございます」

D

「ふむ……。ではその魔導師たちのデータをそれぞれのデバイスに送  
つておこう」

? 1

「ありがとうございます」

D

「いや、気にすることはないよ。それでは頑張ってくれたまえ」

ブツツ（通信が切れる音）

? 1

「それではみんな。ターゲットの搜索は2人一組で行う。俺は一人  
で大丈夫だから（? 2）と（? 5）、（? 3）と（? 4）のペアと  
俺の計三組で搜索する。なるべくターゲットが一人の時を狙え。タ  
ーゲットを発見したら他の二組に連絡し、その二組は周辺の警戒を  
する。他の魔導師が援護してくるかもしれないからな。それから襲  
撃時は結界を張れ。関係のない者は巻き込むな。わかったな？」

? 2  
5

「「「はい！」「」」

？  
1

「それでは、搜索開始！」

五人の人影は男の声を合図に一瞬で散った…

## 第一話 出会い

俺の名前は日比野未来。私立聖祥大学付属中学校に通う三年生だ。普通なら受験について考える歳だが俺はあまり考えていない。まあ、理由を説明すると長くなるが説明しよう。

俺は三年前まで別の場所で暮らしていた。そしてその場所というのがミッドチルダだった。俺はそこで両親と一緒に暮らしていて、こんな生活がずっと続いて欲しいと思っていた。

しかし、ある日事件が起きた。

それは両親が管理局の仕事で別の次元世界へ出張している時のことだった。

俺がいつも通り学校で友達と談笑していると先生が呼んできた。

俺は何事かと思いつながら先生についていくと両親の同僚で何度か会ったことのある管理局の人がいた。その人は俺の顔を見ると俺の両親が出張先で事故死したことを教えてくれた。俺はその時、その事を理解できなかった。いや、理解しなくなかった。の方が正しいか数日前までは普通に話していて、その日々がこれからも続くと思っていた。しかし、そんな日々もいつかは終わることを俺は知っていた。

それから両親の葬式も終わり、俺は海鳴市にある叔父夫婦の家に住むことになった。

しかし俺は両親を失ったショックで、ろくに学校にも行かず近所の不良に喧嘩をふっかけていた。そしてついには高校生にも勝てるようになっていた。警察沙汰になったこともあったが、叔父夫婦は俺のことを叱らなかつた。

俺はそれが不可解だった。

そしてもう一つ不可解なことがあった。

それは叔父夫婦の娘の行動だ。

その娘はまだ小学校二年生で俺のことが怖かったであろう筈なのに

俺に優しくしてくれた。

何度無視しても俺を気にしてくれた。

そしてある事件を期に俺はショックから立ち直り、学校にも行くようになった。

まあ、友達が出来なかったが。

中学生になっても友達が出来なかった。

いや、作ろうとすれば作れたかもしれないが俺は一人でいることを選んだ。おっと、話がそれたな。それで何故受験について考えていないかというところと中学校を卒業したらミッドチルダの家に帰ると決めたからだ。これ以上叔父さんたちに迷惑をかけたくなかったしな。そしてミッドチルダに戻ったら管理局に入ろうと思っている。

今はまだ私立聖祥中で普通の中学生として過ごしている。それでは、魔法少女リリカルなのは Brave 始まります。

ピピピピッ、ピピピピッ、ピピピピッ、ピピッ。

「ん……。朝か」

時刻は6時。俺は今年度一杯、海外に赴任することになった叔父夫婦の代わりに家事をやっているため、いつもこの時間には起きている。

俺は着替えてから夜中の内に洗濯しておいた衣類をベランダに干していく。洗濯が終わったら次は朝食と弁当の準備である。米を炊飯器にセットし炊き始める。一時間ぐらいで炊けるだろう。その間に俺はおかずを作っていく。米も炊け、弁当箱への詰め込みや、朝食の配膳も終わると時間は7時半だった。そろそろカコを起こさないと遅刻する。

ちなみにカコというのは叔父夫婦の娘で俺にとっては従妹だ。現在

は小学五年生で私立聖祥大学付属小学校に通っている。また、カコも昔はミッドチルダにすんでいて嘱託魔導師の資格を持っている。

「カコ！そろそろ起きろ！」

「はい。お兄ちゃん、おはよう」

「おはよう。寝癖直してこい。すごいことになってるぞ」

「えっ！？本当！？」

カコは髪を押さえながら洗面所に走っていった。カコの髪は長く腰までであるが、くせがないため寝癖等はすぐに直る。

カコが戻ってきたので一緒に朝食を食べ、家を出る。時間は8時。家から学校までは十五分くらいで行けるのでのんびりと歩いていく。カコは俺が元の家に帰ると知ってからというもの前よりも甘えるようになり、今も俺の左手を握っている。

家を出て少し歩くと五人の少女が高校生らしき男たちからまれていた。しかたない…。

「カコ、ちょっと下がってる」

「えっ？どうしたのお兄ちゃん？」

「ちょっとあいつらをどかしてくる」

そう言つとカコは俺の手を離してくれた。俺は男たちに近づき肩を叩く。

するとその男は

「あ？」とか言いながらこちらを向いた。見るからに不良といった

感じた。

「お前ら邪魔。どけよ」

「はあ？お前何言ってるの？怪我したくなかったらさっさと謝りな」

「だからどけつつつってんだろ。邪魔なんだよ」

「つつ！うぜえんだよ！」

男の一人が殴りかかってくる。

少女たちが息をのむのがわかった。

しかし俺はその拳を左手で受け止め、右足を男の脇腹に叩き込み気絶させる。

残りの男たちはそれを見て一人ではかなわないと思ったのか一斉に殴りかかってきた。

俺は一人目のストレートをしゃがんでかわし、鳩尾に左の拳を叩き込む。

次に左から迫る男の鳩尾に左肘を叩き込み、右から迫る男の足を引っ掛け、こつちに倒れてくるのを利用し顎にアッパーを入れる。これで後一人。すると最後の男がナイフを取り出しこちらに向かって突進してきた。それをかわし、ナイフを持っている方の手をひねる。男がナイフを落としたのを確認し、首に手刀を叩き込み気絶させる。少女たちの方を見ると呆然としていた。見る限り怪我は無さそうだが一応聞いてみるか。

「大丈夫か？怪我とかないか？」

「えっ？あ、はい。大丈夫です」

「そうか。じゃあな。カコ！行くぞ！」

「うん。お兄ちゃん」

少女たちが何か言いたそうな顔をしていたが俺は気づかないふりをしてその場を離れた。礼を言われるのは苦手だからな。

「ねえ、お兄ちゃん」

「ん？何だ、カコ？」

学校に向かって歩いているとカコが話しかけてきた。

「何である人たちを助けたの？」

「え？うーん……。目の前に困ってる人がいて、自分がそれを助けられる力を持っているにもかかわらず見て見ぬふりをするのが嫌だったからな。それに昔喧嘩してた奴らに比べたら雑魚だったからな」

「そうなんだ。やっぱりお兄ちゃんは優しいね」

「いや、俺は優しくなんかないよ。三年前だって叔父さんたちに迷惑かけまくったしな。お前にも迷惑かけたし……」

「お兄ちゃんは優しいよ！それに私は迷惑だなんて思ってない！」

「ありがとう、カコ。その気持ちだけで嬉しいよ」

「お兄ちゃん……」

その後は学校に着くまで会話する事もなかった。学校に着き、カコと別れ教室に入り席に座ると一人の女生徒が話しかけてきた。

「どうしたの、未来？何か元気ないけど」

「のぞみか…」

こいつの名前は相原のぞみ。俺がミッドチルダに住んでいたころの幼馴染みだ。二年前にこの学校に転校してきた時はかなり驚いた。ちなみにこいつも囑託魔導師だ。

「登校時にいろいろあったんだよ」

「いろいろって？」

「ああ、それはな…」

俺はのぞみに登校時、五人の女子を不良から助けたこと、その後にかコから優しいと言われそれを否定したこと、三年前にあったことを話した。

「そんなことがあったんだ…」

「ああ、あったんだよ」

これでのぞみも俺のことを放っておいてくれるだろう。

「バツカじゃないの」

「……は？」

今こいつ何て言った？バカ？何故？

「あんたが優しくくない？何バカなこと言ってるのよ。あんた、ここに引越してくる前でも困ってる人がいたら知らない人だろうが関係なく助けてたじゃない。そういうのを優しくいつて言うのよ。だいたいあんたが優しくくないんだったら世界のほとんどの人が優しくないわよ」

「それは大袈裟じゃないか？」

「大袈裟じゃないわよ。それだけあんたは人に優しくしてるのよ」

「そうか……」

俺は優しいのか。後でカコに謝らないとな。

「サンキュー。のぞみ」

「別に良いわよ。それじゃ、そろそろ席に戻るわね」

「おっ」

そして順調に授業を終え、昼休み

俺は四限目が終わると同時に弁当を持って屋上に来ていた。俺がいるのは屋上に通じるドアがある建物？の上のスペースだ。俺はいつもここで弁当を食っている。ここは人があまり来ないから昼休みに俺がここにいるのを知っている奴はいない。

「さてと。弁当食うか」

そう眩き弁当箱の蓋に手をかけると…

ガチャッ

「わあ。たまには屋上に来るのもいいね」

誰かが屋上に来たようだ。誰だ？屋上に来るような物好きは？

俺はそうつと頭を出して覗いてみると…

「げっ」

そこには六人の少女がいた。一人はのぞみ、あとの五人は今朝助けた少女たちだった。あいつらは仲がいいのか？

「あれ？今何か聞こえなかった？」

「何か？別に聞こえなかったけど」

「気のせいじゃない」

「そうかな…」

のぞみたちが会話している。くそつ。何であいつらが屋上に来るんだよ。どうする。あいつらが出てくまでおとなしくしているか？それが一番安全だな…。

「あ、ねえねえみんな。もう一人呼んでもいい？」

なんてのぞみが言いやがった。にしても誰だ？もう一人つて。何か嫌な予感がするが…。

「別にいいわよ。ねえ、みんな？」

「「「いいよ」「」/  
「かまへんよ」

「ありがとう。未来ー！出て来なさい！いるのはわかってるのよー！」

「バレてるー！！！！」

「…どうしてわかったんだよ」

俺はのぞみたちから見える場所に行き聞いた。

「あつ。本当にいたんだ」

「うおい！カマかけただけかよ！」

「あれ？君って今朝の…」

少女たちが驚いたような顔をしながら言ってくる。

「よお。また会ったな」

「あれ？未来、なのはちゃんたちのこと知ってるの？」

「ああ。こいつらなんだよ。今朝助けたのは」

「そうなんだ」

「今朝は助けてくれてありがとうございます。私は三年二組の高町なのはって言います。家は喫茶翠屋です。よろしくね」

「フェイト・T・ハラオウンです」

「八神はやてや。よろしくな」

「アリサ・バニングスよ。よろしく」

「月村すずかです。よろしくお願いします」

「日比野未来だ。趣味は読書。クラスはのぞみと同じ三組だ。よろしくな」

俺達は自己紹介をし、弁当を食べ始める。俺はさっさと食い終わり屋上から出ていこうとした。が…

「ねえねえ、未来君ってどういう本を読むの？」

と質問された。

今度は質問攻めか。こりゃ逃げられねえな。

「俺が読むのはたいてい推理モノだ」

「おすすめの本とかあるん？」

「国内では江戸川乱歩の少年探偵団シリーズ。国外ではコナン・ドイルのシャーロック・ホームズシリーズが読みやすいな」

「何であんなに喧嘩強いのよ？」

俺はアリサの質問に少し固まってしまった。まあ、普通なら気にな

るよな。

「…少し長くなるがいいか？」

「う、うん…」

俺の声の調子が少し下がったのに気づいたのか、なのはたちの表情が少し真剣になった。

そして俺は三年前のことをなのはたちに話した。住んだ場所は関東だとかまかしたが。話が終わる頃にはなのはたちは申し訳なさそうな表情をしていた。

「ごめんね。つらいこと聞いちゃって」

「お前らが気にすることじゃない。随分前のことだしな」

「……うん」

「それで他には質問はないのか？ないなら俺は教室に戻るぞ」

俺は早くこの雰囲気から抜け出したいためにそう言った。するとなのはたちが慌てて質問してきた。

「その叔父夫婦の娘って今朝の子？」

「ああ、そつだぞ」

その後は予鈴が鳴るまで会話をした。この平和がいつまでも続くように願いながら。

## 第二話 襲撃（前書き）

期末テストが近いにも関わらず執筆してしまいました。これから死ぬ気で勉強しないと…

## 第二話 襲撃

そして放課後

俺は下校するために教科書等をまとめていた。他の奴らは部活があるためそれぞれの部活の準備をしている。まあ、俺は帰宅部だから関係ないが。ついでに言うとのぞみも帰宅部だが運動神経が良いため様々な部活に助っ人として参加している。

教科書等を入れたバッグを背負い教室を出た。昇降口に向かう途中、なんとなく二組の教室を覗いてみるとまだHRが終わっていないらしい。いや、三組が終わるのが早かっただけか。

俺は学校を出るとすぐに家の近所にあるスーパーマーケットに向かった。叔父夫婦が海外に行つてからは俺が家事をやっているからだ。俺はスーパーで食材を買つと家路についた。日はすでに沈んでおり、街灯が照らす薄暗い道を歩いていた。すると…

キーン

「っ！なんだ!？」

突然辺りに金属音に似た音が鳴り響いたと思つたら、空に輝いていた星々が消え、灰色に覆われた。

『マスター。結界の反応があります』

未来の左腕に着いている腕輪から声が響いた。この腕輪は未来のデバイス、メビウスリングの待機形態である。

「誰かがこの結界を張つたか…。一体何の為に？メビウスリング、この結界の機能は分かるか？」

『はい。この結界は人除けの機能があるようです。現在結界の内部にいるのは私達と結界を張った者達だけだと思われます』  
未来が狙われる理由を考えていると

「ということは狙いは俺か…？でもなんのために…」

未来が自分が狙われる理由について考えていると…

「お前、魔導師か？」

「!?!」

声が出たほうを見てみるとそこには2人の男女がいた。見た目は未来と同じような歳で、少年は巨大な刃がついている斧型のデバイスを、少女は槍型のデバイスを持っている。

「そつだが…。お前等は何者だ？何故結界を張つた？」

目の前にいる奴らが結界を張つたと確信し、尋ねる。が…

「お前には関係ない。キリュウ、こいつの名前は？」

少年が少女・キリュウと言つらしい。に尋ねると、空中に画面を出して操作し始めた。

「この人は日比野未来。管理局の囑託魔導師でランクはAAAです。  
お兄様」

「!?!」

少女が自分の名前等を知っていることに未来が驚いていると、少年はデバイスを未来に向け構えた。

「わかった。奴とは俺が直接戦う。キリユウは援護を頼む」

「わかりました」

少年は少女の返答を聞くと未来に話しかけた。

「お前に恨みはねえがその魔力、頂くぜ」

『flash move』

デバイス特有の機械的な声が響くと少年は未来の目の前で斧を振りかぶっていた。

「っ！くそ！」

横風ぎに振るわれた斧を瞬時に後ろに飛んで回避し、未来は自身のデバイスを呼びかける。

「メビウスリング！セットアップ！」

『set up』

未来の体を青色の光が包むと、次の瞬間にはバリアジャケットを身に纏い両刃の剣を両手で構えた未来がそこにいた。

「おい！何でいきなり攻撃してくる！？」

「お前には関係ないって言ってんだろっが！」

激しく切り結びながらも未来は少年に語りかけ続けるが、少年は一向に答えてくれない。

「お兄様！退いて下さい！」

キリユウの声に少年はすぐに後退する。それに未来は追撃をかけようとしますがそれをキリユウが許す筈もない。

「ニードルショット！シュート！」

『needle shot・shoot』

キリユウが円錐形のスフィアを約30個程放ってきたため、未来は追撃するのを止めた。

「メビウスリング！ソードモード！」

『trident form』

突如メビウスリングはその形態を棒の両端に三つ又の槍がついたような形に変えた。

『Protection』

未来の前に光の膜のようなバリアが現れスフィアを防いでいくが…

「アープ！カートリッジロード！」

『Load cartridge』

スフィアに気がとられている隙に少年が未来に近づいてきた。

「爆砕刃！」

未来は振り下ろされた斧を再び後ろに飛んで回避しようとするが…

「ぐわ！」

振り下ろされた斧によって砕かれたコンクリートの破片がさまざまな速度で未来の体を貫こうとする。未来はそれをかろうじて弾き、急所に当たるのだけは防いだが、バリアジャケットは所々が破け、袖口からは血が流れている。

「よく防いだな。だが次で終わりだ。キリュウ！」

「わかりました。お兄様」

少年が後退し、キリュウに呼びかけると同時にそれぞれの足下に魔法陣が出現した。

「アープ！」

「コスモス！」

「カートリッジロード！」

『『Load cartridge』』

『burn cannon』

『lightning spear』

それぞれのデバイスは2つずつ空薬莖を排出すると、少年の前には赤色の、キリュウの前には黄色の魔力球が現れた。

『マスター。彼らは砲撃を放とうとしています』

「わかってる。こつちもやるぞ。カートリッジロード！」

『Load cartridge · burning blast  
』r e』

メビウスリングから空薬莖が3つ排出され、未来の前に青い魔力球が現れる。そして、それぞれの魔力球がだいぶ大きくなり、少年とキリュウは砲撃を放った。

「バーンキャノン！」

「ライトニングスパーク！」

放たれた砲撃は途中で合流し、Sランク級の砲撃となり未来に向かっ  
ていく。2人はこれで終わったと思ったが…

「バーニングブラスター！」

未来から放たれた青い光が2人が放った光とぶつかり、一際強く輝  
いたかと思うと、次の瞬間には2つの砲撃は消えていた。

「なっ！Sランク級の砲撃を相殺された！？キリュウ！本当にあいつのランクはAAAなのか！？」

「た、確かにデータにはAAAランクって書いてあります！私にも何がなんだか…」

「おい」

「「！？」」

突然話しかけられたために、2人は再びデバイスを構えた。対する未来は呆れたように2人を見て口を開いた。

「お前等いつの話してんだ？それは三年前の記録だ。今の俺のランクはSランクぐらいはあるんだよ。下調べしてくるんならもっとしつかり調べてからきな」

「くっ、仕方ない。キリュウ、ここはひとまず退くぞ」

「わかりました。お兄様」

少年達はそう悔しそうに言うのと転送魔法を使い姿を消した。少年達が消えると同時に張られていた結界はとけ、未来はバリアジャケットを解除した。

「一体なんだったんた？あいつらは」

未来はそう呟くと再び、家路についた。

「ただいま」

未来が扉を開け、家に帰ると奥の方からドタドタと足音がしてきた。

「お兄ちゃん、おかえり…ってどうしたのその怪我！？救急箱取ってくるね！」

未来の怪我を見てカコは慌てて奥の方へ走っていった。

十分後

「お兄ちゃん、何でこんなに怪我してるの？」

「……………」

治療が終わり未来達はリビングで向かいあっていた。カコは心配そうに未来に質問し、未来なそれに答えず黙ったまま。治療中からこの状況は続いている。

（本当のことを言おうにも言ったら

「なんで私に連絡しなかったの！？」って言われるだろうし…。か  
とって嘘をつこうにも変に勘がいいからバレる恐れもあるし…。  
仕方ない、本当の事を言うか）

「それで、どうしてそんなに怪我してるの？」

「さっき魔導師に襲われたんだよ。2人組の」

「ま、魔導師に襲われたあ！？一体何で！？」

「落ち着け。理由はわからん。まあ、

「魔力を貰いうける」とか言ってたし奪った魔力で何かをしようとしてるんだろっな」

「そ、それで大丈夫なの？お兄ちゃん」

「あのなあ、今お前が手当てしてくれただろうが」

「そ、そっか。そうだったね。あつ、一応管理局に報告しないと」

そう言つてネックレス型のデバイス・ガイアを取り出し管理局に通信を繋げようとした。

「いや、管理局にはまだ言わないでおこう。言った所で何か行動するとは限らないしな」

「…うん、わかった」

そう言つてカコは渋々デバイスをしまった。兄を傷つけた輩を野放しにはしたくないのだろう。未来はその気持ちに気づいたのかカコの頭を優しく撫で始めた。

「まあ気にすんな。それより明後日から夏休みだろ？その間の予定でも決めようぜ」

「…うん！お兄ちゃん、夏休みになったら一緒にプール行こうね！」

「ああ。楽しみだな」

「うん！」

満面の笑みを浮かべるカコに未来は優しく微笑んだ。  
その願いが叶わないことになるとも知らずに…

### 第三話 少女達の危機と助けに入る者達（前書き）

すいませんでした！前回の投稿から既に約1ヶ月もかかってしまいました。本当にすみません。

なお、今回は少し長めです。評価・感想の程、よろしくお願いします。

### 第三話 少女達の危機と助けに入る者達

次の日

その日、学校では終業式が行われ生徒達は明日から始まる夏休みに浮かれていた。それは管理局の魔導師であるなのは達も例外ではなく、明日から何をして過ごすか五人で話しながら下校した。が、なのはは翠屋の手伝いをしなければならぬということの後日、みんなが集まって決めることになった。

喫茶翠屋

なのはは学校が午前中で終わったため、お店の手伝いをしていた。

「いらっしやいませ。四名様ですか？お席へご案内いたします」

「こちらお水になります。ご注文がお決まりになりましたらお呼び下さい」

「ご注文は……。かしこまりました。ご注文の方、繰り返します」

と、客が多い為なのはは忙しく働いていた。そして客足がだいぶ落ち着いてきたため、なのはは少し休憩していた。

「ふう。今日はいつもよりお客さんが多いから疲れるね」

「なのは、ちょっといいかしら？」

「なに？お母さん」

なのはが休んでいるとなのはの母親である高町桃子である。とても三児の親とは思えないほど若々しい。もうすぐよ…

「あら？女性の年齢を言うなんて失礼よ？作者さん」

「すみません、すみません、すみません、すみません！もう言わないので笑顔で拳を握りしめないで下さい！！かなり恐いです！！！！」

「分かればいいのよ」

「た、助かった…（汗）」

「お母さん？どうかしたの？」

「何でもないわよ。ところでなのは」

桃子は再びなのはの方を向いた。

「コーヒーに入れるミルクとガムシロップがもうすぐ切れそうなの。注文したやつが届くのも明日だから今日の分を買ってきてくれないかしら？」

「うん、わかった。他に何か買ってくるものはある？」

「それじゃあお夕飯の買い物もお願い。カレーにするつもり何だけど材料がいくつか足りないのよ。じゃが芋と人参、あとトマトをお願いね」

「わかった。それじゃあ行ってきます」

「行ってらっしゃい」

そしてなのは歩いて十分程にあるスーパーに向かった。

三十分後

なのは買ったものが入ったレジ袋を両手に持って家に向かっていった。すると突然…。

『マスター。封鎖結界の反応を確認。範囲を拡大中。展開位置はすぐ近くです』

「封鎖結界！？昨日もすぐに消えたとはいえ反応があったし…。また何か事件？」

『マスター！何者かが接近中！気をつけて下さい！』

レイジングハートが忠告すると同時に左から誰かが切りかかってきた。

「くっ」

『Protection』

反射的にプロテクションを張り斬撃を防ぐと相手はなのはから距離を取った。その間になのははバリアジャケットを展開し改めて相手を見て…

「えっ？」

驚いた。

なぜなら・・・2人組の全く同じ容姿をした少女がそこにいたからだ。同じ髪型、同じ顔立ち、同じバリアジャケット、同じデバイス。なにからなにまで同じ二人だ。なのはは初め、双子だと思ったがすぐにその考えを捨て、片方は幻術で作り出したフェイクシルエットだろうと考えた。

「ルルイエ起動の為に、あなたの魔力もらうわよ」

なのはが考えていると少女が話しかけてきた。

（ルルイエ？それって一体…）

なのはが再び考えていると少女が動いた。

（っ！速い！）

少女たちは瞬時に移動し、左右から切りかかってくる。それを今度は防がず空中に逃げるにより回避する。

「逃がさない！」

少女も空に上がり追撃をかけようとする。

「レイジングハート！」

『Accel Shooter』

「シュート！」

二十のスフィアを放ちなのはは少女から距離を取る。少女はアクセルシューターを回避しているためなのはは追撃できない。

「レイジングハート」

『load cartridge』

レイジングハートから空薬莖が一つ排出される。

『Divine Buster』

レイジングハートの前に魔力球が現れだんだんと大きくなっていく。

「デイバイン！バスター！」

放たれた砲撃はそのままシューターもろとも少女を飲み込んだ――

かのように見えた。

「残念でした」

後ろから声をかけられ、さっきのが幻術だという事に気づき急いでレイジングハートを向ける。しかし間に合わず少女の斬撃により地面に叩きつけられた。

「かはっ………！」

なのはは地面に倒れながら自分を叩き落とした少女を見て――

「……………え？」

がく然とした。

そこには二人の少女がいた。しかしさつきのような幻術ではない。なぜなら二人の少女たちの容姿が全て同じではないからだ。顔立ちと同じ。バリアジャケットのデザインも同じ。しかしその色は違い、髪型も違う。デバイスも一人はさつきと同じ双剣だがもう一人の少女はガントレットの甲の部分に巨大な爪を一つ付けたようなデバイスを両腕に装備している。

「セラ、ナイスタイミング」

「うん。それよりも早くあの人の魔力を奪おう」

「それもそうね」

二人の会話が聞こえてくる。その会話を聞いて急いで立ち上がろうとするが、体が思うように動かない。どうやらさつき叩き落とされた時に頭を打ち軽い脳震とうを起こしたようだ。

「くっ……」

そんな事を考えている内に少女たちが近づいてくる。

「ごめんね」

「ごめん」

少女たちはそう言ってそれぞれのデバイスをなのはに向け、なのはは目を瞑った。

少女たちのデバイスが振り下ろされようとした、その時！

「エクリプス！バスター！」

横から赤色の砲撃が放たれた。

「っっ！」

少女たちはそれを飛んで回避する。なのはに当たらないギリギリの場所に放たれた砲撃が消えるとなのはの前に一人の少女が現れた。

「誰……？」

「今説明している時間はありません。それよりも、もう動けますか？」

少女に聞かれなのはは体を動かす。どうやら脳震とうは治まったようだ。問題なく動く。

「うん。もう大丈夫みたい」

「でしたら手伝ってくださいませんか？さっきは隙をついたものの私人ではきついので」

「うん、わかった」

なのははそう答えて再びレイジングハートを構える。

「お姉ちゃん、どっする？」

「どっするって言ったってやるしかないでしょ」

少女たちは相手が増えたことに少し焦っているようだ。そしてお互いなかなか動けないでいると…

《サラ、セラ。ひとまずここは退くぞ。相手の援軍が多すぎる。このままではこちらが不利だ》

「うん……。わかったよ、ヴェル兄」

「仕方ないわね…。あんたたち。次こそは魔力を奪うからね」

サラとセラはヴェルというらしい人物からの念話を受けたあと、その場から消えた。

時は少し戻ってなのはがサラに襲われた頃。フェイトとはやて、シグナム達ヴォルケンリッターは結界内をなのはのいる場所に向かって飛んでいた。

「なのは、大丈夫かな？」

「なのはちゃんとは別の魔力反応も結構ランクが高いしな。はよ行こ」

フェイトの言葉にはやてが答え、フェイトたちは速度をあげた。

「ニードルショット！シュート！」

フェイトたちの行く手を阻むように横から円錐状のスフィアが飛んできた。

「なっ…！」

フェイトたちは瞬時に反転し、スフィアをかわした。そしてスフィアの飛んできた方向から二人の少年と一人の少女がフェイトたちの行く手を遮る位置に現れた。

「ここから先には行かせねえよ」

「悪いがここで足止めさせてもらおう」

「ここは通しません」

少年たちはそう言うとそれぞれのデバイスを構えた。一人は両刃の剣、他の二人は斧と槍。

・・・そう、先日未来の前に現れた二人である。

「そこをどいてください。どかないなら公務執行妨害であなたたちを逮捕します」

フェイトは油断無くバルディッシュを構え、少年たちに言った。それに対し少年たちは聞く耳持たずといったように見える。

「俺とクレイがメインで戦う。キリユウは援護を頼む」

「「おう／＼はい」」

リーダーらしき少年が言うとキリユウは後ろに下がリスフィアを展開、少年とクレイと呼ばれた少年は自身のデバイスを構えて接近してきた。

「シグナムとヴィータ、フェイトちゃんは前衛、うちとシャマルは

後衛、ザフィーラは後衛の護衛や！隙があったら切り抜けてなのは  
ちゃんを助けに行くで！」

「……はい／＼ん」「」「」

対するはやては瞬時にそう指示を出した。そして前衛になったシグ  
ナム、ヴィータ、フェイトは接近してくる少年たちを迎え撃つため  
にデバイスを構えた。

「クレイ、お前はあの金髪を頼む。残りの二人は俺がやる」

「わかったぜ。兄貴」

少年はクレイにそう言ってシグナムとヴィータに向かっていった。

「おい。お前だけであたしらとやるつもりか？後ろの奴と一緒に戦  
った方がいいんじゃないか？」

「大丈夫だ。お前らごとき俺一人で戦える」

「っ！お前なんかあたし一人で十分だ！」

ヴィータは挑発するようにそう言うが少年は気にしていない。逆に  
挑発され、それに乗ってしまった。

「ぶっ潰す！」

そう言うとヴィータは自身の前に現れたいくつかの鉄球にアイゼン  
を叩きつけた。鉄球は様々な軌道で少年に向かっていく。しかし――

「甘い！」

その全てが少年によって切られた。

「ちっ！アイゼン！」

『Raketen form』

それを見たヴィータはすぐさまカートリッジをロード、アイゼンをハンマーの片方にブースター、もう片方に角錐のついた形態……ラケテンフォームに変化させた。

「ラケテン！ハンマー！！！」

そしてヴィータはその場でコマのように回転を始め、その勢いのまま少年にアイゼンを叩きつけた。

『Protection』

が、それも少年が張ったバリアにより防がれる。

「ちっ！硬え……。なら！アイゼン！」

『Ja!!』

バリアに叩きつけたままさらにカートリッジをロード、するとバリアにひびが入り始めた。

「ぶち抜けええええ！！！」

ヴィータのかけ声と共にバリアは破壊されアイゼンは少年に叩き込まれようとした。しかし、少年はそれを剣で受け流しヴィータに切りかかるうとした。その時――

ガキーン！！

少年の一撃はシグナムにより防がれていた。シグナム達はそのまま後ろに下がり、再び自身のデバイスを構えた。

「ヴィータ、少し頭を冷やせ。こいつは手強い。二人でやるぞ」

「わかったよ」

シグナムの言葉にヴィータは頷く。

「今度は二人か。まあ結果は変わらないがな」

「それはどうかな。ヴィータ、行くぞ」

「おう！」

シグナムたちは再び攻撃を再開した。しかし、いくら切りつけようが、叩き込もうがその全てがことごとく防がれてしまう。

「そろそろこっちからやらせてもらおう！」少年はそう言う。今まで防御にしか使っていなかった剣をシグナムに叩き込んだ。シグナムはギリギリの所でそれを防ぐが勢いは殺せずそのまま地面に叩き落とされる。

「シグナム！」

「よそ見をしている場合か？」

シグナムが落とされたことによりヴィータは一瞬、そっちに気をとられてしまった。その隙を少年が逃す筈もなくヴィータもまた近くの民家に叩き落とされる。そして少年はシグナムとヴィータにバインドをかけ、動けなくした。そして少年は後方にいる先程とは髪の色が変わった少女――リインフォースIEとユニゾンした八神はやてに向かつていった。

「させん！」

少年の前にザフィーラが現れ、はやてを守ろうとするが少年の一撃により叩き落とされた。少年はそのままはやてに肉迫し剣を振り上げる！

「どうやらお前の相手は俺らしい。女が相手ってのはやりにくいが手加減はできねえ。悪いな」  
フェイトと対峙するクレイはデバイスを構えながらそう言った。

「何故、こんなことをするの？きちんとした理由があれば管理局も協力してくれる」

「そんなの知ったこっちゃねえ。俺達には時間がねえんだ」

クレイはそう言うとフェイトに肉迫しデバイスを振り下ろした。フ

エイトはそれをソニックムーブでかわし、クレイから距離を取った。

「……………あれは、少しキツイね。バルディッシュ」

『Zamber form』

バルディッシュの形状が変化し黄色に輝く魔力刃を持った大剣になった。

『Sonic move!』

フェイトはクレイの後ろにまわりバルディッシュを振り下ろす。クレイもそれを防ごうとするがギリギリで間に合わない。決まった! そうフェイトが思った瞬間 - -

「ニードルスフィア! ファイア!」

「っ!?!」

横から円錐形のスフィアが飛んできた。フェイトはそれをなんとかかわし、スフィアの飛んできた方向にフォトンランサーを放つ。しかしそれもスフィアによって相殺される。そのスフィアを放ったのは槍を持った少女 - - キリユウだった。

「サンキュ! キリユウ!」

キリユウに対してお礼を言うその声はフェイトの真後ろから聞こえた。フェイトが慌てて後ろを向くとそこには斧を振り上げた状態のクレイがいた。

「わるいな。不意打ちになっちまって。でも手段は選んでられねえんだ」

クレイはそう言うつと斧を振り下ろした。それに対してフェイトは目をつむる事しかできなかった。

ガキイイイイン!!!!

デバイスが振り下ろされた瞬間、金属がぶつかったような音が辺りに響いた。フェイト達は覚悟していた衝撃がないことを不思議に思い目を開けると――  
フェイトの前には少年が、はやての前には少女がいて、クレイ達の攻撃を防いでいた。

「未来君？/のぞみちゃん？」

……そうフェイト達を守ったのは未来とのぞみだった。

「大丈夫？テストタロツサさん」「だ、大丈夫だけど……。未来君も魔法を使えるの？」

「それについては後で説明する。今はあいつらだ」

未来はそう言うつてデバイスを構えなおした。

「おめえは昨日の……」

「また会ったな。お前らの目的はなんだ？何故魔力を奪おうとする？」

「お前らには関係ない。んじゃ、行くぜ」

クレイが斧を構えた瞬間――

「クレイ、ここは退くぞ。相手が多すぎる。すでにサラとセラにも伝えた」

突然クレイ達の隣に少年が現れ、そう言った。

「ちっ！わかったよ兄貴」

「わかりました。ヴェル兄様」

クレイ達はそう答えると未来達を一瞥して転移魔法を使いその場から消えた。

「逃げたか……。テストロッサさん、大丈夫？」

「う、うん。大丈夫。それよりなんで未来君達は魔法が使えるのか教えてくれないかな？あの人達のこと相談したいし」

「わかった。でもその前にカコ達と合流しよう。それでいいか？」

「うん、いいよ」

「よし。それじゃあ行く……」

「こんのバカ未来いいいいいい！！！！！！！！！！」

ドガシャアアアアアアン！！！！！！！！！！

未来が言いかけた瞬間横から誰かの蹴りが飛んできて未来の側頭部にヒット、地面に叩きつけられた。

――その際、グキツ！っという音が聞こえたが気にしないでおう。

「いってえな！おい！！いきなり何しやがんだ、のぞみ！！！」

すぐさま起き上がった未来は蹴ってきた人物に怒鳴った。どうやら無事なようだ。

――訂正、微妙に首が曲がったままだ。

「うっさいわね！！私を無視して話を進めるんじゃないわよ！！！」

未来を蹴った人物――のぞみはそう怒鳴って未来を睨んだ。それに対して未来は再び怒鳴った。

「だからっていきなり蹴ることはねえだろ！」

「ああもう、うっさいわね！どうでもいいでしょ！！そんな事！！！」

「どうでもいいってなんだよ！？お前がやったことだろうが！！！」

そんな未来とのぞみの怒鳴り合いはしばらく続いた。

十分後

未来とのぞみはお互い息切れするほど怒鳴り合っていた。それを見てフェイト、はやて及びヴォルケンリッターは啞然としていた。

「あ、あの、そろそろなのはちゃん達と合流した方がいいとおもう

んですけど…」

一番最初に我を取り戻したシャマルはそう言って未来達の間に入ってしまった。

「それもそうだな。早く行くぞ」

シャマルの言葉に未来はそう言うと我を取り戻したフェイト達と共にカコとなのはがいる場所に向かった。

## 第四話 話し合い（前書き）

今回はかなり短いです。

## 第四話 話し合い

ハラオウン家 リビング

今、未来達はハラオウン家のリビングにいる。

ソファにはなのは、フェイト、はやてが座り、側にはシグナム達ヴオルケンリッターが立っている。

テーブルをはさんだ反対側のソファには未来、カコ、のぞみが座っている。また、テーブルの上には人の顔が映し出された画面のようなものがいくつか宙に展開されている。その画面に映し出されているのは時空管理局提督、リンディ・ハラオウンと時空管理局提督にして次元航行艦『アースラ』の艦長、クロノ・ハラオウン、『無限書庫』司書長のユーノ・スクライアである。

「それじゃあ、まず未来君達が魔法を使える事について話してもらえないかな？」

なのはがそう言うと未来が口を開いた。

「それは俺が説明しよう。俺とカコの祖父はこの次元世界の出身で子供の時に魔法を知り、ミッドチルダに行ったんだ。そこで結婚して二人の子供が産まれた。

それが俺の父さんとカコの父さんだ。

そしてカコの父さんはこの世界に引越してきて、俺の父さんはそのままミッドチルダに住んで管理局で働いていた。

そこで管理局の同僚と結婚、俺が産まれた。その数年後にはカコも産まれた。そこでカコの家族はよくウチに遊びに来てな。そんな時に父さん達に勧められて嘱託魔導師の試験を受けたんだ。そして合格のぞみは俺が通っていたミッドの学校のクラスメイトで魔導師の素質があり、先生達の勧めで受けて合格した。これが俺達が魔法を使

える理由だ」

未来は一通り説明するとテーブルに置いてあるお茶で喉を潤した。

「魔法を使える理由はわかったわ。それでは次に襲撃してきた人達について話してもらえるかしら？」

リンディの問いに未来はお茶を置いて答えた。

「話すもなにもあいつらの内、二人に昨日学校の帰りに襲撃されたんだよ。魔力を奪うとか言ってる。まあ退けたけどな」

「そうですか。次は敵の特徴を教えてくださいませんか？」

未来の答えを聞くとリンディは全員に問いかけた。それに対して最初に口を開いたのはなのはだった。

「私を襲撃したのは双子の女の子だったよ。一人は双剣型のデバイスで幻術を使ってきた。もう一人はクロー型のデバイスだったよ」

そう言うってなのは少女達の画像を展開し、全員に見せた。

「クロー型…私のと微妙に似てるわね」

画像を見てのぞみはそう呟いた。それを聞いたなのははのぞみに尋ねる。

「似てるって…のぞみちゃんのデバイスもクロー型なの？」

「うん。まあ私の場合クローが三つ付いてるんだけどね」

「そうなんだ」

「なのはさんを襲撃した人達についてはわかりました。次はフェイト達が戦った人達について話してくれる？」

「うちらが戦ったのは剣型のデバイスを持った男の子と斧型のデバイスを持った男の子、槍型のデバイスを持った女の子やったよ」

はやてがそう答えるとシグナムが補足するように口を開いた。

「剣を持った男は特に強いな。私やヴィータが隙を突かれたとはいえ簡単に撃墜された」

シグナムの言葉にその場にいなかったなのは、リンディ、クロノ、ユーノは驚いた。あのシグナムを簡単に撃墜した。一体どれほどの実力を持っているのか、と。

「そ、それではあの人達の目的について何かわかることはあるかしら？」

最初に冷静さを取り戻したりリンディがそう尋ねるとそれになのはが答えた。

「そつえば私を襲撃した人達がルルイエ起動のためとか言ってたよ」

「ルルイエ……。それが何なのかはわかりませんが調べてみましょう。ユーノさん、無限書庫の方でも調べて貰えますか？」

「わかりました。さっそく調べてみます」

ユートはそう言うと通信を切った。

「それでは今日はこのぐらいにしましょうか。未来さん、カコさん、のぞみさん。明日本局の方に来てもらえますか？あなた達の今の実力を知りたいので」

リンディの頼みを未来達は承諾してその日は解散となった。

第五話 模擬戦（前書き）

今回は全て戦闘です。  
疲れた…。

## 第五話 模擬戦

時空管理局本局 訓練室

そこになのは達はいた。未来達の実力を知る為に模擬戦をすることになったのだ。今、ここにいるのはなのは、フェイト、はやて、ヴオルケンリッター、リンデイ、クロノ、未来、カコ、のぞみである。

「それでは誰から行きますか？」

「私が行くよ！」

「私が行くね」

リンデイの問いにカコとなのはが前に出る。

「わかりました。二人とも、準備して下さい」

リンデイがそう言うと二人は訓練室に入っていった。二人以外は訓練室の外で見物する。

二人は訓練室に入るとバリアジャケットを装着しそれぞれのデバイスを構えた。

「始め！」

リンデイがそう言うと二人は同時に動いた。

「アクセルシューター！」

なのはの周りに桃色のスフィアが二十個展開される。

「フォトンシューター！」

対するカコの周りにも赤色のスフィアが二十個展開される。

「シュート！！！」

計四十個のスフィアは互いを砕き、相殺され、その衝撃により土煙が辺りを覆う。

その煙の奥になのは一瞬赤い光を見た。

『Flash Move』

それを見てなのは空に逃げる。それと同時に先程までなのはがいた場所を赤く輝く砲撃が通り過ぎた。

その砲撃により煙ははれ、カコの姿が見えるようになる。

それを見てなのは再びスフィアを展開、カコに向け撃つ。

カコは空に飛びかわそうとするがスフィアが追撃してくる。カコはそれを体を捻ることにより回避し回避できないものも咄嗟にバリアを張り防ぐ。そんな事が三十秒程続いた時…

「デイバイン！バスター！」

なのはから砲撃が放たれる。カコはそれをかわそうとするがスフィアが邪魔で動けない。カコはプロテクションを張り砲撃を防ぐがすぐにひびが入り始める。そして砲撃はプロテクションを破りカコを呑み込んだ。それを見た一同はこれで終わったと思った。やがて光は消え、そこにはボロボロになったカコが――

――いなかった。

「っ！どこ！？」

それを見たなのはは周りを見回し、カコを探す。

「あ、危なかつたあ」

そんな声が後ろから聞こえてきた。なのははすぐに振り向き、カコを見る。

そこにいたのは先程よりも動きやすいミニスカートに袖無しの上着を着たカコがいた。デバイスも先程のような杖ではなく二丁の銃になっている。

「間に合つてよかったよ」

そう、カコは瞬時にフォームチェンジし、動きやすいソニックフォームになり、デバイスも速射のできるガンモードにした。そして回避の邪魔になるスフィアだけを撃ち抜きソニックムーブでなのはの後ろにまわったのだ。

「なかなかやるね……」

「いえ…隙を突かないとなのはさんに勝つことは出来ないのよ」

「そっか……。それじゃ、本気で行かしてもらおうよ！」

なのははそう言うとエクセリオンモードを起動、再びスフィアを作り出す。しかし今回の数は五十個、今までの倍以上である。

「させない……」

カコはすぐに速射でスフィアを撃ち抜いていく。どんどん数が少なくなっていく。

「シユート！」

なのはが放つ時には既に半分のスフィアが消えていた。

カコは放たれたスフィアも次々に撃ち抜いていく。その隙になのははカートリッジを一発ロードする。

「エクセリオン！バスター！！」

抜き打ちで放たれたその砲撃はまっすぐカコに向かっていく。

「くっ！」

スフィアを撃ち抜いたカコは砲撃に向け銃を構える。するとその前にスフィアが四つ出現、回転し始める。

「スパイラルブラスト！」

四つのスフィアは回転したまま発射され、螺旋の軌道を描きながらエクセリオンバスターとぶつかる。

――直前で分裂、エクセリオンバスターに沿いながらなのはに向かっ  
ていく。

エクセリオンバスターはカコに、スパイラルブラストはなのはに当  
たりそれぞれのいた場所で爆発が起きる。

やがて煙がはれるとそこにはバリアジャケットが少し汚れたなのは  
とバリアジャケットが所々破けているカコがいた。

「今のはちょっと効いたかな…」

「そう…ですか…」

まだまだ余裕のありそうなのはに比べてカコは少し辛そうに見える。

「行くよ、レイジングハート」

『all right』

「ガイア、私達も」

『了解』

そう言うとなのははカートリッジを二発ロード、レイジングハートの前に桃色の魔力球が現れ、だんだんと魔力が高まってくる。カコはカートリッジを三発ロードし、ガイアをガンフォームから弓型のシューティングフォームし魔力でできた矢をガイアにあてがう。

「エクセリオン！」

「メテオ！」

なのははレイジングハートを構え、カコは矢を引く。

「バスター！」

「アロー！」

なのはからは桃色に輝く砲撃が、カコからは赤く輝く魔力の矢が放たれる。砲撃と矢はぶつかり少しの間拮抗する。やがて砲撃は矢を砕きカコに直撃する。

その一撃によりカコは落下、それをなのはがバインドを使い支える。こうしてなのは対カコの模擬戦はなのはの勝利に終わった。

「次は誰が行きますか？」

なのは達の模擬戦が終わり、次の模擬戦が始まることになった。ちなみにカコは側にあるソファで寝ている。

「私が行くわ」

未来側からはのぞみが出ることになった。そしてなのは側からは…

「私が行こう」

「私が行くよ」

シグナムとフェイトが同時に出てきた。後ろでヴィータが

「このバトルマニア共が…」と呆れている。

「それではシグナムさんのぞみさん、フェイトが未来さんと闘うというのはどうですか？」

リンディの言葉にシグナム達は納得しシグナムが前に出てきた。そしてのぞみとシグナムは訓練室に入りバリアジャケットを装着した。

「始め！」

リンディの言葉に先に動いたのはシグナムだった。シグナムは一気に距離を詰めるとレヴァンティンを振るう。のぞみはそれをバックステップで回避、空に上がりシグナムから離れる。シグナムもそれを追い空に上がる。

「はあっ！」

声と共に振るわれるレヴァンティン。のぞみはそれを左腕のガントレットの甲で受け止め右腕をシグナムに叩きつける。その一撃でシグナムは少し吹き飛ばすがすぐに体制を整える。その顔はどこか楽しそうな表情を浮かべている。

「なかなかやるな」

「こっちは必死でやってるんだけどね…」

シグナムの言葉にのぞみはそう返した。

「相原。たしかお前は昨日、剣を使っていたな？」

「それがどうかした？」

「いや、お前と剣で闘ってみたくてな」

「そう…。ならやってあげようじゃない！」

のぞみはそう言うとノアをソードフォームに変え正面に構える。それを見てシグナムも構え、まっすぐのぞみを見る。

「行くぞ！」

シグナムはそう叫ぶと一気にのぞみに近づきレヴァンティンを振り下ろす。のぞみはそれをノアを横にして受け止め、しばらくの間その状態が続く。

「はっ！」

やがてシグナムが押し切りのぞみを吹き飛ばす。そしてカートリッジをロード、レヴァンティンを連結刃の形をしたシュランゲフォルムに変える。そしてレヴァンティンを鞭のように振るい、のぞみへと叩きつける。のぞみはそれをかるうじて弾き、一度距離を置こうとする。

「レヴァンティン！」

『Explosion』

レヴァンティンがカートリッジをロードすると炎が連結刃を覆った。

「飛竜一閃！」

振るわれる連結刃をのぞみは再び弾こうとするが――

「えっ？――きゃあああああ！」

弾くことが出来ず、地面に叩きつけられる。シグナムはレヴァンティンをシュベルトフォルムに戻し、のぞみの落下した場所を見る。

「くっ」

のぞみはノアで体を支えながら立ち上がるとノアを片手に持った。

「ノア、クローフォーム」

『了解』

刀の形をしたノアを光が覆い、光が消えるとノアはガントレットの甲に爪が三つ付いたクローフォームに変わった。

「はっ！」

のぞみはシグナムに近づくと右腕のクローで切りかかる。シグナムはそれをレヴァンティンで防ぐが追撃してきた左腕のクローで切られそうになる。シグナムは後ろに下がりそれをかわし、レヴァンティンをのぞみに叩きつける。のぞみはそれをかろうじて防ぐがシグナムとのぞみの距離が開く。

「レヴァンティン」

『Explosion』

「ノア」

『Load cartridge』

シグナムは一発、のぞみは左右一発、計二発カートリッジをロードする。

するとレヴァンティンは再び炎を纏い、ノアは全ての爪を魔力が覆

い強化する。

二人はそれぞれのデバイスを構え、動かなくなる。そのまま一分が経っても二人は動かない。動こうとしない。

そしてその時、のぞみの額から流れる汗が地面にポタリと落ちた。

その瞬間

二人は同時に動いた。二人の距離は瞬時に縮まり、シグナムは炎を纏ったレヴァンティンを振り下ろし、のぞみは魔力で強化された両腕の爪を振り上げる。

レヴァンティンとノアが激突した瞬間、爆発が起こり周囲を爆音と爆煙が包み込んだ。だんだんと煙がはれてくるとバリアジャケットが少し破れたシグナムとバリアジャケットが所々切れたり、焦げたりしたのぞみがいた。

二人の間は約三十メートル。二人はまだお互いを睨んでいる。

「ノア」

『Sword form』

のぞみはノアをソードフォームに変え居合いの構えをとった。

「この一撃で終わらせる」

のぞみがそう言うとシグナムもレヴァンティンを鞘に納め、居合いの構えをとった。

「その勝負、乗ろっ」

シグナムがそう言うと再び二人は動かなくなった。そして――

カッ

先程の爆発により空高く飛び上がった石が落ちたと同時に二人は動いた。すぐに縮まる距離。すれ違う瞬間、二人はそれぞれの剣を振り抜く。

振り抜いた体制のまま二人は固まる。

ドサッ

倒れたのは――

――のぞみだった。

この瞬間、のぞみ対シグナムの模擬戦はシグナムが勝利した。

「あああ、負けちゃったあ」

のぞみは未来達のいる場所に戻るなりそう言った。

「まあまあ。お前みよくやったよ」

そんなのぞみに未来はそう言う。

「次は俺の番か」

そう言って未来は訓練室に入っていった。そのあとをフェイトが追いついて、フェイトも訓練室に入る。

二人は所定の位置につくとバリアジャケットを纏った。ちなみに今のメビウスリングの形態はブレードフォームである。

「始め！」

リンディの声と同時に未来は空に上がる。それを追ってフェイトも空に上がる。

「フォトンランサー、ファイア」

フェイトは空に上がるとすぐに黄色の魔力刃を二十個作り出し放つ。放たれたランサーは未来にまっすぐ向かっていく。未来はそれを全て剣で切り捨てる。

「バルディッシュ！」

『Load cartridge, Haken form』

それを見てフェイトはカートリッジをロード、バルディッシュから黄色の刃が現れ鎌になる。

『Haken Saber』

「はあっ！」

フェイトがバルディッシュを振るうと同時に放たれる黄色い斬撃。それはまっすぐ未来に向かっていく。未来はそれをメビウスリングで切り捨てる。そして一気にフェイトとの距離を詰め、逆袈裟に切りかかる。

『Sonic Move』

フェイトはそれを高速で動きかわす。そして一旦未来と距離をとる。

「バルディッシュ」

『Zamber form』

フェイトの声に反応しバルディッシュは変形、黄色い刃を持つ大剣  
ーザンバーフォームに変わる。  
そしてフェイトの姿が消え、次の瞬間未来の背後に現れる。

「っ！」

振り返りざまに振り下ろされるバルディッシュをギリギリで防ぐ。  
そして弾き、距離をとる。

「メビウスリング！」

『Trident form』

メビウスリングの形状が両刃剣のブレードフォームから三又の槍が  
両端についたトライデントフォームに変わる。

そしてフェイトに対し突きを繰り出す。フェイトはそれを高速で動  
きかわす。そして再び後ろからバルディッシュを振り下ろす。

が、それは槍の又の部分で受け止められる。そしてそのままバルデ  
イッシュを上弾き、反対側の槍をフェイトに叩きつける。それに  
よりフェイトは吹き飛び、二人の距離が開く。二人の間は約百メー  
ートル。吹き飛ばされた先でフェイトは魔法陣を展開する。そしてカ  
ートリッジを二発ロードする。

対する未来もカートリッジを二発ロードする。

『Trident Smasher』

『Burning blaster』

それぞれのデバイスがそう発言するとフェイトの前には黄色の、未来の前には青色の魔力球が現れる。

「トライデント！スマッシュャー！」

「バーニング！ブラスター！」

同時に放たれる二つの砲撃。

一つは黄、一つは青。二つの砲撃がぶつかると周囲に衝撃波が広がる。その衝撃波の中、二人は砲撃を放ち続ける。二つの砲撃の威力はほぼ同等。未来はさらにカートリッジを一発ロード。青色の砲撃が押し始める。そして砲撃はフェイトに当たり、爆発が起きる。やがて爆煙がはれるとボロボロになったフェイトがいた。

「フォトンランサー……」

フェイトがそう呟くと周囲に二十個ほどのランサーが現れる。

「っ！？メビウスリング！」

『Wing Buster』

それを見て未来は再び砲撃を放つ。カートリッジを使っていないため、それほど威力はないが今のフェイトを倒すには十分すぎる威力だった。フェイトに当たり再び起こる爆発。そして爆煙の中からフェイトが落ちてくる。

『Sonic Move』

それを見た未来は高速移動魔法で瞬時にフェイトに近づき抱える。  
そこでフェイトは気がついた。

「……………ん……………あれ？私は……………」

「お、目が覚めたか。大丈夫か？」

そこでフェイトは自分の状況に気づいた。フェイトは今、未来に抱えられている。所謂お姫様抱っこだ。

それに気づいたフェイトは顔を真っ赤にする。そしてなんとか逃れようとするが体が何故か動かない。なので未来に頼むことにしたが

「お、降ろして……………」

「何言ってるんだ。お前今動けないだろうが。ソファまで運んでやるよ」

――撃沈。

そのまま二人はリンディ達のいる場所に戻った。戻ると目の覚めたカコとのぞみが不機嫌そうに未来達を睨んでいる。背中からは強烈な負のオーラが溢れ出ている。

それにフェイトは冷や汗を流して、再び逃れようとするがやはり体は動かない。未来はそのオーラに全く気づかず、フェイトをソファに寝かす。

「とりあえず皆さんの実力はわかったわ。もう帰ってもいいですよ」

リンディの言葉に未来、カコ、のぞみは転送ポートに向かう。ほかの人達はやることがあるそうだ。

「おい、何でそんなに不機嫌そうなんだ？」

「……別に」「」

向かう途中、未来はカコとのぞみに尋ねるがそう返される。  
そうこうしている内に未来達は転送ポートについた。そして自分達の  
住む世界に帰っていった。

第六話 判明 ルルイエの正体（前書き）

小学校時代の友人と近所のデカイプールに行ったのですが…日焼けで肌が痛い！

## 第六話 判明 ルルイエの正体

次の日の正午過ぎ

今、未来は家でデバイスの手入れをしていて、カコは晩御飯の買い物に行っている。未来は少しカコを心配しているが大丈夫だろうと家にいる。その時――

『マスター。結界反応を確認』

「っ！場所は！？」

『スーパーの近くです』

「くそっ！狙いはカコか！」

未来はそう叫ぶと急いで家を出た。

『みんな！おそらく襲われているのはカコだ！今、俺が向かってる！みんなもなるべく早く来てくれ！』

未来は走りながらみんなに念話で一方的にそう言つとさらに走る速度を速くした。

「メビウスリング！」

『Set up』

未来は結界に近づくと周りに人がいないことを確認し、セットアップする。

そして結界内に入りカコの元へと急いだ。しばらく飛ぶと数人の人影が見えてきたので一気に加速する。

「カコ！」

そこには壁にもたれるボロボロのカコと昨日の少年達がいた。そしてカコの胸の前に何やら赤く光る球体が浮かんでいる。それに少女――キリュウが手を掲げ、球体はだんだんと小さくなっている。カコはボロボロだが特にこれといった外傷はない。しかし球体が小さくなるのにあわせてカコが苦しそうにしている。

「くそっ！」

未来はキリュウに切りかかろうとするが、リーダー格の少年に邪魔される。何回も切りかかるがその全てを防がれる。

「ヴェルお兄様。終わりました」

キリュウがそう言つと同時に今まで守つてばかりだった少年が一気に攻撃してきた。最初の一、二撃は防げたがそれ以上は防げず壁に叩きつけられる。その間に少年達は消え、後には未来とカコしか残っていないかった。

「ごめん、遅くなった」

そこにのぞみ達が到着した。シャマルはまずカコに駆け寄った。

「シャマルさん、カコは大丈夫ですか？」

「リンカーコアが少し小さくなっていますね。この位なら一日程で

戻ります」

「よかった……」

シヤマルの言葉に未来は胸を撫で下ろす。

「ただ、一応検査の為に本局に来てもらいたいんだけど……」

「わかりました」

未来達は結界を解き、時空管理局本局に向かった。

検査が終わり、カコはベッドに寝ている。その周りには未来達がい  
た。

「今後はなるべく複数で行動した方がいいですね」

リンディの言葉に一同は頷く。そのまま無言の時が流れた。その時  
――

ピピピピッ、ピピピピッ

通信が入った。リンディがそれに出るとユーノだった。

「ユーノ君？どうかしたの？」

なのはが不思議そうに尋ねるとユーノは真剣な表情で言った。

「ルルイエの正体がわかったんだ」

ユーノの言葉に一同に緊張が走る。

「それで、どういう物何ですか？」

「ロストロギア『ルルイエ』。太古の昔にいくつもの次元世界を破壊したロストロギアです。そしてベルカが多数の犠牲を出して別の次元世界に封印しました。封印を解いた後、起動までには約一日かかります。そして起動直後のルルイエはまだ力を上手く制御出来ません。破壊するならその時しかありません。万一起動した場合はその時を狙って下さい。詳しいデータはそちらに送っておきますので、それを見て下さい。それから、これはルルイエについての今現在わかっていることなので、これからまた調べてみます」

ユーノはそう言って通信を切った。ユーノの話を聞いて、一同は話し合う。

「あいつら、そんな危険なものを起動させようとしているのか」

「……………お兄ちゃん、それは違うよ」

未来の言葉にいつの間にか目の覚めたカコがそう言った。

「カコ、何が違うんだ？」

「うん…。あの人達言った。これで世界を取り戻せるって。多分あの人達は消えた世界を蘇らせたんだよ」

カコは自分が襲われた時に少年達が言った言葉を覚えていた。

「ということは彼らは誰かに騙されている可能性が強いな…」

クロノがそう呟くと一同は頷いた。その時、ユーノからルルイエについてのデータが送られてきた。

「こゝ、これは…」

そして一同はルルイエのデータを見て余りの強力さに言葉を失った。

第七話 Dの正体 ルルイエ起動(前書き)

今回は短いです。

## 第七話 Dの正体 ルルイエ起動

次の日 午前十時頃

未来達は全員（未来、のぞみ、なのは、フェイト、はやて、シグナム、ヴィータ、ザフィーラ、シャマル）で行動していた。カコは現在家で大人しくしている。先程まではハラウン宅で話し合いをしていた。そして今、未来達はそれぞれの家に向かっている。その時――

キーン

未来達は封鎖結界に閉じ込められた。未来達は瞬時にセットアップし、戦闘準備をする。

そして未来達の前に少年達が現れる。

「もう時間がねえ。意地でも魔力をもらっせ」

「待つて！ルルイエは危険なの！そんなものを起動させたらこの世界が滅びちゃう！」

「そんな訳あるか！俺達はルルイエを使って…俺達の世界を蘇らせるんだ」

なのはが説得しようとするが一蹴される。そして一気に攻撃してきた。未来がクレイト、のぞみがキリュウと、フェイトがヴェルト、シグナムがサラと、ヴィータがセラと戦い、なのは、はやて、シャマルがそれを援護し、ザフィーラがなのは達を護衛する。

「話を聞け！ルルイエはお前らの思っているような物じゃない！」

「うるせえ！んなこと信じられるか！」

未来は戦いながらも必死に説得しようとするが、クレイは全く話を聞かず、切りかかってくる。

「そんなに言うんなら…力づくで聞かせてやるよ！」

言い終わると同時に未来は剣を振り上げる。

クレイはそれをバックステップでかわし、斧を横なぎに振るう。

未来はそれを剣で防ぎ、弾く。

そしてクレイにできた隙について突きを繰り返す。

それはクレイのバリアジャケットをかすかに切り裂く。クレイは一旦後ろに下がり、再び接近してくる。再び始まる斬り合い。袈裟切り、水平切り、突き、逆袈裟など何度も斬り合いが続く。そして遂にクレイをとらえる斬撃。クレイは吹き飛ばされ、近くの民家に突っ込む。未来が追撃をかけるために近づこうとした瞬間――

「目的は達成できた。退くぞ」

ヴェルの声が辺りに響いた。その声に未来はヴェルと戦っていた筈のフェイトを見た。

そこにはボロボロになり地面に倒れるフェイトがいた。

「フェイト!？」

「「フェイトちゃん!？」」「」

未来の言葉に反応し、なのは達もフェイトを見て驚く。シャマルはすぐにフェイトに近づき回復魔法をかけ始める。

「これで俺達の世界は蘇る。これで…ようやく…」

そう言っつてヴェル達は消えた。

なのは達は急いでフェイトを本局に運んだ。フェイトはカコと同じように魔力を奪われ、リンカーコアが少し小さくなっただけで目立った怪我は特になかった。

そして深夜

未来達はアースラの艦内にいた。現在アースラは地球に向けて航行している。いつ彼らが現れてもすぐに出動できるようにするためだ。そして地球まであと一時間程で到着するという時――

突然警報が鳴った。

未来達が急いで艦橋に行くとモニターには海鳴湾沖に結界を張り、宙に浮かんでいるヴェル達が映っていた。

「これは少し前の映像だよ。なのはちゃん達。すぐに行ってもらっけどいい？」

「はい！」

エイミイの言葉になのは達は返事をして転送ポートに向かい走っていった。

海上にヴェル達は浮いていて、ヴェルの手の上にはカコとフェイト

から奪ったリンカーコアの一部がある。

「これでルルイエは起動できる。みんな所定の位置につけ」

「……ああ／はい／うん」「」

ヴェルの声に反応し、ヴェル達は円を作るように移動する。そしてヴェル達の胸からリンカーコアが出てくる。

「待つて！」

そこになのは達が到着し、止めようとす。しかしその瞬間、なのは達は球状のバリアに包まれ、動けなくなる。

「!?これは？」

「どけ！破壊する！」

そう言つてシグナムはバリアを破壊しようと切りかかる。が――

「何!?!」

バリアはシグナムの一撃をたやすく弾き返した。

その間にもヴェル達のリンカーコアは小さくなっていく。

そしてその動きが止まった。

それと同時になのは達を包むバリアは消え、海面が揺れ始めた。

「くそつ。間に合わなかつたか……」

「ご苦労だったな、ウィルレイン兄妹よ！」

その時、ヴェル達の中心に一人の男が現れた。その男は――  
Dだった。

「D?何かしたのですか？」

突然のDの登場にキリユウが不思議そうに尋ねる。それにDは嘲るような笑みを浮かべたまま答えない。  
その時、アースラから通信が入った。

「みんな。あの男は広域次元犯罪者のドレッド・カタシアス。ここ数年大人しくしていたんだけど…」

「ようするにあいつらはそいつに騙されていたって事か」

未来達はエイミイの言葉に納得する。そしてエイミイの言葉が聞こえていたのかヴェル達は呆然としている。

「君達は本当によくやってくれたよ。騙されているとも知らずに魔力を用意してくれて。おかげでルルイエを起動することができた。これで世界を、私を認めなかった世界を破壊することができるよ」

D――いや、ドレッドはそう言うと海面から浮かんでくるルルイエに近づいていった。

その瞬間――

「ぐわあああああああ……!!……!!……!!……!!……!!……!!」

ルルイエから伸びた触手がドレッドを襲った。

「な、なんだ…？」

突然の出来事に啞然とする未来達。その時、ユーノから通信が入った。

「ルルイエについて新たにわかったことがある。ルルイエは完全に起動する前に近くにいる人間を呑み込んでその脳を使って活動するんだ。だからルルイエには近づかないで！」

ユーノの言葉に呆然とする一同。その間にも触手はドレッドを襲っていく。そしてドレッドは完全にルルイエに呑み込まれた。ドレッドを呑み込んだルルイエは再び海に沈み、沈黙した。そこで一同はヴェル達に近づいた。

「一緒に、来ていただけですか？」

なのはの言葉にヴェル達が力無く頷くと、未来達はアースラに移動した。

## 第八話 決戦直前 ウィルレイン兄妹の過去とのぞみの不安

次の日

未来達はアースラ艦内でヴェル達と向かい合っていた。昨夜はヴェル達が話を聞ける状態ではなかったため、今日話を聞くことになったのだ。今、ここには未来達の他にリンディヤ、リンカーコアの回復したカコとフェイトもいる。

「まずは自己紹介をしていただけないかしら？」

「……ヴェル・ウィルレインです」

「……クレイ・ウィルレインだ」

「……キリュウ・ウィルレインといいます」

「……サラ・ウィルレインよ。セラとは双子よ」

「……セラ・ウィルレインです。双子の妹です」

ヴェル達は辛そうに言った。

「それでは、どうしてルルイエを起動させようとしたのか話していただけますか？」

リンディの問いにヴェルはゆっくりと口を開いた。

「……俺達は元々、ミッドチルダという第127管理外世界にある星の王族でした。その星にも魔法はありましたが、それは王族と一

部の貴族のみに受け継がれてきました。その中で王族にはインテリジェントデバイスが、貴族にはアームドデバイスが渡されます。これが俺のデバイス『ツルギ』です」

そこまで言ってヴェルは十字架のペンダント型のデバイスーツルギを取り出した。

「弟達のデバイスはクレイがアープ、キリュウがコスモス、サラがコロナ、セラがアゲルです。それで俺達は平和に暮らしていました……それは一年前、唐突に終わりました。俺達の世界の近くで次元震が起きたんです。その次元震に俺達の世界は呑み込まれて……消滅、しました」

ヴェルの言葉にクレイ達は苦しそうな、未来達は驚いた表情になる。

「…リンディさん、本当なんですか？そんな、一つの次元世界が消えてしまう程の次元震が……」

なのはがリンディに尋ねる。

「…ええ、本当よ。管理局の記録にも残っているわ」

リンディの答えに未来達は愕然とする。そんな大規模な次元震があったなんて……。

「…話を続けます。その次元震により俺達の世界が消える直前、俺達の両親が…転送魔法で俺達を、別の次元世界に送ったんです…。俺達に、元気に過ごしてくれって言って……」

ヴェルの話を未来達は黙って聞く。時折、クレイ達はその時のこと

を思い出したのか、嗚咽や泣く声などが聞こえる。

「他にも、別の次元世界に送られた者もいます。その人達がどうしているのかはわかりませんが…。」

その後、俺達はいくつもの次元世界を旅しました。どうにかして世界を蘇らせる方法はないものかと…。その時です。D—いや、ドレッドと出会ったのは。奴は俺達の話聞いて、協力すると言ってきました。それと、俺達の願いを叶えることができるロストロギアがあると。俺達はその言葉に飛びつきました。その時奴が言ったロストロギアが…。」

「ルルイエ…ね」

「そうです。奴はルルイエについて、失われたものを蘇らせることができるロストロギアだと言っていました。そして俺達はルルイエを探していくつもの次元世界を巡りました。そしてようやく見つけて、俺達の世界を蘇らせられると思ったのに…騙されていたなんて…！」

そう言つてヴェルはテーブルを思いっきり自分の手を叩きつけた。それにあわせて泣き崩れるキリュウとセラ。クレイとサラは俯き、自分の足に涙を零す。

「俺達は今まで何のために必死で探してきたんだ！世界を、父さん達を蘇らせる為に探してきたのに…あんな奴の言うことを信じて！騙されて…もう二度と！父さんや母さん達に会うことができないなんて…！くそっ！くそっ！！くそっ！！！！」

そう叫んで涙を流すヴェル！兄妹達も今まで以上に泣き出す。それほどまでに蘇らせれるとおもっていたのだ。

それを見て未来は突然立ち上がった。

「未来…？」

のぞみの声を無視して未来はヴェル達に近づく。

「おい」

未来に声をかけられ、ヴェル達は顔を上げる。そして――

パンツッ！

未来はヴェルを平手で打った。そのまま他の者達にも平手打ちを決めていく。呆然とする一同。それを気にせず未来はヴェルの前に立つ。その目は怒りに染まっている。

「世界を蘇らせる為？そんなくだらない事の為にこんな事件を起したのか？」

「っ！？てめえ！」

未来の言葉にキレ、未来の襟首を掴むヴェル。

「くだらないだと！俺達の気持ちがお前なんかにはわかるか！知った風な事言っつてんじゃねえ！」

「くだらないさ。そんな事のために犯罪を犯して、拳げ句の果てに騙されて。そんな事を！お前達の親は望むのか！？お前達の親は！お前達に元気に過ごしてくれって言っただんたろ！親の最期の願いを！お前達は破るのか！」

「うつせえ！親を亡くした気持ちなんて！お前にはわかんねえだろ！」

ヴェルの言葉に、未来は怒りの表情から一転、無表情になった。

「わかるよ……」

「……は？」

「わかるつつつてんだよ！俺だって！両親を事故で亡くしてんだよ！出張に行くって言って！そのまま帰ってこなかった！お前らと違って！俺は別れを言うこともできなかつたんだよ！」

未来の言葉に呆然とするヴェル達。そして申し訳なさそうな表情になる。

「それは…悪かった」

「…いいよ。それよりももう後ろを振り向くな。ゆっくりでもいい。前を向いて歩け。お前らの親がそう望んだように」

「…わかった」

未来の言葉に頷くヴェル達。

「えっと…。それではルルイエについての対策を話してもいいかしら？」

「どござ」

ヴェルの返事を聞いて、リンディは話し始める。

「まず起動したばかりのルルイエはバリアを何重にも張っているわ。まずはこれを破壊、そして本体に攻撃を加えコアを露出させます。そうしたら上空に転送、アースラのアルカンシエルで消滅させます。ルルイエを攻撃する際、ヴェルさん達は手伝っていただけますか？」

「はい」

「ありがとうございます。今作戦ではクロノも出動するのでアルカンシエルの発射は艦長代行として私がやります。作戦の決行は本日深夜、ルルイエの起動と共に開始します。各自、それまで休んでいてください」

『はい！』

そして各々、自分に割り当てられた部屋に戻っていく。未来もおなじように戻ろうとしたとき――

「未来、ちょっといい？」

のぞみに呼び止められた。

「なんだ？」

未来が不思議そうに尋ねる。

「あ、えっと……」

少し言いよどむのぞみ。その顔は少し赤い。

「？何も用がないなら行くぞ」

そう言っつてその場から立ち去ろうとする未来。

「あ、ちょっと待って！」

のぞみは慌てて未来を止め、意を決したように口を開けた。

「今夜、作戦が無事に終わったらあんたに言うことがあるから」

「は、はあ」

「だから！今夜の作戦。絶対に帰ってくるわよ」

「あ、ああ」

「約束だからね」

「わかった。約束だ」

そう言っつて未来は立ち去った。そんな未来の背中をのぞみは心配そうに見つめる。何故、のぞみが突然こんな事を言っつたかというと、妙な胸騒ぎがしたからだ。もう、未来に会えなくなるような、そんな不安。その不安を消すかのようにのぞみは首を横に振り、自分の頬をパシンと叩く。そしてのぞみも自分の部屋に戻っつていった。

## 第九話 決戦（前書き）

感想、アドバイスなど、お願いします。

## 第九話 決戦

深夜

海鳴湾沖のルルイエがある場所には封鎖結界が張られている。

今、ここには未来、カコ、のぞみ、なのは、フェイト、はやて、シグナム、ヴィータ、クロノ、ヴェル、クレイ、キリユウ、サラ、セラ、そしてサポート係としてザフィーラ、シャマル、アルフ、ユーノがいる。海面には黒く光るドーム状の物体ールルイエがある。そして突然、ドームが割れ中から異形の物体が現れる。その姿は八本の足を持ち、正面に怪獣のような口を持つ。背中には巨大な翼を持ち、その間にはルルイエに呑み込まれたドレッドの上半身がついている。海面からはたくさんの職種が生え、五重のバリアを張っている。

「私から行くぜ！アイゼン！」

『Ja！』

ヴィータがそう言いアイゼンを構える。

「鉄槌の騎士ヴィータと、鉄の伯爵グラーフアイゼン！」

『Gigantform！』

アイゼンがカートリッジを二発ロード、ハンマーヘッドを巨大な角柱状のものに変形させた形態ーギガントフォームになる。

「ギガント！シュラーク！」

ヴィータの声と共に振り下ろされるアイゼン。それはバリアに叩きつけられ、バリアを一枚破壊する。

「うがああああああああ」

ルルイエが叫び、触手がなのは達を襲おうとする。それをザフィーラが切り裂く。

「縛れ！鋼の軛くわ！」

ザフィーラの叫びと共に突き出される両腕。腕の前にある白いベルカ式の魔法陣から白い光が放たれる。その光は鞭のようになり、触手を切り裂いていく。

「剣の騎士、シグナムが魂、炎の魔剣レヴァンティン！」

シグナムは柄尻と鞘をあわせ、カートリッジをロードする。

『B o g g e n f o r m』

レヴァンティンは光を放ち変形、弓の形態——ボーゲンフォルムになる。

シグナムが弓に手をそえると魔力の矢が発生する。シグナムは矢を引きカートリッジを二発ロード、矢の輝きが増す。

「翔けよ、隼！」

声と共に放たれる矢。それはバリアにぶつかり爆発、破壊する。

「ウィルレイン兄妹、長女！キリュウ・ウィルレイン！行かせて頂

きます！」

声と共にキリユウは槍を頭上で回す。刃の部分に集まる魔力。そして突きの体制で構え、カートリッジを二発ロード、さらに魔力を高める。

『Arc lance』

「はああああああ！！！」

突きと同時に解放される魔力。刃の形で放たれ、だんだんと巨大化していく。

そして先端がバリアに接触すると同時に高速回転を始める。耐えきれずに破壊されるバリア。

「同じくウィルレイン兄妹が次男、クレイ・ウィルレイン！行くぜ！！！」

『grand ax』

クレイの声と共に、カートリッジを二発ロード、アープの柄がクレイが持っている部分と刃がついている部分に分かれ、その間は魔力の鎖で繋がれている。そして刃の部分が巨大化する。

「うおおおおおお！！！」

クレイはアープを鞭のように振るい、バリアに叩きつけ、バリアを破壊する。

「日比野未来とメビウスリング！行く！」

『Trident smash』

未来はカートリッジを三発ロード、トライデントフォームとなったメビウスリングを体の前で回転させる。両端についている刃には魔力が纏われ、青い円形の軌跡が浮かぶ。そして、その前に青色の魔法陣が出現する。

「はあああああああ！！！！」

声と共に放たれる砲撃。それはバリアを貫通し、本体にもダメージを与える。

「貴様らあああああああ！！！！」

叫び声と共に再び未来達を襲おうとする触手。しかしそれは阻まれる。

「行くわよ！セラ！」

「うん！お姉ちゃん！」

「ウィルレイン兄妹が次女、サラ・ウィルレインと！」

「ウィルレイン兄妹が三女、セラ・ウィルレイン！」

「「行きます！カートリッジロード！」」

『『Load carttridgge』』

『Lightning sword』

『Ice claw』

サラとセラはそれぞれ、雷を纏った双剣と冷気を纏った爪で触手を切り裂いていく。切り裂かれた触手は麻痺、または凍り動きが止まる。

「があああああああ！！！」

異形は叫び声をあげ、翼を大きく広げ羽ばたき始める。だんだんと浮かび始める巨体。

「ウィルレイン兄妹が長男、ヴェル・ウィルレイン！飛ばせるか！」

『Flame slash』

ヴェルはカートリッジを二発ロード。するとツルギは炎を纏った。

「はあああああああ！！！」

ヴェルがツルギを振るうと共に放たれる三日月状の炎の斬撃。それは一撃で異形の翼を切り裂いた。翼を切り裂かれ、落下する異形。しかし、異形は口の前に光を集め砲撃を放とうとする。そして放たれる砲撃。

その前に割り込むのぞみ。その手にはガントレットフォームとなったノアが纏われている。

『Load cartridge』

ノアはカートリッジを三発ロード、その右手にまりよくが纏われる。

「クラツシュインパクト！」

突き出されるのぞみの右手。それは砲撃と接触し拮抗、やがて相殺した。

「悠久なる凍土、凍てつく棺のうちにて、永遠の眠りを与えよ」

その間に詠唱をするクロノ。魔法陣が展開され、異形の周りの海水が凍る。

「凍てつけ！！」

『E t e r n a l C o f f i n』

異形はその動きを一時的に止める。

「今だ！」

クロノの声に反応し、砲撃を放とうとするのは、フェイト、はやて、カコ。

なのはがレイジングハートを構えると先端に光が収束する。

「全力全開、スターライトー」

フェイトがザンバーフォームのバルディッシュを振るい、その刃に雷が走る。

「雷光一閃、プラズマザンバーー」

はやてがシュベルトクロイツを掲げ、魔法陣が展開される。そこに収束される黒い光。

「響け終焉の笛、ラグナロク」

カコがガイアを振りかぶり、目の前の魔法陣に収束される赤い光。

「輝け、光よ、シャイニングー」

「『『『ブレイカー!!!』』』」

同時に放たれる四つの砲撃。それはそれぞれ、別方向から異形を襲い、爆発を起こす。

「本体コア、露出!」

露出したコアをシャマルが捕まえる。

「『『『転送!』』』」

転送魔法を発動するシャマル、アルフ、ユーノ。異形の真下に魔法陣が出現し、転送される。転送される場所は上空、アースラの前。転送された異形はいまだ再生を行っている。

「アイヤリングロックシステム、オープン」

リンディの前に出現する鍵穴。リンディはこれに鍵を差し込む。発射準備が完了するアルカンシエル。そして鍵を回すと同時に放たれ

るアルカンシエル。

「あがあああああああああ！！！」

アルカンシエルが当たる直前、異形は地上に向けて一発の光弾を放つ。そしてアルカンシエルは異形に当たり…異形は完全に消滅した。

…しかし、放たれた光弾に気づいた者はだれもいなかった…。

「みんな！ルルイエの消滅を確認！終わったよ！」

エイミイの言葉に歓声をあげる一同。ウィルレイン兄妹も集まって喜んでいる。カコとのぞみものは達と一緒に喜んでいる。その光景を見て、微笑む未来。

そこで未来は気づいた。上空から迫る一つの光に。それは先程ルルイエが放った光弾だった。それに気づいているものはいない。そしてそれはまっすぐウィルレイン兄妹に向かっていく。今から叫んでも避けるのは間に合わない。

「くそっ！」

未来は悪態をつき、ソニックムーブでウィルレイン兄妹と光弾の間に割り込む。その瞬間、辺りを光が包んだ。

## 第十話 告げる別れ（前書き）

今回で第一章は終了です。

…第一章の最後にしては短いです。

## 第十話 告げる別れ

光が止む。しかし何も起きていないように思える。

「未来!？」

いつのまにか近づいてきたのぞみが驚いた声をあげた。その声は僅かに震えている。のぞみは俺の足を見ている。

「?」

疑問に思い未来は自分の足を見ている。そこには――

――つま先からだんだんと消えてきている足があった。

「なっ…!？」

驚愕する未来。そしてすぐに気づく。

これが先程の光弾の効果なのだ。

そう気づいた未来は周りを見回した。そこにはカコ、のぞみ、なのは、フェイト、はやて、ヴェル、クレイ、キリュウ、サラ、セラがいた。少し離れた場所にはシグナム、ヴィータ、シャマル、ザファイ

ーラ、クロノ、アルフ、ユーノがいる。カコ達は何が起こっているのかわからないといったような表情をしている。

「…俺はどうやら消えるらしい。多分次元の狭間あたりをさまようことになるんだろう」

未来の言葉を聞いてカコ達は信じられないといったような表情になる。

「そんな…。嘘だよね？お兄ちゃん」

カコが今にも泣きそうな顔で聞いてくる。そんなカコに未来は悲しそうな顔をして言った。

「嘘じゃない。おそらくさっきの光弾のせいだろうな」

「なんで…なんで私達を守ったりしたのよ。まだ会って数日しかたっていないのに」

サラの言葉に未来は少し困ったような顔になる。

「なんでって…。守るのに理由はいらないだろ？あえて言うなら、お前達にはこれから楽しい事がたくさんある。その未来を、俺は守りたかった」

「なによ…かっこつけてんじゃないわよ…」

未来の答えにのぞみがそう言う。のぞみの瞳からは涙が溢れている。

「別にかっこつけてるつもりはないんだけどな…」

未来はのぞみに対してそう言うとなのは、フェイト、はやての方を向いた。

「なのは、フェイト、はやて。短い間だったけど俺と仲良くしてくれてありがとう。アリサやすずかには俺は転校したとでも言ってくれ。…本当に、ありがとう」

未来は今までのような名字にさん付けではなく名前で言った。

「未来君…」

「未来」

未来の言葉になのは達は涙を流す。

そしてその時、フェイトは自分の気持ちに気がついた。

クレイとキリュウにやられそうになった時、自分を助けてくれた。模擬戦の時、撃墜され地面に落下するしかなかった自分を助けてくれた。

魔力を奪われ、地面に倒れていた自分に最初に気づいてくれた。そしていつのまにか、未来といると胸の奥が温かくなるようになった。

そして今、フェイトは自分の気持ちを知った。

――自分は、未来のことが好きなのだ。

しかし、今、未来は消えようとしている。それがどうしようもなく悲しい。あとからあとから涙が溢れてくる。

そんなフェイトに気づかず、未来は次にウィルレン兄妹の方を向いた。ヴェルとクレイは辛そうに俯き、サラは涙をこらえている。キリュウとセラは瞳から涙を溢れさせている。

「ヴェル、クレイ、キリユウ、サラ、セラ。最初は敵だったけど、これから仲良くなれると思ってたよ…。これからは親の願いの通り、元気に過ごしてくれ」

未来の言葉にヴェル達は頷いた。辛そうに、そして涙を流しながら。次に未来はのぞみの方を向いた。既に体はへそのあたりまで消えている。

「のぞみ。ミッドチルダに住んでいた頃から仲良くしてくれてありがとう。お前が聖祥中に転校してきた時は驚いたけど、話せる友達がいって、本当に良かったよ。必ず帰るって約束、守れなくてごめんな」

「そんな事言わないでよ…！バカ…！」

のぞみは溢れてくる涙を拭いながら答える。そんなのぞみに未来は申し訳なさそうな顔をして、次にカコの方を向く。

「カコ、昔は無視してばかりでごめんな。お前のおかげで俺は立ち直れた。それから、一緒にプールに行けなくてごめんな。叔父さん達に、よろしく」

「そんなの気にしてないよ…。だから、一緒にいてよ…。お兄ちゃん…」

カコは溢れる涙を拭いもせず未来にそう言う。そして、最後に未来は一度みんなを見回した。すでにその体はほとんどが消えている。

「みんな…。笑ってくれよ…。笑って、別れようぜ…」

未来の瞳からも涙が溢れてくる。そして未来は口を開いた。

「本当に…本当に……今まで………」

——ありがとう——

そう言い終わると同時に未来の姿は完全に消えた。

「お兄ちゃあああああああん!!！」

「未来iiiiiiiiiiiiiiii!!！」

後に残ったのはカコとのぞみの悲痛な叫びとフェイトの嗚咽だけだった…。

## 第二章 プロローグ(前書き)

今回から新章突入です。

## 第二章 プロローグ

周りには何も存在しない漆黒の空間。そこに未来はいた。体は少年ではなく青年と呼べる程に成長し、しかしその目は固く閉じられている。

「未来」

突然の未来を呼ぶ声。そして未来の前の空間が光り出し、そこから人影が二つ現れた。一人は女性。一人は男性だ。

「未来」

再び未来を呼ぶ二人。

その時、未来の固く閉じられていた目が僅かに動き、少しずつ開いた。

「…父さん……母さん……」

二人を見た未来はそう言った。

「—そう、二人は未来の両親だった。」

「久し振りね、未来」

「う、うん。久し振り……って二人共どうして？二人共死んだはずじゃ……」

「うん、それは今から説明するよ。簡潔に言うと、カコちゃんやの

ぞみちゃん、テスタロツサさん達の住む世界、いや、ほとんどの次元世界に危険が迫っている。お前にはそれを救ってほしいんだ」

「……………は？」

あまりに突然の事の為、困惑する未来。

「ちょっと待て。なんで俺？俺にはそんな力無いよ」

未来の言葉に二人は手を前に出す。母親の手の上には一つの赤い腕輪が、父親の手の上には一つの光の球がある」

「……………それは？」

「これがその力だよ。これでお前は強くなれる。でも、この力は善にも悪にもなる。使いこなせるかはお前次第だ」

二人がそう言うのと腕輪は未来のメビウスリングのついてる方とは逆の腕についた。

そして光の球は未来の体に溶け込んだ。

「この力で、お前の仲間達を助けるんだ。がんばれよ」

そう父親が言うと同時に未来の体は光に包まれた。

「父さん！？母さん！？」

「大丈夫。私達はいつでもお前の事を見守ってるよ」

そこで未来の意識は途絶えた。

そして光から抜け出した未来は森の中に倒れた。

第二章 第一話 スカリエツティ脱獄 機動六課再び(前書き)

第二章、始まります。

## 第二章 第一話 スカリエツティ脱獄 機動六課再び

マリアージュ事件から半年後

第9無人世界

「グリューエン」

ここにある軌道拘置所にその日、襲撃があつた。

監房が並ぶ薄暗い廊下。その手前には時空管理局の武装局員が警備についている。その警備員の男は欠伸をしながら眠そつに警備をしている。デバイスも近くの壁に立てかけられている。

「ふわあつ。眠っ…」

「そんなに眠いなら眠らしてやるっ」

「!?!」

突然男の背後から聞こえてくる声。眠気はすぐに覚め、男は自身のデバイスを取ろうとする。

「させるかよ」

しかし声の主である全身を黒に包んだ青年は自身が持つ剣型のデバイスで男の首を殴り、気絶させた。

そして青年はどんと奥に歩いて行く。途中にいる局員は全員気

絶させた。そして青年は一つの監房の前で立ち止まった。その扉の上には第1監房の書かれたプレートがある。そしてデバイスでその扉を破壊する。その監房には紫色の髪に金色の瞳の男性がいた。

「おやおや、お客さんかい？随分と派手なご登場だね」

「黙れ。犯罪者ID：GG-W-85494-D765642137443-11、ジェル・スカリエッティだな？」

「ご挨拶だね。いかにも、僕はジェル・スカリエッティだよ」

青年の言葉に男性——ジェル・スカリエッティは肩を竦めながら答えた。

「ならいい。今からお前を脱獄させる。文句があるならお前はここで死ぬまで居ることになるぞ」

青年の言葉にスカリエッティは少し驚いた顔をしたがすぐにいつもの笑みを浮かべた。

「いや、文句はないよ。ただ、どうして僕を脱獄させようと思ったのか聞かしてもらえないかな？」

「ただお前に暴れてほしい。それだけだ」

青年はそう言うとスカリエッティを連れて転移魔法を使える場所まで来た。

「あ、ちょっと待ってくれないか？一緒に連れて行きたい者がいるのだが」

「誰だ？」

「ウーノとクアットロだよ。彼女たちは使えるからね」

スカリエツティの言葉に青年は少し考えてから答えた。

「ウーノとクアットロとは犯罪者ID：GG - W - 85494 - D  
765642137443 - 12とGG - W - 85494 - D76  
5642137443 - 14の事か？」

「犯罪者IDまでは知らないけどおそろくね。いいかな？」

「構わない。その方がお前にとって暴れやすいんだろう？」

「そつだよ」

そして青年とスカリエツティは転移魔法を使い第17無人世界『ラ  
ブソウルム』と第6無人世界『ゲルダ』をまわった。そしてそれぞ  
れの軌道拘置所からウーノ、クアットロを連れ逃げ出した。その時、  
青年はスカリエツティにある者を渡した。

「これは？」

「これは古代ベルカのロストロギア『テュルフィング』だ。管制人  
格は破壊してある。第97管理外世界にはこういった武器型のロス  
トロギアや生物型のロストロギアが多数存在する。どうするかはお  
前の自由だ」

そう言つて青年は去つていった。

翌日、スカリエツティ一味の脱獄は時空管理局に通達された。

これにより八神はやて二等空佐はかねてより考えていた機動六課再編を決意。

半年後にはリンディ・ハラウン提督、レティ・ローラン提督、クロノ・ハラウン提督、ヴェル・ウィルレイン提督、そして聖王教会教会騎士団の騎士にして時空管理局理事官、カリム・グラシアを後見人とし、隊長陣に高町なのは一等空尉とフェイト・T・ハラウン執務官、副隊長陣にヴィータ三等空尉とシグナム二等空尉、戦技教導官に相原のぞみ執務官と日比野カコ二等空尉、FW陣にスバル・ナカジマ陸曹、ティアナ・ランスター執務官、エリオ・モンデリアル一等陸士、キャロル・ルシエー等陸士を始めとする元機動六課メンバーが集結した。

また、この半年の間にもスカリエツティは一回だけ事件を起こした。新型のガジェットによる市街地への襲撃。

最初の襲撃では偶然近くで休暇をとっていたスバル・ナカジマ陸曹とギンガ・ナカジマ准陸尉による素早い撃破と救出が行われた為、被害はほとんどでいていない。しかしこの新型は今までのガジェットと違い、四足歩行の獣型と翼を持ち二型以上の飛行能力を持つ鳥型で、今まで以上の強さを誇っている。そのためこの新型のガジェットに対し管理局は警戒態勢をとっている。

そして機動六課が再編されてから数日後、六課の隊舎は以前と同じ場所にあるため近くには海や森林がある。その森林で異変が起きた。

「隊舎近くの森林に次元の乱れを確認！」

「次元の乱れ？何か変わったことはあるか？」

報告をした隊員に対して部隊長である八神はやてが問う。そばには高町なのは、フェイト・T・ハラOWN、相原のぞみ、日比野カコ、シグナム、ヴィータがいる。

「特には無いと思われませう。どうしますか？」

「そうやね。FW陣に見回りに行かせよか。スバル達に連絡や」

「わかりました」

そうしてはやては指示を出すとスバル達からの報告がくるのを待った。

森林

そこでスバル達は見回りをしていた。だんだんと次元の乱れが起きた場所に近づいていく。

「もうすぐ次元の乱れがあった場所よ。油断しないように」

ティアナの言葉にスバル達は頷く。そしてその場所に着き――

――愕然とした。

そこには木など最初から無かったかのように平坦な地面が広がっていた。そしてその中心に一人の青年が倒れている。

「スバル、すぐにあの人を隊舎に運ぶわよ。エリオとキャラロは八神部隊長に報告して」

ティアナはそう指示するとスバルと協力して青年を持ち上げる。その少し離れた所ではエリオとキャラロが報告をしている。

機動六課隊舎

「八神部隊長。報告が入りました」

「わかった。モニターに出して」

そしてモニターにエリオとキャラロがでてくる。

「部隊長。次元の乱れがあつた場所で一人の青年を発見。今、スバルさんとティアさんが医務室に運ぼうとしています」

「わかった。ちょっとその人の顔を見してもらえるか？」

「わかりました」

そう言うなりモニターに映る青年の顔。

その顔を見て、なのは達は愕然とした。

その顔は前より成長しているが見間違いではない。

八年前に別れを告げられた少年の顔を忘れる筈がなかった。その顔を見て、カコは呟いた。

「お兄ちゃん……」

そう。その青年は八年前に消えた筈の日比野未来だった。

## 第二話 衝撃（前書き）

部活の大会の最中に執筆しました。

## 第二話 衝撃

未来が目を覚ますと見えたのは真っ白な天井だった。上半身を起こし、周りを見回す。部屋に置いてあるベッドや薬品からここが医務室だというのはわかる。

未来は部屋の外に出ようと思いい床に足を下ろす。その瞬間――

「お兄ちゃん！」

バタンツ！と扉が勢いよく開かれ一人の女性が現れた。腰まで伸びる長い茶髪の女性はいきなり未来に抱きついた。

「え、ちょ、ちよつと!？」

いきなりの女性の行動に慌てる未来。そして女性の顔を見てさらに慌てた。

「お兄ちゃん…。ひぐつ。お兄ちゃん…。良かったよ…。えぐつ。良かった」

女性は泣いていたのだ。そして女性の兄という言葉に困惑する未来。女性のいう兄という人物が誰なのかわからない。未来は女性を引き剥がして少し離れた。女性は涙を流しながらもかなり嬉しそうだ。しかし、次の未来の言葉にその顔は固まった。

「君……誰？」

未来は不思議そうに尋ねる。その顔は本当にわからないといった顔だ。

「お兄ちゃん…？私だよ！カコだよ！わからないの！？」

女性——カコは未来の肩を揺すりそう言った。しかし効果はない。

「ごめん…。俺…」

未来は……

「自分の名前以外に何も覚えてないんだ」

記憶喪失になっていた。

今、医務室には未来とカコをはじめのぞみ、なのは、フェイト、はやて、シグナム、ヴィータ、シャマル、ザフィーラがいる。いずれも未来と面識のある人物だ。

あの後、すぐにのぞみ達が入ってきた。そして未来が記憶喪失だと知って嬉しそうな顔から一転、ショックを受けた顔になった。

「あの…皆さんは俺の事を知ってるんですか？」

思い空気の中、未来は尋ねた。その問いにフェイトは辛そうに答える。

「うん…。私達は記憶を無くす前の君を知ってる…」

「そう…ですか…」

再び静かになる空気。そんな中、カコはシャマルに尋ねた。

「シャマルさん。何かお兄ちゃんの記憶を戻す方法はないんですか？」

「わかりません…。記憶を失った原因は先程の時空の乱れだとは思いますが…。何かのショックで記憶を取り戻す事もあれば一生取り戻さない事もあります」

シャマルの答えに再びショックを受ける一同。三度静かになる。そして少し経ち、カコははやてに尋ねた。

「はやてさん。お兄ちゃん…いえ、未来さんはどうしますか？」

「そうやね…。とりあえず次元漂流者として六課で保護しよか」

「ありがとうございます。あの、何か手伝える事はありますか？」

未来の言葉にははやては少し考えてから答えた。

「魔法の事は覚とる？」

「魔法…？」

「うん、魔法。未来君の左腕に腕輪があるでしょ」

「腕輪…？」

未来は自分の左腕を見つめる。そこには青い腕輪がついていた。

「久しぶりだね、メビウスリング」

「……………」

カコが青い腕輪—メビウスリングに話しかけるが何も話さない。不思議に思ったシャマルが調べてみると、言語機能が壊れている事がわかった。

「大丈夫。六課には優秀なメカニックがいるから。すぐに直してくれるよ」

なのはの言葉も未来は聞いていない。そして未来はメビウスリングに触れる。その際、未来の右腕についている赤い腕輪にカコ達は気づいた。

「おに……未来さん。その赤い腕輪は？」

「わからない……。これは一体……ぐっ!？」

未来は赤い腕輪に触れると顔を歪めた。

「ぐあああああああああ!!!」

未来の頭の中に多量の情報が入り込んできた。その為、ひどい頭痛がする。しかしそれはすぐに収まった。

「だ、大丈夫ですか？」

六課で医務官をやっているシャマルが未来に尋ねる。未来は肩で息をしているが、もう大丈夫そうだ。

「大丈夫……。それと、魔法の事は思い出したよ」

未来の言葉に驚くカコ達。

「そ、そか。なら、戦技教導官を頼もうかな？」

はやての言葉にカコ達は頷く。

「そうと決まればまずはメビウスリングの修理やな。あと明日、六課のFW陣と模擬戦をしてみらおか」

そしてはやて達はメビウスリングを回収。その際、赤い腕輪も回収しようとしたが何故か腕からはずれなかった。

### 第三話 模擬戦 VS FW陣

機動六課 空間シミュレーター

今、そこには未来と六課のFW陣がいる。シミュレーターは現在、ビル街になっていて、道路の両脇には樹が植えられている。何故未来達がここにいるのかというと、前日の話に挙げた模擬戦をするためである。メビウリングの修理も終わり、この模擬戦でデータを収集、さらに調整をするらしい。

「準備はいい？」

モニターに映るなのはが未来達に問いかける。

「いつでもどうぞ」

「大丈夫です」

未来達の答えになのはは頷き

「始め！」

告げる。

「はあああああああ！ー！」

それと同時にスバルは瞬時に距離を詰める。それを見て未来はメビウリングをブレードフォームからナックルフォームに変え、スバルを迎え撃つ。

「はあっ！」

振られる右腕のリボルバーナックル。未来はそれを受け流し、右足でスバルの脇腹に蹴りを入れる。その一撃をスバルはかるうじて避け、両の腕で未来を連打する。それを未来は全てガードし、逆に回し蹴りをする。スバルはバックステップで回避、未来と距離をとる。

「クロスファイアー！シユート！」

その瞬間、横から飛んでくる橙色の15個の魔力弾。未来はそれを避けられるものは避け、避けられないものは叩き潰した。

「スバル！エリオ！今よ！」

ティアナの声に反応し、スバルとエリオがそれぞれ別の方向から襲いかかってくる。

「はあああああああー！」

「でりゃあああああああー！！！」

未来はエリオの攻撃はバリアを使い横に受け流し、スバルの攻撃はプロテクションで正面から受け止めた。

「お返しだ」

そうやって未来は空いた方の腕に魔力を纏い地面に叩きつける。すると地面は未来を中心に広範囲が割れ、スバル達を巻き込む。

「ストライダー！フォルムツヴァイ！」

『D u s e n f o r m』

「マツハキャリバー！」

『W i n g R o a d』

それをエリオとスバルはそれぞれ空を飛ぶことのできるデューゼンフォルムとウイングロードで空に逃げ回避、その場から離脱。それを見て未来も空に飛び、空からスバル達を捜す。そして…

「見つけた！」

未来が見つけたのはキャロとティアナ。未来はすぐに急降下しメビウスリングをブレードフォームに変え、切りかかる。

「何っ！？」

が、切りかかった瞬間にティアナ達の姿が消える。

「今よ！」

「幻術！？」

未来は畏だど気づきその場から離れようとするが時すでに遅し。未来の真下の地面に魔法陣が展開される。

「錬鉄召喚！アルケミックチェーン！」

魔法陣から出てきた鎖に体の自由を奪われる未来。それと同時に左右から再びスバルとエリオが攻撃してくる。

「ちっ！メビウスリング！」

『Burst Sphira』

鎖の近くにスフィアが展開、爆発する。それにより鎖を破壊し、プロテクションを張る。ぶつかる拳と壁、槍と壁。しかしそこはカートリッジを使った攻撃。少しずつヒビが入る。

「いける！」

「甘い」

スバルとエリオの周囲にスフィアが展開される。

「しまった！」

爆発するスフィア。スバル達はギリギリで後方に下がったが、多少のダメージを受け少し動けなくなる。

「他の二人が厄介だな」

そう呟き未来は空にあがる。そしてティアナとキャロを捜す。

「！？」

その時、未来にレーザーポインターの赤い光が当たる。それに気づいた未来はレーザーポインターの発射地点を見る。

「ティアナか」

そこにはクロスミラージユを構え未来を狙ったまま動かないティアナがいた。

「メビウスリング」

『Plasma Sphira』

未来の周りに雷を纏ったスフィアが10個出現、ティアナに向け放たれる。

「あれ？未来って雷の魔力変換資質なんて持ってたっけ？」

「いや、あれはスタンバレットと同じだよ。麻痺効果を付加しただけ」

のぞみの言葉になのはが返す。

「まあ、意味は無いけどね」

「ティアナ、昔も似たような事したよね」

「まあ、あの時とは違って無茶はしてないけどね。もしかしたら未来君負けちゃうかもね」

なのは達の見ているモニターにはスフィアの直撃を受けティアナが消える所が映っていた。

「また幻術!？」

未来は消えたティアナを見て叫んだ。その瞬間――

「フロントムブレイザー!」

背後から放たれる橙色の砲撃。未来がそれに気づいた時にはそれは間近に迫り回避する暇はない。未来は振り向きカートリッジを二発ロード、剣に魔力を纏わせ砲撃にぶつける。しばし拮抗するもののすぐに砲撃が押し勝ち、未来を呑み込む。

「やった!？」

遠目で確認するティアナ。その目に映ったのは――

「なっ!？」

少々ダメージを受けながらもまだまだ余裕のありそうな未来だった。

それを見てティアナはすぐにその場から離れる。同じ場所にはすぐにやられる。そう思いティアナはアンカーショットを駆使して自身の今できる最高速で移動する。ビルからビルへ移動しながらティアナは指示を飛ばす。

《スバル！エリオ！恐らく未来さんの狙いは私かキャロよ！エリオはキャロと！スバルは私と二人一組ツーマンセルで動くこと！わかった！？》

《わかりました！ティアさん！》

《わかったよ！ティア！》

《それじゃあすぐに合流！作戦は合流した後に直接伝えるわ！》

ティアナはそう伝え念話を切る。そして再び走り出した。

「もう逃げたか…」

未来はあの後すぐに砲撃の飛んできたビルに飛んだ。しかしそこには誰もおらず既に逃げたのだと思われる。

未来は三度空からティアナ達を捜す。そして見つけた。

「エリオとキャロか…」

見つけたのはエリオとキャロ、そしてフリード。二人と一匹はビルとビルの間を移動している。

「今度は幻術じゃないだろうな……」

未来はそう呟くと確認の為にスフィアを数個展開、エリオ達の少し前に向け放つ。

エリオ達はこれに気づき立ち止まる。

それを見て未来は本物だと確信、エリオ達に向け急降下する。

「フリード！ブラストフレア！」

それにキャラロが気づき、フリードが火球を放つ。未来はそれをかわし一気に距離を詰める。

「はあっ！」

声と共に振るわれる剣。それをエリオがストラダの柄で受け止める。少しの間拮抗するが、やがてエリオが押され始める。

「！」

そして未来は突然体を引いた。

「ブラストフレア！」

瞬間、さっきまで未来がいた場所を数個の火球が通り過ぎる。

「エリオ君、大丈夫？」

「大丈夫だよ。ありがとう、キャラロ」

エリオはキャロにそう言うのとストラダを構え直す。その視線は未来を捉えている。未来もメビウスリングを構え直しエリオを見る。刹那、未来は瞬時に距離を詰め、袈裟掛けに切りかかる。エリオはそれを弾き返し、水平にストラダを振る。未来はバックステップで回避、突きを繰り出す。エリオはそれをサイドステップで回避、未来と距離をとる。未来はそれを追撃しようとするが横から飛んできたフリードの火球に阻まれる。

「我が乞うは、疾風の翼。若き槍騎士に、駆け抜ける力を」

『Boost Up Acceleration』

キャロはブースト魔法によりエリオの機動力を強化、エリオはストラダを未来に向ける。

『Speerrangriff』

エリオはキャロのブーストもあり、凄まじい速さで未来に突撃する。あまりの速さに未来は回避できず、煙があがる。

エリオは煙の中から現れ地面に着地、煙の方に向け構える。やがて煙がはれ、未来の姿が見えるようになる。

「いってえ…。結構やるじゃん」

未来のバリアジャケットはボロボロだが、これといった外傷は見られない。どうやらかるうじて防いだようだ。

「これで決める」

エリオはそう言い、ストラダに電撃を纏わせる。その状態からさらにカートリッジを二発ロードする。

「それならこっちも」

それに対し未来もカートリッジを二発ロード、メビウスリングから巨大な魔力の刃が伸びる。

二人は同時に走り出し、エリオはストラダを、未来はメビウスリングを振りかぶる。

「紫電！」

「バーニング！」

振り下ろされるストラダとメビウスリング。

「一閃！」

「スラッシュ！」

交差するストラダとメビウスリング。その瞬間、爆発が起き周囲を煙が包んだ。

「くっ！」

煙の中からエリオが飛び出す。その姿はボロボロで立つのもやっとといった感じだ。

「やったかな……!?!?」

「はい、これで撃墜」

煙を見るエリオの背後に突如未来が現れ、剣の柄でエリオの頭を軽く叩く。

「いつのまに!?!」

「ん?ソニックムーブで移動しただけだ」

そう言うと未来はソニックムーブでキャロの側に移動、剣の柄で頭を軽く叩く。

「これでキャロも撃墜、後はスバルティアナだけか」

未来はまた空にあがりスバル達を捜し始める。

「見つけた!」

未来が見つけたのはスバル。未来は即座に降下しスバルに近づく。スバルはそれに気づいたのかウィングロードを使い未来に向かってくる。

「はああああああ!!!」

「甘い」

スバルがリボルバーナックルで殴りかかってくるが未来は頭を右に反らし回避、そのままスバルの右腕をつかみ背負い投げの要領で空中に投げ飛ばす。

「くっ！……リボルバーシュート！」

スバルは空中で体勢を立て直しナックルスピナーを回転、その衝撃波を未来に向け打ち出す。

「ぐっ！？」

予想しなかった攻撃に未来はろくに防御も出来ずビルに叩きつけられた。

「いつてえ……。メビウスリング、ナックルフォーム」

『了解』

瓦礫の中から起き上がった未来はメビウスリングをブレードフォームからナックルフォームに変え立ち上がる。

「はあ！」

同時にスバルがビルに飛び込んでくる。それと一緒に二十個程の橙色のスフィアも飛んでくる。

「ちっ！」

未来は近くにある瓦礫をいくつか蹴り上げ、スフィアとぶつける。それによりスフィアは半分程に減る。

「はっ！」

未来は先に飛んでくるスフィアを殴り飛ばし消滅させる。

「でりやああああああああ！！！」

最後のスフィアを殴り飛ばした所でスバルが殴りかかってくる。未来は瞬時に膝を曲げしゃがみかわす。そのまま左足を軸に逆時計回りに回転、スバルの足を右足で払う。

「っ！はっ！」

が、スバルは左腕一本で体を支え、逆に蹴りを放つ。

未来はそれをバックステップで回避、スバルと距離をとり右腕のメビウスリングからカートリッジを二発ロードする。

スバルも体勢を整え、カートリッジを二発ロード、足下にベルカ式の魔法陣が展開され、マツハキャリバーのウイル（車輪）が高速で回転し始める。二人は右腕を引き、構える。

そして刹那――

「はああああああああ！！！」

「でりやああああああああ！！！」

二人は同時に駆け出し、お互いの右腕を、リボルバーナックルとメビウスリングをぶつける。

その衝撃で周囲の瓦礫は全て吹き飛び、二人の周りは平らな床に戻る。

二つの拳はしばらく拮抗した後、お互いを弾く。同時に放たれるス

バルの左回し蹴り。未来は上半身を後ろに反らしそれを回避。そのままバク転し、跳ね上げた右足でスバルを蹴り上げる。未来はすぐに追撃をかけようとする。

『Variable Barret』

「シュート！」

その瞬間、横から飛んでくるスフィア。未来はとっさにバックステップで回避する。スバルはバク宙で体勢を整え未来から離れる。

「ティア、ありがとう！」

「いいからさっさとやるわよ！」

スフィアを放ったのはティアナ。ティアナはツーンハンドモードのクロスミラージユを両腕に握っている。

「シュート！」

ティアナはクロスミラージユでスフィアを未来に撃ち込む。未来はそれを回避、その間にスバルが近づきリボルバーナックルで未来の腹を殴る。

「かっつ！」

未来は肺の息を全て吐き出し、吹き飛ばされる。壁に激突し、巻き起こる煙。

「クロスファイアー！シュート！」

さらにティアナが二十個のスフィアを煙の中に撃ち込む。

「やったかな？」

「さあ…？油断はできないわよ」

スバル達は油断なくデバイスを構え煙を見る。

やがて煙がはれると右腕を突き出し、プロテクションを張った未来がいた。

「かなりギリギリだったな…」

未来はプロテクションを解除し、構える。バリアジャケットはかなりボロボロになり、未来の表情からも余裕は消えている。そしてスバルとの距離を一気に詰める。

「ふっ！」

息を吐き出すと同時に右の回し蹴りを繰り出す。スバルはかろうじて防ぐがその威力に少し体が浮く。

『Variable Barrett』

「シユート！」

追撃をかけようとする未来に再び飛んでくるスフィア。未来はそれをかわし、体勢の整ったスバルを攻撃する。

「クロスファイアー！」

『Burst Sphira』

ティアナがスフィアを放つ直前、未来はカートリッジを二発ロード、周囲を百個のスフィアで囲む。

「っ！シュート！」

それでもティアナはスフィアを放つ。放たれたスフィアは未来が設置したバーストスフィアに阻まれ届かない。その間に再度スバルに接近、未来は右腕で肘打ちを決め、さらに追撃をしかける。左の膝蹴りで宙に浮かし、右足でさらに蹴り上げる。

「くっ！」

完全に宙に浮いたスバルに対し未来もジャンプ、そこから左回し蹴り、右の後ろ回し蹴りを決め宙返り、踵落としを決め地面に叩きつける。

「かはっ…！」

そして未来は三十程に減ったスフィアの内、半分をスバルの周りに設置する。これだ炸裂すれば流石のスバルも気を失うだろう。

「はい、これで撃墜」

「あはは…。ティア、ごめん」

未来はスバルの周りに設置したスフィアを消し、ティアナの方を向き構える。

「シュート！」

放たれるスフィア。未来はそれをブレードフォームにしたメビウスリングで切り裂き距離を詰める。

「はっ！」

振り下ろされる剣。ティアナはそれをダガーモードにしたクロスミラージュを交差させ防ぐ。未来は剣を引き、横から斬りつける。ティアナはそれを防ぐが、さらに斬りつける。何十と重なる斬撃。だんだんとティアナが押され始める。

『Sonic Move』

未来はソニックムーブでティアナの背後に回り、剣の柄で頭を軽く叩く。

「はい、撃墜」

こうして未来vsFW陣の模擬戦は未来の勝利に終わった。

「今日はこれでお終い。各自、反省点をレポートに纏めて明日には提出してね」

「「「「はいつ！」「」「」

「それじゃ、解散」

なのはの言葉にスバル達は一斉に座り込んだ。

「は。未来さん強いよ」

「まあ、八年前、記憶が消える前はフェイトちゃんに勝ったぐらいだしね」

「……えっ！」「」

なのはの言葉にスバル達はかなり驚く。

「フェイトさんに勝った……。どつりで強い訳ね……」

「まあ、未来はそのことも忘れてるみたいだけどね……」

「……悪い」

フェイトの言葉にいつのまにか側に来ていた未来が謝る。

「い、いや。今の未来が謝ることじゃないよ」

未来はフェイトの言葉に答えず、隊舎に戻っていった。

第四話 カトルフ遺跡の攻防（前編）（前書き）

初の前後編モノです。遺跡の名前は適当につけました。

#### 第四話 カトルフ遺跡の攻防（前編）

スカリエツティアジト

スカリエツティは宙に展開された複数のスクリーンを見て笑みを浮かべていた。スクリーンの一つには縁に装飾のされた丸い鏡が写っている。

「ははは、遂に見つけたよ、『聖鏡』。これで彼の言っていた第9管理外世界のロストロギアを探ることができる」

ロストロギア『聖鏡』。それは第9管理外世界に神話として伝わるロストロギアを探索するために作られた鏡。

「ドクター、まだ改造を始めたばかりなのでですから安静にしてください」

スカリエツティの側に展開されたスクリーンからウーノがそう言う。

「そうは言ってもね、ウーノ、僕は楽しくて仕方がないんだよ。彼がくれたテュルフィング、実に素晴らしい物じゃないか。しかもこれに匹敵するものやこれ以上のものもあるんだよ。雷神トールのミョルニル、キリストを貫いたロンギヌス、投げれば三十の鏃やじりとなって降り注ぐゲイボルグ、他にも天叢雲剣やグラム、バルムンクなどたくさん存在する！だが残念なことにそれらは数多ある次元世界に散らばっている。それらを見つけ出すには聖鏡が最も効率が良いんだよ」

「ですがガジェットを向かわせると六課が出てくるのでは？」

「そこはちゃんと考えているよ」

スカリエツティはそう言うとその考えをウーノに話した。  
数日後 機動六課

午前の訓練も終わり、FW陣はオフシフト、隊長陣及び教官陣は書類仕事をしていた。未来は他の人に教えてもらいながら頑張っている。

「日比野さん、チェックをお願いします」

なお、未来は隊長陣及び教官陣は名字をさん付けで呼んでいる。そう呼ばれた時、なのは達——特にフェイト、カコ、のぞみの三人——は悲しそうな顔をした。

「……わかりました」

幼い頃から名前と呼ばれていた為にカコの悲しみは他の二人よりも大きい。今も少し悲しそうな顔をしながら書類のデータを受け取る。

「……………抜けている所や変換ミスがいくつかあります。やり直して下さい」

が、いくら悲しくても仕事は仕事。カコは悲しみを押し殺して未来にデータを返す。

その時——

ビーン！ビーン！ビーン！

「アラート!?!」

『市街地近郊の森林地帯に未確体出現。隊長陣及び教官陣、FW陣、

704は出勤準備。待機中の隊員は準警戒態勢に入ってください』

「いきますよ、未来さん！」

カコと未来ははやてのいる司令室へと走った。

司令室

「動体反応確認！………何これ！？」

未確認の正体を見たロングアーチスタッフが悲鳴をあげる。

「どうしたんや？」

「未確認はガジェットなんですけど……数が異常です！一型と二型が50機ずつ、三型と四型が二五機ずつ！」

その数を聞いた隊長陣、FW陣、教官陣の顔に戦慄が走る。

「近くには市街地がある。出勤はスターズとライトニング。教官陣は待機や」

「はやてちゃん、私達も行くわ！」

のぞみの言葉にはやては首を横に振る。

「だめや。なんか……嫌な予感がするんよ。だから教官陣には待機していてもらう」

「……………わかったわ」

「それじゃあスターズとライトニングはヘリで現場まで移動。その後ガジェットを殲滅。もしかしたら新型が増援にくるかもしれない。十分気をつけてや」

『はい!』

なのは達は司令室を出てヘリポートへ走っていった。

市街地近郊

暗闇の中をいくつものガジェットが蠢いていて、空は二型が飛んでいる。

その光景を見てなのはが指示を出す。

「私とフェイト隊長で空のガジェットを殲滅。地上のガジェットは副隊長達とFW陣がお願いね。私達も殲滅でき次第地上に加わるから」

『はい!』

「それじゃ、まずは私とフェイト隊長が行くね」

そうやってなのはとフェイトはへりから飛び降りた。

「レイジングハート！」

「バルディッシュュ！」

「セツトアップ！」

『Set up』

『Get set』

なのはとフェイトをそれぞれ桃色と金色の光が包む。光が消えると二人はバリアジャケットを纏っていた。

「次は私達だ」

「行くぜ、お前ら」

「『はい！』」

次に飛び降りたのはシグナムとヴィータ、そしてFW陣。

「レヴァンティン！」

「アイゼン！」

「マツハキヤリバー！」

「クロスミラージュ！」

「ストラーダ！」

「ケリユケイオン！」

「セッアップ」

『Set up』

『Get set』

スバル達も光に包まれ、光が消えるとバリアジャケットを纏っている。

そしてなのはとフェイトは空のガジェット群へ、スバル達は地上のガジェット群へと向かった。

空　なのは　フェイト視点

「アクセルシューター！シュート！」

放たれる桃色の魔力弾。その数は二十。それは的確にガジェットを撃ち抜き、十機のガジェット二型を撃墜した。

『Sonic Move』

「はあああああ！！！」

振るわれるバルディッシュ・ハーケンフォーム。高速で振るわれるその斬撃により五機のガジェット二型が鉄くずと化す。

「行くよ、フェイトちゃん！」

「うん、なのは！」

二人は声をかけあい再びガジェットの群れに突っ込んだ。

シグナム視点

「ふんっ！はあっ！」

袈裟懸けに振るわれる炎の魔剣。その一撃はガジェット三型を一太刀で両断し、そのまま横に振るわれ、さらに三型を一機破壊する。

『Schlangeform』

シグナムはカートリッジをロード、レヴァンティンを連結刃に変える。そしてさらにカートリッジをロードする。

「飛龍！一閃！」

シグナムはレヴァンティンを振るい、周りを囲むガジェットを破壊する。そして煙の中から現れた四型にレヴァンティンを向ける。

ウィータ視点

「うおおおおおおお！！！」

放たれる五つの鉄球。それはガジェット一型を次々と貫き十数機の

ガジェットを破壊する。

そしてヴィータはアイゼンを振り下ろし三型を叩き潰す。そのまま振り向きざまに刃を振り下ろそうとする四型を横殴りに吹き飛ばす。

「アイゼン！」

『Raketenform』

アイゼンはカートリッジをロード、ラケーテンフォームへと変わる。

「ラケーテン！ハンマー！」

ヴィータはアイゼンを次々とガジェットに叩き込んでいく。自分の周りにいたガジェットを全て潰すとアイゼンをハンマーフォームに戻し肩に担ぐ。そして別の場所のガジェットへ走り出した。

FW陣

「はああああああ！！！！」

振るわれる拳と槍。拳は三型を叩き潰し、槍は一型と四型を切り裂いていく。

「クロスファイアー！シユート！」

放たれる二十の魔力弾。それはガジェットを貫き、十数機を破壊する。

「アルケミックチェーン！」

四型の真下に展開される四角形の魔法陣。そこから鎖が現れてガジェットを拘束する。

「はあっ！」

拘束されたガジェットをスバルがリボルバーナックルで叩き潰す。そんなスバルに後ろからガジェットが迫り来る。スバルはそれに気づいていない。

『Variable Barrett』

「シユート！」

瞬間、横から放たれた魔力弾によりガジェットは破壊された。

「ありがとう、ティア！」

「油断しない！」

スバルにそう言うとティアナは最後の一機に魔力弾を撃ち込み破壊した。

「全機破壊！次行くわよ！」

そしてティアナ達は暗闇の森の中を駆け出した。

「はあっ！」

フェイトは最後のガジェットを破壊し、バルディッシュをアサルトフォームに戻す。

「これで終わりかな？なのは」

「だね。地上も片付いたみたいだし」

二人が話していると、そこに通信が入った。

『敵増援を確認！敵機総数……… 350！例の新型もいます！一型、二型が100！三型、四型が50！五型、六型が25！』

その数を聞いたなのは達は再び戦慄する。新型が50。スバルとギンガが戦った時の五倍もいる。

「ちょっときついか……。でも！行くよ、フェイトちゃん！」

「うん！」

そしてなのは達は敵へと向かった。

「はやてさん！私達も出ます！」

敵機総数を聞いたカコがはやてに言う。

「そつやね……この数はさすがのなのはちゃん達でもきついかもしれへん」

それを聞いたカコ達が走り出そうとした時――

「新規にガジエットの反応を確認！場所は……古代ベルカの遺跡、カトルフ遺跡です！」

「敵機総数は!?!」

「五型と六型が50！」

「のぞみちゃん、カコちゃん、未来君。こっちの方を頼んでもええか？」

はやての言葉に未来達は頷いて走り出した。

後編に続く

#### 第四話 カトルフ遺跡の攻防（後編）

カトルフ遺跡

地上は獣型のガジェット五型が疾駆し、空は鳥型のガジェット六型が滑空している。ガジェット達が目指すのはカトルフ遺跡。そこにあるロストロギア『聖鏡』。

「エクリプス！バスター！」

暗闇の中、放たれる一筋の赤い閃光。それは空のガジェット群を貫き、十数機のガジェットを撃墜する。空のガジェット群は一斉に砲撃の飛んできた方向に飛んでいく。砲撃を放ったのはカコ。カコはガイアをガンフォームに変え、ガジェット群を狙い撃ちしていく。しかし何体かはそれをかいくぐりカコに近づく。

「はあっ！」

カコに近づいたガジェットを切り裂いたのはのぞみ。遠距離のガジェットはカコが地上だろうと空だろうと関係なく撃ち抜いていき、それをかいくぐり遺跡に近づく空のガジェットはのぞみが破壊する。未来は地上でカコが撃ちもらしたガジェットを破壊している。

「ふっ！」

声と共に未来は踏み込みガジェットを上下に両断する。そのまま剣を後ろに突き出し襲いかかるガジェットを串刺しにする。

「くそっ！数が多すぎる！」

未来はそう悪態をつきながらも次々と遺跡に向かうガジェットを破壊していく。遺跡の入り口にはバーストスフィアを設置し、ガジェットの邪魔をしている。

「っ！？」

その時、未来は嫌な予感がして咄嗟に横に飛ぶ。瞬間――

ゴオッ！

さっきまで未来がいた場所を通り、遺跡の入り口に砲撃が炸裂する。それによりバーストスフィアは誘爆を繰り返し、遂には一つ残らず爆発する。

「くそっ！」

未来は入り口の正面に立ち、殺到するガジェットを切り捨てていく。が、一瞬の隙を突いて一機のガジェットが遺跡の中に入った。

「ちっ！」

未来はすぐさまそれを追おうとするがガジェットに邪魔される。しかもこちらにもガジェットの増援が来た。そのガジェットは背中にミサイルポッドやブレードといった追加武装をしている。

「こりゃ追えそうにないな……」

そう未来は呟くと迫り来る武装ガジェット群に向け剣を構えた。

遺跡の中を一機のガジェットが駆け抜ける。床には支柱や瓦礫が転がっているがそれも関係ない。

やがて道は行き止まりになり、ガジェットはそこで止まる。そしてガジェットの目？らしき部分が点滅したかと思うと、突然口を開けた。鋭い牙が並ぶ中、口の奥の方から円筒形の物が出てきた。それは光り出すと砲撃を放ち壁を破壊した。その奥にはさらなる通路が現れ、ガジェットはその中を再び走り出した。

「はあああああああ！！！！」

カコは叫びながら魔力弾を放ちガジェットを撃ち落としていく。しかし敵のガジェットも二型とはまったく別タイプの新型。小回りがきき、上下左右に動くので的を絞るのが難しい。それでも撃ちもらしが数機しかないのはカコの射撃技術のたまものだろう。

そして何個目かもわからないカートリッジのマガジンを取り替えようとした時、突然ガジェットが後退を始めた。

「……………何？」

後退していくガジェットを見ながらカコはそう呟いた。

ガジェットが突然後退を始めた。先程遺跡内に入ったガジェットが鏡のような物をくわえて走り去ってからしばらくしたらだ。あれが何なのかはわからないが未来はそれを追いかけてよとした。しかしガジェットに邪魔をされ、片付けた時には既に見失っていた。

『スターズ分隊、ライトニング分隊、教官陣は警戒態勢が解かれた後、帰還してください』

それを聞いた未来達は了解と答え、周囲を警戒した。

暗闇の中、ガジェット群はスカリエッティのアジトへと向かっていた。その内の一機は口に鏡――聖鏡をくわえている。

ブンッ！

風を切る音と共に先頭のガジェット数機が破壊される。ガジェット達は足を止め、ガジェットが破壊された方を見つめる。そこには一振りの黒い剣を持った一人の青年がいた。

「スカリエッティにそれは必要ない」

『D e s t r u c t i o n   t y p h o o n』

発生する竜巻。それはその場にいた全てのガジェットを破壊した。

「聖鏡……………こいつをスカリエッティに渡す訳にはいかないからな」

青年は聖鏡を拾うとその場から転移した。【改

スカリエッティアジト

スカリエッティは今、スクリーンに映る未来——その腕にある赤い腕輪を見ていた。

「はははは！こんな所であれを見る事ができるとはね！思わぬ収穫だったよ」

高笑いするスカリエッティの横に現れるモニター。そこにはウーノが映っている。

「ドクター。聖鏡についてですが…」

「どうしたんだい？ウーノ」

言いよどむウーノにスカリエッティが尋ねる。

「輸送中のガジェットが何者かに襲撃され、奪われたようです」

「ほう…。まあいい。当分のターゲットは決まったからね。クアックトロ、例の新型はどうだい？」

「はい、今のところ十機が完成していますよ」

「じゃあその内の五機をまわそう。武装は……………近接二機、遠距離二機、バランス一機にしようか。くくくつ。面白くなってきたねえ。」

はははははははははは！」

後書きコーナー

未来

「こんにちは。魔法少女リリカルなのはBraveの主人公にして現在記憶喪失中の日比野未来です」

カコ

「その従妹の日比野カコです」

のぞみ

「幼なじみの相原のぞみよ」

未来

「ようやく始まったな。後書きコーナー」

のぞみ

「そうね。バカ作者のせいでかなり遅れたからね」

カコ

「えと…このコーナーは読者から送られてきた質問に答えたり、他の許可をもらえたSSからゲストを呼んだりする場所…らしいよ？」

未来

「今回は質問がまったく無いから勝手に作者がこの小説を書き始めた理由を語るらしい」

作者

「こんにちは」

のぞみ

「クラッシュインパクト！」

作者

「ごはっ！」

キラーン

のぞみ

「何いきなり出てきてるのよ」

未来

「だからっていきなり殴るなよ……」

作者

「そつだそつだ！」

未来

「うおっ！お前今飛んでったんじゃなかったのか！？」

作者

「いえいえ、そこは作者ですから」

カコ

「それでは作者さん。この小説を書き始めた理由、語って下さい」

作者

「わかりました。あれは今年度に入っただばかりの頃ですが、その時、このサイトを知ったんですよ。中学を卒業してかなり暇でして

ね。それまで呼んだことがないファンフィクションを読みまくりましたよ。その時に見つけたのがテストメント先生の『風雲！海鳴温泉！！』でしてね。なのは見たことがあったので読んでみようと思ったんですよ。そしたらファンフィクション同士のクロスでしてね。参加している作品は全部読みましたよ。テストメント先生の『魔法少女リリカルなのはS T S , E X』。ヨシユア先生の『魔法少女リリカルヴィヴィオ』。suzukami先生の『魔法少女リリカルなのは P H O E N I X』。nanao先生の『魔法少女リリカルなのはSilver friends』。大和先生の『どりの作品も面白くてね。春休みの間に全て読んでしまいましたよ。そして自分でも書いてみたいと思いいかにいたると………なんでみんなはデバイスを構えてるのかな？』

未来・のぞみ・カコ

「説明が長いわあああ！（長いです！）」

未来

「バーニングブラスター！」

のぞみ

「クラッシュインパクト！」

カコ

「シャイニングブレイカー！」

作者

「ぎゃああああ……！」

キラーン

未来

「ふう。それでは皆さん」

のぞみ

「質問やメッセージ、その他色々な要望があったら」

カコ

「どしどし送って下さい」

未来

「本編では三話後くらいで俺は記憶を取り戻す予定です」

のぞみ

「それではまたいつやるかはわからないけど」

一同

「また次回で会いましょう」

## 第五話 カコの大切な思い出

聖鏡争奪戦から数日後の午後、未来は部隊長室に呼び出された。部隊長室に行くところになっていたのははやてを始めなのは、フェイト、カコ、のぞみ。シグナムとヴィータはFW陣の教導中だ。

「何の用でしょうか？」

「うん、未来君を呼んだのは休暇をとってもらおう為や」

「休暇……ですか？」

「そや。未来君には記憶を取り戻してほしいからな。たまには休んで羽をのばした方がええと思うんよ」

「ですが…休暇と言われても何をすればいいのかわかりません」

「クラナガンとかどうかな？」

「クラナガン…？」

なのはの提案に未来は首を傾げる。

「ミッドチルダの首都だよ。色んなお店があるから息抜きにはピッタリだよ」

「はあ……どうするかな……」

「あ、あの」

未来が考えているとカコが口を開けた。

「私も未来さんと一緒に行ってもいいですか？クラナガンを案内してあげたいんです」

カコはそう話すと同時に未来を除くその場の全員に本当の理由を話した。

《昔、お兄ちゃんと一緒にクラナガンに遊びに行ったことがあるんです。その時と同じ行動をすれば、もしかしたらお兄ちゃんの記憶が…》

《戻るかもしれないやね？》

《はい》

《うん、そんならOKや。がんばってきてや》

《ありがとうございます》

「うん、しっかり案内してあげてな」

「はい」

はやての言葉にカコは満面の笑みを浮かべながらそう答えた。

その日の夜、カコの部屋

カコはベッドに寝転がりながら明日の事を考えていた。

（お兄ちゃんとお出かけか…。八年前の春休みに行ったクラナガン。懐かしいな…）

そう思いながらカコは以前未来と一緒にクラナガンに来た時のことを思い出した。

八年前、まだ未来がなのは達と知り合う前、未来が中学三年に進級する直前の春休みのある日の事。

「お兄ちゃん、春休みの間にクラナガンに連れて行って」

「クラナガンって…なんでまたそんな所に？」

突然のカコのお願いに未来は問う。

「お兄ちゃんが昔住んでた所なんでしょ？一回行ってみたいんだ」

そう言うカコに未来は少し考えてから答えた。

「わかったよ」

「本当！？やったあ！」

そう言って飛び跳ねるカコを見ながら未来は微笑んだ。

次の日

「うわあ！ここがクラナガンかあ！」

クラナガンの街を見てカコはそう声をあげた。その少し後ろでは未来が微笑んでいる。

「それで、どこに行きたいんだ？」

未来がそう尋ねるとカコは悩み始めた。

時刻は11時を少し過ぎた頃だ。ほとんどの店が開いているだろう。

「うーんとね……そうだ！お兄ちゃん！お洋服が見たい！」

「服か…ちょっと待ってる」

未来はそう言うとメビウスリングについている地図で近くに服屋がないか探し始めた。

「歩いて10分ぐらいの所にあるな……。よし、行くぞ、カコ」

「あ、待ってよお兄ちゃん！」

洋服屋

「これ可愛い〜 あ、あのワンピースも可愛いな〜」

「……………」

現在、カコは服を手にとつては自分の体の上から重ね、その服を戻してはまた他の服を重ねる。その行為を繰り返していた。時刻は既に12時半。店に入ってから一時間以上が経っている。未来はカコが見える位置で壁に寄りかかっている。

「……………どうして服一着買うのにこんなに時間がかかるんだよ………  
…はあ」

どうやら未来は精神的に疲れているらしい。確かに女物の服ばかりが置いてある場所にいるのはつらいだろう。

「お兄ちゃん！どっちの服の方がいいかな？」

壁に寄りかかっている未来の所へさつきまで服を選んでいたカコがやってきた。二着の服を両腕に抱えている。

「さあ？どっちでもいいんじゃないか？」

カコの抱えている服をろくに見ずに未来は答える。そんな未来にカコは頬を膨らませた。

「むっ、お兄ちゃん！試着してくるからそうしたらちゃんと答えてよー！」

「お、おっ……」

カコの気迫に押され未来はついそう返事してしまった。

それを聞くとカコはすぐに試着室に入りカーテンを閉めた。

約10分後

カーテンを開け、カコが出てきた。服装は白のミニスカートに赤の半袖Tシャツで髪をポニーテールにしている。

「どうかな？」

「別に。似合ってるんじゃないか」

ぶっきらぼうに答える未来に対してカコ再び頬を膨らませた。

「じゃあもう一着の方も試着してくる」

再びカコは試着室に入った。

さらに10分後

「お兄ちゃん！これはどうかな？」

そうやって出てきたカコの服装は白のワンピース。頭には赤いリボンのついたこれまた白い帽子が乗っかっている。その姿に未来は見とれた。

「……………」

「えっと……………お兄ちゃん？どうかな……………」

「あ、ああ。似合ってるぞ」

先程とほとんど変わらない言葉。しかしカコは未来が一瞬見とれた事に気づいていた。

「うん それじゃあこの服、買うね」

そう言ってカコは着替え、ワンピースと帽子を買った。

「次はどこに行く？お兄ちゃん」

「その前に飯でも食おう。もう昼飯の時間だ」

そう言って未来はメビウスリングを指し示す。そこには1時07分と表示されていた。

「あ、もうそんな時間なんだ。それじゃあ………あのお店にしよう？」

そう言ってカコが指さしたのは喫茶店。そこでは軽食としてパスタなどもあるようだ。

「わかった。そんじゃ行くか」

「うん」

そして未来達は喫茶店に入っていった。

「いらっしやいませ。何名様ですか？」

「二人です」

「こちらへどうぞ」

そして案内されたのは窓際のボックス席。二人は早々にメニューを見て何にするか決めた。

十数分後

頼んだ品が運ばれてきた。頼んだのは未来はミートソーススパゲティ、カコはサンドイッチである。

「このパスタ、翠屋のやつ程美味しくはないけどなかなかいけるな」

「このサンドイッチも美味しいよ」

二人はたわいもない話をしながら食べ進めていく。

「お兄ちゃん」

「ん？」

呼ばれて顔を上げるとカコがサンドイッチを差し出していた。

「はい、あ〜ん」

「……………」

どうやらカコは他のカップルの客がやっているのを見てやりたくないらしい。が、未来は完全無視。自分のパスタを黙々と食べている。

「あ〜ん」

「……いい加減にしないと元の世界に帰るぞ」

「……………むっ…」

未来がそう言うのとカコは頬を膨らませるもやめた。

そして食後に未来はアイスコーヒー、カコはオレンジジュースを飲みながらこの後どこに行くか決めることにした。

「この後はどこに行くんだ？」

「んーとね……………あ、映画とかどうかな？」

「映画か…。ああ大丈夫だ。それじゃあ早く行くぞ」

未来はそう言うのと半分程残ったアイスコーヒーを一気に飲み干した。

映画館

「それで、どの映画にするんだ？」

「えーっと……あれ！」

カコが指さしたのは最近流行っている恋愛映画だった。

「れ、恋愛映画か……」

「お兄ちゃん…ダメ……？」

カコが瞳をつるつるさせながら言う。未来達はチケットを買い、劇場に入ってしまった。

「面白かったね〜」

「ああ……」

劇場から出てきた二人の表情は対照的だった。カコは満面の笑みを浮かべているが未来は疲れているように見える。映画を見ている時もカコは瞳をつるつるさせていたが未来はかなりつまらなそうにしていた。

「カコ、次はどこに行く？……カコ？」

未来がカコがいるはずの後ろを向くがそこにカコはいなかった。

「あれ？どこに行ったんだ……ってあいつは……」

未来が周りを見回すとすぐに見つけた。カコは露店のアクセサリ

「ショップにいた。」

「カコ。何してんだ？」

「あ、お兄ちゃん。ちょっとね……」

そう言うカコの視線はある一点に注がれている。未来がその視線の先を見ると一つのプレスレットがあった。そのプレスレットはチェーンをつないだモノに赤いガラスがついている。

「このプレスレットがどうかしたのか？」

「うん、きれいだなあつて思つて」

「そうか………すみません、このプレスレット下さい」

「えっ！お兄ちゃん！？」

突然の言葉にカコは驚いて未来の顔を見上げる。

「はいよ。どうもありがとね」

「ほら、カコ」

驚くカコをよそに未来は受け取ったプレスレットを渡す。

「いや、いいよお兄ちゃん。悪いよ」

「いや、昔迷惑をかけたからな。これで許してくれとは言わない。」

受け取ってくれ」

「でも……」

「それじゃあこの後行く所を俺に決めさせてくれ。それでいいか？  
まだ遠慮しようとするカコという言葉を遮って未来は言った。

「でも……はあ、わかったよ、お兄ちゃん」

これ以上何を言っても無駄だと悟ったのかカコはしぶしぶ承諾した。

「それで、どこに行くの？お兄ちゃん」

「そうだな……んじゃあそこで」

そう言っつて未来が指さしたのは書店だった。

「すげえ！ここ本当にミッドチルダの本屋か！？」

本屋に入り、推理小説の置いてある所に行くなり未来はそう言った。

「『モルグ街の殺人』に『完全犯罪』もある！うおっ！『黒死館殺人事件』に『ドグラ・マグラ』、『虚無への供物』もあるのかよ！  
すげえ！」

どうやらこの書店には第97管理外世界の珍しい推理小説が多いらしい。

「お、お兄ちゃん……?」

「うわあ!」そして誰もいなくなった』に『ねじれた家』、『黒後家蜘蛛の会』もあるのかよ!」

「あ、あう……」

あまりの推理小説の数に未来は夢中になりカコに呼ばれても気づかなくなっていた。

「お兄ちゃん……」

「あ!あの作品の新刊出てたんだ!」

書店に入ってから既に一時間以上が経過している。その間、未来はずっと推理小説を見ている。よくもまあ飽きないものだ。

カコはずっと本を見ている未来を見て少しイライラしている。せっかく未来と一緒に出かけできたのに未来は本ばかり見て、自分の相手をしてくれないからだ。

「お兄ちゃん!」

「な、何すんだよ!」

カコは未来の持っている本を取り上げ棚に戻す。その行動に未来は怒る。

「行くよ！」

「お、おい！カコ！？」

カコ未来ね服の襟をつかんで店の外まで引きずっていった。

「お兄ちゃん、高いね〜」

「……ああ、そうだな」

今、二人はクラナガンにある展望タワーにきている。カコはさつきから何度も話しかけているが本を見るのを邪魔された未来はぶつきらぼうに答えるばかりである。

「あ！お兄ちゃん！夕日がきれいだよ！」

「ぶつ……ん……」

夕日を見て未来は声を失った。それは夕日がきれいだったこともあるのだが、昔の事を思い出したからだ。幼い時、両親に連れられてこの展望タワーに来た事があった。その時にも同じように夕日を見たのだ。

「お兄ちゃん？どうしたの？」

気がつくともカコが心配そうな顔で覗き込んでいた。

「…いや、何でもない。少し昔を思いだしたただけだ」

未来はそう返すと再び夕日を見た。

あの時は日常がずっと続くと思っていた。しかしその日常も突然終わることを知った。ずっと一緒にいると思っていた両親も、今はもういない。

未来のそんな思いがわかったのか、カコは未来の前に立った。

「お兄ちゃん」

「ん？何だ？」

不思議そうな未来にカコは満面の笑みを浮かべ、言った。

「これからも、ずっと一緒だよ！」

それはカコの心からの願いだった。その思いが未来に伝わったかはわからない。でも、未来は微笑んで、答えてくれた。

「ああ、ずっと一緒だ」

この日常も突然終わるかもしれない。

でも、それまでは今の日常を精一杯過ごそう。いつか終わりがきた時に、後悔しない為に。

満面の笑みを浮かべるカコを見て、そう未来は思った。

「それじゃあ帰るか。今日の晩飯は何がいい？」

「うーんとね……シチュー！」

そんなたわいもない会話をしながら二人は家へと帰って行った。

この時から数ヶ月後、二人はある事件に巻き込まれる。その事件により日常は終わりを迎え、カコの願いもむなしく、未来は消えた。

「……………ん……………」

どうやらあのまま寝てしまったらしい。カコは体を起こし、時計を見る。6時を少し過ぎている。

「懐かしい夢を見たな……………」

カコはそう呟くと机に向かい、引き出しの中のある物を取り出す。

「懐かしい……………」

それはあの未来に買ってもらったブレスレット。あれから未来が消えるまでは毎日のようにつけていたが、それ以降は一度もつけていない。

カコはそれをしばらく眺めた後、机の上に置き、着替える為にクロ―ゼットに向かう。

(絶対に、お兄ちゃんの記憶を取り戻させてみせる)

カコは着替えながらそう決意した。

第六話 記憶を取り戻す為に（前編）（前書き）

時間がかかった割にかなり短いです…:すいません。

## 第六話 記憶を取り戻す為に（前編）

機動六課隊舎前、そこにカコは立っていた。白のワンピースを纏い、頭には赤いリボンのついた白の帽子、腕にはブレスレットが巻かれている。

カコにとってそれはどれも思い出の品。まあ流石にワンピースはサイズが合わなくなってくるので仕立て直しているが。

「すみません。お待たせしました」

そう言っただけでカコに近づいてきたのは未来。服装はジーパンに黒の半袖Tシャツとラフな格好だ。

「いえ、私が早く来ただけです。それでは行きましょうか」

「そうですね」

そうして二人は駅へと歩き出した。

「ここがクラナガン…」

クラナガンに着き、その人の多さに未来は軽く圧倒された。

「はい、賑やかな街でしょう？」

「そうですね…」

「それではまずお洋服を見に行きましょうか」

カコはそう言ってまだ圧倒されている未来の手を引いて歩き出した。

「これいいな。でもこっちもいいんだよね。迷うな」

現在、店に入って30分が経っている。その間カコは服を見ていて、未来は壁に寄りかかっていた。が

「日比野さん。そろそろ他のお店に行きませんか？」

「え？あ、すみません。私ばかり…」

「いえ。それでは次はどこに行きますか？」

時刻は11時半。次は映画を見に行くつもりだったが、今行くと昼食が遅くなる。

「そうですね…少し早いですけど昼食にしましょう。近くに喫茶店があるのでそこにしましょうか」

そして二人は近くの、前回行った喫茶店に向かった。

（喫茶店）

現在、二人は黙って運ばれてきた料理を食べている。カコは昔と同じサンドイッチを、未来はカルボナーラを食べている。なぜ黙って食べているかというと、最初はカコが未来に何度も話しかけていたのだが、未来の返答が短いために会話が続かないからだ。そして会話の無いまま二人は喫茶店をあとにした。

今、二人は映画館にいる。

昼食の後、カコの計画通り映画を見ることになったからだ。

「どの映画を見るんですか？」

「えっと……あ、あれです」

カコが指差したのは最近流行っている冒険モノの映画だった。本当は恋愛映画を見たかったようだが、現在は公開していないようだ。

「それではチケットを買って入りましょうか」

「そうですね」

そして二人は映画館に入ってしまった。

「面白かったですね」

「そうですね。それで次はどうするんですか？」

「えっと……」

未来の言葉にカコは何かを探すように周りを見回す。探しているのはアクセサリーショップ。だが流石に何年も経った今では昔行っただけのお店も無くなっていた。

「はあ……。次は本屋さんに行きましようか」

カコはため息をついてそう言った。向かう場所は推理小説が多数置いてある書店である。

「ここです。記憶を失う前の未来さんは推理小説が大好きだったんですよ」

「はあ……」

未来は手近にあった小説を手に取り、パラパラとページをめくった。が、すぐに本を閉じて元の場所に戻した。

「ど、どうかしましたか？」

「いえ……。次はどこに行きますか？」

未来の言葉にカコは迷う。

次は展望タワーに行き夕日を見る予定だったが現在時刻は3時半。日が沈むまではまだまだ時間がある。

予定通り展望タワーに行くか、どこかを回ってから展望タワーに行くか。どちらかだ。

「……………展望タワーに行つて、帰りましょうか……………」

「わかりました」

そしてカコは予定通り展望タワーに行くことを選んだ。

既に計画はボロボロになっているが、八年前とは違う行動をして記憶を戻せなかつたらと思うと怖いからだ。

勿論計画通りに行動して記憶が戻るという確証はない。でも、カコは計画通り行動することを選んだ。

（展望タワー）

今、二人は展望タワーの望遠鏡で街を見ている。

結局展望タワーに来てても未来の記憶は戻らなかつた。カコは落胆しながらも、未来には笑顔を見せ、望遠鏡で街でも見ようと提案したからだ。

カコは望遠鏡の向きを変えて別の場所を見る。そして……

「っ！？あれは！」

カコは気づいた。路地裏のマンホールから数機のガジェット一型が見え隠れしているのに。

「未来さん！ガジェットが現れました！これから殲滅します！」

カコはそう言うと、ガイアでロングアーチと連絡を取り、ガジェットが現れたことを伝える。

そして二人は路地裏へと駆け出した。

## 第六話 記憶を取り戻す為に（後編）

クラナガン地下通路

今、そこを剣を持った青年と銃を持った女性が滑空している。未来とカコだ。

二人は路地裏のマンホールから地下に入りガジェットを搜索している。

だがいまだにガジェットは見つからない。六課のロングアーチも探索しているがステルス機能でもあるのか一向に見つからない。

二人が角を曲がり少し進むといきなり広い場所に出た。

そこにはガジェット一型が15機いた。

「フォトンシューター！」

「フェザースラッシュ！」

瞬時に放たれるスフィアと斬撃。

それはガジェットを貫き、あるいは切り裂き破壊した。

15機いたガジェットは一瞬で全てが破壊された。

「これで全部ですかね？」

「そうだといんですけど…。それにしてもここは何…？避難施設…？いや、それにしても天井が高すぎる…」

カコの言うようにこの空間は天井が高い。それに避難施設にあるはずの食糧倉庫などがない。

「とりあえずロングアーチに連絡します。ロングアーチ、こちら日

比野カコ

カコはモニターを出し、ロングアーチと通信しようとする。

『……………』

「ロングアーチ？こちら日比野カコ。ロングアーチ？」

何度か呼びかけるが返事はなくモニターには何も映らない。それに時折ザーツという音聞こえてくる。

「通信妨害…？念話は……………念話も繋がらない…。とりあえず地上へ出ましよう」

カコは未来にそう言って来た道を戻ろうとした。しかし…

ガシャンッ！

「っ！？」

この広い場所の出入り口が封鎖された。

その上封鎖された出入り口付近には高濃度のAMFまで張られている。

「…どうやら私達はこの場所に誘い出されたみたいですね…」

カコはそう呟くと油断なくガイアを構え周りを警戒する。それに合わせて未来もメビウリングを構える。

次の瞬間……………

「っ！」

どこからかレーザーが飛んできた。二人は瞬時に横に転がりそれを回避する。

「スパイラルブラスト！」

カコはレーザーの飛んできた方向にスフィアを放つ。放たれたスフィアは螺旋を描きながら飛んでいく。

敵は複数いるようでそれを散開して回避、次々と地面に着地した。敵機の数に5機。

その姿は怪獣を連想させ、装備も三種類ある。

5機の内二機は両腕が一つの巨大な爪になっており、背中にはバーニアのようなものがある。膝にも装甲がついていて、尾も先端が鋭く尖っているという接近戦に特化した機体。

二機は右腕がガトリング、左腕がショットガンになっており、両肩の上部にはレールガン、背中にはミサイルポッド、膝にはレーザー砲、尾の先端にはミサイルがついている遠距離戦に特化した機体。そして残った一機は接近戦も遠距離戦もできるように作られたらしい装備をしている。右腕は接近戦型の巨大な爪、左腕は遠距離戦型のガトリング、両肩には遠距離戦型のレールガン、背中には接近戦型のバーニア、膝には遠距離戦型のレーザー砲、尾は接近戦型の鋭く尖った先端になっている。

そして口部にあるメーサー砲と開閉式の胸部は三種類ともに共通した装備だ。

「新型のガジェット…？」

「そうみたいです…」

二人が会話を交わした次の瞬間

ドンッ！

接近戦型の二機が突っ込んできた。二機はそれぞれ未来とカコに突撃し、二人を引き離すかのように攻撃をしかけてきた。

突撃してくる接近戦型。

それはカコに近づくと同時に右腕を振り下ろす。

「っ！」

カコはそれをバックステップで回避、魔力弾を撃ち込みながら距離をとろうとする。しかし

「なっ！？」

魔力弾は接近戦型の装甲にいと簡単に弾かれ、その進行を止めることができない。接近戦型はカコに近づくとその尾を叩きつけた。カコはそれをギリギリでプロテクションを張り、防ぐ。が、プロテクションごと弾き飛ばされカコは壁に叩きつけられた。

「っ！…」

ガラガラと音を立てながらカコは瓦礫の中から立ち上がる。

「っ！!?」

そんなカコに対してミサイルが多数飛んでくる。放つのは遠距離戦型だ。

「はあああああああ！！！！！」

カコはすぐさま速射でミサイルを撃ち落としていく。  
だがミサイルを撃ち落としていく度に爆煙により視界が悪くなっていく。

「っ！？」

『Protection』

爆煙をその衝撃波で晴らしながらレーザーが飛んでくる。

カコはギリギリでプロテクションを展開、何とか防ぎきる。

ヒュンッ

続いて接近戦型がその爪で切りかかってくる。

その一撃はプロテクションをいとも簡単に破壊した。

カコは咄嗟に空に上がり追撃を避ける。

そしてガイアをガンフォームから杖のノーマルフォームに変え、カ  
ートリッジをロード、50ものスフィアを展開する。

『Photon shooter』

「シュートー！」

一斉に放たれるスフィア。

その全てが接近戦型の頭部の一ヶ所に殺到する。

それは爆発を起こし、周囲を爆煙が包んだ。

「やった……かな……？」

カコはそう呟くも油断なくガイアを煙に向ける。  
しばらくして煙が晴れてきて中がうつすらと見えるようになる。  
そこには

無傷の接近戦型がいた。

否、無傷ではない。だがこれといったダメージはなく、頭部に少しばかり亀裂が入っているだけだ。

それを確認したカコはすぐさま距離をとろうとする。

リミットのかかっている今の状態では接近戦で勝ち目はないからだ。リミットを解ければ勝つことは難しくはないだろう。

しかし通信も念話もできない今の状態ではリミット解除の申請をすることもできない。

ならば遠距離からの攻撃で破壊するしか勝つ方法はない。

カコはそう考え接近戦型から離れようとする。

しかし

「っー！」

遠距離戦型からの援護射撃により接近戦型と一定以上の距離をとることができない。カコはスフィアを遠距離戦型にも飛ばすが途中で撃ち落とされ意味をなさなかった。そしてそうしている間に接近戦型が突撃してきた。

カコはそれを上に飛ぶことで避け、体を捻りながら接近戦型の背後に回る。

「ストラグルバインド！」

カコはすぐさまバインドで接近戦型の動きを封じ距離をとる。

「ガイア！カートリッジロード！」

『Load cartridge』

そしてカートリッジを二発ロード、ガイアを構え先端部の前に魔力弾が現れる。

「エクリプス！バスター！」

放たれる赤色の砲撃。

それはバインドで動きを封じられている接近戦型に直撃し、爆発を起こした。

「次！」

カコはすぐにさっきまで援護射撃を行っていた遠距離戦型の所へ向かう。

遠距離戦型は弾幕を張りカコを接近させまいとする。

カコはレーザーは避け、それ以外はプロテクションで防ぎながら接近する。

「ガイア！」

『Gun form』

カコはガイアをガンフォームに変え、ソニックムーブで一気に遠距

離戦型の懐に潜り込む。

『Load cartridge』

そしてカートリッジをロード、胸部に突きつける。

「ファントムブレイザー！」

そして放つ砲撃。

ティアナが使うものと同じだが威力はそれよりも高い。

ゼロ距離で放たれた砲撃は確実にその装甲を貫いたかに思われた。  
しかし

「なっ!？」

貫いたのは胸部の装甲のみ。

その内部までは破壊できていなかった。

そしてその中からは光を放つパラボラアンテナのようなものが覗いていた。

メーサー砲だ。

それも発射直前の。

『Protection』

メーサーの発射と同時にカコはプロテクションを展開、ギリギリで防ぐ。

「っっ!」

だがメーサーによる砲撃はそのまま放たれ、プロテクションごとカ

コを押し始め、やがてプロテクションにヒビが入り始める。そしてプロテクションは破壊され、メーサーはカコを吹き飛ばした。

「きゃああああああ！！！！！」

カコは再び壁に叩きつけられる。

そして瓦礫の中から立ち上がったカコの視界に先ほど接近戦型に砲撃を決めた際に起こった爆煙が入った。爆煙はすでにほとんどが晴れていた。

「そんな……」

その煙の中に影が見えた。

それにカコは驚愕する。

その影が接近戦型だったからだ。

それも砲撃によるダメージは全くないようだ。

カコはガイアを握り直し、敵を睨みつけ。

「はああああああ！！！」

そして駆け出した。

未来は突撃されてからずっと接近戦型と切り結んでいた。

その数はすでに三桁まで届いている。

（いい加減この状態から抜け出さないと体力切れでこっちがやられる……）

『S o n i c m o v e』

「はあっ！！」

未来は接近戦型の背後に回りメビウスリングを振り下ろす。  
その斬撃は確実に接近戦型を捉えていた。だが

ガキーン！

「なっ！？」

その一撃は接近戦型の装甲の前にも簡単に弾かれた。

ブオン！

「っ！」

未来の一撃を弾いた接近戦型は振り返りざまに左腕の爪で切りかかってくる。

未来はそれをメビウスリングで受け止め、その勢いを利用して一旦距離をとる。

そしてそんな未来に追撃をかけようと接近戦型が突進してくる。

「メビウスリング！」

『Load cartridge・Burst sphia』

それに対して未来はカートリッジを二発ロード、接近戦型の前に百個のスフィアを設置する。

ガアアアアアアン！！

接近戦型が接触したスフィアから爆発。

さらにその爆発したスフィアから次々と誘爆していき周囲を爆煙が包む。

『Wing buster』

爆煙を見ながら未来はさらにカートリッジをロード、いつでも砲撃を放てるようにする。

そして次の瞬間、煙の中ならほとんど無傷の接近戦型が現れる。

「ウイングバスター！」

それを確認して未来はすぐに砲撃を放つ。それは接近戦型に直撃し、吹き飛ばした。吹き飛んだ接近戦型に未来は追撃をかけようとするが横から飛んできたミサイルがそれを邪魔する。

「っ！メビウスリング！」

『Photon shooter』

「ファイア！」

展開されたスフィアは飛んでくるミサイルを的確に破壊、そして遠距離戦型へと向かっていく。

しかしそれも右腕のガトリングにより撃ち落とされる。

そして未来がスフィアを放った隙に接近戦型が言っつてに距離を詰め、その尾を叩きつける。

「かはっ！」

ギリギリで防ぐことには成功したものの衝撃を殺しきれず未来は壁

まで吹き飛ばされる。

そんな未来に向け遠距離戦型が次々とミサイルを放ってくる。

未来はミサイルが着弾する前にその場を離れ、接近戦型に一気に近づく。

「ふんっ！はっ！はあっ！」

振るわれるメビウスリング。

その斬撃は全て接近戦型を捉えているにも関わらずその装甲により傷をつけることさえできない。

「メビウスリング！」

『Load cartridge』

「はあああああああ！！！！」

未来はカートリッジをロードし、魔力をメビウスリングに纏わせる。そしてメビウスリングを大上段に振りかぶり。

「はあっ！！！！」

渾身の力を込めて振り下ろす！

その一撃は接近戦型を吹き飛ばし、壁に叩きつけた。

「はあっ…はあっ…次…」

未来は肩で息をしながらもメビウスリングを構え直し遠距離戦型を睨み、駆け出す。それに対し遠距離戦型は胸部を開き、全ての装備を持って未来を迎え撃つ。

右腕から休むことなく放たれるマシンガン。

左腕と肩部から放つ度にその全身に衝撃が伝わるショットガンとレールガン。

口部と胸部から放たれる雷のようなメーサー。

膝部から放たれる輝くレーザー。

次々とミサイルポッドから吐き出されていくミサイル。

その全てが未来に向かっていく。

『Protection』

それを未来は威力の低いモノはプロテクションで防ぎ、威力の高いモノは避けて遠距離戦型との距離を詰めていく。

『Load cartridge』

そしてあと数歩で間合いに入るといつ所でカートリッジをロード、再び魔力をメビウスリングに纏わせる。

そしてメビウスリングを両手で持ち、一気に距離を詰める。

「はあっ!!」

そして遠距離戦型の胸部に向けメビウスリングを横なぎに振るう。

その一撃は先ほどの接近戦型のように遠距離戦型を吹き飛ばし、壁に叩きつけた。

「はあっ…はあっ…はあっ…」

未来はメビウスリングを振り切った状態でしばし息を整える。

「はあっ…はあっ…っ!」

未来の右側に何かが見れ、その右腕を振りかぶる。

未来は咄嗟にメビウスリングを突き出しその一撃を防ぐ。

だが突然のことにその一撃を防ぎきれず未来は壁に叩きつけられた。

(っ…！くそっ…油断した…)

未来はメビウスリングを支えにして立ち上がり、自分を吹き飛ばした相手を確認する。

そして見た。

さっきまで自分のいた場所に立つ接近戦型を。

その胴体には縦に一筋の傷がついている。

(あの一撃であれだけしかダメージを受けてない…。なんつう装甲だよ…)

未来はメビウスリングを構え直し、さっき吹き飛ばした遠距離戦型を横目で確認する。

そこにはやはり遠距離戦型が立っていた。だが幸いなことにその胸部には横一文字の傷があり、メーサー砲は破壊できている。

「っ！」

そしてその奥に未来は見た。

接近戦型と交戦中のカコを。

そしてそんな彼女の背後で右腕の爪を振りかぶっているバランス型を。

カコはまだ気づいていない。

『Sonic move』

それを見た未来は瞬時に高速移動魔法を使い。

「日比野さん！」

カコとバランス型の間割り込んだ。

第七話 取り戻す記憶 新たなる力（前書き）

アンケートは八月で締め切ります。

## 第七話 取り戻す記憶 新たなる力

「日比野さん！」

接近戦型を砲撃で吹き飛ばした時に聞こえたその声にカコは振り向く。

その目に映ったのは右腕を振りかぶっているバランス型。

そしてその一撃から自分を庇うように自分の前にいる未来だった。

「くっ…！」

振り下ろされた一撃を未来はメビウスリングで受け止め、防ぐ。

その瞬間

「っ!？」

突然未来を頭痛が襲った。

そして未来の視界でカコに5人の少年少女が、バランス型に謎の光弾が重なり周囲ね景色が海に変わる。

(俺は……今と同じ状況になったことがある…?)

次の瞬間、未来の頭の中で様々な光景が再生された。両親の死を自分に告げる男性。

夕日を背に満面の笑みを浮かべるカコ。

のぞみ、なのは、フェイト、はやて、金髪の少女、紫色の髪の少女と共に弁当を食べる自分。

街中で自分を襲ってくる少年と少女。

フェイトを抱える自分。

異形の怪物と戦う自分と少年少女達。  
そして

5人の少年少女を庇い、消えていく自分。

「……………も……………した……………」

「え……………?」

未来の呟きにカコは聞き返す。  
それに対し未来は

「思い出した!」

そう、返した。

「メビウスリング!」

『Load cartridge!』

そしてバランス型の一撃を受け止めた状態のままカートリッジを口  
ード。

「はあっ!」

バランス型を弾き、吹き飛ばした。

「カリバーン!」

そしてメビウスリングを左手に持ち替え右腕を前に突き出す。

「起動！」

『Anfang』

未来の声に反応し、光を発し始める腕輪。光が収まると未来の右手には銀色に輝く一振りの剣が握られていた。

バリアジャケットも変化し、通常のジャケットの肩、胴、腰、足に装甲が付加されている。

そして未来の目の前に一人の少女が現れた。

身長は30cmほどで銀色の髪をセミロングにしている。

「初めまして、マスター。私はカリバーンの管制人格のルナといいます。よろしくお願ひします」

少女　ルナはそう言うとおペコリとお辞儀した。

「ああ、よろしく。それよりも今はあいつらを何とかするぞ。初めてだがユニゾン、いけるか？」

「はい、大丈夫です。いけますよ」

未来の問いにルナは頷く。

「よし。いくぞー！」

「はい」

「「ユニゾン、イン！」」

未来の髪の色が銀色に変わる。

それと同時に接近戦型二機が一気に距離を詰めてくる。

それに対し未来も接近戦型へと駆け出す。距離はだんだんと縮ま  
ていき、すぐにお互いの間合いに入った。

同時に振り下ろされる二機の接近戦型の爪。

それを未来は回避、すれ違うようにして接近戦型の背後に回る。

「はあっ！」

そして振り返りざまに右のカリバーンで接近戦型二機を横なぎに斬  
りつける。

その威力は高く、その強固な装甲に傷をつけた。

未来はすぐさま空に上がり接近戦型の尾の一撃を回避する。

「やっぱりあの装甲は厄介だな……」

「大丈夫です、マスター。カリバーンをメビウスリングを重ねてみ  
てください」

「は？あ、ああ。わかった」

ルナの言葉に従い未来はカリバーンをメビウスリングを重ねる。  
瞬間、カリバーンが光を発する。

『Device addition』

光が止むと右手のカリバーンは消え、左手のメビウスリングもその  
刀身が変化している。

「デバイス付加。カリバーンの能力の一つです。簡単に説明すると  
他のデバイスを強化することができます。これならあのロボットも

斬れると思いますよ」

ルナの説明に未来はしばらく呆然とする。しかしすぐに我に帰り接近戦型に対し構える。

「メビウスリング！」

『Load cartridge』

そしてカートリッジをロードすると同時に駆け出す。

「はあっ！」

すれ違いざまに一機の接近戦型に対しメビウスリングを横なぎに振るう。

その一撃により接近戦型は真っ二つに切り裂かれ、爆発した。

「すげえ……」

その威力に未来は唾然とする。

その隙に背後からもう一機の接近戦型が襲いかかろうとするが。

「バーストスフィア！」

接近戦型の周りにスフィアが現れ、爆発。それにより接近戦型は吹き飛ばされる。

「ありがとな、ルナ」

「いえ。マスターを守るのは当然のことです」

スフィアを設置したのはルナ。

未来はルナに礼を言い、吹き飛んだ接近戦型に近づく。やはりその装甲には傷一つついていない。だが壁に叩きつけられた時の衝撃で一時的に動きが鈍くなっている。

『Load cartridge』

「はっ！」

その隙に未来はカートリッジを使い、魔力をメビウスリングに纏わせる。

そしてメビウスリングを逆手に持ち接近戦型に振り下ろす。

その突きは接近戦型の頭部と胸部を貫いた。

未来はすぐにメビウスリングを引き抜いて、距離をとる。

次の瞬間、接近戦型は爆発した。

「次！」

未来は続いてバランス型に向かい飛ぶ。

それに対してバランス型はガトリングやレールガン、レーザー、メーサーを放ち近づけないようにする。

『Protection』

それを未来はプロテクションで防ぎながら一気に距離を詰める。

「はあっ！」

間合いに入るなり振るわれるメビウスリング。

バランス型はそれを右腕の爪で防ぎ、左腕のガトリングの砲身で未

来を殴り飛ばす。

「かはっ…!!」

その一撃に未来は吹き飛ばされるが、すぐに体勢を整える。

『Load cartridge』

「はっ!」

そして未来はカートリッジをロード再びバランス型との距離を詰める。

そんな未来に対してバランス型はその鋭い尾を突き出す。

未来はそれを上体を僅かに反らして避け、メビウスリングを突き出しバランス型の胸部を貫く。

「はあああああ!!」

そしてそのままメビウスリングを振り上げ、バランス型を真っ二つに切り裂く。

次の瞬間にはバランス型は爆発し、未来の周りを爆煙が覆う。

「っ!」

そしてその爆煙を貫いて飛んでくるレーザー。

未来はそれをギリギリで避け、移動しながらレーザーの飛んできた方向を見る。

そこにいるのは残った遠距離戦型二機。

二機はその武装を未来に向け乱射している。

未来は近づこうとするが弾幕が濃いために近づけない。

「メビウスリング！」

『Load cartridge』

そこで未来はカートリッジを二発ロード、メビウスリングの刀身に大量の魔力を纏わせる。

『Feather slash』

「はあっ！」

メビウスリングを横なぎに振るうと共に放たれる斬撃。

それは弾幕を切り裂きながら飛び、遠距離戦型二機を同時に切り裂いた。

「ふう。これで全部か」

新型のガジェットを五機全て破壊したのを確認した未来はユニゾンを解き、啞然としているカコに近づく。

「カコ。怪我はないか？」

未来がそう尋ねるとカコは未来の顔を見上げた。

「お兄ちゃん……？」

「ん？どうした、カコ」

「記憶……戻ったの……？」

「ああ、そのことが。……ああ、戻ったよ」

未来はそう言っただけでカコの頭をなでる。

瞬間

「お兄ちゃん！」

カコが未来に抱きついた。

突然のカコの行動に未来は少し慌てるが。

「良かった……良かったよ……お兄ちゃんの記憶が戻って……本当に良かった」

カコが泣いているのを見て未来は微笑みながら頭をなでる。

「ごめんな……本当に……ご……め……」

謝る途中、未来が突然倒れた。

あまりに突然のことでカコは慌てる。

「お、お兄ちゃん!？」

が。

「くーっ……くーっ……」

寝ているだけだった。

「も、もう。お兄ちゃんったら」

カコは怒ったように言うが、その顔はとても嬉しそうだ。

「初めてのユニゾンでしたからね。その疲れが出たんでしょう」

「え、えっと……ルナさん……でしたっけ？」

横から出てきたルナにカコは聞く。

「あ、はい。そうです。よろしくお願いしますね」

「あ、はい。よろしく……。あ、それよりも早く帰りましょう」

カコはそう言ってたった今遅れて到着したなのは達の所へ未来を支えながら歩いた。

## 第八話 記憶を取り戻して（前書き）

本編より後書きの方が長くなってしまいました…。

新学期に入り学校の文化祭も近いので更新速度が今よりも落ちると  
思いますが、今後もよろしく願います。

## 第八話 記憶を取り戻して

未来が目を覚ますと見たのは真っ白な天井だった。

「何で俺は医務室にいるんだ…？確か俺はユニゾンを解いた後カコの頭をなでて…」

その時、医務室の扉が開いてカコが入ってきた。

「あ、お兄ちゃん。目覚めたんだね」

「ああ。ところでどうして俺は医務室にいるんだ？」

「それはね、お兄ちゃん。お兄ちゃん、初めてのユニゾンの疲れが出て眠っちゃったんだ。それで念の為医務室で検査したってわけ」

カコの説明に未来は頷く。

その時、医務室の扉が再び開き、二人の人物が入ってくる。

「こんの馬鹿未来いいいいいい！！」

二人の内の片方 のぞみは医務室に入るなり跳躍。未来の頭に空中回し蹴りを決めた。

「がはっ！いきなり何すんだよ！」

「あんたが何年も消えてた上に戻ってきたと思ったら記憶喪失になつてたからよ！」

「だからっていきなり回し蹴りはないだろ！」

「うるさい！悪いのはあんたでしょ！ふんっ！」

そう言っただけで未来に背を向けるのぞみ。  
その顔は嬉しそうに綻んでいる。

「たくっ。全然変わってねえな…」

「未来」

愚痴る未来に二人の内のもう片方　フェイトが声をかける。

「本当に…記憶は戻ったんだよね…？」

「ああ。戻ったよ」

未来の言葉にフェイトは瞳から涙を零す。

「良かった…記憶が戻って…」

「お、おい。大丈夫か？」

「大丈夫…。未来の記憶が戻って嬉しいだけだから…」

「そ、そうか。…えっと、ただいま、でいいのか？」

「うん、おかえり」

未来の言葉にフェイトは笑顔で返す。

「ほう…未来。私にはただいまって言わなかったくせにフェイトちゃんには言うんだ…」

「お兄ちゃん……私にもただいまって言ってない」

そんな未来にのぞみとカコがどす黒いオーラを出しながら言う。  
その迫力に未来はベッドの上で後ろに下がろうとする。

「わ、悪い……ただいま」

「「いまさら襲いわあ（よ！）」」

「ぎゃあああああ！！」

その後、フェイトはすぐに二人を止めようとしたが二人はそれを無視して未来をボコボコにした…。

機動六課部隊長室

あの後、ようやく二人が落ち着き、のぞみとフェイトが医務室に来た本来の目的である未来を部隊長室に連れてくるということを出し、四人は部隊長室に来た。

そこには部隊長であるはやてをはじめなのは、ヴィータ、シグナム、リンがいた。

「あれ？ルナはどこだ？こっちにいるんだと思ってたんだが」

「私ならここですよ、マスター」

聞こえてきた声に未来は周りを見回す。  
だがどこにも見当たらない。

「右手の腕輪ですよ」

「右手？」

未来が右手の腕輪　カリバーンの待機形態を見ると腕輪についている宝石のようなものが光を放ちルナが現れた。

「それがカコちゃんの言ってた管制人格なん？」

それを見ていたはやてが尋ねる。

どうやらカコからすでに話は聞いていたようだ。

「はい。はじめまして。カリバーンの管制人格のルナといいます」

「あ、機動六課部隊長の八神はやていいいます」

ルナが自己紹介したのを見てはやても自己紹介する。それに続いてなのは達も自己紹介する。

「スターズ分隊隊長の高町なのはです」

「ライトニング分隊隊長のフェイト・T・ハラオウンです」

「スターズ分隊副隊長のヴィータだ」

「ライトニング分隊副隊長、シグナムだ」

「はやてちゃんの補佐のリインフォースエエですう」

「六課の医務官のシャマルです」

「改めて戦技教導官の日比野カコです」

「同じく戦技教導官の相原のぞみよ」

「はい、よろしく願いしますね」

「自己紹介が終わった所で聞きたいことがあるんやけどええかな？  
未来君」

「いいぞ」

未来の返答を聞いてはやては質問する。

「次元の狭間に消えた筈の未来君がどうやって戻ってこれたか。覚えとらん？」

未来ははやての問いに次元の狭間に消えた後のことを思い出そうとする。だがまったく思い出すことが出来ない。

「悪い……覚えてない」

「そうか……あっ、ルナちゃんにも聞きたいことがあるんやけどええかな？」

未来の返答を聞いてはやては少し考え込み、ルナに尋ねた。

「かまいませんよ。それと呼び捨てでいいですよ？」

「そうか、そんならルナ。未来君がカリバーンに触った時、魔法に  
関しては思い出したやん？それについて何かわかるか？」

「はい、わかります。というのもそれは私がやったことだからです」

「そか……………は？それってどういうことや？」

ルナの言葉にはやてが聞き返す。

「言葉通りの意味です。その時、すでにカリバーンは半分起動している状態で私の意識もありました。ただ、完全な起動はマスターにしか出来ないのでカリバーンの中から外を見るしかなかったんです。それでマスターが記憶喪失だとわかり、記憶を戻すことはできないまでも魔法に関する情報を与えることは出来ると思いました。それでマスターがカリバーンに触れた時、魔法に関する情報を与えたんです。私にはそれくらいしか出来ない……………」

「そうか……………。ありがとな、ルナ」

「マスター……………」

ルナの説明を聞いた未来はルナの頭を優しくなでた。その行動にルナは頬をつつすらと桜色に染め、微笑んだ。

「未来君、ちょっと言うことがあるんやけど」

「ん？なんだ？」

なでるのを止めてはやての方を見る未来。その際、ルナが少し名残惜しそうな表情をしたのには気づいていない。

「未来君が消えて、管理局では未来君は死亡扱いになっつたんよ。まあ私達やヴェルさん達は認めなかつたんやけどな。それで死亡については取り消したんやけど囑託魔導師試験をもう一回受けること

「なったんや。ええかな？」

「ああ、いいぞ。リミットは解除してもいいのか？」

「ああ、ええで。それで試験は五日後や。準備しといてな」

その時、はやてが何かを企んでいるような笑みを浮かべていることには誰も気づかなかつた。

（後書きコーナー）

のぞみ

「やっぱり翠屋のショートケーキは美味しいわね」

カコ

「このチョコケーキも美味しいですよ」

ヴェル

「…二人共、もうカメラが回ってるぞ」

のぞみ・カコ

「嘘!?!」

しばらくお待ち下さい

カコ

「こんにちは、日比野カコです」

のぞみ

「相原のぞみよ。今回のゲスト、まずは第一章以来出番がないウィルレイン兄妹」

ヴェル

「ヴェル・ウィルレインだ」

クレイ

「クレイ・ウィルレインだ」

キリュウ

「キリュウ・ウィルレインです」

サラ

「サラ・ウィルレインよ」

セラ

「セラ・ウィルレインです」

のぞみ

「続いて魔法少女リリカルヴィヴィオから一之瀬祐希奈とキング・オブ・ヘタレよ！」

祐希奈

「ども〜 一之瀬祐希奈よ」

ヘタレ

「名前くらいちゃんと紹介しろよ！俺の名前は風間力……」

ドガアアアアアアン！！！！！！

カナン

「ナアアアアアアア！！？？」

セラ

「な、なんでカナンさんの足下がいきなり爆発したんですか！？」

のぞみ

「地雷を設置しといたからよ。結構飛んだわね」

祐希奈

「やるわね」

のぞみ

「それほどでも」

カコ

「あ、カナン君がヴェルさんに向かって落ちてきた」

カナン

「…はっ！ヴェルさん！危ない！」

ヴェル

「……ふんっ！」

カナン

「ごはあっ！」

クレイ

「流石は兄貴だな。落下してくるカナンの腕を掴んで地面に叩きつけるとは……」

カナン

「いきなりひどいっすね!?!」

サラ

「復活早いわね!?!」

カナン

「慣れてるんで……。ところで未来さんはどうしたんすか?見当たらないんですけど……」

カコ

「ああ、お兄ちゃんならEXの方に行つて……」

?????

「ただいま……」

カコ

「えっと……巫女さんが何のご用でしょうか?」

みつこみこ未来

「俺だよ……未来だよ……」

一同

『……………はあ!?!』

カコ

「え、ええ!?!で、でも完璧な女の子になつてるよ!?!」

みつこみこ未来

「アリサの力だよ……。しかも戻さないで帰された……」

祐希奈

「さっすがアリサね」

未来

「しかも写真集も作られた……」

カナン

「それは……ご愁傷様です……」

未来

「言っておくが……お前やシオンのもあるぞ……」

カナン

「……マジっすか？」

未来

「ああ……マジだ……」

のぞみ・祐希奈

「何コソコソ話してるのよ!」「」

未来・カナン

「「がはあ!」「」

のぞみ

「あら?カナンって結構蹴り心地良いわね」

祐希奈

「でしょ もっと蹴っていいわよ」

カナン

「お前は何てことを言ってる……」

のぞみ

「ありがとね、祐希奈」

ゲシッ

ドカッ

バキッ

グシヤッ

ビシッ

ザクッ

ドスッ

プスッ

パキッ

ポキッ

パクッ

にやゝ

ばうっ！

コケコッコー！

ぎゃおおおおお！！

バシヤッ

ポウッ

ちゅどおおおおおおん！！

パチパチパチパチパチパチパチパチパチ……

かゝめゝゝめゝ波！

ストリ ム！光線！

マテリ ルパズル！三獅 祭！

《FINAL ATTACK RIDE DE・DE・DE・DECA

DE!》

ピ チュウ、十万ボルト!

ピカチュウウウウウ!!

夢想封印!

殺人ドール!

ドラゴンメテオ!

アトミックフア ヤーブレード!

カナン

「ぎゃあああああ!」

未来

「後半どう聞いても蹴りの音じゃないだろ!猫とか犬がいたぞ!」

祐希奈

「うるさい!」

未来

「ぐはっ!」

カコ

「なんか私達置いてかれてるね…」

ヴェル・クレイ

「「だな…」」

キリユウ・セラ

「「そうですね…」」

サラ

「そっね…」

未来

「ところでこの女体化を解きたいんだが…」

作者

「しかたないなあ。僕が解いてあげるよ」

カコ

「わっ！作者さんいつのまに…？」

未来

「それより本当か！？本当にこの女体化を解いてくれるのか！？」

作者

「うん、いいよ。ほい」

ペアアツ

未来

「よっしゃあ！男に戻ったあああああ！！」

????

「お兄ちゃん」

ダキッ

未来

「お、おい！カコ！抱きつくな！……って何でみんなして固まってるんだ？」

カコ

「お兄ちゃん…抱きついてるのは私じゃないよ…」

未来

「え？じゃあ誰が（クルッ）……………」

????

「あれ？お兄ちゃん？どうしたのー？…………固まっちゃった。あっ  
！この隙に…………ん〜」

カコ

「ダメー！」

????

「キャッ！」

のぞみ

「何やってんのよこの変態！ー！」

未来

「ぐはっ！」

カナン

「えっと…。ところであなたは誰ですか？」

未来

「あ、ああ。誰だよお前」

サラ

「あんたも復活すんの早いわね…………」

???

「私は未紀。お兄ちゃんの妹だよ」

未来

「…作者……これは一体どういう……っていねえ！」

キリユウ

「置き手紙がありますよ。何々……『女体化が解けたら未来は男と女に分かれるから。理由は面白そうだから』……だそうです」

未来

「あの野郎……今度会ったら絶対に飛ばす……」

未紀

「お兄ちゃん、大丈夫？」

未来

「近づくな！俺はお前の存在を認めたくはない！そうだ！これは夢だ！夢に違いない！夢なら早く覚めてくれえ！」

のぞみ・祐希奈

「「うっさい！」」

未来

「がはっ！」

カナン

「未来さん、だいじょ……」

カコ・未紀





カコ

「あの、そろそろお帰りの時間なんですけど…」

祐希奈

「あ、もうそんな時間？ほら、カナン。帰るわよ」

カナン

「わかった！わかったから引きずるな！」

のぞみ

「じゃあね〜」

祐希奈

「じゃあね〜」

未来

「ゲストも帰ったしそろそろ終わるか」

のぞみ

「そうね……あ！祐希奈にこれ渡すの忘れてた」

未来

「何だ？それ」

のぞみ

「KDGの入団届よ」

未来

「渡せなくて良かったあ！」

のぞみ

「よいしょっ」と

未来

「…お前は何をやってるんだ？」

のぞみ

「特製のカプセルにKDGの入団届を入れてるのよ」

未来

「何となく見当はつくけど何のために？」

のぞみ

「LVに届けるためよ」

未来

「させるか！」

のぞみ

「邪魔よ！」

ドカツ！

未来

「がはっ！」

のぞみ

「カコちゃんと未紀ちゃんも入らない？KDG」

カコ

「入りません。お兄ちゃんを弄る組織になんて」

未紀

「私もです」

のぞみ

「(ぼそ) K D Gに入れば未来が弄られることはなくなるわよ」

カコ・未紀

「「入ります!」「」

のぞみ

「よし」

未来

「お前は一体何を言ったんだよ!」

のぞみ

「あんたたちはどうする?」

ヴェル

「面白そうだな。入ろう」

クレイ

「俺も。弄られるよりは弄る方が好きだしな」

キリユウ

「私は遠慮します。流石に可哀想ですから」

サラ

「私は入るわよ。楽しそうだしね。徹底的に弄るわ」

セラ

「私は入りません。入ってもうまく弄れる自信がないので」

のぞみ

「そう。じゃあ入団届書いとくわね」

クレイ

「あ、これも入れといてくれ」

のぞみ

「これって……ケーキと蟹？」

クレイ

「馬鹿作者のせいでヴィヴィオとメイデン、レナスを呼べなかったからな。そのお詫びとして手作りのケーキと最高級の蟹だ」

サラ

「ちなみにクレイ兄の料理の腕は王族直属の料理人に参ったと言わせたほどよ。それにケーキとかのお菓子系はクレイ兄の得意分野。めちやくちや美味しいわよ」

のぞみ

「それはすごいわね……」

クレイ

「それとカナンにはこれを」

のぞみ

「カナンにもケーキをあげるって…確かにカナンは甘いモノが苦手だけど多分ヴィヴィオあたりあげちゃうから嫌がらせにはならないわよ？」

クレイ

「いや、これは普通のケーキじゃない。世界一辛い食べ物、ブート・ジヨロキアをふんだんに使ったかなり辛いケーキだ。ちなみにギネスに登録されているブート・ジヨロキアの辛さは1001304スコヴィルだがこれに使われてるブート・ジヨロキアはおれが品種改良を重ねて作ったモノでな。ギネスを軽く超える3000000スコヴィルはあるぞ。一口食べただけで逝けるはずだ」

のぞみ

「見た目だけじゃ全然わかんないわね……。間違ってヴィヴィオ達が食べないように注意書きをつけておかないと。カナンには甘味を抑えたカナンでも好きになるようなケーキって伝えてもらっわ。カナンが食べるまではあんたがKDGに入ったことは秘密にしておいた方がいいわよね？それと祐希奈にはカナンに無理やりでも1ホール全部食べさせるようお願いしとくわね」

クレイ

「ああ、頼んだ」

のぞみ

「それじゃLVまで吹っ飛ばすわよ！クラッシュインパクト！」

カコ

「シャイニングブレイカー！」

未紀

「ブルームクラッシュャー！」

未来

「カナン……すまん。俺では止められなかった」

のぞみ

「それじゃあ今度こそお終いね」

一同

『また次回の後書きコーナーで会いましょう』

ヨシユア先生、カナンと祐希奈の出演許可、ありがとうございます。  
精一杯弄ってみましたけどどうでしょう？  
では

第九話 囑託魔導師試験（前書き）

一万文字を超えてしまいました……。  
それから最初に言っておきます……。すいません……。

## 第九話 囑託魔導師試験

五日後、試験当日の朝  
未来はまだ寝ていた。

そしてそんな未来をカコが起こしにきている。記憶が戻ってからは毎日だ。

「お兄ちゃん、起きて。朝だよ。今日は囑託魔導師試験があるんだから早く起きないと」

「ん、あと……………」

「あと？」

未来の言葉にカコが尋ねる。

どうせ五分って言うんだろ？

そい思いカコは未来が戻ってきたことを改めて感じていた。

「二時間」

「ダメだよ！二時間も寝てたら試験に間に合わないよ！？」

未来に対してカコは突っ込むが起きる気配はまったく無い。

「仕方ないなあ。早く起きないと……………」

カコの少し間を聞いて言う。

「キスしちゃうよ？」

「……………」

未来は無言ですぐに起き上がり、カコの頭に拳を落とした。

「いったあい！お兄ちゃん！何するの！？」

「お前が朝っぱらからふざけた事を言うからだ！そういうことは好きな奴にやれ！」

「……………好きだからやったのに（ぼそっ）」

「ん？何か言ったか？」

「ううん。何でもないよ」

カコは慌ててそう返し、それから何故かベッドに座った。

「……………まだ何かあるのか？カコ」

着替えを取り出すのを止め、未来はカコに尋ねた。その問いに伸びをしていたカコは目を丸くする。

「え？特にないけど」

「だったら出てけ。着替えるから」

「別にいいよ。気にしないから」

カコはそう言って立ち上がった。

「あ、着替え手伝ってあげるね」

そう言つてカコが近づいてくるので、未来はカコの服の襟を掴み、持ち上げる。そして部屋の扉を開けて外に放る。

「お、お兄ちゃん」

「いい加減にしろ」

未来はそう言つて扉を閉めた。カコはなおも喚いているが、無視する。

「ふう……………これで着替えられる」

未来の記憶が戻ってからというもの、カコはなにかと未来にくつついてくる。未来が消える以前もカコは未来に懐いていたが、記憶が戻った後のカコの行動は昔を越えている。今のように着替えを手伝おうとするだけでなく、一緒にお風呂に入ろうとしたり、一緒に寝ようとしてくるのだ。その度に未来は苦勞して止めている。未来はため息をつき、着替えに手を伸ばす。

「たくつ、あいつは……………」

「本当、カコさんには困りますね」

未来の呟きに誰かが同意する。その声は未来の肩の辺りから聞こえてきた。ルナである。

「……………ルナ、お前は何をやってんだ？」

「はい？マスターの肩に座ってるだけですよ？」

未来の問いにルナは首を傾げながら答える。

「そうか。用が無いなら外に出てくれるか？」

「何故です？」

「着替えるってさつきカコに言ったよな？」

「でもデバイスは常にマスターと共にいますよ？」

「お前は自立行動ができるだろうが」

「でも……」

なおも反論しようとするルナに対し未来はカコと同じように襟を掴んだ。

「お前もいい加減にしろ」

「……………むう」

そして再び部屋の外に放って扉を閉めた。ルナと出会って約一週間が経ったが、その間に未来はあることに気づいた。ルナは寝ぼけるとカコと同じように自分にくつつくようになる。寝ぼけているようには見えないのだが、しばらくすると顔を真っ赤にして慌てるので寝ぼけていたことがわかる。そんなルナにも未来は苦労しているようだ。

そして数分後、着替えた未来が部屋の外に出るとそこにはカコと顔を真っ赤にさせたルナがいた。

「ルナはともかく、カコはまだ何かあるのか？」

「うん！はい、これ！」

そうやってカコが渡したのは巾着袋。中身の形からして恐らく弁当だろう。

「弁当？なんで」

「試験は午後までであるでしょ？だったらしっかり食べなきゃ。どうせお兄ちゃんのことだからお昼ご飯は簡単にパワーゼリーとかで済ませるつもりだったでしょ？」

「うっ……よくわかったな」

どうやら凶星だったようだ。未来はおとなしく弁当を受け取った。

「マスター……先ほどはすいませんでした……」

未来が弁当を受け取った所でルナが謝ってきた。顔は恥ずかしさから真っ赤になっている。

「気にすんな。もう慣れた」

「うっ……」

その言葉にルナはさらに顔を赤くするが未来は気づかない。

「それじゃ、言ってくるな」

「あ、お兄ちゃん。行ってきますのキスは？」

「……………行くぞ、ルナ」

未来はカコを無視し、未だ顔の赤いルナを連れて試験会場に向かった。

試験会場

受付を済ませた未来はまず筆記試験の会場にきている。

そして今、試験官が来るのを待っていた。そして画面が現れ、そこには髪は白髪に変わっているがまだまだ元気そうな老人が映った。

「またせたの。わしが今回の試験の試験官をやる日比野徹郎じゃ」

「じ、爺ちゃん!？」

映っている老人に未来は驚愕した。

実の祖父だったからだ。

「九年ぶりじゃの。勝手に消えおつて。まったく、心配をかけさせるな」

「なんで爺ちゃんが囑託魔導師試験の試験官をやるんだよ!少将だろ!?!他にも誰かいただろ!」

「はあ。久しぶりにあった祖父にそう言うか。それに少将としての仕事なぞ久しぶりに孫に会えるんじゃ。さつさと終わらせてきたわい」

「爺ちゃん……」

徹郎の言葉に未来は少し感動する。

八年間も消えていた自分のことを祖父は大切にしてくれてくれたからだ。

「まあ、本音は久しぶりに未来を弄れるおもったからじゃがの」

「よし！さつさと試験始めるぞ！」

しかしそれも徹郎の手により破壊された。未来は徹郎に早く試験をしようと催促し、筆記試験が始まった。

そして二時間後、時刻は一時。

筆記試験は終了し、儀式魔法も四種全て確認できていた。

「次は実技試験じゃが、その前に昼食休憩を入れるぞ。腹が減っては戦はできぬ、じゃ。それと実技試験の試験官はお主の知り合いじゃそうじゃ。一緒に食うといい」

「知り合い？」

徹郎の言葉に未来は首を傾げる。

知り合い？誰だ？

「よお、未来」

「え？」

後ろから聞こえてきた声に未来は振り向く。

そこには提督の制服を纏った蒼髪の青年がいた。

「……………ヴェル？」

「ああ。久しぶりだな」

その青年は八年前に出会った自分達の世界を失い、未来に叱咤されたウィルレイン兄妹の長男、ヴェル・ウィルレインだった。

「久しぶりだな。管理局に入ったのか」

「ああ。その方がなにかと便利だしな。それに妹達の気を紛らわすのにもちょうど良かったしな」

「気を紛らわす？何のために」

ヴェルの言葉に未来が尋ねる。

「八年前、お前が消えたのは俺達を庇ったからだったろ？それで俺達は自分を責めたんだよ。まあ数日もしたら俺とクレイは立ち直ったがな。父さん達とお前に元気に過ごさせて言われたしな。でも、妹達は自分を責め続けて立ち直れなかった。父さん達を失った時はお前が叱咤してくれたお陰で立ち直れたが、その時は叱咤してくれる奴がいなかった。一年ぐらいいして、立ち直ったって自分で言っていたが、俺から見たら立ち直れているようには見えなかった。だから管理局に入れて、気を紛らわせようと思ったんだよ」

「そうだったのか……今は立ち直っているのか？」

「ああ。でも立ち直ったのもつい最近のことだ。お前が帰ってきたと聞いた時はかなり喜んでいたが、記憶喪失になっていると聞いてまた沈んだ。記憶が戻ったって話を聞いた時はめちゃくちゃ喜んでたよ。俺が見た所あいつらはもう大丈夫だ」

「そうか……良かった」

ヴェルの言葉に未来は安堵する。

「兄貴。そろそろ昼飯にしようぜ」

未来の後ろから声がかかる。その声に未来が振り向くとそこには赤い髪の青年がいた。

「クレイか。キリュウ達はどうした」

青年　クレイを見てヴェルが尋ねる。

「キリュウ達は飲み物を買って行ってよ。ところで何の話をしてたんだ？」

「何、未来が消えた時にキリュウ達が立ち直れなかったという話だ」  
ヴェルの言葉にクレイは笑いをこらえながら未来に話しかける。

「未来、久しぶりだな。お前が戻ってきてあいつらが立ち直った今となつては笑い話なんだけどよ。お前が消えた後のサラは今となると面白かったよ。キリュウとセラはともかく普段は勝ち気なサラま

ですごい落ち込んでただげ。確かにあいつは責任感が強いから自分を責めるのもわかるけどあの時のサラの落ち込みっ振りは今となつてはかなり笑え……る……よ………」

笑いをこらえながら話すクレイの声がだんだんと小さくなっていく。クレイは未来ね後ろを見て少し冷や汗を流している。

未来が振り返って後ろを見ると三人の女性がいた。

一人はウェーブがかかった金髪を背中の中ほどまで伸ばした優しそうな印象を受ける女性。

一人は肩に軽くかかる位の薄い緑色の髪を左サイドテールにして、目尻がつり上がっている女性。

最後の一人は左サイドテールの女性と双子のようで同じ長さで同じ色の髪を右サイドテールにしている女性。

「ク~~~~し~~~~い~~~~に~~~~い~~~~」

左サイドテールの女性　サラは顔を真っ赤にさせてクレイを睨んでいる。その両手には双剣型のデバイス、コロナが握られている。

「この馬鹿兄貴！」

サラはそう叫びクレイに突撃し、両手のコロナで切り裂こうとする。それをクレイはギリギリで避けていく。

「はあああああ……！」

「うおっ！あぶね……！」

「……………止めなくていいのか？」

「ああ、あの二人の喧嘩は日常茶飯事だからな」

「そうなのか……」

未来は喧嘩する二人を見て軽く呆れる。

「あの」

そんな未来に誰かが声をかける。

未来が振り向くとそこにはウェーブがかかった金髪の女性　キリ

ユウと右サイドテールの女性　セラがいた。

「お久しぶりです。未来様は私達のこと、覚えていますか？」

振り向いた未来にキリユウが尋ね、未来の顔を不安そうに見る。隣のセラも同じように未来の顔を見ている。どうやら二人は本当に未来の記憶が戻っているかどうか確認しようとしているようだ。まだ少し不安なようだ。

「ああ、キリユウとセラだろ？久しぶりだな」

未来はそんな二人の頭をなでながら言う。二人は嬉しそうに微笑み、涙を流した。

「お、おい。何で泣くんだよ？俺、何かやったか？」

泣き出した二人に未来は慌てる。いくら尋ねても顔を横に振るだけで理由はわからない。

「何キリユウ姉とセラを泣かしてんのよ！」

「うはっ！」

慌てる未来に対して横から蹴りが飛んでくる。

蹴りを放ったのはサラ。

さっきまでクレイを切り裂こうとしていた筈だが二人が泣いているのを見て中断したのだ。

「サラ！？何てことをするんですか！？」

「お姉ちゃん！なんで未来さんを蹴ったの！？」

未来を蹴ったサラに対しさっきまで泣いていた筈の二人が怒る。

「あいつが二人を泣かせたからよ！」

「私達が勝手に泣いただけで未来様の所為ではありません！」

「お姉ちゃん！未来さんに謝って！」

怒る二人にサラはたじろぎ、渋々頷く。

「わ、わかったわよ。悪かったわね、蹴ったりして」

「いや、いいよ。姉妹を思ってたことだし」

「あ、ありが（グーツ）……………」

お礼を言う途中でサラのお腹が鳴る。

「くく…………サラも腹が減ったようだしいい加減飯にするか。クレイ、

シートを敷くぞ」

「くく……ああ。わかったよ兄貴」

ヴェルとクレイの二人が笑いをこらえながらシートを敷く。その場のサラを除く全員が笑いをこらえている。

それに対してサラは顔を真っ赤にさせている。

「笑うなあ!」

そしてサラの叫びが辺りに響いた。

今、六人は敷いたシートの上で弁当を食べようとしていた。

そして未来はカコにもらった弁当を開けようとして嫌な予感がした。弁当の蓋を使いヴェル達に見られないようにそっと弁当の中身を見る。そしてすぐに閉めた。

(これは……まずい……)

弁当の中身を見た未来はそっと鞆に戻そうとする。だがそれをサラに見られてしまった。

「あれ?何で弁当をしまうのよ?食べるんじゃないの?」

「あ、食欲がないんだよ……」

「……怪しいわね」

「別に怪しくねえよ……っておい!人の弁当を取るな!」

サラは未来の弁当を奪おうとする。未来はそれを止めようとするが奪われてしまった。

「別にいいじゃない。見るだけだし」

「やめろ！」

未来は弁当を取り返そうとするが時すでに遅し、すぐに弁当の蓋を開けられてしまった。

「わあ……」

弁当の中身を見てサラは固まった。

それを見てヴェル達も弁当を覗き込みサラと同じように固まった。ヴェル達が固まったのも当然といえるだろう。何故なら白いご飯の上にはそぼろでハートマークが描かれているからだ。それにおかずも手作りのハンバーグに足が八本あるタコさんウィンナー、半熟ちよい固めのゆで卵と手が込んでいる。

「……………未来様には彼女がいらっしやるんですか？」

真っ先に気がついたキリユウが未来に尋ねる。その瞳は何故か潤んでいる。

その隣ではセラが同じように瞳は潤ませて未来を見つめている。

サラは別に気にすることじゃない、といった表情をしているがヴェルとクレイには認めようとしていないように見える。

そんな三人を見てヴェルとクレイは苦笑していた。

「いねえよ！カコだよ、カコ！弁当を作ったのは！ああ、もう！こうならやけだ！」

未来は弁当を奪い返し、弁当を一気に食べた。一分ほどで食い終わり、未来は弁当を置いた。

「足りねえ……」

食い終わった弁当を鞆にしまいながら未来は呟く。弁当が小さかったために全然足りなかったのだ。

「よかつたら私達のお弁当、一緒に食べませんか？」

「いいのか？」

キリュウの申し出に未来が尋ねる。

それにキリュウは微笑みながら答える。

「元々みんなで食べる為に作ったモノですから。どうぞ召し上がって下さい」

「ありがとうな」

未来は礼を言っつて弁当を見る。たしかに数種類のおかずが結構な量がある。

未来はまず唐揚げに箸を伸ばした。

「お、この唐揚げ美味しいな。キリュウとセラ、どっちが作ったんだ？」

「なんで私は候補に入っていないのよ！」

未来の言葉にサラが突っ込む。

「それはまあ……キャラ的に」

「勝手に人のキャラを決めないでよ！」

「この唐揚げを作ったのは私でもセラでもなくクレイ兄様ですよ」

キリュウの言葉に未来は驚く。  
そんな未来にセラが説明する。

「クレイ兄さんは料理が得意なんですよ。王族直属の料理人に参ったと言わせたほどなんですよ」

「そりやすげえな……」

未来はそう言っただけでクレイを見る。  
人は見かけによらないというか……。

「小さい頃からやってたらそうだったんだよ。それに料理は趣味だからな」

「そうなのか……。となるとこの弁当は全部クレイが作ったのか？」

未来の問いにキリュウが答える。

「違いますよ。クレイ兄様が作ったのはおにぎりと唐揚げです。この肉じゃがは私が、野菜炒めと卵焼きはセラが、ブリの照り焼きはセラが作ったんですよ。未来様に食べてもらいたかったので……」

「私もです……」

キリユウとセラが俯きながら言った。その頬は赤くなっている。

「私は違うわよ！キリユウ姉とセラも作るのに私だけ何も作らないのが嫌だっただけ！あんたなんかの為に作ったわけじゃないんだからね！」

「ああ、わかってるよ。んじゃ野菜炒めから頂きますか」

サラの言葉に未来はそう返し、箸を野菜炒めに伸ばした。

それが口に運ばれる様子をサラは横目でチラチラと見ている。

パクッ

そして口に入れ

「からああああああ！！！！」

叫んだ。

「からっ！この野菜炒めからっ！水！水くれっ！」

「どうぞ、お茶です！」

未来はキリユウに差し出されたお茶を飲み、辛さを落ち着かせる。そんな未来にサラが不安そうに尋ねる。

「そ、そんなに辛かった？」

「めっちゃくちゃかれえよ！何入れたらこんなに辛くなんだよ！」

「ピリ辛にしようと思ってクレイ兄の育ててた唐辛子を一つ細かく刻んで入れたけど……」

「ピリ辛になってねえよ！」

「おいサラ。その唐辛子って俺の畑のどこにあったやつだ？」

「え？一番端にあったやつだけだ」

サラの返事にクレイは頭をおさえる。

「それは唐辛子じゃない。ブート・ジヨロキアだ」

「ブート・ジヨロキア？何それ」

「第97管理外世界で最も辛い食べ物だ。しかもサラの入れたやつは俺が品種改良した特製で普通のブート・ジヨロキアよりも三倍は辛い」

「よくその辛さがお茶だけで落ち着いたな……」

クレイの説明に未来が眩く。

「ああ、そのお茶も俺が作った特製だ。これの辛さを落ち着かせる効果があるんだよ」

「ははは………すげえな」

未来はクレイに対して感心するのを通り越して呆れた。そして卵焼

きを取る。

「卵焼きなら……………大丈夫だよな？」

「何で疑問形なのよ！」

未来はサラの突っ込みを無視して卵焼きを口に入れる。

「よかった。卵焼きは普通に美味しい」

「ほ、本当？」

「ああ。塩加減もちょうどいいしな」

「……………え？」

それを聞いてサラが固まる。

「……………甘くないの？」

「は？甘くなんてないぞ……………ってまさか」

「塩と砂糖を間違えた……………か」

「ベタな間違いだな」

サラの言葉にヴェルとクレイが呟く。それを聞いてサラは膝を抱えてうつむいてしまった。

「ま、まあ美味しいんだから気にすんなって。な？」

未来はサラを励まそうとするがサラは

「砂糖と塩を間違えるなんて……」と呟いてばかり。今のサラには未来の声は聞こえていない。

「放っておけ。そのうち戻ってくる。それよりも早く食わないと昼食休憩が終わるぞ」

「それもそうだな」

未来は箸を再び持って肉じゃがを掴む。

「……………（ジーツ）」

肉じゃがを口に運ぶ途中で、キリュウがこちらを凝視しているのに未来は気づいた。それを不思議に思いながらも未来は肉じゃがを口に入れる。

「ん、美味しいな、この肉じゃが」

それを聞いてキリュウは安堵する。美味しいと言ってもらえるか不安だったからだ。

「ありがとうございますっ」

キリュウは未来に美味しいと言ってもらえて嬉しくなり満面の笑みでお礼を言う。その声も少し弾んでいる。

「むっ……………。未来さん、これも食べて下さい！」

それを見てセラがさんまの蒲焼きを一つ取って未来に差し出す。

「ああ。わかった」

未来は皿の上に乗せようとしてるのだと思い、皿をセラに向ける。が

「あ〜ん」

セラはさんまの蒲焼きを自分の箸で掴み、未来の口の前に差し出していた。

「あ〜ん」

「セラ、それは無料だって」

未来がそう言うと、セラは瞳を潤ませて上目遣いで未来を見て言う。

「ダメ……ですか？未来さんは私のことが嫌いなんですか？そんなんですね!？」

さらに涙目になったセラに未来は折れ、渋々OKした。

「わかったよ……」

「ありがとうございます」

満面の笑みを浮かべるセラを見て未来は騙された？と思ったが取り消せそうにないので諦めた。

「あ〜ん」

「あ、あ〜ん」

未来が口を開くとその中に蒲焼きが入れられる。

「美味しいですか？」

「ああ、美味しいよ」

美味しいと言ってもらえたセラはかなり嬉しそうに笑った。

「ありがとうございます」

そしてお礼を言つと同時に未来に抱きついた。

「お、おい！抱きつくな！離れる！」

「えへへ 嫌です 離れたくありません」

未来はセラを引き剥がそうとするがその度に力をこめて抱きついてくる。体に当たる柔らかい感触と甘い匂いに未来は気が遠くなりそうになるがなんとか耐える。

「セラ！何をやっているんですか！」

「あ！あなた何やってんのよ！」

キリユウと気を取り戻したサラが未来とセラを引き剥がそうとする。

「あなた！何妹に抱きついてんのよ！」

「俺じゃねえ！お前の妹に抱きつかれてんだよ！」

「セラ！いい加減未来様から離れなさい！」

「嫌だよ　えへへ、未来さん暖かい」

そう言つてセラはさらに体を擦り寄せる。その行動に未来はさらに慌て、キリユウとサラはますます引き剥がそうとする。

「どうやら完全に立ち直つたらしいな」

「だな。まあ未来は大変そうだが」

ヴェルとクレイはそんな四人を眺め、苦笑した。

あの後、昼食休憩が終わり徹郎が呼ぶまであの騒動は続いた。今は未来とヴェルが50mの間を開けて互いに向き合っている。ルナは未来をサポートするためにカリバーンの中にいる。ユニゾンはしていない。

また、クレイ達は別室からモニターを使いこれを見ている。

「それでは始めるぞ。いつでも来い」

ヴェルの言葉に未来はメビウスリングとカリバーンを構える。それを見てヴェルもツルギを構える。

刹那、二人は駆け出す。

二人の距離はすぐに縮まった。

未来は両手の剣を同時に振り下ろし。

ヴェルは横なぎに剣を振るう。

勢いのついた斬撃同士がぶつかり合い、衝撃波が発生する。しばらくの間、二人は鏢迫り合いになるが、突然ヴェルが後ろに下がる。

瞬間、さっきまでヴェルがいた場所に上からスフィアが降り注ぐ。ルナが作り出したスフィアだ。

スフィアは地面ギリギリで止まり、ヴェルを円形に囲むように誘導される。

誘導されたスフィアは一斉にヴェルに向けて突き進む。

『Explosion』

それを見てヴェルはカートリッジをロード、ツルギに炎を纏わせる。

「はあっ！」

ヴェルは炎を纏ったツルギを一回転して振るう。

ツルギに纏われていた炎は斬撃となって放たれ、ヴェルを囲むスフィアは全て相殺、爆発が起こる。

ヴェルを爆煙が包む。

その煙を突っ切って未来がヴェルに切りかかる。

ヴェルは未来の一撃をツルギで防ぎ、弾く。

そして二人は互いに距離をとり、それぞれのデバイスを構えなおす。

「……………空でやるか？」

「そうだな……………その方がお前の空戦能力も見れる」

未来の提案にヴェルは頷き、二人同時に空に上がる。

ここで二人が戦っている戦闘フィールドについて説明しよう。地上は森林地帯。そのほとんどが木々に覆われていて、開けた場所は3、4ヶ所しかない。そして木以外には岩が所々に転がっている。そして空には岩が多数浮遊している。その内のいくつかは、その岩の上で戦闘ができるほどでかい。それが二人が戦っている戦闘フィールドである。

まずいな。

未来は焦り始めていた。

空に上がってから何回かヴェルとぶつかってそう思った。

スピードは互角。

剣速も互角。

しかし、いくら切りかかっても、その全てを受け流される。

相手は使い慣れている剣術。

対する自分はいく数日前から使い始めた二刀流。

その間には技術面の壁が何枚も存在するということを未来は感じていた。

せめてカリバーンの能力であるデバイス付加を使えればマシになると思うが、ヴェルはそんな暇を与えない。

現在、二人は空を飛び回り追跡戦を行っていて、未来をヴェルが追跡している。

未来は一つの浮遊岩石にそって飛び、端から飛び出すと同時にヴェルと遭遇した。

ヴェルはすでにツルギを構え、いまにも横なぎに振るってきそうだ。

「ちっ！」

未来は舌打ちをし、スライディングする。いや、正確にはスライディングのような行動である。

それによりヴェルの下を通り、素早く背後にまわる。

二人が振り返るのはほぼ同時。

振り返ると同時に片手で振るわれ、ぶつかり合うカリバーンとツルギ。

その威力はほぼ同じ。

しかし未来は左手にまだメビウスリングを握っている。

「はあっ！」

未来はヴェルの腹部にメビウスリングを叩き込む。

その一撃にヴェルは浮遊岩石に吹き飛ばされる。

が、浮遊岩石に突っ込む直前で体の向きを変え、浮遊岩石に着地、再び未来に突っ込む。

その際、着地の衝撃により浮遊岩石は粉々に砕かれた。

ヴェルは体当たりのように未来に突っ込み、未来はそれをシールドを張って防ぐ。

ヴェルがシールドにぶつかった瞬間、衝撃波が発生し周囲の煙などは吹き飛ばされた。

そして二人は距離をとる。

未来はメビウスリングに残ったカートリッジ三発をロード、刃に多量の魔力を纏わせる。

それに対しヴェルもカートリッジを三発ロード。刃に炎が纏われる。未来はメビウスリングとカリバーンを振り上げ。

ヴェルはツルギを居合いのように構える。

「はあっ！」

未来はメビウスリングとカリバーンを同時に振り下ろし。

X字の斬撃を飛ばす。

それと同時にヴェルは駆け出し、ツルギを横なぎに振るう。

それは未来が放った斬撃を切り裂き。

ヴェルは未来にツルギを振り下ろす。  
未来はその一撃をバリアで防ぎ。

『Ring bind』

ヴェルを拘束する。

その際に未来はヴェルから離れる。  
以前見してもらった戦技披露会でのなのはとシグナムの模擬戦でなのはがシグナムに対して行った戦術である。

「カリバーン！」

『Device addition』

そして未来はカリバーンをメビウスリングに付加させる。  
そしてメビウスリングの弾倉を取り替え、カートリッジ六発をフルリロードする。

『Burning blaster・EX type』

未来はメビウスリングを正面に突き出すように構える。  
そして魔法陣が展開される。  
未来はメビウスリングを振り上げ。

「はあああああ！！！！」

魔法陣に叩きつける。  
放たれた巨体な剣のような砲撃はまっすぐヴェルへと突き進み、飲み込んだ。

「あれがあいつの新しい力……カリバーンか」

「ヴェル兄に砲撃を当てるなんて……」

「未来さん……すごい……」

「未来様……すごいです……」

未来がヴェルに砲撃を当てるのを見てクレイ達が呟く。それもそうだろう。

ヴェルの魔導師ランクはSSS+。

リミットがかかっているとはいえオーバーSランクだ。

その上ヴェルは王位継承者として幼い頃から特殊な訓練を受けてきた。

そんなヴェルに砲撃を当てたのだ。

驚くのも当然といえるだろう。

「これは……ヴェル兄でも耐えられそうにないわね」

「そうですね。未来様の勝利ですね」

「未来さん……強い」

「お前らはどつちを応援してんだよ」

口々に未来の勝ちだと言う妹たちにクレイが突っ込む。

「な、何言ってるのよ！私があんなやつを応援するわけないでしょ！」

「お兄様を応援しているに決まってるじゃないですか！」

「そつだよ！お兄ちゃん！」

だったらなんで嬉しそうな顔してたんだよ。

口々に反論する妹たちにクレイは心の中でそう突っ込んだ。

「お。どうやらまだ終わってないみたいだぞ」

「「「え？」「」」

クレイの言葉に三人はモニターを見る。

モニターにはバリアジャケットの左袖を失っているがヴェルがまだ浮かんでいた。

「かわされた……………か」

浮かんでいるヴェルを見て未来は呟く。

「危なかったな…。後一瞬でもバインドを破壊するのが遅かったら砲撃を食らって負けてたな…」

ヴェルはツルギを正面に構え、カートリッジを補充する。

「模擬戦でこれを使うことになるとはな……………ツルギ！」

『Ja! Tachi form!』

ヴェルはカートリッジを三発ロード。

瞬間、ツルギは光を放ちその姿を変える。

鍔のない両刃の剣から刀身の長さが2mを超える大太刀へと。

「あれはキツいな……」

「ユニゾンしますか？」

フォームを変えたヴェルを見て未来のメビウスリングを握る手に入力が入る。

それにルナがユニゾンするか聞くが。

「いや、いい。俺一人でやりたい」

未来はそう答え、メビウスリングを構える。

「ユニゾンはしないのか？」

「ああ……」

「そうか……。後悔……」

ヴェルの左腰に鞘が現れ、その鞘にツルギを納刀する。そして居合いの構えをとり。

「するなよ！」

そして駆け出す。

対する未来もメビウスリングを居合いのように構え。

「しねえよ！」

ヴェルが間合いに入ると同時に横なぎに振るう。  
しかしそれをヴェルは予測していた。  
未来の間合いに入ると同時に足下に魔法陣を展開。  
それを足場にして跳躍し未来の斬撃をかわす。

「はあああああ!!」

頭上から振り下ろされる一撃を未来は右に避ける。が

「甘い！」

「っ!!」

ヴェルは振り下ろしたツルギを瞬時に返し、跳ね上げるようにして  
未来を斬る！  
未来はそれをギリギリでかわし、バリアジャケットだけが斬られる。  
しかし

「があっ!?!」

未来は吹き飛ばされた。  
剣先から放たれた衝撃波によって。  
未来は浮遊岩石に叩きつけられる。

「ぐ……………」

呻きながら未来は浮遊岩石から抜け出す。その口の端からは血が流  
れている。

「くそっ……………」

未来は口の端から流れる血をバリアジャケットの袖で拭い、メビウスリングを構える。

「まだやるのか……？」

それを見てヴェルが尋ねる。

それに未来は当然だというように頷く。

それを見てヴェルはツルギを正面に構え。

「わかった………行くぞ！」

駆け出す。

ヴェルはすぐに未来との距離を詰め、ツルギを振るう。

未来はそれをメビウスリングで防ぐ。

だが再び吹き飛ばされてしまう。

吹き飛ばされた未来は地面に叩きつけられ、木々をなぎ倒しながら吹き飛ばす。

それは進路上にあった岩にぶつかるまで止まらなかった。

そして巻き起こる土煙によって未来の姿は見えなくなる。

「いい加減に諦める。俺はまだ力の半分も出していないぞ」

煙の中にいる未来にヴェルが言い放つ。

そしてツルギを振るう。

その衝撃波により土煙は全て吹き飛んだ。

それにより未来の姿が見えるようになる。

未来はメビウスリングで体を支え、立っていた。

「まだ立つか……」

「当たり前、だろ……………がはっ！」

未来が答えると同時にヴェルの膝蹴りが腹部にめり込む。  
重い感触。

鉛の玉を叩き込まれたようだ。

「ぐ……………」

その一撃に未来は膝をつきそうになるがメビウスリングを地面に突き刺し、こらえる。

それを見てヴェルはツルギの峰の部分で未来の右脇腹を殴る。

未来は再び吹き飛び、木を数本なぎ倒して止まる。

だが未来はそれでもメビウスリングを離さずに立ち上がる。

「マスター！これ以上は無茶です！止めて下さい！」

傷だらけの未来をルナが止めようとする。

しかし未来は首を横に振り、戦いを止めようとしなない。

「いや……………止めない。例え模擬戦でも、諦めたら……………そこで終わる」

未来はそう言ってメビウスリングを構える。

『……………まだ、やるんですか？』

そんな未来にメビウスリングが尋ねる。

それに未来は笑い、答える。

「知ってるだろ？俺は戦闘に関しては諦めが悪いって」

『……………そうでしたね』

そう言つて、メビウスリングは再び黙る。

「だったら、せめてユニゾンはして下さい！」

「いや、それだけは、絶対にしない。それをしたら、ヴェルと対等の条件じゃ、なくなる。対等の条件の下で、俺はヴェルと、戦いたい」

息切れしながらも未来はそう言つて、カートリッジを二発ロード、ヴェルへと駆け出す。

「……………もう知りません」

そんな未来にルナはそう言うが、ならサポートに徹しようと思った。

「まだ向かつてくるか…」

ヴェルは未来を見てそう呟き、ツルギを納刀する。

「ならば……………」

ヴェルは納刀した状態でカートリッジを二発ロードする。

「これで決める！」

そしてヴェルも未来へと駆け出す。

「はあああああ！！！！」

振り下ろされたメビウスリングと抜刀されたツルギがぶつかり合う！  
発生した衝撃波が周囲の木々をなぎ倒す。

二人はお互いにデバイスをぶつけたまま拮抗するが。

「はあっ！！！！」

ヴェルがツルギを振りきり、メビウスリングを未来の手から弾き飛ばす。

そして瞬時に未来の背後に回り込み、ツルギの柄頭で未来の首を殴る。

「が……………あ……………」

「マスター！」

その一撃により未来は地面に倒れる。

薄れていく意識の中、ルナが自分と呼ぶ声だけが聞こえた。

未来が目を覚ますと見たのは真っ白な天井だった。

（なんか戻ってきてからよく医務室の世話になるなあ）

未来はそう思いながら起き上がる。

「あ！マスター！目が覚めたんですね！」

起き上がるとすぐにルナが気づいた。

周りにはルナの他にウィルレイン兄妹がいる。

「なんで模擬戦であんな無茶したんですか!？」

「ルナ様の言う通りです! 太刀フォームのヴェル兄様にユニゾンしないで挑むなんて! どうかしてます!」

「本当よ! どうかしてるわ!」

「未来さんはもっと自分を大切にしてください!」

起き上がった未来にルナ、キリユウ、サラ、セラが怒る。

「わ、悪い……。ってもしかして心配……。してくれたのか……?」

「「「当たり前です!」」」

「な、なんで私があんたの心配なんかしないといけないのよ! むしろあんたが負けて嬉しいくらいよ!」

未来の言葉にルナ、キリユウ、セラの三人は瞳を潤ませながら怒鳴り、サラは慌てて否定する。

そんな四人を見てヴェルとクレイは苦笑した。

「話している所悪いが合格発表をしてもいいかの?」

突如、モニターが現れ徹郎が言ってくる。それに一同は頷く。

「それでは発表するぞ。筆記試験は満点。儀式魔法四種確認。模擬戦も少し無茶をしていたが合格じゃ。結果は合格。まあ、一度受か

ってるんじゃないから受かって当然じゃがな」

「うるせえよ」

そう言ってくる徹郎に未来はそう返し、ベッドから降りよつとする。

「マスター！まだ休んでいて下さい！」

「もう大丈夫だって」

「ですが……」

「本当に大丈夫だから」

未来はそう言っつてルナの頭をなでる。

そうすると大人しくなるのを未来はここ最近で知った。

それをキリュウとセラは羨ましそうに、サラは不機嫌そうに見る。

「ちよつとあんた。何ルナの頭なでてんのよ」

「お、何だサラ。嫉妬してんのか？」

未来に文句を言っつサラをクレイがからかう。

「なななな何言っつてんのよ！私が嫉妬するわけないじゃない！」

サラはそう言っつてクレイを殴る。

壁に『医務室ではお静かに』と貼り紙があるがそれには気づいていない。

まあ、幸い他に人はいないが。

「未来様、私も頭をなでてもらいたいのですが…」

「私もお願いします…」

サラとクレイが喧嘩している時にキリユウとセラが顔を赤くしながらお願いしてくる。

「？わかった」

「「」

未来は少し不思議に思ったが気にせず二人の頭をなでる。それに二人は気持ちよさそうに笑みを浮かべる。

「あ、あんた！何でキリユウ姉とセラの頭をなでてんのよ!？」

「二人になでて欲しいって言われたからだか？お前もなでて欲しいのか？」

サラの言葉に未来はサラの頭をなでる。それにサラは気持ちよさそうにするが、すぐに我に返る。

「何勝手に頭なでてんのよ!」

「え？あ、悪い」

未来は謝りながらなでるのを止める。その際、サラが一瞬だが残念そうにしたのにヴェルとクレイは気づいた。

「怒ったり、嬉しそうにしたり、残念そうにしたり。サラは忙しいな」

「まったくだな。にしても未来はすげえな。あの三人を前以上に元気にしやがった」

二人は苦笑しながら会話する。

そしてまた騒がしい五人を見守った。

（後書きコーナー）

のぞみ

「ども〜 後書きコーナーの時間よ 今回は屋外で撮影してるわ」

未来

「何でこんなに暑いのに外でやるんだらうな…」

カコ

「それは今日のゲストが関係あるらしいよ？」

未来

「ゲスト？でも今は許可を取ったオリキャラはいないぞ？」

のぞみ

「それは見てのお楽しみよ それでは、今回のゲストはこちら」

バルン星人

「ウオッフオッフオッフオッフオ」

ゴラ

「ぎゃおおおおお！〜」

ゼ トン

「ゼ トン！」

エレキ グ

「キイイイイイ！！」

ガタ ゾーア

「ぐおおおおおお！！」

未来

「人間じゃねえええええ！！！！」

いくら作者がウルト マン好きだからってゲストに怪獣や宇宙人を呼ぶなよ！」

未紀

「わぁ かつこいいね、お兄ちゃん」

未来

「かつこいい！？そんな反応でいいの！？」

カコ

「ちなみにこの怪獣達は作者さんが選んだ比較的有名な怪獣らしいよ」

未来

「選ぶなよ！選んでもマイナーなことに変わりないだろ！」

作者

「ウルト マンをバカにすんな！」



パアアッ

未来

「ようやく消えた…」

のぞみ

「ちなみに消えた怪獣の内一体はLVに送ったわ」

未来

「お前は何を送ってただよ！あいつら40m以上あるんだぞ！あいつらが暴れて道場が壊れたらどうすんだよ！」

のぞみ

「大丈夫よ ちゃんと道場の外に転送したし それにカナン以外は攻撃しないようにしてあるわ」

未来

「カナアアアアアアン！！逃げろおおおお！！！！」

のぞみ

「黙りなさい！」

未来

「もがつ！？」

カコ

「あ、それって前回クレイさんがカナンさんに送ったのと同じケーキ……」



「のぞみさああああん!？」

未来

「ああ……川の向こうで父さんと母さんが手を振ってる……」

カコ

「お兄ちゃああああん!!!向こうに行っちゃだめえええ!!  
!カナンさんの不死身経典を思い出してえええ!!!」

未来

「そついや前にカナンがなんか言ってたな……なんだっつけ？」

のぞみ

「どうやら辛さによるショックでカナンの不死身経典を忘れている  
ようね」

未紀

「忘れないでえええええ!!!向こう岸に行かないでえええええ  
え!!!」

のぞみ

「さて 未来は行動不能。カコちゃんと未紀ちゃんは未来を助ける  
のに必死だしそろそろ終わるわね ちなみに次回では未来は今の状  
態のまま始めるわ さようなら」

未来

「ああ……川がだんだんと近づいてくる……。泳ぐか……」

カコ・未紀

「お兄ちゃああああん!!!泳がないでえええええ!!!」

終

## 第十話 東の間の平和

「どこだ……ここ……？」

気づくと未来は荒れ果てた荒野にいた。

草木も。

川も。

生物すらもない。

そんな荒野が地平線まで続いている。

未来は周りを見回すが自分以外何も無い。

キンッ

「!？」

突然遠くから聞こえてきた金属のぶつかり合う音。

未来は反射的に音の聞こえた方を向く。

そこには小高い丘があった。

音はその向こうから止むことなく聞こえてくる。

「なんだ……？」

疑問に思った未来は小高い丘を登り、その向こう側を見た。  
そこでは。

「はあっ！」

「……………」

一人の青年と漆黒の鎧が戦っていた。

鎧は全身が漆黒に染まり、禍々しい赤の紋様が所々に刻まれている。頭部の鎧の顔の部分には顔が彫られており、目は横に長く、これも禍々しい赤に輝いている。

手にはこれまた漆黒の大剣が握られている。

対する青年は銀色のバリアジャケットを身を纏い、手甲や足甲などを体につけている。手には銀色に輝く両刃剣が握られている。

青年は何度も鎧に切りかかっているが、鎧はその斬撃のほとんどを大剣で受け止め、鎧に当たったとしても、火花が出るだけで傷をつけることもできない。

しばらくの間、青年は休むことなく鎧に切りかかっていくが、鎧にはまったく効いていない。

遂には青年の体力は切れてきたのか、剣を振るうスピードは落ち、大きな隙ができてきた。

その瞬間、今まで防御に徹していた鎧が攻撃に転じた。

大剣による大振りの逆袈裟切り。

体力の切れている青年にその一撃をかわす力は残っておらず、青年は剣でその一撃を受けた。

しかし青年にその一撃を受け止める体力はもうない。

青年は鎧の一撃に吹き飛ばされ、10m離れた地面に叩きつけられた。

その時、未来はあることに気づいた。

「な、なんで……………っ!」

未来が気がつくのと、鎧が青年の目の前に立ち、逆手に持った大剣を今にも振り下ろそうとしていた。

対する青年は目を閉じ、何かを唱えている。

「くそっ!」

それを見て未来は駆け出した。  
いくら知らない人でも、今にも殺されようとしているのを黙って見  
ているわけにもいかない。  
しかし、未来は間に合わなかった。  
鎧は大剣を振り下ろし、振り下ろされた大剣は青年の体を貫いた。  
その瞬間、荒野を闇が覆った。

「！！！」

そこで、未来は目が覚めた。  
ゆっくりと体を起こす。

「今の夢は一体……それに……」

未来は横にあるミニサイズのベッドで寝ているルナを見る。  
そして夢の内容を思い出す。

「なんでカリバーンが………?」

そう、夢で青年が使っていた剣。  
それはカリバーンだった。

何故あの青年がカリバーンを使っていたのか。  
あの鎧はなんなのか。

未来はルナを起こそうと思いい手を伸ばす。しかしできなかつた。なぜなら。

「お兄ちゃん！おは……………よ……………」

カコが部屋に入ってきたからだ。

カコはドアを開けると同時に目に映った光景に固まった。

まだ寝ている少女<sup>ルナ</sup>に手を伸ばしている男性（未来）。

勘違いするには十分な光景だった。

「お前な……………ノックしてから入って何度言えばわか……………る……………ん……………」

未来は注意をしながらカコの方を向く。

未来の目に映ったのは黒いオーラを放っているカコ。その恐ろしさに未来は震えだす。

「あの……………カコさん？何か黒いオーラが出てるんですけど……………」

ゆっくりと、カコが未来に近づいていく。カコが一步進むごとに未来も後ろに下がるが、すぐに壁にたどり着く。

「お兄ちゃんの……………」

カコは顔を上げ、未来を睨みつける。

「バカアアアアアアアア！！！！」

「じぶっ……！！」

カコの右腕が未来の腹に叩き込まれ、未来は地面に倒れる。

「お兄ちゃん！なんでルナちゃんに手を出そうとしたの！？ルナちゃんは……」

そこまで聞こえた所で、未来の意識は途絶えた。

「まったく………なんでこんな目に……」

未来は今、カコ達に追われて六課の隊舎内を逃げ回っている。あの後、目が覚めるとカコの他にのぞみとフェイトまでいた。しかも三人とも黒いオーラを出しながらバリアジャケットを纏い、デバイスを構えた状態で。

それを見て未来は反射的に逃げ出し、背後から撃たれるフォトンシューターやフォトンランサー、ノアで切りかかってくるのぞみをかわし、なんとか撒くことができた。

だがそのせいで朝食を食べることができず、空腹のまま逃げ回っている。

「っ……！」

その時、曲がり角を覗くとのぞみがいた。それを見た未来は近くにあったトイレに逃げ込む。

「未来……。早く出てきなさい」

トイレに隠れて、のぞみの足音が遠ざかるのを待つ。そして足音が遠ざかってしばらくしてから外に出る。周りを見回して誰もいないことを確認する。

「よし、誰もいな……………」

「マスター」

「っ！……………つてルナか」

後ろからの声に未来は距離をとって振り返る。

そして話しかけてきたのがルナだとわかり安堵した。

「どうしたんだ？」

「あ、あの……………その……………」

ルナは顔を赤くしてもじもじしてばかりで未来の問いに答えない。

そして少ししてから口を開いた。

「カコさん達から聞きました……………マスターが私に手を出そうとしたと……………」

「……………は？」

ルナの言葉に未来は固まる。

そんな未来に構わずルナは話を進める。

「私達はデバイスとそのマスターです……………そういうのはいけません……………でも、マスターが言うのなら……………」

ルナはそこで一旦区切り、深呼吸をする。

「ふつつかものですかよろしく願いしますっ」

「……………はっ」

顔を真っ赤に染め、ルナはお辞儀をする。そこで未来は我に帰った。そしてカコ達が自分を追いかけてくる理由に気づいた。カコ達が勘違いしているということに。そしてルナも勘違いしているということに。

「ルナ！お前は勘違いしてる！俺はお前を起こそうとただけだ！そこでカコが部屋に入ってきて勝手に勘違いしたんだよ！だいたい！俺がお前に手を出す訳ないだろ！」

未来は慌ててルナの勘違いを解こうとする。

10分後

「……………という訳だ」

「そ、そうだったんですか。すいません、勘違いしてしまつて」

しばらくの間、説明することでようやく勘違いを解くことができた。ルナは勘違いだとわかると顔を真っ赤にして謝った。

「もういいつて。ところでルナ、真っ黒な鎧って知ってるか？」

未来は夢で見た鎧について尋ねる。

「真つ黒な鎧………ですか？すみません、わかりません」

しかしルナはわからないと言い、申し訳なさそうに謝ってきた。

「そうか………」

「それがどうかしたんですか？」

「あ、いや、何でもない」

未来はそうごまかし、その場から立ち去ろうとする。  
そして振り向いた先には。

「……見いつけたあ」「……」

暗黒のオーラを放つカコ達が出た。

「お兄ちゃん、ルナさんと何をやってたのかな？」

「何もやってねえよ！第一今朝のことだってお前の……」

「……問答無用！」「……」

「ぎゃあああああああ……！！！」

機動六課の隊舎に、未来の叫び声が響いた。

未来の囁託魔導師試験から1ヶ月。

スカリエツティによる事件も起こらず平和な日々が続いていた。

まるで、嵐の前の静けさのようだよ。

第十一話 第97管理外世界（前書き）

すみません、遅れました。

## 第十一話 第97管理外世界

「……ごめん（なさい）……」

カコ達が未来に頭を下げる。

あの後、未来は三人にやられ喋れない中、念話で必死に説明し誤解を解いた。

ちなみに誤解が解けたのは一時間後でその間、未来はやられ続けた。そして今に至るといふ訳だ。

「まあ、もとはといえば俺の行動が原因なんだが……お前らもう少し人の話を聞け。それにカコ。お前はそその早とちりを治せ」

「……はい……」

「わかればい……」

『スターズ分隊、ライトニング分隊、教官陣は至急部隊長室に来て下さい。繰り返します……』

未来の言葉を遮って放送が流れた。

「何か事件でもあったのか……？」

「とりあえず部隊長室に行ってみましょ」

そして未来達は部隊長室へ向かった。

機動六課部隊長室

未来達が部屋に入ると、すでに他のメンバーは来ていた。

「はやて、何かあったのか？」

「そや。まあ、詳しくはこれから話すから未来君達も座ってえな」

はやてに促されて未来達は座った。

そしてはやてが話し始めた。

「ロストロギア関連の出張任務が入ってな。それでこのメンバーで行くことになったんや」

「そのロストロギアはどんな物なの？」

なのはの問いにははやてはモニターを開いた。そこには一本の矛が映っていた。

「ロストロギア『天沼矛』あめのぬほこ。第97管理外世界の日本の神話に伝わっている矛や。詳しい情報はわからないんやけど神話通りなら凄まじい力をもってるのは確かやね」

「あの、その神話ではどういふ風に伝えられているんですか？」

スバルが尋ねるとはやてはいくつかのモニターを開いた。

「天沼矛は日本における世界創世“国産み”の際に使われた矛や。



そこまで言うてはやては再び周りを見回す。

「あ、民間協力者ってもしかして…」

「スバル。少し黙ってようね」

「むぐっ!?!」

「何やってんだ?」

民間協力者について喋ろうとするスバルの口をのぞみがふさぐ。それを見て未来は尋ねるがのぞみはそれを無視してスバルを引きずっていった。

未来がそれを不思議そうに見ていると、車の音が近づいてきた。

「あ、来たみたいやな」

「リ、リムジン!?!」

はやての言葉に車の方を向くと二台のリムジンが近づいてきていた。迎えの車がリムジンだということに未来は驚いた。

「なのは、フェイト、はやて、のぞみ、カコ、久しぶり」

「久しぶり」

そう言いながらリムジンから降りてきたのは金髪の女性と紫色の髪の女性。

アリサとすずかだ。

「アリサちゃん、すずかちゃん、久しぶり〜」

「久しぶり」

「久しぶりやね」

「久しぶりね」

「お久しぶりです」

なのは達が続いてFW陣なども挨拶する中、未来は少し気まずそうにしていた。  
八年前、突然消えてしまったので何と言えいいのかわからないようだ。

「未来君も久しぶり」

「本当にね。八年ぶりかしら？」

「え……………？」

未来はアリサ達が普通に挨拶してきたのに驚いた。

自分が帰ってきたことを知っているかのように挨拶してきたからだ。

「なのはさん達が教えておいたんだよ」

「なるほど」

カコの説明を聞いて未来は納得した。

「アリサ、さすが、久しぶり」

「あんたが消えてからフェイト、のぞみ、カコが大変だったのよ？特にカコがね」

「ははは…。同じことを1ヶ月前にも言われたよ」

「笑い事じゃないんだけどね…。ま、帰ってきたんだし許してあげるわ」

苦笑する未来にアリサはそう言うとりムジンに乗るように促した。そして未来達はアリサとさすがが提供してくれる場所に向かった。

（後書きコーナー）

ルナ  
「どうも、今回から出演することになったルナです。これからよろしく願います」

未来

「父さん……………母さん……………今行くよ……………」（ガクッ）

カコ

「し、心肺停止しちゃった！？未紀！AEDを持ってきて！」

未紀

「は、はい！持ってきたよ！」

ルナ

「マ、マスター！？なんでいきなり死にそうになってるんですか？」

のぞみ

「あ……。それはね、私が激辛の麻婆豆腐とお茶を飲み込ませたからよ……」

ルナ

「あなたは何をしてるんですか！」

カコ

「離れて！AEDを使うよ！」

ピー……………バクンッ！

未来

「う……………」

カコ・未紀・ルナ

「「お兄ちゃん（マスター）！大丈夫ですか！？」」

未来

「あ、ああ……………なんとかな……」

のぞみ

「まったく……………あの程度で死にけるなんてだらしないわね」

未来

「ならお前が食ってみるよ」

のぞみ

「遠慮しとくわ」

未来

「はあ……………それで今回のゲストは誰なんだ？」

のぞみ

「これから呼ぶわ。今回のゲストは魔法少女リリカルなのはSTS、EXから、カナンの相手！神庭シオンよ！」

シオン

「ども、神庭シオンで（ガシッ！）……………はい？」

のぞみ

「さてと、女性に重いつて言ったらどうなるか、身をもって知ってもらいましょうか？みんな、行くわよ！」

女性陣

『はい（わかったわ）！』

シオン

「ちよっ！呼ばれた直後にそれすか！？未来さん！助け……」

のぞみ

「未来？助けたらあんたも同罪よ？」

未来

「悪い……………そいつら相手に助けられる自信がない……」

シオン

「そんなあああああ……！」

ズルズル……バタンツ！

しゅん……

シオン

「うわあああああ！！！」

未来

「！？……なにが起きてんだ……？」

ガチャツ

カコ

「シャイニング！ブレイカー！」

未紀

「ブルーム！クラッシュャー！」

シオン

「ぎゃあああああ！！！」

キリユウ

「ヴェルお兄様！お願いします！」

ヴェル

「はいはい……、展開！眼前の敵を貫け！」

シオン

「こはっ！」



ズバズバズバズバ!

シオン

「ぎゃあああああ!」

?2

「ああ。少しお仕置が必要ね」

シオン

「言葉遣いに反してやることはえげつないいいいい!」

未来

「……………」

パタンッ

未来

「シオン……………頑張れ」

〔数時間後〕

ガチャッ

のぞみ

「ふうっ。今はこれくらいで勘弁してあげるわ」

シオン

「……………」

未来

「お、おい。大丈夫か？」

シオン

「はっ！俺は……」

未来

「のぞみ達にリンチされてたんだが……」

シオン

「途中からの記憶がない……」

未来

「よく生きてたな……」

シオン

「俺もそう思う……」

のぞみ

「これに懲りたら少しは乙女心を理解しなさい」

シオン

「できたら苦労しな……」

のぞみ

「何か言った？」

シオン

「何でもありません！」

カコ・未紀・ルナ

「「「ヘタレだね(ですね)」「」」

のぞみ

「まあいいわ……………あ、あと道場に帰る時はお土産を持って帰ってね」

シオン

「お土産って…何すか?」

のぞみ

「体高200mのエスカルゴと体高888mのエイだけど?」

シオン

「それって絶対別の生物ですよね!?!」

のぞみ

「ちなみに名前はガタノゾ アとデモン ーアよ」

未来

「それってどつちも邪神だよな!道場に送ってどうすんだよ!?!」

のぞみ

「あ、それはちょっと待って……………ヒツポ ト星人」

ヒツポ ト星人

「……………」

シオン

「ちよつ、何すか!?!このカプセル!何か煙が出てきてるんですけど!」

のぞみ

「それはあんたをタール像にする為のやつよ。ちなみにタール像のまま道場に帰すから」

シオン

「ゲストの扱い酷いつすね!？」

のぞみ

「大丈夫よ。アリサなら戻せるから。じゃね」

シオン

「ぎゃあああああ!」

のぞみ

「さてと、シオンもタール像になったことだしさっきの質問に答えるわね。道場に送ったのはシオンに調理させたら面白そうだからよ。調理できなくてもタカトなら倒せそうだしね」

未来

「……………確かにタカトなら倒せるかもな……………」

のぞみ

「それじゃあそろそろお終いに……………」

クレイ

「ちよつと待ってくれ。タカトに送りたいものがあるんだよ」

未来

「送りたいもの?何を送るんだ?」

クレイ

「俺の畑で作った野菜と材料から作り方までこだわりぬいたチョコケーキだ」

のぞみ

「ふうん。まあいいわ。送っとくわね。それじゃあ」

一同

『また次回』

## 第十二話 終わる平和（前編）

スカリエツティアジト

「ドクター、六課に動きがありました。カリバーンのマスターも一緒です」

「ほう。動き、とは？」

「別世界への出張任務です。ロストログア『天沼矛』の回収任務のようです」

ウーノの言葉にスカリエツティは笑みを浮かべる。

「天沼矛………国産みか。いいね、僕達も行こうか。七型も何機か連れて行こうか」

「わかりました」

ウーノはそう言って通信を切った。

「国産み………どれほどの力を持っているのか、楽しみだよ」

スカリエツティはモニターに映る天沼矛を見ながらそう呟いた。

第97管理外世界

サーチャーをまき終わった未来達はアリサ達の用意したコテージにてバーベキューをし、銭湯に行った。

そして今は夜の10時。

アリサとすずかはお酒、それ以外はお茶やジュースを飲みながら喋

っていた。

「あんたが消えて大変だったんだからね!!」

「首絞めるな!それにその話はさっきも聞いた!お前酔ってるだろ!?!」

「もう消えんじゃないわよ!?!」

「ごはっ!のぞみ!お前は酔ってないだろ!ボディブローを決めるな!」

「「うっさい!」」

「がはっ!」

「お兄ちゃん、大丈夫かな?」

「未来君なら大丈夫だよ」

アリサとのぞみに絡まれている未来を見て咳くカコにすずかが答える。

そんな楽しい時間はしばらく続き、絶えることのない笑い声と時々悲鳴が辺りに響いた。

そして深夜2時。

既にアリサとすずかは眠りにつき、六課メンバーは交代で監視をし

ていた。

現在見張りをしているのは未来とカコの二人だ

「カコ、叔父さん達は元気か？」

モニターをチエックしながら未来はカコに尋ねる。

「うん、お兄ちゃんがいなくなった時は悲しそうにしてたけどお兄ちゃんが帰ってきた今は元気だよ。今はイギリスに出張中」

「そうか……………挨拶しとこうと思ってたんだがな」

「それはいつでも出来るよ。……………それよりも」

カコはそこで一旦言葉を区切り未来にもたれかかった。

「お兄ちゃんが帰ってきて……………本当に良かった……………」

「……………」

未来は黙ってモニターを見る。

そんな未来に構わずカコは言葉を続ける。

「お兄ちゃん……………もう、どこにも行かないでね……………」

「……………ああ」

未来が答えた瞬間、アラームが鳴った。

それはロストログア発見のアラームとは違い。

「ガジェット………？」

ガジェット反応が確認された。

ガジェットが現れた場所は三ヶ所。

一つは海上。

一つは森。

一つは今使われていない廃工場。

しかも出現したガジェットの全てが七型だった。

「カコ！すぐにみんなを起こしてこい！」

「うん、わかった！」

未来の指示にカコはみんなを起こす為にコテージへ向かった。

コテージの前、先程バーベキューを行った所に六課メンバーは並んでいた。

すでに全員がバリアジャケットを纏っている。

「ガジェットが現れたのは三ヶ所。その中に天沼矛がある可能性が高い。それで天沼矛を発見したら天沼矛の回収を優先してや。スターズ1、ライトニング1は海上、スターズ2、3、4、ライトニング2、3、4は森、教官陣は廃工場を頼むで。うちはここで指示、リイン、シャマルはうちの補佐や。リミッターを解除してもかまへん。機動六課、行くで！」

『はい！』

そうして未来達はそれぞれの持ち場へ向かった。

海上

なのはとフェイトが着いた時、そこには10機のガジェット七型がいた。

その内5機は接近戦型、残りは遠距離戦型である。

「「！」「」

ガジェットは二人の姿を確認すると同時に胸部のメーサー砲を放った。

二人は左右に分かれてそれを避け、スフィアを展開する。

「「シユート！/ファイアッ！」」

放たれたスフィアは的確にガジェットに命中するが傷をつけることは出来なかった。

「それなら！」

それを見たなのはカートリッジをロードする。

『Cross fire』

同時にレイジングハートの前に現れるスフィア。

しかしそれは普段と違いどんどん圧縮され、遂には普通のスフィアの半分ほどになった。

「シユート！」

そして放たれる極細の砲撃。それは七型の堅固な装甲を貫き、撃破した。

だが、その間に残りの接近戦型4機が距離を詰めてきた。振り下ろされる接近戦型の右腕をなのは左に飛んで避ける。

「はあっ！」

接近戦型の左からフェイトがバルディッシュを振り下ろす。

バルディッシュは黄色の魔力刃を持つ鎌　ハーケンフォームに変わっている。

しかしその一撃は接近戦型の左腕により弾かれる。

接近戦型はそのまま体をひねりその尾をフェイトに叩きつける。

「くっ！」

フェイトはそれをバルディッシュで受け止めるがそのまま吹き飛ばされるが、すぐに体勢を整える。

そこになのはが飛んでくる。

「リミット有りだとキツイね……」

「うん……」

なのはの言葉にフェイトは頷く。

それと同時に接近戦型4機が近づいてきた。

なのはとフェイトは咄嗟にスフィアを展開、放つが接近戦型はそれを回避、二人に近づいた。

そして目の部分から放たれた青白い光は二人を拘束した。

「「バインド!?」」

ガジェットがバインドを使ったことに驚く二人。  
その間に接近戦型は二人から距離をとる。そして九機全てのガジエ  
ットがその武装を二人に向けた。

「「!」」

それに気づいた二人はバインドを破壊しようとするが既にガジエ  
ットの全ての武装は放たれ、二人に直撃。  
二人は爆煙に包まれた。

森

「はあああああ!」

声と共にレヴァンティンを振り下ろすシグナム。

しかしその斬撃は接近戦型の堅固な装甲に傷をつけることはでき  
たが切り裂くことはできない。

そして横なぎに振るわれる接近戦型の右腕。

シグナムはそれを後ろに飛んで避け、レヴァンティンを構えなおす。  
その隙に後ろからシグナムに襲いかかる接近戦型。

「っ!」

それに気づいたシグナムは振り向きざまにレヴァンティンを振るお  
うとするがすでに接近戦型は右腕を振り下ろす寸前。  
シグナムはダメージを覚悟した。

「ファントムブレイザー!」

瞬間。

横から飛んできた橙色の砲撃が接近戦型を吹き飛ばした。  
シグナムは砲撃を放った人物　ティアナの方を向く。

「すまん。助かった」

「いえ。それよりもどうしますか？あの装甲はそう簡単には破れませんよ」

「…………私とヴィータがやる。お前達は援護を頼む」

「はい」

ティアナが頷くのを確認し、シグナムは別の接近戦型と交戦中のヴィータへて飛んだ。

「はっ！」

そして接近戦型を吹き飛ばし、ヴィータの隣に並んだ。

「ヴィータ、リミットを解くぞ。このままでは埒があかん」

「…………わかった」

シグナムの言葉にヴィータは頷き、アイゼンを接近戦型に向ける。

「アイゼン！」

『Ja! Raketenform!』

ヴィータの言葉にアイゼンはカートリッジをロード、ラケーテンフ  
ォームへと変わる。

そしてアイゼンの噴射口からロケットのように推進剤を噴射し、回  
転し始めた。

「ラケーテン！」

叫ぶと同時にヴィータは回転を止め、接近戦型へと突っ込む。

「ハンマー！」

振り下ろされるアイゼン。

推進剤の噴射と回転の遠心力が合わさり、爆発的な打撃力が備わっ  
たその一撃は接近戦型の堅固な装甲を貫き、撃破した。

「ふっ。私も負けてられん、な！」

シグナムはそう言うと同時に飛んできたレーザーを避け、レーザー  
を放った遠距離戦型へと飛ぶ。

それに対し遠距離戦型は近づけさせまいと全ての武装を放つがシグ  
ナムはそれを紙一重で回避し、遠距離戦型との距離を詰めていく。

「紫電」

『Explosion』

シグナムはレヴァンティンを鞘に納めたままカートリッジをロード、  
そして遠距離戦型の懐へと潜り込む。

「一閃！」

叫ぶと同時にシグナムはレヴァンティンを抜刀、遠距離戦型へと炎を纏った刃を振り上げる。  
その斬撃は遠距離戦型を一太刀で両断した。

「副隊長達すごいね〜」

「スバル！余所見しない！」

シグナム達が一撃でガジェットを撃破したのを見て呟くスバルにテイアナが怒鳴る。

二人の後ろにはブリストをにかけているキャロとキャロを守る位置にいるエリオがいる。

スバルとテイアナのやりとりに二人は苦笑する。

次の瞬間。

「……………え？」

キャロの背後に生えていた木が切り裂かれた。

切り裂いたのはいつの間にか移動していた接近戦型。

エリオは咄嗟にキャロと接近戦型の間に入り込み、接近戦型へとストラーダを振るう。

しかしその一撃はいとも簡単に弾かれ、接近戦型はその右腕を振り上げる。

それに気づいたシグナムとヴィータは助けようとするがそれを別の接近戦型が邪魔をする。

今にも振り下ろされようとしている接近戦型の右腕。

それを防ごうにもストラーダは弾かれたばかりで間に合わない。

そしてその右腕が

「っ！」

振り下ろされた。

廃工場

未来達が到着した時、ガジェット達は何かを探すかのような動きをしていた。

「どうやらアタリらしいな。リミット解いていくぞ」

「うん」

「わかったわ」

未来の言葉に二人は頷き、三人は駆け出した。

それに気づいたガジェットはこちらに向かってくる。

ガジェットの数は十二機。接近戦型が八機、遠距離戦型が四機だ。

「カコは後方支援を頼む。のぞみ、行くぞ！」

未来の言葉を聞き、カコは止まり、未来とのぞみはさらにスピードを上げる。

『Load cartridge』

「エクリプス！」

カコはすぐさまガイアを構えカートリッジをロード、赤色の魔力球が現れる。

「バスター！」

放たれる赤色の砲撃。

それは未来とのぞみの間を通り抜け、遠距離戦型二機の胴体を抉った。

それを見た他のガジェットはカコを狙い、近づこうとする。しかし。

『Load cartridge』

「俺（私）達を忘れんなよ（ないでよ）！」

「はあっ！」

「クラッシュインパクト！」

接近戦型の前に未来とのぞみが現れ、未来はメビウスリングとカリバーンで両断、のぞみはガントレットフォームのノアで叩き潰した。

「フォトンシューター！」

カコの周りに展開されるスフィア。

その数は軽く百を越えている。

「シュート！」

一斉に放たれるスフィア。

それわガジェットを撃破することはできないが動きを止めることができる。

その間に未来とカコの二人はガジェット達の後ろに回り、未来はカ

リバーンで貫き、のぞみは地面に叩きつけ破壊した。  
発生する爆煙。

それにより未来達の姿は見えなくなり、遠距離戦型は攻撃できなくなる。

そして煙の中から何かが飛び上がる。

遠距離戦型はその飛び上がった何かへとミサイルを放った。

「エクリプスバスター！」

しかし飛び上がった人物　カコが放った砲撃によりミサイルは撃ち落とされた。

そしてその砲撃はそのまま遠距離戦型へと突き進み、破壊した。

「お兄ちゃん、のぞみさん、大丈夫？」

カコは宙に浮かんだまま煙の中にいる二人へ呼びかける。  
やがて煙は晴れ、そこには残った接近戦型全てを破壊した二人がいた。

「カコ、ちょっとこっち来い」

「何？」

未来に呼ばれ、カコは二人の所へと降りていく。  
そして見た。

地面に穴が開き、その中にある古びた転移ポートを。

「お兄ちゃん、これって……」

「恐らく、いや、十中八九この先に天沼矛があるだろうな」

「はやてちゃんに伝えて、行く？」

のぞみの問いに未来は頷いた。

そして三人ははやてに通信し、この事を伝えて転移ポートに乗った。

「ここに天沼矛があるのか…？」

未来達が着いたのはかなり広い空間。

しかし少し離れた所に社が建っている以外はなにもない。

「人がここに来るなんて何百年ぶりかしら？」

「「「！？」」」

突然聞こえてきた声に未来達は驚き、デバイスを構える。

「誰だ！」

未来が叫ぶと同時に社の扉が開いた。

そこには一本の矛があり、その上には30cmほどの和服を纏った黒髪の少女がいた。

「天沼矛の管制人格、杏よ。あなた達は何者かしら？」

未来達は声の主が管制人格だとわかり、構えるのを止める。

「俺は時空管理局古代遺物管理部機動六課の囑託魔導師、日比野未  
来だ」

「同じく機動六課の教官の日比野カコです」

「機動六課教官、相原のぞみよ」

三人の言葉に杏は少し考え込む。

「時空管理局？私が寝ている間に出来た新しい組織かしら？……  
まあいいわ。それで、その管理局が何の用………ってあら？」

杏の言葉が止まり、その視線はある一点に注がれる。

「それってカリバーンよね？ルナもいるの？」

「いますけど……」

杏の言葉にカリバーンの中からルナが出てくる。

「うわあ！ルナ、久しぶりね！元気だった？」

「え？あ、あの……」

杏はルナを見て嬉しそうに話しかけてくる。

ルナはそれに戸惑っている。

「覚えてない？うん………あ！じゃあこれでどっかしら？早とち  
りのルナちゃん？」

「え？……あ！杏さん？久しぶりですね！」

「本当にね。ところでその人がルナちゃんのマスター？」

杏が未来を手で示して尋ねる。

それにルナは頷いた。

「はい！私のマスターの日比野未来さんです！」

「ふふっ、さっき本人が名乗ってたから知ってるわよ」

「はうあっ！そ、そうでした……」

杏に言われてルナは顔を赤くして俯く。

そんなルナを見て杏は微笑み、未来へと近づく。

「未来さん、ルナちゃんが迷惑かけてないかしら？」

「え？別にかけてないが……」

「そう？意外ね。あの子毎朝寝ぼけるとかなりべったりになったり早とちりしたりしつただけど……」

「あ、それはある」

「マスター！ひどいですよ！」

杏の言葉に未来は頷き、それにルナが怒る。

「確かにルナちゃんって毎日朝は未来にくっついてるわね」

「の、のぞみさんまで……」

「うん、それに早とちりだし」

「お前は人の事を言えないだろ」

話に乗ってくるカコに未来が突っ込む。

それにみんなが笑った。

「お兄ちゃんひどい！それに笑わないでよ！」

「ふふっ、ごめんなさいね。それで、未来さん達は何のためにここに来たのかしら？」

杏に言われて、未来達は任務の内容を説明した。

「そうなの？でもごめんなさいね。私は新しいマスターが現れるまではここを動く気はないの」

「そうか………わかった。はやて達は俺達が説得しておくよ」

それを聞いて杏は未来達に礼を言った。

そして未来達は転移ポートへと向かい、杏は社へと戻った。  
その時。

「天沼矛………もらおうか」

突然社の側へ男が現れた。

全身を黒のバリアジャケットで包み、黒い剣を右腕に握っている。  
スカリエッティだ。

スカリエッティは天沼矛を左手で握り持ち上げようとしたが

「私かマスターが認めた人じゃないと天沼矛は使うどころか持ち上げることもできないわよ？」

杏がそう言うと同時に天沼矛に結界が張られ、スカリエッティの腕を弾いた。

「くっ！………ならカリバーンの方をもらおうか」

スカリエッティはそう言って剣　テュルフィングを未来達へと向けた。

それに対し未来達もデバイスを構え。

同時に駆け出した。

第十二話 終わる平和（後編）（前書き）

遅れてすみません！

次回はなるべく早く投稿します！

## 第十二話 終わる平和（後編）

（海上）

なのは達がいた場所には今、爆発による煙が立ちこめている。

それを見てガジェット達は撃墜したと判断、他の場所の援護に向かおうとする。

だが、ガジェット達は煙の中から誰も落ちてこない事に気づかなかった。

「エクセリオン！バスター！」

瞬間。

煙の中から桃色の砲撃が放たれた。

それは援護に向かおうとするガジェット達を捉え。

ほとんどのガジェットを破壊した。砲撃を回避したガジェットはすぐさま砲撃が飛んできた方向を向く。

そこにはエクセリオンモードとなったレイジングハートを構えたなのは”だけ”がいた。

『S o n i c m o v e』

続けてデバイスの音声が流れる。

瞬間、残ったガジェット達は両断された。

ガジェットを両断したのはフェイト。

ガジェット達の後ろでザンバーフォームのバルディッシュを振り切った体勢でいる。

「フェイトちゃん！他の場所の援護に向かおう！」

「うん！」

なのはの言葉にフェイトは頷き、二人はその場から飛び去った。

（森）

「はああああああ！！！」

接近戦型の右腕がエリオを切り裂こうとした瞬間、横から飛んできた拳により接近戦型は吹き飛び、爆発した。

拳を繰り出したのはスバル。

その瞳は緑から金色に変わっている。

戦闘機人モードである。

「よしっ！これなら通る！」

スバルのIS 『振動破砕』

対象の物体に振動波を送り、共振現象を発生させることによって外装や装甲だけでなく内部まで破壊する能力である。

そしてこの能力はガジェット七型に対しても有効であり、破壊することができる。

スバルの攻撃が七型に通ったのを見て、ティアナは瞬時に戦術を考えた。

「スバル！エリオ！キャロ！私達もやるわよ！」

そしてFW陣もガジェットの殲滅戦に加わった。

（天沼矛の社）

「はあっ！」

最初にスカリエッティとぶつかったのはのぞみ。  
のぞみは接近すると次々と左右の拳による突きを繰り返す。  
しかしスカリエッティはその全てを少し体を動かすだけでかわす。

『S o n i c m o v e』

「はっ！」

スカリエッティの後ろに回り、未来はカリバーンを付加させたメビウスリングを横なぎに振るう。

しかしスカリエッティを切り裂く直前、スカリエッティが消える。

「遅いよ」

「っ！」

背後から聞こえてきた声に未来は反射的に上に飛ぶ。

瞬間、未来の頭部があった場所をテュルフィングが通り過ぎる。

そして未来は空中で振り向き、メビウスリングを振り下ろす！

だがその斬撃はスカリエッティに易々と受け止められ、弾かれた。

そして横なぎに振るわれるテュルフィング。

未来はそれをバックステップで避ける。

「がっ！？」

しかし、避けた筈の斬撃は未来を切り裂いた。

そのままスカリエッティは未来を斬りつけていく。

未来はそれを全てメビウスリングで防ぐが、未来の体には次々と傷

が増えていく。

「くっ……」

「カリバンのマスターというのはその程度なのかい？」

スカリエッティはそう言うなり斬撃の速度をだんだんと上げていく。上がり始めた時はまだ防げていたが、少しずつ防げない斬撃が増えていく。

「フォトンシューター！シュート！」

上や横から飛んでくるスファイア。

スカリエッティはそれをバックステップで避ける。

「エクリプス！バスター！」

スカリエッティが未来から離れると同時に放たれる砲撃。それはスカリエッティへとまっすぐ飛んでいく。

「ふっ」

しかしその砲撃もスカリエッティが振るったテュルフィングにより切り裂かれた。

「その程度の砲撃で僕を倒せると思ってるのかい？」

「思っていないわよ！」

『Crash impact』

背後から返ってきた返答にスカリエッツィは振り向く。  
そこには右腕を引き、殴る直前ののぞみがいた。

「はあっ！」

突き出される拳。

しかしスカリエッツィはテュルフィングの腹でその一撃を軽く受け止めた。

「邪魔だよ」

スカリエッツィはそう言い、のぞみの鳩尾に膝を叩き込む。  
その一撃はのぞみを吹き飛ばし、壁にめり込ませた。

そしてスカリエッツィはのぞみにテュルフィングを向ける。  
テュルフィングの切っ先に収束していく魔力。

砲撃だ。

それを見てカコはガイアをスカリエッツィに向ける。  
が、スフィアが展開される前に砲撃は放たれた。

砲撃はのぞみへと突き進み、直撃。

周囲を爆煙が覆う。

そして爆煙の中からのぞみが落下。

地面に落ち、動かなくなる。

「のぞみさん！」

『大丈夫、気絶しているだけです』

ガイアの言葉にカコは安堵する。

「人の心配をしている場合かい？」

「!!!」

背後から聞こえてきた声に、カコは咄嗟に左に飛んだ。

「逃がさないよ」

瞬間、右足に激痛が走る。

テュルフィングで貫かれたのだ。

あまりの痛みに、カコの動きが止まる。

その隙にスカリエッティはカコの長い髪を掴み、テュルフィングを引き抜いた。

引き抜いた際に、右足から鮮血が飛び散る。

スカリエッティはテュルフィングについた血を振り払い、カコの髪を離す。

そしてカコを蹴り飛ばし、のぞみと同じように地面にめり込ませる。スカリエッティはテュルフィングを振り上げ、再び切っ先に魔力を収束させる。

「これで邪魔者は消え…」

「させるかつ！」

『Sonic move』

テュルフィングを振り下ろそうとするスカリエッティの前に未来が割り込む。

『Load cartridge』

「はっ！」

カートリッジをロードし、魔力を纏わせたメビウスリングを横なぎに振るう。

それにスカリエッティは収束させていた魔力をテュルフィングに纏わせ、振り下ろす。

激突するメビウスリングとテュルフィング。

二人の力は拮抗し、しかしすぐにスカリエッティが押し勝ち未来は吹き飛ばされる。

そしてスカリエッティはテュルフィングを未来に向ける。

瞬間、テュルフィングの切っ先からスファイアが連射される。

「くっ……………」

未来は吹き飛ばされながらもメビウスリングを振るい、スファイアを切り落としていく。

「がっ！」

が、切り落とせなかったスファイアが先程スカリエッティに斬られた所に当たる。

その衝撃で傷からさらに血が流れる。

それでも未来は耐え、スカリエッティへと向かう。

「そろそろお終いにしようか」

向かってくる未来に対してスカリエッティはそう言い、一瞬で未来との距離を詰め、テュルフィングを二度、振り下ろす。

未来の体はX字に切り裂かれ、返り血がスカリエッティの頬にかかる。

そしてスカリエツティは後ろ回し蹴りを未来へと叩き込み、地面へと叩きつけた。

血だらけになりながらも未来はメビウスリングを支えにして立ち上がる。

そんな未来にスカリエツティはゆっくりと歩み寄った。

「これで……………終わりだよ」

スカリエツティはそう言い、テュルフィングを突き出した。

未来にはそれがスローモーションで見えた。

ゆっくりと迫り来るテュルフィング。

それに未来は死を覚悟した。

その時、未来を庇うように誰かがテュルフィングの進路上に割り込んだ。

テュルフィングはその人物の左脇腹を貫き、未来に届く前に静止した。

未来は自分をを庇った人物を見て、啞然とする。

「あ……………あ……………ああ……………」

「お……………兄……………ちゃん……………だい……………じょ……………うぶ……………?」



ンの中でルナはそう感じた。

瞬間、ルナの頭にヴィジョンが映った。愛する者を殺され、怒りに我を忘れて大剣を振るう青年のヴィジョン。

ルナは思い出した。

それが自分が前のマスターだということ。

そしてその後起こったことも。

「マスター！怒りに、負の感情に身を任せてはいけません！心を闇に支配されてしまいます！」

ルナは懸命に声をかけるが、怒りに我を忘れた未来には届かない。

「マスター！このままでは……」

『魔鎧装、展開』

ルナの言葉を遮ってメビウスリングから 正確にはメビウスリングに付加しているカリバーンから声が響いた。その瞬間、未来の意識は闇に堕ちた。

第十三話 暴走（前書き）

かなり短いです。

## 第十三話 暴走

『魔鎧装、展開』

その言葉が響いた瞬間、未来の顔に、腕に、体に、バリアジャケットの上からでも見える赤い紋様が浮かんだ。同時に、未来の目も赤く輝きだす。

「あああああああああああああ！！！！」

未来は叫び、メビウスリングを横なぎに振るった。それにより発生した衝撃波がスカリエッティを吹き飛ばす。

「うおおおおおおお！！！！」

再び叫び、未来はメビウスリングを掲げる。

瞬間、メビウスリングに付加されたカリバーンが闇となり未来の体を覆う。

闇は未来の体を覆うと同時に変化し、鎧となった。

頭部には五本の角。

左腕には楕円形の盾。

右腕の甲には二本の鉤爪。

両肩には角が生えた盾。そして黒に赤い紋様が描かれている全身。その姿はまさに暗黒の鎧。魔鎧装であった。

「……………」

魔鎧装。未来は闇に染まったメビウスリングの切っ先をスカリエッティに向け、黒い電撃を放つ。

放たれた電撃はスカリエッツィへと突き進む。

それをスカリエッツィはテュルフィングを一振りし、かき消す。瞬間、スカリエッツィの体が突然吹き飛んだ。

スカリエッツィはすぐに体勢を整え、さっきまで自分がいた場所を見る。

そこにはメビウスリングを振り切った状態で未来が立っていた。

「ほお………僕が気づかない程の速さで動くとはね………その力、ますます欲しくなったよ！」

スカリエッツィはそう言うとテュルフィングを勢い良く振り上げる。しかし、そこでスカリエッツィの動きが止まった。

「む………どうやら今の一撃でどこか壊れたみたいだね………仕方がない、ここは引くでしょう」

そう呟き、スカリエッツィは転移魔法陣を展開する。

それを見て未来はスカリエッツィの目の前に瞬時に移動、メビウスリングを振りかぶる。

「じゃあね」

しかし、メビウスリングが切り裂く直前でスカリエッツィは消えた。スカリエッツィが転移したのを見て未来も転移魔法陣を展開する。

「……………お……………にい……………ちゃん……………」

背後から聞こえてくる声に未来は振り向く。

そこには腹部を貫かれ、地面に倒れながらも未来に手を伸ばすカコがいた。

「……………」

「行か……………ないで……………おにい……………ちゃん……………」

だんだんと意識が薄れていく中、カコは涙を流しながら未来に手を伸ばす。

それを未来は無言で見つめる。

「行か……………ない……………で……………！」

カコは声を大きくし、再び手を伸ばす。  
しかし。

その願いは未来には届かず。

未来は轉移し、その場から消えた。

「お……………に……………い……………ちゃ……………」

それと同時にカコは意識を失い、地面に伏した。

数分後、駆けつけたなのは達は傷ついたのでぞみとカコを発見。  
のぞみは命に別状は無かったが、カコはかなり危険な状態であり、  
すぐに運ばれた。

## 第十四話 救う為に（前書き）

前回の更新から1ヶ月以上経ってしまい申し訳ありません！  
スランプになってしまい、全く執筆作業ができませんでした…。  
それでは、どうぞ！

## 第十四話 救う為に

何もない、全てが漆黒に染まった闇の空間。  
何の音も聞こえず。

一筋の光もない。  
そんな空間がどこまでも広がっている。

「ここ……どこ……？」

その中心に立つ女性　カコはそう呟きながら周りを見回す。  
しかし、見えるのはどこまでも続く闇だけ。  
そんな中、カコは何かを見つけた。

「え……？　あれって……」

その正体に気づいたカコはすぐに駆け出した。  
段々と距離は縮まっていき、その姿ははっきりと見えるようになる。

「お兄ちゃん！」

カコの目に映ったのは大好きな。  
何よりも大切な。

愛しい、本当に愛しい従兄の姿。

「お兄ちゃん！」

カコは再び叫び。  
従兄へと。

未来へと駆けていく。

しかし、未来が振り向くことはなく。  
逆にカコから離れていく。

「待って！ お兄ちゃん！」

カコは叫びながら未来へと必死に手を伸ばす。  
しかし、その手が未来に届くことはなく、すでに未来との距離はか  
なり開いている。

「お兄ちゃん！ もう、もう置いてかないで！」

カコは走りながら叫び続ける。  
もう、未来と離れたくないから。

「お兄ちゃん！ 待ってよ！ お兄ちゃん……！」

涙で視界がぼやける。  
それでもカコは走るのを止めない。

「お兄ちゃん！」

お兄ちゃん……！

待ってよ……！

お兄ちゃん………！

「お兄ちゃん!!」

一際大きく叫んだ所で、カコは周りの景色が変わっていることに気づいた。

自分の視界に映るのは白い天井と、天井へ向かい伸びている自身の右腕。

周りを見ると、ここが医務室　いや、病院だということがわかる。そして自分は何故かベッドに横になっている。

「お兄ちゃんは……っ!？」

兄を探そうと、カコは体を起こそうとする。

しかし、左脇腹に激痛が走りベッドに倒れてしまう。

「なんで…?」

その原因を知ろうと、カコは頭を起こして自分の体を見る。

激痛の走った左脇腹は服に隠れて見えないが、軽く触ってみると服の上からでも包帯が巻かれているのがわかる。

そして右足もギプスで固定され、包帯が巻かれている。

何故こんな状態なのか疑問に思っていると、病室の扉が開き、なのは、フェイト、はやて、のぞみ、シャルが入ってきた。

「カコちゃん、起きた?　って、まだ大人しくしてなきゃ駄目よ!」

カコが体を起こそうとしているのを見て、シャルが駆け寄り、カコを止める。

少し不服そうにしながら再びベッドに寝たカコにはやて達が苦笑しながら近づく。

「その様子なら体以外は平気みたいやね。心配したんやで？ カコちゃん、十日間も眠ったままやったんやから」

「十日間も……」

はやての言葉を聞いて、カコが咳く。

「ところで起きたばつかで悪いんやけど、カコちゃんに聞きたいことがあるんや。ええかな？」

「？ はい、いいですよ」

はやての言葉に、カコは首を傾げながらも頷く。  
そしてのぞみがカコに尋ねた。

「私が気絶した後、なにがあつたの？ なのはちゃん達が駆けつけた時には未来はいなかつたみたいだし……」

「お兄ちゃんがない？……！！」

のぞみの言葉にカコは首を傾げるが、すぐに思い出した。  
天沼矛の社であつたことを。

そしてカコはその時のことをなのは達に話した。  
のぞみが気絶した後、自分も右足を刺され撃墜されたこと。  
未来がスカリエツティに刺されそうになり、それを庇って自分が刺されたこと。

未来が我を忘れてスカリエツティに切りかかったこと。

我を忘れた未来を黒い霧のようなものが覆い、それが鎧に変わったこと。

そして……未来が自分を見捨てて転移したことを。

「鎧って……もしかして……」

「何か知ってるんですか！？　なのはさん！」

なのはの言葉に、カコが反応する。

なのははモニターを展開、操作しカコの前に映像を映す。そこには大量のガジェットが映っていた。

「これは今から八日前、私達が出張任務から帰ってきて、カコちゃんが海鳴病院から聖王病院に移った次の日に、大量のガジェットが第57観測指定世界の観測基地の近くで確認されたの。すぐに動けるのが私達だけだったからすぐに向かったんだけど……」

そこでモニターに映っている映像が切り替わる。

そこには大量のガジェットの残骸が映っていた。稼動しているものは一機もない。

「私達が到着した時にはもうこの通り、破壊されていたの。それで基地の映像を確認してみても、映ってたのが……」

再びモニターの映像が切り替わる。

そこには三又の槍を振るい、一方的に大量のガジェットを殲滅している漆黒の鎧が映っていた。

「お兄ちゃん！？」

「やっぱり……」

鎧に対するカコの反応を見て、なのははそう呟く。

「この鎧　未来君はこの後もガジェットが出現する度に確認されてるの。しかも話を聞こうとした局員に対しても攻撃してる。幸いなのはその攻撃が非殺傷設定だったこと。だから傷害罪はないけど公務執行妨害は適用される。でも…」

そこで再びモニターが切り替わる。

そこには頭を抑え苦しんでいる未来と近づこうとしている局員が映っていた。

そして突然未来が槍　メビウスリングを振るい、局員の1mほど前にかなり深い溝ができる。

その斬撃が少し局員をかすったのだろうか、局員の脚のバリアジャケットが切れ、そこから一筋の赤い線が見えている。

その後未来は尻餅をつく局員に目もくれずに転移した。

「これは昨日の映像。見てわかるように、この攻撃は殺傷設定だったの。恐らく未来君はかろうじて残っている自我で非殺傷設定にしていた。そしてその自我ももうほとんど残ってない。早く助けないと…」

「取り返しのつかないことになる……ですよね？」

なのはの言葉を、カコが続ける。

それになのははコクリと頷いた。

「幸いこの件は六課の担当になってる。だから、取り返しつかないことになる前に、未来君を助けるよ」

なのはがそう言うと、その場にいた全員が頷いた。それと同時に、はやてに通信が入る。

「グリフィス君？ どないしたん？」

「はい、今日から六課に出向となる方々が到着しました。なるべく早くお戻り下さい」

「ん、なら今から戻るわ」

はやてはそう言つと通信を切つた。  
そこにカコが尋ねる。

「あの、出向つて…？」

「ああ、スカリエツティだけでなく未来君も捕まえなあかんことになつてしもたやろ？ それにカコちゃんもその怪我じゃしばらくは戦えないへん。それで他の部隊から何人かに来てもらうことになつたんや」

「はあ……よく上の人が何も言いませんでしたね？」

「そこはまあクロノ君達が頑張ってくれたんや。それに向こうの方から『六課にきたい』って言ってくれてたからな」

「そうですか」

「あ、なんならカコちゃんも一緒に来るか？」

「え？ 大丈夫なんですか？」

はやての提案に、カコが尋ねる。

「大丈夫やよ。目も覚めたし、後は六課でも治療できるからな。ただ車椅子で過ごしてもらうことになるんやけどええかな？」

「はい、いいですよ」

「そんなら早速向かおか」

はやてはそう言うと、車椅子を取りに行った。

（機動六課）

時間的にはこれから午後の訓練が始まるという所。訓練場にFWメンバーが横に並び、その前には出向人員と教官陣がいる。

少し離れた所ではカコが車椅子に座りながらこれを見ている。

「本日付けで機動六課に配属されました陸士108部隊のギンガ・ナカジマ准陸尉です。よろしく願います」

「本日付けで機動六課に配属されました航空武装隊第1007部隊のキリュウ・ウィルレイン二等空尉です。よろしく願います」

「本日付けで機動六課に配属されました航空武装隊第1065部隊のサラ・ウィルレイン三等空尉です。よろしく願います」

「本日付けで機動六課に配属されました航空武装隊第1065部隊のセラ・ウィルレイン三等空尉です。よろしく願います」

「本日付けで機動六課に配属されました本局技術開発部、試験魔導師のセレナ・マーテリアです。よろしく願います」

「あの、試験魔導師ってなんですか？」

それぞれの自己紹介が終わった所でエリオが尋ねる。

「簡単に言うと技術開発部で開発された新型のデバイスやカートリッジシステムのテストをする魔導師ですね」

それにセレナはそう答える。

エリオが礼を言った所でなのはが話し出す。

「それじゃあ午後の訓練を始めるよ。いつも通りスバルはヴィータ副隊長と、ティアナは私と、エリオとキャロはフェイト隊長とだね。ギンガはスバルと一緒にヴィータ副隊長の所で。のぞみ教官はキリュウ二等空尉達に隊舎の方を案内してきて下さい」

『はい！』

そしてFW陣は訓練場に、のぞみ達は隊舎へと向かっていった。

〈機動六課 隊舎 食堂〉

隊舎内の案内が終わったのぞみ達は、キリュウ達がまだ昼食を食べていないということで食堂で遅めの昼食をとっていた。

「そういえば、キリュウさん達はどうして六課への出向を希望したんですか？」

一緒に遅めの昼食をとっていたカコがキリユウ達に尋ねる。

「私は未来様や皆様に久しぶりに会いたかったのよ」

「私もキリユウお姉ちゃんと同じ理由です」

「私はキリユウ姉とセラが行くって言ったからよ」

その問いにウイルレイ三姉妹はそう答え。

「私は未来様に会いたかったからです」

セレナはそう答えた。

「え？ セレナさんってお兄ちゃんの事知ってるんですか？」

セレナの言葉に、カコがさらに尋ねる。

のぞみ達もセレナを見ている。

「はい、幼い時はよく遊んでいたのよ」

「あれ？ でも私やカコちゃんと会った事無いよね？ 私達もちっちゃい時はよく未来と遊んでたんだけど」

「それは私の両親と未来様の両親が知り合いで、未来様を連れてよく私の家に遊びに来ていたからですね。だから会えなかつたんだと思います」

「あの、セレナさんって未来さんとどういう仲なんですか？」

「どづいつ仲、と言われましても…」

セラの問いにセレナは少し悩んだ後、急に頬を赤く染めた。そして口を開いた。

「キスをした仲……ですね。五回程」

ピシッ

セレナが答えた瞬間、そんな音が聞こえたような気がした。

「キ、キスを……した？」

「はい……とはいってもキスの意味も知らない位幼い時だったんですけどね…」

のぞみの言葉にセレナはそう答える。

しかし、カコ達には聞こえていないようだ。

( )( )(未来)(さん/様) /お兄ちゃん……帰ってきたら殺す!( )( )( )

その瞬間、カコ達からも凄い量の負のオーラが噴き出した。

それは別次元にいる暴走中で自我の無い筈の未来に寒気を感じさせる程だったとか…。

（後書きコーナー）

杏

「皆さんこんにちは 天沼矛の管制人格、杏です」

ヴェル

「ウィルレイン兄弟が長男、ヴェル・ウィルレインだ」

クレイ

「ウィルレイン兄弟が次男、クレイ・ウィルレイン」

杏

「それでは早速今回のゲストを呼ばせてもらいます 魔法少女リリカルなのは Brave Saversより、第二のフラグ王、作者の『ちよつ、これ絶対一般人に通じないだろ!』とツツコミとなるほどのマイナーなウル ラマンネタにもついて行ける程のウルト マンや仮面ラ ダー、ゴ ラなどの特撮に詳しい草薙翔さんです」

翔

「その紹介の仕方はどうかと思うが……。ども、草薙翔です」

ガシッ!

作者

「よく来てくれた!」

翔

「は?」

作者

「さあっ! 早速ウルト マンについて語り合おう!」

翔

「え? 何で?」

作者

「さあさあさあさあ！」

クレイ

「グランドアックス！」

グシヤッ！

作者

「ぐばあっ！」

クレイ

「悪いな。こいつ、たまに暴走すんだよ」

翔

「そ、そうか。ところで未来達はどうした？ フルーツタルトを作ってきたんだが…」

クレイ

「ああ、未来達ならあそこだ」

5 未来

「やめろおおおおお！…！」

カコ・未紀

「「お兄ちゃん、可愛いよ」

のぞみ

「懐かしいわね」



作者

「まあこれじゃあ先に進まないからね。とりあえず止めてくるよ」

翔

「復活早いな…」

作者

「まね。んじゃ」

～しばらくお待ち下さい～

カコ

「お兄ちゃん可愛いよ～」

のぞみ

「次は私なんだからね？」

作者

「とりあえず交代で未来を抱けるといいうことにして止めてきました」

5 未来

「俺は許可してねえよ…」

作者

「は？ お前に拒否権なんてあるわけねえだろ」

5 未来

「もついや…」

翔

「と、とりあえず。フルーツタルトを作ってきた。みんなで食べてくれ」

カコ

「ありがとうございます ん、美味しい」

のぞみ

「ホント、前より美味しくなってない？」

キリユウ

「お、美味しいです…」

サラ

「美味いわね…」

セラ

「美味しいです」

ルナ

「そうですね」

セレナ

「美味しいです」

翔

「好評なようで良かったよ」

カコ

「はい、お兄ちゃん。あ〜ん」

5 未来

「い、いや、自分で食べるからな？」

カコ

「あ〜ん」

5 未来

「いや、だから……」

カコ

「あ〜ん」

5 未来

「……あ〜ん」

カコ

「はい どう、美味しい？」

5 未来

「美味しいです……」

カコ

「それじゃあ、もう一口 はい、あ〜ん」

のぞみ

「カコちゃんばっかりずるいわよ！ 私も、はい、あ〜ん」



未来

「突然なに!？」

作者

「せつかくウル ラマンに詳しい翔君が来てくれたんだ! マイナ  
ーな怪獣を出すしかないだろ!」

未来

「読者がついて行けなくなるからやめろおおおお!?!」

女性陣（杏以外）

『邪魔をするな!?!』

ズガアアアアアアアン!!!

カコ

「な!?!」

のぞみ

「傷一つついてない!?!」

未紀

「再生してる!?!」

作者

「ははははは! そりゃそうだ! ガ ラの体表はかなり硬い!  
それにサラマ ドラは再生能力を持つてるからな!」

のぞみ

「くっ!?!」

カコ  
「どうすれば…」

翔  
「どっちも喉が弱点だぞ！」

作者

「何バラしてんですか翔さああああああああん！！！！」

のぞみ

「そういうことなら！」

女性陣（杏以外）

「はあああああああああああ！！！！」

サラ　ンドラ・ガラ

『ぎゃ　おおおおおお！！！！』

ドガアアアアアアアアア！！！！

のぞみ

「やったわね！」

カコ

「はい、お兄ちゃん、あくん」

女性陣（杏以外）

『あくん』

未来

「怪獣倒してすぐにごくごくすることじゃないだろおおおおおおお！！」

翔

「すごいな……」

作者

「まあね〜。あ、のぞみ達。プレゼントがあるよ〜！」

のぞみ

「あ〜……何よ？ プレゼントって」

作者

「うん、これ。精神年齢低下剤。精神年齢が五歳まで下がるから見た目だけじゃなく心も五歳児になるよ」

のぞみ

「貸しなさい！」

未来

「お、おい！ のぞみ！ それは何だ！？ 何故無理矢理飲まそうとする！？」

のぞみ

「いいから飲みなさい！」

未来

「おい！ やめる！！」

作者

「さてさて、未来が薬を飲まされそうになっている間にお知らせを自分、mebiusは現在クリスマス及び正月用のイラストの作成を予定しています。正月用のイラストの方はイメージは出来ているのですがクリスマスの方の方がなかなか決まりません。そこでアンケートを取り、選ばれたキャラのサンタコスムのイラストを書きたいと思います。締め切りは12月5日までとさせていただきます。以下のキャラの中から選んで下さい。

- ・カコ
- ・のぞみ
- ・キリユウ
- ・サラ
- ・セラ
- ・ルナ
- ・セレナ

前回のアンケートとは別のものです。前回のアンケートの結果はのぞみとなりました。1月が終わるまでにはupできるように頑張ります。

……つと、どうやら飲ませることに成功したみたいですね」

5 未来

「お姉さん達、誰？」（首を傾げながら）

のぞみ

「こ、これは…」

女性陣

『可愛い〜』

5 未来

「わっ！ 急に抱きつかないでよ〜！」

作者

「これはすごいな……。よし、アリサ道場とLVにも送っておこう」

翔

「哀れ……カナンとシオン」

作者

「それでは今日はこの辺で」

一同

『また次回』

東吾先生、翔の召喚許可、ありがとうございます。うまく扱えたかどうか、かなり不安ですが許してくださいと嬉しいですし、それでは

第十五話 発見（前書き）

はい、またまた遅れてしまいました、すみません…。  
今回、後書きコーナーが約半分を占めてます。  
しかも伏せ字ばかりという（笑  
では、どうぞ！

## 第十五話 発見

（第83管理外世界）

地平線まで続く、深い森。

沢山の動物が平和な時を過ごしている、平和な世界。

そんな平和な森の一面から、突然沢山の鳥が飛び立つと同時に。

ドゴオオオオン！！！！

凄まじい爆音と共に、爆煙が上がった。

爆発により木が吹き飛び、開けたその場所には黒い鎧で全身を覆い、三叉の槍　メビウスリングを手に持つ未来がいた。

その足下には未来に破壊されたであろうガジェットの残骸が多数転がっている。

「ぐうう……！！　ガアアアアアアアアアアア！！！！」

未来は唸りながら地面に転がっているガジェットIⅤ型の頭部を蹴り飛ばし、叫ぶ。

その苛立ちを含んだ叫びに空気を震え、近くの草陰から未来を睨んでいた虎や熊、竜といった猛獣のほとんどはその場から逃げ出した。そして、逃げていく猛獣の中で唯一逃げ出さなかった獣がいた。

右目や体の至る所に傷を持つ、いかにも激しい闘いを生き残ってきたというような隻眼の虎が、ゆっくりと草陰から姿を現す。

「グルルルル……」

虎は低く唸りながら未来の周りを円を描くように歩き始める。それに対して、未来は全く動かない。

「ガアッ！」

虎は一声咆哮をあげ、未来に飛びかかった。

口を大きく開き、牙を剥き出しにして。

そして、虎が目前に迫った時、未来はメビウスリングを振り上げた瞬間。

虎の体の至る所から血が噴き出した。

血を噴き出しながら虎は未来の横を通り過ぎ、地面へと横たわった。物言わぬただの肉塊へなりはてた虎に、未来は一目もくれず、メビウスリングについた血を振り払った。

その時、草むらが揺れた。

そこにいたのは二匹の子虎。

子、といっても十分虎と呼べる位には成長しているが。

その二匹の子虎は牙を剥き出しにして未来を睨んでいる。

よく見ると、地面に横たわっている虎と模様が似ていることから親子だということがわかる。

しかし、未来がそのことに気づける筈もなく、メビウスリングの切っ先を子虎へと向ける。

自らに敵意を向ける存在へと、殺気を叩きつける。

放たれる殺気に敵意は消え失せ、二匹の子虎は逃げようとする。

しかし、一度でも自らに敵意を向けた存在を自我の無い未来が逃がす筈もなく。

逃げようとする子虎の首へと、未来は何の躊躇も無く、メビウスリングを振り下ろした…。

（機動六課・会議室）

そこに、隊長陣及び教官陣が集まっている。

話していることは勿論、スカリエツティのこと。

そして、暴走中の未来のことである。

スクリーンに新型ガジェット、テュルフィングを使うスカリエツティ、そしてガジエツトを破壊する未来を映しながらはやてが口を開く。

「未来君はスカリエツティを追っていると考えて間違い無いやろな。実際、未来君の姿が確認されてるんはガジエツトが出現した所ばかりや。そこで、六課はガジエツトが確認され次第出動。ガジエツトを追ってくるであろう未来君を確保するで。普段からの未来君の搜索は次元航行艦『カラミティ』の艦長、ヴェルさんに頼んである。といっても任務をこなしながらってことやから見つかる可能性は低い。せやからみんな、ガジエツトが確認されたらすぐに出動できるように準備しといてや」

『はい！』

「会議はこれで終わり。各自、待機しといてや」

はやての言葉に、なのは達は部屋を出ようとする。

その時、警報が鳴り、先程までスカリエツティ等の映像が映っていたウィンドウに『Alert』の文字が浮かぶ。それを見て、はやて達はすぐにロンググーチへと通信を繋ぐ。

「ロンググーチ！ 何があつたの！？」

『第83管理外世界にガジエツト反応！』

「ガジェット反応？」

シャーリーから返ってきた答えに、はやて達は困惑する。通常、管理外世界ではガジェットが現れても滅多に見つかるとは無い。

しかし、反応が確認された。

それは一体どういうことなのか。

『…何これ！？』

なのは達がそう考えていると、シャーリーの悲鳴のような声が聞こえてきた。

その声になのは達は考えるのを中断し、シャーリーに何があったのか尋ねる。

『ガジェットの大きさが異常なんです！ 今、そっちのモニターにも映します！』

シャーリーが言い終わると同時に、モニターにガジェットが映る。その姿は正に異形。

蜘蛛のような体に、その側面からそれぞれ生えている四本の脚。口の両横から巨大な鉤爪のようなものが生えた龍の顔。

先端に龍の顔がついた二本の尾。

背中にはケンタウロスのような人型があり。

人型の背中から生えている巨大な翼と二本の触手。

両肩から生えている龍。

頭部から生えている二本の角。

怪しく光る六つのモノアイ。

口に生えている鋭い牙。

そして何よりも。

その大きさになのは達は愕然とした。

シャーリーの言う通り、大きさが異常なのだ。

恐らく150mはあるだろう。

翼長に至っては300mはあるように見える。そして、その脚は一本一本が大樹並の太さ。

その大きさ、姿、全てが今までのガジェットとは一線を画している。これだけ大きければ、管理外世界だろうと楽に見つかるだろう。

はやて達が愕然としている所に、通信が入る。

その音にはやて達はハツとし、通信に出る。

ウィンドウに映っているのははやて達が未来の搜索を頼んでいる人物。

次元航行艦『カラミティ』艦長、ヴェル・ウィルレイン。

『第83管理外世界に巨大ガジェットが確認された事は知っているな？ 未来もすぐに現れるだろう。俺達の艦はこれからすぐに向かう。そっちはどれくらいで到着できる？』

「これからやと30分はかかりそうや。そっちはどれくらいかかりそうなん？」

『10分だな。まずはガジェットを撃破、その後ガジェットを追ってくるであろう未来を確保する。それでいいか？』

「了解や」

はやてが頷き、通信が切れる。

そしてはやてはなのは達の方を向く。

「すぐに第83管理外世界に向かう。向かうのは教官陣とライトニング1、2。スターズとライトニング3、4は待機や」

『了か…』

はやての言葉になのは達が頷こうとした時、ウィンドウから凄まじい轟音が響いた。

その音に、はやて達はウィンドウに映っているガジェットを見る。ガジェットは全身からレーザーを放ち、何かと交戦しているようだが、小さすぎる為に何と交戦しているかは判別できない。

「まさか……。シャーリー、ガジェットと交戦している何かを拡大してくれへんか？」

『わかりました』

シャーリーが答えると、どンドンガジェットと交戦している何かを拡大されていく。

そして、ウィンドウに映ったのは…。

「やっぱり…」

「いくら何でも来るの早すぎよ…」

ウィンドウに映ったのは黒い鎧を身に纏い、三叉の槍を操る人物…

『お兄ちゃん／未来（君／さん／様）…』

日比野未来だった。

（後書きコーナー）

のぞみ

「いや〜、久しぶりね、後書きコーナー」

カコ

「作者さんが期末試験とかで執筆できなかつたですからね〜」

のぞみ

「ホント、あのクズは一回死んだ方が良いわよね」

未来

「お前ら……ちゃんと名乗れよ。ども、ようやく五歳児から戻れました、日比野未来です」

のぞみ

「何で戻ったのよ……。相原のぞみよ……」

カコ

「ちっちゃい方が良かったのに……。日比野カコです……」

未来

「せっかく戻れたのにひどい言いようだな、おい!」

のぞみ

「うっさい!」

バキヤツ!

未来

「ぐはっ!? な、何故突っ込んだだけで……」

のぞみ

「祐希奈が言ってたでしょ。『未来さんは顔くのが仕事なんだから変なツッコミ入れたらと殴ってよし』って」

未来

「ひでえ…」

カコ

「お、お兄ちゃん。あれは無視なの？」

ネオバ タン

「ウオツフオツフオツフオツフオ！」

テ チルス

「ギャオオオ！」

バキ ム

「グオオオオ！！」

未来

「怪獣と超獣と宇宙人！？ 何でいんの！？」

カコ

「BSから送られてきたって作者さんが」

未来

「東吾さああん！？ 何送ってきてんですかあああ！？」

カコ

「でも、さっきから暴れてないよ？」

のぞみ

「それはね、私が捕まえたからよ！」

未来

「ネオバトル イザー！？ お前レイ ニクスじゃねえだろ！」

のぞみ

「レイ ラッド星人からもらってきたわ。ギガバトル イザーと一緒に」

未来

「どうやって!?!」

のぞみ

「お願いしたらくれたわ。これがその時の映像よ」

のぞみ

『ネオバトル イザーとギガバトル イザー、ちようだい』

レイ ラッド星人

『よかるっ』

のぞみ

「ね」

未来

「レイ ラッド星人！？ 仮にも銀河の覇者だった奴が何あっさりと渡してんだよ!?!」

のぞみ

「レイ ラッド星人もノリが良かったのよ」

未来

「究極生命体がノリ良いつてなんなんだよ!」

のぞみ

「うっさいわね…。ん? あれって…」

カコ

「砲撃ですね。BSからの」

未来

「真っ直ぐ怪獣達に向かっている! 翔さん、ありがとう!」

のぞみ

「そうはさせないわ! そららを自由に、飛ぶびた〜いか〜」

ブンブンブン

未来

「ぎゃあああああ!〜!」

のぞみ

「飛んでけ〜」

ギョオオオ!

ドガアアアアン!〜!

のぞみ

「ヴァルキリーストライク・マキシマム、未来に着弾 翔さん、ありがとうね。」

未来

「お前は翔さんの厚意を何無駄にしてんだよ！」

のぞみ

「無駄にはしてないわよ。あんたに着弾したし」

未来

「それを無駄にしたって言うをだよ！」

のぞみ

「あ、確かに無駄ね。あんたなんかに使った翔さんの魔力が」

未来

「そっちじゃねえええ!!」

のぞみ

「うっさいわね。100体モン ロードするわよ?」

未来

「ちなみにその怪獣は?」

のぞみ

「レイ ラッド星人にベリ ドラ、メカ ム、ギガ マイラ、ウキ  
ラー ウルス・ネオ、エン ラ星人、アー ドダー ネス、アー  
ードメフ ラス、アー ドグ ーザム、巨大ヤ ール、デス  
ム、ギガバー ーク、ダークザ 、ゾ 、クイーン ネラ、デス  
エイサー、ガタ ゾーア、デ ンゾーア、カーラ、ダー ム、ヒ

ユ  
ラ…」

未来

「もういい！ てか読者がついていけない怪獣の名前を連発すんな  
！」

カコ

「お兄ちゃん、全部わかるんだ…」

未来

「作者のせいだな！」

カコ

「それでも凄いよ…。あ、またBSからの砲撃だ」

のぞみ

「よし、またやるわよ そらそらを自由に、飛ぶびた〜いか〜」

ブンブンブン

未来

「またかああああ…！」

のぞみ

「はい ヒトコプター」

ギョオオオオ！！

ドゴオオオオン…！！

未来

「ぎゃあああああ!!!」

のぞみ

「ハウリングゲルベロス、また未来に着弾 翔さん、みかん大福、ありがとね 美味しくいただくわ」

未来

「おい、のぞみ！ お前はまた…」

のぞみ

「100体モン ロード」

未来

「へ？」

100体怪獣

『ギャオオオ!!!』

未来

「おいしいiiiiii!?!」

のぞみ

「さて、未来が怪獣と戦ってる間、私たちはお茶といきますか」

オリキャラ陣

『は〜い』

未来

「俺は!?!」

のぞみ

「あんたは怪獣達と戯れてなさい」

未来

「戯れるっていつレベルじゃねえよ!」

のぞみ

「細かいこと言ってる嫌われるわよ?」

未来

「細かくねえよ!」

のぞみ

「この大福、美味いわね」

未来

「俺は無視か!?!」

カコ

「美味しい」

ルナ

「美味しいです」

未来

「お前らも無視か!?!」

のぞみ

「さっきからじちゃじちゃじちゃい!! いけ!! 1000体怪獣!!」

未来

「ぎゃあああああ!!」

のぞみ

「さてと、作者から何か言つことがあるらしいわよ」

どうも、mebiusです。

前回の後書きで言ったクリスマス&正月イラストですが、クリスマスイラストは間に合いそうなのですが、正月イラストは間に合いそうにありません。なので大変申し訳ないのですが、正月イラストは正月を過ぎてからの投稿になりそうです。最悪の場合、1月の下旬の投稿、ということになるかもしれないですね。なるべく早く描き上げるつもりですが、ご容赦していただけるとありがたいです。本当に申し訳ありません。

のぞみ

「んじゃ、そろそろ終わりにしますか」

一同

『また次回』

未来

「俺は最後まで無視か!!」

チャンチャン

## 第十六話 異形態（前書き）

メリークリスマス！

クリスマスイラストをみてみんなにあげたのでよければ見てみて下さい。

色塗りで軽く事故ってますが…orz

<http://297.mitemin.net/i3524/>

## 第十六話 異形態

〔第83管理外世界〕

「……っ！」

異形のガジェットが放った光線が、真っ直ぐ未来へと飛んでくる。それを未来は右に跳んでかわし、そのまま一気に上空へと上がる。そして、それを追うようにガジェットの体の至る所から無数のミサイルが放たれる。

それを見て、未来はメビウスリングを振り上げる。すると、メビウスリングに何かが集まっていく。

それは闇。

深い、深い、漆黒の闇。

その闇は刃を覆い、黒く輝く！

「ガアアアアッ！！」

未来は叫び、メビウスリングを振り下ろす！

刹那、刃を覆っていた闇が連結刃のように伸び、無数のミサイルを切り落としていく！

「グアアアア！！」

未来は再び叫び、メビウスリングを振り上げ、振り下ろす。

その動きに合わせ、闇の刃が上からガジェットを切り裂こうと迫る。しかし、その斬撃はガジェットの左腕に易々と掴まれてしまう。

そして、右腕が未来に向けられる。

瞬間、右腕の先が輝き、そこから極太の砲撃が放たれる。

当たったら、例え鎧があろうとも一撃で致命傷にいたるであろう砲撃が。

「グウウ……！」

未来は低く唸り、闇をメビウスリングから切り離す。

そして、体をひねって砲撃の直前上から逃げる。

しかし、それもギリギリ。

砲撃は鎧の一部をかすり、その部分が消滅する。

未来はそれを気にもとめず、再び刃へと漆黒の闇を集める。そして、回転しながらメビウスリングを横なぎに振るう！

放たれる漆黒の闇。

それは三日月の形となり、空気を切り裂きながら真っ直ぐガジェットへと向かっていく。

それに、ガジェットは両肩の龍を向ける。

二頭の龍の口に光が集まり、光の塊が放たれる。

先ずは右の龍から。

続いて左の龍から。

最初に放たれた光球が闇とぶつかり、爆煙をあげる。

爆煙は瞬く間に広がり、未来の視界を塞ぐ。

それを気にせず、未来は爆煙の中、ガジェットへと飛ぶ。

次の瞬間、爆煙を突き抜け、未来の目の前に光球が現れた。

「ッ!？」

それはガジェットが放ったもう一つの光球。

突然目の前に現れた光球に未来は反応出来ず、光球は未来に直撃した。

次元航行艦『カラミティ』艦橋

「第83管理外世界まではあとどれくらいかかる？」

「あと5分です」

オペレーターの返答を聞き、ヴェルはウィンドウへと視線を戻す。ウィンドウに映っているのは未来。

今までのガジェットとの戦闘中の映像である。

「SSランクはあるな……」

「兄貴、武装隊の出撃準備、できたぞ」

呟くヴェルに、後ろから声がかかる。

声の主はクレイ・ウィルレイン。

『カラミティ』の副艦長である。

「いや、出るのは俺とお前だけだ。ガジェットも未来も、ウチの武装隊には荷が重い」

「でも、いた方がいいんじゃない？」

「ダメだ」

反論しようとするクレイの言葉をヴェルが遮る。

「アレ”を使う可能性がある。武装隊がいたんじゃない、使えない」

「！……アレを、使うのか？」

ヴェルの言葉に、クレイは驚き、確認する。

「あくまで可能性がある、というだけだ。だが、可能性は高い。お前も固有武装を使うことになると思うぞ」

ヴェルはそう言うと、艦橋から出ていった。

「……久しぶりだな。」武神”を見るのは「

ヴェルの出ていった扉を見ながら、クレイはそう呟いた。

### 第83 管理外世界

光球が直撃し、発生した爆煙には何の変化もない。

煙の中から未来が突撃してくることも。

未来が落下してくることも。

それはつまり、まだ未来が撃墜されていないということでもある。そのことがわかっていいるのだろう。

ガジェットは煙を睨んだまま、掌を向かい合わせるように両腕を煙へと向ける。

すると、両掌の間に電撃が流れ、それはだんだんと量を増していく。電撃が重なり、巨大な雷の球体が生まれる。

直径30mはあるつかという雷球が。

そして、ガジェットは両腕を振り上げ、振り下ろす。

放たれる雷球。

それは雷の尾をひきながら煙へと、未来へと突き進む。しかし、それは。

煙と接触する直前、”断ち切られた”。

同時に。

煙が晴れ、未来の姿が見えるようになる。

その姿は先ほどよりスマートな鎧姿に変わっていた。後頭部から斜めに伸びる一本角。

鋭い牙が並んでいる口。  
目は横に繋がり、横長の一つ目に。  
両腕の甲からは鋭い刃が生え。  
背中から生える二本の角。  
細長く、先端の尖った尾。  
メビウスリングは闇に覆われ、その形を無理矢理短剣に変えられ、  
逆手で左手に握られている。  
そして、右手が漆黒の刀へと変わっている。  
時々電気が走っていることから、先ほど雷球を切ったのはこの刀だとわかる。

「グウウ……」

唸ると同時に、右手の刀が消え、普通の手に戻る。  
そして、メビウスリングを右腕に持ち替え

次の瞬間、ガジェットの真後ろに未来が現れた。  
そして、それに少し遅れて、ガジェットの右肩の龍の至る所から煙があがる。  
その部分を見ると、深く斬られていることがわかる。  
あの一瞬で、未来が何回も切り裂いたのだ。

#### 魔鎧装 異形態之速・瞬迅態

魔鎧装の中でも、特に速さに特化した形態である。  
その速さは高速を超え、神速と呼べる程。

「ゲルルルル……」

唸ると同時に、再び未来が消え。  
ガジェットの前の地面へと現れる。

今度は左肩の龍の至る所から煙があがった。

そして、それを気にせずガジェットは右腕を振り上げ。

ゆっくりと振り返ろうとしている未来へと振り下ろした。

瞬迅態の速さなら楽にかわせただろう。

しかし、未来は動こうとせず。

迫り来る拳が、未来に直撃した。

地響きが鳴り。

砂塵が舞い上がる。

この光景を見たら、誰もが未来が潰されたように思うだろう。

砂塵が晴れたそこに、拳に押しつぶされている未来の姿を思い浮か

べるだろう。

やがて、砂塵は晴れ。

押しつぶされている未来がいる筈のそこには。

”片手で拳を受け止めている”未来がいた。

その姿は瞬迅態とも、通常態とも異なり。

太い手足と、バッファローのような角の生えた形態へと変わって

いた。

右手に斧と化したメビウスリングを握り。

左手でガジェットの拳を受け止めている。

その光景を見ても。

一向にガジェットは腕を引こうとしない。

否、”引けない”。

どんなに腕を引こうとしても。

未来が掴んでいるだけで全く動かない。

「グウウ…!!」

唸りながら、未来は後ろを向き。

「ガアアアアアアア!!!!」

叫び、ガジェットを”投げ飛ばした”。  
150mもあるガジェットを、片手で投げ飛ばしたのだ。

### 魔鎧装 異形態之力・剛力態

力に特化したこの形態にとって、150m程度のものなど、簡単に投げ飛ばすことができる。

「グオオオオオオオオオオ！！！」

未来は叫び、空高く飛び上がる。

そして、メビウスリングを振り上げ。

落下の勢いそのままガジェットの頭部へと振り下ろす！

その一撃はガジェットの頭部を砕き。

ガジェットの機能のほとんどが停止する。

未来はガジェットから離れ。

その体を闇が覆う。

闇はすぐに消え、未来の姿は剛力態から変わっていた。

右腕は巨大なバズーカとなり。

左腕は十数もの銃身を持つマシンガンへと変わっている。

### 魔鎧装 異形態之砲・砲撃態

砲撃に特化した形態である。

「ダークネス暗黒」

バズーカを空に向け、未来は呟く。

すると、未来の背中から大量の闇が噴き出し、バズーカに絡みつく。

その状態で、未来はバズーカをガジェットに向ける。  
バズーカの銃身の前に闇が集まり、すぐに巨大な球体となる。

「グアアアアアアアア！！！」

叫び、極太の砲撃が放たれる。

その威力はガジェットのものより高く。

一撃でガジェットの下半身を消滅させ、ガジェットは沈黙した。  
沈黙したガジェットに背を向け、未来は転移魔法を発動しようとする。

「…………ギ…………ゴ…………！」

「ッ！？」

その一瞬の間をつき、ガジェットが残っている機能でアームを使い、  
未来に背後から襲いかかる。

そして、ガジェットのアームが未来を貫こうとした時。

上から降ってきた何かガジェットのアームを消滅させた。  
アームを消滅させたのは龍。

炎を身に纏った、紅蓮の火龍であった。

「グオオオオオオオ！！！」

火龍は叫び、ガジェットの”焼”滅させ、空へと昇る。

火龍の昇る先には二人の男がいた。

一人は斧を持ち、もう一人は両刃の剣を握っている。  
クレイとヴェルだ。

火龍はヴェルに近づくと光を放ち、消えていった。

「グルルル…」

「…もう自我は残ってないみたいだな」

唸りながら睨んでくる未来を見て、ヴェルはそう呟き、ツルギを構える。

それに合わせ、クレイもアープを構える。

「グオオオオオオオオオオ！！！！」

通常態に戻った未来が叫び、ヴェル達に突っ込んでいく。そして、未来と兄弟が激突した…。

第十七話 武神と守護神（前編）（前書き）

2ヶ月もかかってしまい申し訳ありません！

書いても書いても終わらないという（汗

そのせいで予定では四千文字だったのが一万文字越えに（汗  
本当に、申し訳ありませんでした！

## 第十七話 武神と守護神（前編）

グオオオオオオオオオ！！！！

「ぐっ…！！」

叫びと同時に、禍々しい闇を纏った剣が、紅蓮の炎を纏った剣にたたきつけられ、火花を散らす。

闇を纏った剣を操るのは未来。

魔鎧装により増幅された腕力で炎剣の使い手、ヴェルを力任せに押し込む。

『flash move』

「はっ！！」

ヴェルを押し込む未来の背後から迫る、赤色の魔力を纏った斧。その柄を握るはクレイ。

その一撃は確実に未来を捉えていた。

しかし。

「っ！？」

言いようのない悪寒に襲われ、クレイは斧を振り下ろす前に咄嗟に後ろに下がる。

瞬間、クレイの眼前を何かが通り過ぎる。

それは闇。黒い、黒い、漆黒の闇。

先端に、三つの鋭利な鉤爪を持つ、複数の触手。

魔鎧装の両肩の盾から生えた、漆黒の、闇の触手。

ダイクネス  
暗黒之…

声が響く。

未来のものとは思えない程の、低い、低い、声が。

同時に、全ての触手の先端がクレイの方を向き、三つの鉤爪の中心に魔力が集まる。

膨大な、スフィアとは比べ物にならない、それこそAランクの砲撃分はあるつかという魔力が。

数十はある触手の全てに。

それに、クレイは撃たせまいとアープを振るい、魔力斬撃を次々と放つ。

その斬撃は的確に触手を切り裂き、その数を減らしていく。

しかし、いくらその斬撃が的確に触手を切り裂こうとも。その短時間で数十はある触手の全てを切り裂ける筈もなく。

ショット  
弾丸…

再び、声が響く。

同時に、残った触手全てから収束していた魔力が解き放たれる！

弾丸（shot）の一言で表すにはあまりに強大で。

砲撃（buster）と呼ぶにふさわしい一撃が。

「っ！」

迫りくる十数の砲撃をクレイは、あるいは避け、あるいは切り裂く。

右に、左に、上に、下に、前に、後ろに。

振り上げ、振り下ろし、横に薙ぎ、袈裟懸けに。

様々な動作で、砲撃を切り抜けていく。

そして、最後の砲撃を避けたところに、一本の触手が突っ込んでくる。

「ちっ！」

迫りくる触手にクレイは舌打ちし、体を無理矢理捻って触手をギリギリで避ける。

しかし、触手は一本だけではない。

「っ!？」

触手を避けた瞬間、別の触手がクレイに迫る！

先ほどの一撃を無理に避けた為、避ける事はできない。

かといって、触手を切り裂くこともできない。

魔力も何も纏わせていない状態で切り裂こうとしても、魔鎧装の一部でもある触手に弾かれるのが目に見えているのだから。

『Protection!』

咄嗟に、クレイはプロテクションを張る。

その数は五枚。

クレイが咄嗟に張ることができる最大数である。

そして、触手が一枚目のプロテクションと接触する。が、ものの二、三秒で四枚のプロテクションは突破され、触手が最後の一枚にたどり着く。

「なっ!？」

その光景に、クレイは驚く。

防げるとは思っていなかった。

それでも、五〜十秒は持ちこたえられると考えていた。  
しかし、ほんの数秒でプロテクションは破られた。  
目の前に迫る触手。

クレイは咄嗟にアープを盾にし、その一撃を防ぐ。

「ぐっ！」

しかし、衝撃までは防げない。

触手の一撃を受けた反動で、クレイは無防備になる。

無防備になった敵を、見逃す筈がない。

クレイは触手による追撃を覚悟する。

だが、追撃はこない。

ガアアアアアアアアアアアツ！！！！

代わりに聞こえてきたのは未来の叫び。

そして、そのすぐ後に轟音が聞こえた。

「なんだ！？」

クレイは体勢を立て直し、轟音の聞こえてきた方向　地面に目を向ける。

クレイの目に映ったのは放射状に倒れた木々と、その中心に立ち込める土煙。

そして、その真上にいるのはヴェル。

ツルギを振り下ろした体勢で土煙を睨んでいる。

「大丈夫か？　クレイ」

「ああ。サンキュー、兄貴」

「気にするな。……来るぞ！」

ヴェルが叫ぶと同時に土煙の中から幾つもの触手が現れる。それに対し、二人は自らのデバイスを構え、触手を迎え打つ！

「ツルギ！」

『Explosion!』

ヴェルの声に応じ、ツルギはカートリッジを排出する。同時に、刃に纏われる紅蓮の炎。

『Flame needle』

「はっ！」

叫び、振るわれる炎剣。

その炎の軌跡からは幾つもの炎の針が放たれ、触手を貫き、その数は減らしていく。

「こつちもやるか……行くぞ、アープ！」

『All right・Load cartridge』

カートリッジが排出され、アープの刃に魔力が集まっていく。集まる魔力は刃を中心にして巨大な魔力球を形成していく。

『Gravespear』

「グレイブ！」

叫び、クレイはアープを振り上げる。  
同時に、刃に集まっていた魔力が輝く。

「スピアーツ！！」

アープが振り下ろされ、収束していた魔力が斬撃となって放たれる。

放たれた斬撃は触手ではなく地面へと突き進み、着弾する。  
しかし、爆発は起きず、魔力斬撃は地面に溶けるように消えていった。

『spread』

そして、アープが鍵となる単語を紡ぐと同時に地面から生える幾つもの巨大な岩針。

それらは瞬くまに残った全ての触手を貫いた。  
火針、もしくは岩針に貫かれたそれらの触手は闇の粒子となり、消えていく。

ガアアアアアアアアア！！！！

響く咆哮。同時に、土煙の中から未来が姿を現す。

未来は一気にクレイとの距離を詰め、上段からメビウスリングを振り下ろす。

それをクレイはアープで受け止める。

だが、魔鎧装により強化された一撃を受け止めたままでいられる筈もなく、クレイはすぐに押され始める。

ゲウウ…！

唸ると共に、未来の左手に闇が集まり、黒く輝く。

「っ！」

それに気づいたクレイはすぐに未来から距離をとろうとする。しかし、魔鎧装の右腕の甲から放たれた闇のバインドに左腕を縛られ、逃げられなくなる。

「ちっ！」

クレイはなんとかバインドを外そうとするが、それには時間が足りない。

未来の左手はクレイの腹部へと向けられ、黒く輝く闇が放たれる！

瞬間、“未来”が吹き飛んだ。

ガ…ッ！？

それに未来は困惑する。

それもそうだろう。

技を決めたのは自分である筈なのに自分が吹き飛んだのだから。

「ギリギリ間に合ったか…」

未来を吹き飛ばした張本人、クレイが呟く。

クレイの腹部の前には左手が構えられており、プロテクションが張られている。

X字の紋様が入ったプロテクションが。

リフレクト・プロテクション。

クレイが生み出した、オリジナルの防御魔法の一つ。

AAランクまでの魔法なら跳ね返す事の出来る、反射の盾。

未来が吹き飛ばされたのは、これにより砲撃を跳ね返されたからだ。

「兄貴！」

「わかってる！」

返答が聞こえてきたのは吹き飛ぶ未来の進行方向。

その声を発したのはヴェル。

「ツルギ！」

『Ja! Tachi form!』

ヴェルの叫びに応じ、ツルギからカートリッジが三発排出され、

その姿を大太刀へと変える。

『Explosion!』

更にカートリッジを三発排出。

同時に、今までとは比べものにならない大きさの炎が刃に纏われる。

そして、今までと違うのは炎の大きさだけではない。

炎の色も変わっているのだ。

赤い炎からヴェルの魔力光と同じの青の炎へと。

それが意味するのは、刃に纏われている炎が魔力により起こした炎でなく、炎の姿をした魔力だということ。

それだけならば魔導師ならやろうと思えばできるだろう。

だが、ヴェルのそれは普通のそれとは違う。  
魔力が、炎と全く同じ性質を持っているのだ。  
ただの魔力ならば発しない高熱を発し。  
酸素を取り込むことによってより激しく燃える。  
つまり、酸素さえあれば少量の魔力で強力な一撃を放つことも可能となる。

『Absorb』

ツルギから発せられる吸収を意味する言葉。  
同時に、刃が纏う炎が酸素を吸収し、その激しさを増していく。

『compress』

再びツルギから言葉が発せられ、炎が刃へ収束していく。  
その間も酸素の吸収は止まらない。

「天覇聖神流、剣術九之型改式、奥義：！」

ヴェルの頭上に掲げられるは燃え盛る青き炎剣！  
瞬間、収束しているにも関わらず、莫大な量を誇る炎は空へと昇る火柱となる！

「蒼龍！ 烈火閃ッ！」

振り下ろされる炎剣。  
収束していた炎が解放される！  
そして、解放された炎はその姿を龍へと変える。  
それは先程巨大ガジェットを焼滅させたのと同じ技。  
だが、その大きさは先程よりも一回りも大きい。その上、大太

刀により放たれ、青き炎で形作られているが為はその威力は大きく上がっている。

本来の、普通の炎で放たれた場合の威力はSS+。

これでも十分高いのだが、今姿を現している火龍は更にその上をいく。

SSSS+++。

それが、今顕現している火龍のランク。

グオオオオオオオオオオオオツ!!!

火龍の咆哮が、空気を震わせる。

そして、青き火龍はその顎を開き、鋭い牙を未来へと向ける！自身に向かってくる火龍を避けようと、未来はその身を捻る。

グッ…！

しかし、避けるのは間に合わず、左腕が火龍にかすってしまった。かすった左腕部分の魔鎧装は破壊され、肌が覗いている。かすただけで堅固な魔鎧装が破壊されるほどの威力。

直撃したらいくらその身に魔鎧装を纏おうとも無事ではすまないだろう。

グウウ…

そのとんでもない威力に、未来は恐怖する。

同時に、直撃を避けた事に安心し、僅かだが隙ができる。

その僅かな隙が、見逃される筈もなく。

ゴアアアアアアアアアアアツ!!!

避けた筈の火龍が踵を返し、未来へと再び牙を剥く。  
既に回避は間に合わない。

…ッ！ ゴアアツ！！

そう判断し、未来はありつただけの闇を自らの前に集める。  
形成されるは盾。

黒く輝く闇の盾。

ガアアアアアアアアアツ！！！！

しかし、火龍の前ではその防御力は紙ほどしかない。

火龍が激突すると同時に、盾に罅が入り、数秒とたたずに盾は砕け散る。

グオオオオオオオオオオオツ！！！！

そして、未来に食らいつき、引きずっていく。  
その進行方向にいるのはヴェル。

「ツルギ…」

『Ja! Explosion!』

ヴェルが静かに自らのデバイスの名を呟き、同時にツルギはカートリッジを排出。

再び刃に青き炎が纏われる。

「天覇聖神流、剣術伍之型…十字閃・蒼炎…」

放たれる十字の青き斬撃。

それは未来の、魔鎧装の背中、装甲の特に厚い箇所を砕く。そして、ヴェルは2m以上の大太刀を器用に納刀。居合いの構えをとる。

「固有武装、ファーストリミット第一制限部分解除……『霊装・八龍刃』……光刃、部分展開……」

ヴェルが言葉を紡ぐと同時に、ツルギの納刀された鞘が淡く輝く。

否、輝いているのは鞘ではない。

納刀されているツルギの刃だ。

あまりにも強く輝いているが為に、鞘に納められているにも関わらず輝いているのがわかるのだ。

「『存在変換』発動……空气中の塵を足場に……」

眩くと同時に、ヴェルの足下から未来へと伸びる足場が創造される。

ヴェルの固有技能、『存在変換』。

それはあらゆる物質を原子単位 いや、“それ以上に細かく”分解し、組み換えることによってまったく別の存在へと変換する能力。

つまり、剣や槍、斧、盾等といった武具を作ること、炎を氷に、風を雷に、といったように性質の全く違うものに変換することもできる。

先程の炎と同じ性質を持つ魔力も、これによって魔力が変換されたもの。

「天覇聖神流……」

眩き、ヴェルは右手を柄に添えたまま未来へと駆け出す。  
そして、足場が砕ける程の力を込め、右足で踏み込み。

「光刃奥義……」

眩きながら重心を移動、体を前に傾け、柄を強く握りしめる。  
そして、僅かに抜かれた刀身からは眩い光が放たれている。

「閃光……」

抜刀され、ツルギが未来へと振るわれる。

その刀身は2m以上の大太刀から、眩い光を放つ刀へと変わって  
いた。

「昇破ッ！」

未来の背中へと振るわれる光刃。

それは十字閃により砕かれた箇所到的確に放たれ。

ガアッ……！！

火龍と光刃、二つの高ランク魔法に挟まれ。

未来を、太陽を思わせる光と熱を持った爆発が覆った……。

「フー……」



それを見て、ヴェルは咄嗟にツルギを後ろに振るう。

ギインツ！

そこにいたのは瞬迅態となった未来。

長刀とツルギがぶつかり合い、金属音を鳴らす。

グルウ…

鏝迫り合いの中、唸ると同時に未来は左手に握る短剣を振るう。

防御も、回避も間に合わない。

ヴェルはそう判断し、少しでもダメージを減らす為に後ろに下がろうとする。

「固有武装、ファーストリミット第一制限部分解除…シルト・フェニックス不死鳥之盾」、部分展開！」

声が響き、同時に短剣が弾かれる。

弾いたのは盾。

表面に不死鳥が刻まれた、50cmほどの赤い盾。

『Explosion!』

「天覇聖神流、剣術壱之型」

攻撃が弾かれ、未来にできた隙をヴェルは逃がさない。

長刀を弾き、ツルギを腰溜めに構える。

「土熊！」

放たれる剛の一撃。

その一撃は未来の腹部に叩き込まれ、未来を吹き飛ばす。

グウウ…！

唸りながらも未来は体勢を立て直し、再びその姿を消す。

「天覇聖神流、剣術参之型」

それを見てもヴェルは慌てず、ツルギを構え直し。

「牛輪！」

左にツルギを振るう。

ツ！？

その斬撃はヴェルの左側に移動していた未来を捉える。

未来は咄嗟にその斬撃を短剣で受け止め、しかし。

ガッ…！？

その身体に、“四つの斬撃が叩き込まれた”。

それが牛輪の特徴。

空間を曲げることによって、一度に五つの斬撃を繰り出す剣技。

「天覇聖神流、剣術四之型」 吹き飛ぶ未来に、ヴェルは容赦しない。

未来が再びその姿を消す前に、次の一撃を叩き込む。

「時雨！」

繰り返されるは何撃もの高速の突き。  
その一撃一撃が、魔鎧装を砕いていく。

『Explosion!』

振り上げられたツルギから、カートリッジが二発、排出される。  
ツルギの刀身に、炎が纏われる。

『Flame slash』

「フレイム……」

グ……！

振り上げられたその一撃を、未来は右手の長刀で防ごうとする。

「スラッシュ！」

しかし、防御は間に合わず。  
本来、魔力斬撃として放たれる一撃は。

ガアアアアアアアアアアツ！！！！

直接叩き込まれ、未来は地面へと叩きつけられた。

「……………」

「大丈夫か？ 兄貴」

土煙を睨んでいるヴェルに、クレイが尋ねる。

その側には、先程ヴェルを守った赤い盾が浮かんでいる。  
それはクレイの固有武装『不死鳥之盾』シルト・フェニックスの一つ。

「大丈夫だ。それよりも油断するな。あいつはまだ倒れていない」

言葉が終わると同時に、土煙の中から複数の何かがヴェル達に向け飛んでくる。

それは剣。

闇でできた、漆黒の剣。

「アープ！」

『Wide protection!』

飛翔してくる剣に、クレイはプロテクションを展開。  
張られたプロテクションは剣から二人を守る。

『Explosion!』

「天覇聖神流、剣術陸之型、奥義…」

プロテクションに守られながら、ヴェルはツルギをゆっくりと掲げる。  
瞬間、ツルギの刀身に魔力が集まる。

「慧龍一本髪！」

振り下ろされ、放たれるは砲撃。

プロテクションを突き破り、剣群を飲み込みながら土煙の中の未

来へと突き進む！

そして、砲撃が土煙に届く直前、土煙の中から黒い影が飛び出した。

それは未来。

しかし、その姿はまた変わっていた。

長い、短剣程の長さはある五つの鈎爪を持つ左手。

背中から伸びる四対、計八枚の剣翼。

両脚の踵から生えた爪。

頭部から生えた剣のような三本の角。

レヴァンティンのシュランゲフォルムのような蛇腹剣に変化した

三本の尾。

そして、右腕には2mはある大剣が握られている。

魔鎧装 異形態之刃・剣戟態

未来は剣翼を広げ。

ダークネス・ブレイド

暗黒之剣…

声が響く。

同時に、広げられた剣翼から剣が放たれる！

百を軽く超える数の剣が。

「『存在変換』発動…」

眩き、同時にヴェルの周りに剣群が展開される。

それも、炎や風、雷を纏った剣群が。

『Shoot!』

展開された剣群が放たれ、未来の放った剣群とぶつかり合う。  
剣群は剣戟音を鳴らしながら、互いに碎き、碎かれていく。

「天覇聖神流、剣術式之型……」

剣群が互いを碎きあつてのを見ながら、ヴェルはツルギを構える。

「飛燕！」

そして、放たれるは極細の砲撃に似た斬撃。  
剣群の隙間を縫って、未来へと突き進む。

グ……ッ！

それは未来の鳩尾に決まり、剣翼から放たれる剣群が止む。

『S o n i c m o v e !』

その一瞬でヴェルは未来との距離を詰め、ツルギを振り下ろす。  
だが、その一撃は未来の大剣に簡単に弾かれてしまう。

グルル……

唸り、振るわれる左の鈎爪。

それを、ヴェルは後ろに下がることで避ける。

それに、未来は追撃をかけようと右足を振り上げようとす。

「はっ！」

未来の後ろから、声が響く。

同時に、未来の背後から赤い魔力を纏った斧が振り下ろされる。  
それを、未来は剣翼を広げる事により防御。

全身から魔力を放出し、クレイの体勢を一瞬崩す。

ガアッ！

「っ！」

振り返ると同時に放たれる左の裏拳。

それを、クレイはアープで受け止め、防ぐ。

しかし、衝撃までは防げず、吹き飛ばされた。

「兄貴、このままだとマズいぞ……」

未来を間に挟んで、反対側にいるヴェルにクレイが声をかける。

その表情には若干の焦りが含まれている。

たった数合、刃を交えたただだが、その強さはわかる。

剣戟態は今までの異形態とは比べものにならない程の強さを持っている。

それも、今のままのヴェル達では勝てない程の強さを。

「わかつている。……クレイ、固有武装、ファーストリミット第一制限の解除を許可する。……一気に決めるぞ」

「……いいのかよ？」

「ああ。……それに言っただろう、固有武装を使う可能性がある、と」

「そうだったな……。わかつた。行くぞ、兄貴！」

そう、 “今のまま” ならば ！

「固有武装、ファーストリミット第一制限解除……」

異口同音に二人が呟く。

同時に、ヴェルの周りには八色の光が集まり、それぞれそこから太刀の柄が現れ。

クレイの周りには幾つもの大中小様々な炎が浮かぶ。

「『シルト・フェニックス霊装・八龍刃』、展開」

「『不死鳥之盾』、展開！」

呟き、叫び。

それぞれの固有武装が展開される。

ヴェルの周りに展開されたのは八振りの太刀。

炎や水、雷などの力を纏った八色の太刀。

炎の力を纏いしは赤の刃を持つ太刀。

水の力を纏いしは水色の刃を持つ太刀。

風の力を纏いしは緑の刃を持つ太刀。

大地の力を纏いしは茶色の刃を持つ太刀。

氷の力を纏いしは青の刃を持つ太刀。

雷の力を纏いしは黄の刃を持つ太刀。

光の力を纏いしは白銀の刃を持つ太刀。

闇の力を纏いしは漆黒の刃を持つ太刀。

クレイの周りに展開されたのは幾つもの盾。

斜め四方向には2mはある楕円形の大盾が。

その周りには円形に並んでいる1mほどの十の菱形の盾が。

そして、ランダムに50cmほどの円形の盾が五十、展開中される。

それらは全て赤く、表面に不死鳥が刻まれている。

グオオオオオオオオオオオオ！！！！

キユオオオオオオオオオオオオ！！！！

展開されると同時、龍と不死鳥の咆哮が辺りに響いた。

ヴェルの固有武装『シルト・フェニックス霊装・八龍刃』

クレイの固有武装『不死鳥之盾』

それぞれ、霊獣たる龍と神獣たるフェニックスを宿している。

グルル……ガアアアアアアアアアア！！！！

叫び、剣群が未来の前後、ヴェルとクレイに放たれる。

それに、ヴェルは風刃を振るい、クレイは盾を前方に展開する。

剣群は風刃から発生する風に、盾に阻まれ二人には届かない。

ヴェルは剣群を弾き、空を駆ける。

『S o n i c m o v e !』

そして、ヴェルは高速機動魔法を発動、一瞬で未来の背後に回り込む。

その手にはツルギと雷刃が握られている。

「天覇聖神流、剣術壱之型、雷刃壱之型」

振り上げられるツルギと雷刃。

それぞれ、輝く魔力と煌めく雷を纏っている。

「土熊、雷電」

同時に放たれる豪と雷の一撃。  
それは剣翼を砕き、未来を叩き落とす。

……ガアアツ！

落下しながらも未来は体を上へ向け、剣翼から剣群を放つ。  
しかし、クレイの盾に阻まれ、届かない。

グルル…

それに対して、未来はありったけの闇を左手に集める。  
形成されるは剣。  
黒く輝く闇の剣。

ガアアツ！！

叫び、未来は闇剣を投擲。  
闇剣は空気を切り裂きながら突き進み、盾に接触。  
盾に風穴を開け、その向こうにいるヴェルを

貫けなかった。

ツ！？

盾に開いた穴から、ヴェルの姿は見えない。  
未来は周りを見回し、そして。

「天覇聖神流、氣術式之型」

自身の真後ろから声を聞いた。

！？ …ガアッ！！

それに気づいた未来は振り向き様にヴェルに大剣を叩き込もうとして。

「煌爆」

その視界は、光に覆われる。

ゴア……ッ！？

それは気による爆発。

その爆発は未来の視界を奪い、吹き飛ばす。

「アープ！」

『All right』

吹き飛ぶ先にいるのはクレイ。

アープを振り上げ、飛んでくる未来を睨む。

『Load cartridge・Battleax form』

カートリッジを二発排出し、アープはその姿を刃の逆にブースターがついた戦斧へと変える。

「天覇聖神流、斧術式之型」

振り上げられたアープに集まる大地の力。

クレイが未来へと駆けると同時、ブースターが火を吹き、さらに

加速する。

「月閃斧！」

三日月のような弧を描きながら、未来へとアープを振り下ろす。  
視界を奪われている未来はその一撃を防げない。

ガアアアアアアアアアア！！！！

大地の力と加速により強化された一撃をもろに受け、未来は叫び  
声を上げながら落下する。

『Grave needle』

「ファイアツ！」

落下する未来へ追撃をかけようと、クレイは幾つもの石針を放つ。  
だが、未来もやられてばかりではない。  
落下しながらも闇を大剣に集め、一気に上へと振り抜く！  
放たれたのは巨大な斬撃。  
石針を飲み込みながら、クレイへと突き進む。

「不死鳥之盾！」

それに対して、クレイは周りにある四つの大盾の内、二つを前方  
に展開。

二つの大盾と巨大な斬撃が、火花を散らせながらぶつかり合う。  
やがて、大盾に罅が入り始める。

グオオオオオオオオオオッ！！！！

それを見て、未来は叫びを上げながらクレイへと駆ける。  
そして、クレイの顔が見える所まで近づいた時、未来はある事に  
気づく。

クレイが、笑っている事に。

ガアアアアアアアアアアツ!!!

それに気づきながらも、未来は駆けるのを止めない。

もし自我が残っていたなら、駆けるのを止め、他の方法でクレイ  
を攻撃しただろう。

しかし、今の未来に自我は残っていない。

大剣を手に、クレイへと突き進む。

『Phoenix』

そして、クレイまであと少しという所で、未来はその声を聞いた。  
同時、未来の放った斬撃が消えた。

消したのは炎。

盾に入っている罅から、燃え盛る炎が溢れている。

炎は斬撃を消した後、その姿を不死鳥へと変える。

燃え盛る不死鳥は斬撃を消して尚、止まらない。 駆ける未来へ

と襲いかかる！

ッ!?

それを未来は避けようとするが、いつの間にか四肢をバインドで  
封じられていて動けない。

その上、盾が未来を囲っており、逃げることを許さない。

『Flame phoenix』

デバイスの音が響き、未来を囲っている全ての盾が燃え盛る。  
その、どの炎も不死鳥の姿を形成している。

「バースト」

クレイが呟くと同時、盾から不死鳥が放たれる。

バインドで動きを封じられている未来に、全方位から迫りくる不死鳥をかわせる筈もなく。

未来を、紅蓮の炎が覆う。

「アープ！」

『Load cartridge』

カートリッジが二発排出され、アープはその姿を変える。

鎖鎌のように鎖で繋がれた二つの柄と、片方の柄についた巨大な  
大斧の刃　グランドフォームへと。

『grand axe』

「グランド……」

クレイがアープを振り上げる。

その動きに合わせて、鎖が鞭のようにしなる。

「アアアアアックス!!!!」

叫び、振るわれるアープ。

その一撃は真っ直ぐ炎の中にいる未来へと振り下ろされ。

弾かれた。

「なっ!?!」

予想外の事態にクレイは驚き、すぐさま炎から距離を取る。

同時、弾かれるように炎が消えた。

現れたのは黒い球体。

アープの一撃による傷も、炎の不死鳥による焼け痕もない、黒く輝く球体。

「なんだ、あれは……っ!?!」

だんだんと、球体が消えていく。

球体の中にあるのは未来。

その姿は、またも変わっている。

両腕の甲、両肩、両膝についた盾。

頭部に生えているのは三本の角。

背中から生えた一對の巨大な翼と二本の角。

右手には両刃剣が握られている。

「天覇聖神流、移動術式之型、刹那」

未来の背後から声が響く。

注意しなければ聞こえない程の小さい、小さい声。

同時に未来の背後に現れたのはヴェル。

頭上に掲げられたツルギには、既に魔力が集まっている。

「天覇聖神流、剣術参之型」

紡がれる言葉に、未来は動かない。

振り向きもせず、ただ前を向き続ける。

「牛輪っ！」

振り下ろされ、放たれる五つの斬撃。

それぞれ、別の方向から未来に襲いかかる！

だが、それも弾かれた。

魔鎧装 異形態之盾・防御態

防御に特化したこの形態にとって、この程度の斬撃など痛くも痒くもない。

グルウ……

「土熊！」

ならば、とヴェルが放つのは豪の一撃。

だが、それも弾かれる。

渾身の力を込めた一撃を弾かれ、大きな隙ができる。

「かはっ……」

ヴェルの鳩尾に叩き込まれる未来の左拳。

肺の中の空気が吐き出され、動きが止まる。

エルを、未来は両刃剣で切り裂こうとして。

動きの止まったヴ

「斧術壱之型、豪破ッ！」

横から放たれる斬撃に動きを阻まれる。

その一撃は盾をくぐり抜け、未来の腹部に叩き込まれる。  
しかし、それでも少し揺らぐ程度のダメージしか与えられない。

「クレイ、離れろ！」

ヴェルの言葉に、クレイは未来から離れ距離をとる。

『Explosion!』

「剣術漆之型、奥義！」

同時に、ヴェルはツルギを振りかぶり、カートリッジを二発排出。  
その刃に煌めく魔力が纏われる。

「ハツ首卍龍ッ！」

放たれたのは八つの砲撃。

それらは龍のように動き、別々の方向、別々のタイミングで未来  
に襲いかかる。

それに対して、未来は左腕を掲げ、開く。  
掌に闇が集まり、それは球体を形成する。

ダークネス・ウォール  
暗黒之壁…

球体が巨大化し、未来を覆い隠す。

その壁はハツ首卍龍を弾き飛ばした。

「ちっ！」

舌を打ち、ヴェルは左へと飛ぶ。

同時にその場所を闇針が通り過ぎる。

グルウ…

ヴェルの後を追うように未来は闇を放つ。

それを飛びながら避け、ヴェルはツルギを待機形態に戻す。

そして、右手に風刃を、左手に雷刃を握る。

「風刃壱之型、鎌鼬<sup>かまいたち</sup>！」

放たれる幾つもの風の刃。

それらは空気を、闇を切り裂きながら未来へと飛翔する。

ガルル…

未来は闇を放つのを中断し、盾で鎌鼬を防ぐ。

しかし、それこそがヴェルの狙い。

歩法術、刹那を使い未来の懐へと飛び込み、風刃と雷刃を交差させる。

守りに優れているのなら、その防御力を越える一撃を叩き込めばいい…！

「風雷・二龍合成剣術…！」

言葉が紡がれ、二刃が溶けるように混ざり合う。

生まれたのは風を纏い、刃に雷を走らせる太刀。

風と雷、二つの属性を纏った太刀 風雷刃が生まれ落ちた。

「奥義…」

ゆっくりと、ヴェルは風雷刃を納刀する。

同時に、二人は風と雷に包まれ、雷が刃に、風が柄頭に集まり、圧縮される。

それに、未来は再び暗黒之壁を展開。自らを守る壁となす。

「旋風ッ！」

風雷刃を途中まで抜刀、柄頭を暗黒之壁に叩きつける。

圧縮されていた風が解き放たれ、柄頭を基点として暗黒之壁を包む。

同時に風は鎌鼬へとなり。

幾千、幾万もの風の斬撃が暗黒之壁を切り裂く！

それは暗黒之壁を砕くも、未来には届かない。

「轟雷刃！」

しかし、技はまだ終わってない。

風雷刃が完全に抜刀され、雷纏う刀身が振るわれる。

響く轟音。

同時に、圧縮されていた雷が解き放たれる。解き放たれた雷は

数本に分かれ、真っ直ぐ未来へと突き進む。

グルウ…！

未来は迫る雷を両腕の盾、そして全身の盾で受け止める。

盾は軋み、砕かれる。

それでも、雷を防ぐ事はでき、ダメージは負っていない。

「クレイ！ 今だ！」

「ああ！」

それでも、既に未来を守る盾は無い。いつの間にも移動したのか、未来の背後でクレイが両腕を振り上げる。

その右腕にはアープが、左腕には八龍刃が大地の一振り、地刃が握られており、アープの周りには菱形の盾、十個全てが浮いている。

「地刃、不死鳥之盾、合成斧術：奥義」 クレイの言葉と共に、地刃がアープに溶けるように混ざり合い、不死鳥之盾は炎へと姿を変え、アープを包み込む。

大地の力と炎の力。

二つの異なる力が混ざり合った結果、アープは圧縮された紅蓮の炎を纏い、金剛石の如き輝きを放つ！

「金剛、爆斧ッ！」

放たれた紅蓮の輝きは盾に守られていない未来に直接叩き込まれ、魔鎧装を砕く。

同時に、圧縮された炎が解放され。

未来を、不死鳥の姿をした炎が覆った。

炎の不死鳥は消え、爆煙が辺りを覆う。

それを見下ろすのはヴェルとクレイ。

風雷刃は風刃と雷刃に分かれ、炎刃と不死鳥之盾もアープから分かれている。

「……………」



樹が。川が。空気が。大地が。空が。世界が！

苦しみ。叫び。歪み。軋み。悲鳴を上げる！

その中心は爆煙、つまり未来。

「っ！ 飛燕！」

爆煙の中で何が起きているのか、それを知ろうと、ヴェルは爆煙へと斬撃を放つ。

「な……！？」

しかし、それが届く前に爆煙が晴れ、同時に飛燕が消える。爆煙を晴らし、飛燕を消したのは未来から放出された魔力。禍々しい、暗黒の魔力。

それを放った未来の全身からは、ゴポゴポと沸き立つように闇が溢れている。

溢れた闇は流れ落ち、未来の真下を中心として地面に広がっていく。

瞬く間に闇は広がっていき、数秒後、闇が止まる頃には約20km四方は闇に覆われていた。

ガ……ア……！

「っ！」「

未来から放たれる重圧に押されながらも二人はデバイスを構え、未来へと向ける。

それを見ても、未来は剣を構えない。

ガアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアツ!!!!!!

右腕に握る剣から闇が溢れ、未来を包み込む。

そして、闇はすぐに弾け。

闇の隙間から、未来の姿が少し見える。

その姿を見て、二人はある考えに至り、戦慄する。

もしも、“異形態全ての能力を持つ異形態”がいたら？

闇が晴れ、未来の姿が現れる。

その姿は紛れもない異形。

ただ、今までの異形態のどれよりも異質な姿となっていた。十本の角が生え、額に赤いクリスタルがついている、青き瞳を持つ頭部。

背中から生えている二本の巨大な角と無数の棘、互い違いに生えた剣翼と闇翼、二対四枚の翼。

甲から鋭い刃を生やした右腕。

肩には三本の角が生えた盾がついており、指先は黒く輝く禍々しい鉤爪となっている。

次に、甲に二本の角が生えた盾がついた左腕。

腕と盾の間から五つの銃口が伸びており、肩からは三本の鋭く尖った触手が生えている。

その指先は右腕のものより太い鉤爪となっていた。

尾は五本に増え、その全てが先端に三又の刃を持っている。

そして、刃が黒く染まった両刃剣と斧のような剣を両腕に握っている。

その姿は今までの異形態、全ての特徴を持っていた。  
速さの異形態たる瞬迅態。  
力の異形態たる剛力態。  
砲撃の異形態たる砲撃態。  
刃の異形態たる剣戟態。  
盾の異形態たる防御態。  
その、全ての特徴を。

魔鎧装 異形態之極・魔神態

グルウ……

「っ!？」

悪寒を感じ、ヴェルはツルギを横に構える。  
直後、ヴェルの体が吹き飛ぶ。

ガア……!

さっきまでヴェルがいた場所、クレイの真横に未来はいた。  
獰猛な笑みを浮かべ、斧剣を振り上げた体勢で。

「っ!？」

なんだ今の速さは!？

「……豪破ッ！」

未来の速さに戸惑いながらも、クレイはアープを真横に振るう。  
しかし、瞬迅態の速さを超える魔神態に当たる筈もなく、その一

撃は虚しく空を斬るだけだった…。

遅い…

「っ！」

真後ろから声が聞こえると同時、クレイの背中に何かが押し付けられる。

それは未来の左腕から伸びる銃口の一つ。

シヨット…

零距离で闇の砲撃が放たれ、クレイを貫く。

「かはっ………！」

そのあまりの威力に、クレイは意識を飛ばしそうになる。

それでもギリギリで意識を保ち、地面の闇に落ちる前に体勢を立て直す。

喰らえ…

「させん…！」

クレイに追撃をかけようとする未来の背後に、ヴェルが現れる。振り上げられたツルギからは紅蓮の火柱が立ち上る。

「剣術九之型、奥義…！」

未来は振り向き、ヴェルの方を向くが動かない。

避けようとも、防ごうともせず、ただただ迫る火柱を眺める。

「火龍烈火閃ッ！！」

近距離で放たれた火龍は未来に食らいつき、地面に広がる闇へと引きずっていく。

しかし、地面に辿り着く前に火龍は消えた。

否、消された。

その程度か…？

「マジかよ…」

クレイは思わずそう呟いた。

言葉にこそしていないが、それはヴェルも同じ。

それほどまでに、信じられないことが起きている。

無傷。

火龍の一撃を近距離で喰らって尚、未来は無傷だった。

しかし、ヴェル達が驚いているのはそれだけが原因ではない。

魔鎧装が、会話をしている。

今までの異形態のような咆哮や唸り声ではなく、ちゃんとした言葉を発している。

それはつまり。

魔鎧装が、“意思を持っている”ということ。

未来の意思ではない、魔鎧装そのものの意思を。

その程度ではないだろうか？ 本気を出せ、本気を。久方ぶりに目覚めたのだ。楽しませよ。血湧き、肉踊る戦いで、我を楽しませよ！

未来　否、魔鎧装の言葉を聞きながらも、二人はデバイスを構えるのみ。

固有武装を解禁する様子はない。

あくまで本気は出さないというのか？　ならばこちらにも考えがある。汝等が本気を出さねば…

そこで魔鎧装は言葉を区切り、首の魔鎧装を部分解除。魔鎧装の間から覗く肌へと、両刃剣を押し当てる。

この者を殺す

「「っ！」「」

その言葉に二人は驚く。

宿主が死ぬということは自身の消滅も意味する。

本気を出さなければ自身の消滅すらも構わないというのだから驚くのは当然といえるだろう。

「…本気か？　未来が死ねば、お前も消えるぞ？」

確かに我は消える。だが、次のカリバーンのマスターを宿主にすれば我は復活する。この者はただの人形だ。我が強者と戦う為のな。それで、どうする？　本気を出すか、この者を見捨てるか。早く答えねばこの者が死ぬぞ？

そう言って、剣を更に首へ押し付ける。

冗談ではないだろう。

二人が本気を出さなければ、魔鎧装は未来を殺す気だ。

「っ……！ ……わかった」

魔鎧装の言葉に、ヴェルはぎしりと歯を鳴らし、頷く。そして、懐からペンダントのようなものを取り出した。銀で縁取られた赤いクリスタルがついたペンダントを。

「クレイ。固有武装、セカンドリミット第二制限を解除するぞ。責任は俺が持つ」

「……了解」

クレイもまた、懐からペンダントを取り出す。そのペンダントには金で縁取られた青いクリスタルがついている。

「コード入力……」

二人は同じ言葉を同時に呟く。続いて、二人の口から文字では表せない言葉が紡がれる。そして、言葉が紡がれるにつれてペンダントが輝く。

「優里／フェニス、起動」

一際眩い輝きを放った後、ペンダントは消え、さっきまでペンダントがあつた場所には二人のユニゾンデバイスがいた。

ヴェルの前には銀色の髪をポニーテールにし、青の半袖ミニスカートの身を包んだ活発そうな少女が、クレイの前には金色の髪をセミロングにし、赤の長袖ロングスカートに身を包んだ無表情の無口そうな少女が浮いている。

「久しぶりだな、ヴェル。十年ぶりか、あたしを使うのは？」

「……久しぶり、クレイ」

銀髪の少女がヴェルに、金髪の少女がクレイに話しかける。  
しかし、のんびりと挨拶をしている余裕など、今の二人には無い。

「今はそんな話をしている場合じゃない。ユニゾン、いけるか？  
優里」

「十年ぶりだつてのに挨拶も無しか。ま、いや。ユニゾンならい  
つでもいけるぜ！」

「お前はどうか？ フェニス」

「……大丈夫」

二人の問いに優里とフェニスは頷き、両腕をそれぞれのロードに  
向ける。

「……ユニゾン・イン」「……」

優里とフェニスは溶け込むようにユニゾンし、二人の髪を銀色と  
金色に変える。

しかし、このユニゾンは固有武装では無い。

「固有武装、セカンドリミット第二制限解除……」

眩き、二人の体が光に覆われる。  
ヴェルは銀の、クレイは赤の光に。

「『デユナミスト・ギア適能者之鎧装』、展開」

「『ガイア・ギア大地之鎧装、展開」

二人の声が辺りに響き渡り、光が消える。光が消えた先で、二人は先程までは纏っていた鎧を纏っていた。

手甲、脚甲、兜、胸当て、腰当てのついた鎧を。

ヴェルの鎧は全身銀色。

胸部についている赤いクリスタル以外は全て銀色である。

クレイの鎧は銀色のラインの入った赤の鎧。

胸部にはヴェルのものより小さい、青いクリスタルがついている。

『デユナミスト・ギア適能者之鎧装』と『ガイア・ギア大地之鎧装』。

どちらもロストロギアに認定されている装備だ。

それが汝等の本気か。……さあ、我を楽しませよ！ 戦おうではないか！

叫び、魔鎧装は両刃剣と斧剣を構える。

それに二人は答えず、ただただ魔鎧装を睨む。

「『武神』、ヴェル・ウィルレイン……」

「『守護神』、クレイ・ウィルレイン……」

それぞれ自身のデバイスを構え、呟く。

そして、重心を落とす。

「「参る……」」

次の瞬間、ヴェルとクレイ、魔鎧装の姿が消え。

三人の真ん中で銀と金、黒の光が弾けた…。

第十七話 武神と守護神（後編）（前書き）

はい、約5ヶ月振りの更新です（汗  
遅れた理由は色々あるんですが……何を書いても言い訳にしかなら  
ないので止めときます（汗  
それでは、本編をどうぞ！

## 第十七話 武神と守護神（後編）

青い空に、銀と金、そして漆黒の光が至る所で火花を散らす。それらの光を放つのはヴェルとクレイ、魔鎧装。

姿が霞む程の速さで動き、激突する度に世界を軋ませる。

カオスダークネス…

「炎刃奥義…！」

深い闇が漆黒の剣に、紅蓮の炎が炎刃に集まる。

ブレード…

「業炎、烈破ッ！」

振るわれ、ぶつかり合う二振りの剣。

それにより発生した衝撃波だけで、世界が再度軋む。

世界が軋む程の衝撃波を発生させた技の威力はほぼ互角。いや、僅かに魔鎧装が押している。

「炎龍…！」

鏢迫り合いながら、ヴェルは呟く。

同時、炎刃が眩い光を放つ。

「咆哮！」

グオオオオオオオオオオオオツ！！！！

紡がれたのは追加スペル。

世界に響くは龍の咆哮。

炎刃に纏われし炎は解き放たれ、極大の熱線となり。

ヴェルを押し込んでいた魔鎧装を至近距離から飲み込む！  
しかし。

ダークネス・フィールド！

低い声が響くと同時、熱線が弾け飛ぶ。

否、押し返される。

闇を全身に纏った魔鎧装によって！

「ちっ！」

舌打ちし、ヴェルは熱線をカット。

移動術、刹那を使い魔鎧装の背後に回り込み、ツルギの切っ先を  
魔鎧装に向ける。

「優里っ」

『応！』

ヴェルの言葉に応え、ユニゾン中の優里は腕を広げる。

同時、ツルギの切っ先から青い光が洩れ始める。

『ブラスト！』

切っ先から洩れる光が幾つもの光球へと変化する。

『シヨット!』

放たれる光球群。

それを魔鎧装は斧剣を横薙ぎに振るい、かき消す。  
そのままヴェルへと駆けようとして。

「斧術式之型、月閃・飛翔!」

横から飛んできた三日月型の魔力斬撃に吹き飛ばされる。  
そして、魔力斬撃を放った人物　クレイは吹き飛ぶ魔鎧装に追撃をかける。

「斧術陸之型、奥義:!!」

腰溜めに構えたアープの刃に光が集い、赤く輝く。

「紅刃っ!　滅龍牙!」

赤い光を纏ったアープが一気に魔鎧装へと振り抜かれる。  
放たれる赤き斬撃。

それを魔鎧装は斧剣と両刃剣を重ねて防ごうとする。

しかし、それらは斬撃が触れた瞬間に“砕けた”。

なにっ!っ!

自分の武器が突然砕けた事に、魔鎧装は驚愕し、その動きが一瞬止まる。



「っ！？ フェニス！」

『…わかってる！』

咄嗟にクレイとフェニスは不死鳥之盾を前方に展開。  
同時、不死鳥之盾に衝撃が走る。

くくくつ。まさかああも簡単に武器を砕かれるとはな

「ちっ！」

『Flame ray!』

笑みを浮かべながら突っ込んでくる魔鎧装に舌打ちし、クレイは不死鳥之盾から炎の砲撃を放つ。

それを魔鎧装は上へ飛ぶことで回避。

右腕の甲から生えた刃が振り下ろされる。

「……刹那」

その一撃をクレイは移動術、刹那を使い避け。

魔鎧装の背後に回り込み、魔力を纏ったアープを振り下ろす。

しかし、その一撃は振り向いた魔鎧装の右腕に防がれ、弾かれた。

そつだ！ その調子だ！ もっと我を楽しませよ！！

「っ！」

魔鎧装の言葉にクレイは歯を食いしばり、アープを握る手に力が入る。

「……ぞけ……な……」

……何？

「ふざけんなつ！ 未来の事を人形扱いしておいて！ 何が楽しませろだ！！ そんなくだらない事の為に、未来の体を奪うんじゃないやねえ！！！」

クレイが叫ぶと同時に、不死鳥之盾が燃え上がる。

クレイの怒りに呼応するかのように、激しく燃え盛る。

その熱に、魔鎧装は一旦クレイから距離を取る。

何故だ？ 何故、そこまで怒りながら殺す気でこない？ 汝等にとってこの者は赤の他人であろう？ なのに何故、そこまでこの者を救おうと必死になれる？

「そんなの、仲間だからに決まってるんだろ」

仲間、だから……？

魔鎧装の問いにクレイは即答する。

「ああ、仲間だからだ。それに、未来は俺達にとって恩人でもある。だから、必死になれる」

クレイは魔鎧装を睨みすえ、そう続ける。

それを見て、魔鎧装は

くくくくく……、ははははははははははっ！！

笑った。

仲間だから必死になれる、か。くくく…

「何が可笑的い！」

いやなに、汝等がこの者を仲間だと言った事が、な

「何…？」

汝等に良い事を教えてやろう。我が目覚めたのはこの者が負の感情でカリバーンを振るったからだ。怨みや憎しみといった負の感情でな。心が弱いから簡単に負の感情に吞まれる。例え我を倒し、この者を救えたとして、この者は再び負の感情に吞まれるかもしれないぞ？ それでも汝等はこの者を救おうと思えるのか？ この者を、仲間だといえるのか？

魔鎧装の言葉に対し、クレイはアープを向け。

「言えるに決まってんだろ」

即答した。

「心が弱いから負の感情に吞まれる？ それがどうした。未来だって人間だ。負の感情に吞まれる時だってある。そういう時に助けてやるのが仲間ってもんだろ。それに、未来はな…」

『Load cartridge!』

カートリッジが排出され、魔力がアープを包む。  
赤く輝くアープを大上段に構え、クレイは魔鎧装を見据える。

「家族を傷つけられて何も感じないような冷たい奴じゃねえんだよ  
!!!」

叫び、同時にクレイの姿が消え、魔鎧装の目の前に現れる。

「斧術壱之型、豪破！」

振るわれる剛の一撃。

それを魔鎧装は右腕で受け止める。

「ぐ…っ！」

しかし、大地の力が込められた一撃を無傷で受け止められる筈もなく、その装甲にひびが入る。

それを確認したクレイは魔鎧装を蹴り、距離を取る。

「今だ！ 兄貴！」

「ああ！」

同時に、クレイの背後から四振りの太刀が飛翔する。  
それらはヴェルの固有武装、八龍刃のうちの四振り。  
炎刃、氷刃、風刃、雷刃。  
放たれた四刃は魔鎧装の翼、それぞれを貫く。

「空間固定…」

四刃が貫くと同時にヴェルが言葉を紡ぎ、四刃は空間に固定される。

それにより翼を貫かれている魔鎧装は身動きが取れなくなる。

『Explosion!』

ツルギからカートリッジが二発排出され、その刀身を赤、青、緑、黄の四色の魔力が包む。

輝くツルギを腰溜めに構え、ヴェルは魔鎧装へと駆ける。

ーくっ！ー

近づかせまいと魔鎧装は翼から剣と闇のスフィアを放つ。

それらをかわしながら、ヴェルは魔鎧装との距離を詰めていく。

「四龍合成剣術」

ツルギの刀身がさらに輝き、それに呼応するように凄まじい魔力を放つ四刃。

その魔力はそれぞれの太刀が宿す属性となり具現化し、魔鎧装の装甲を傷つける。

それにより魔鎧装は怯み、剣とスフィアが止む。

その隙をつき、ヴェルは一気に魔鎧装の目の前へと駆け。

「狂乱・龍神閃華」

言葉が響いた時、ヴェルは魔鎧装の背後現れた。

“ツルギを振り抜いた体勢”で。

ガ…ッ!?

数瞬遅れて、魔鎧装の全身にヒビが入る。  
そのヒビからはツルギが放っていたのと同じ四色の魔力が漏れ、  
魔鎧装を覆っていく。

「狂い咲け」

魔力が魔鎧装の全身を覆うと同時に、ヴェルはポツリと呟いた。

瞬間、華が咲いた。

魔鎧装を中心に、何輪もの四色の華が！

赤き炎の華はその燃え盛る炎で。

青き氷の華はその凍える冷気で。

緑の風の華はその真空の刃で。

黄の雷の華はその雷鳴轟かせる稲妻で。

狂ったように咲き乱れるその華々は魔鎧装の装甲を燃やし、凍らせ、切り裂き、穿っていく。

そして、その華々を押し分け一際大きな蕾が現れ。

それは開花すると同時に、轟音を響かせ爆発。

魔鎧装はたちまち爆煙に包まれた。

「戻れ」

爆煙に左手を向け、ヴェルは呟く。

それに応えるように、爆煙から四刃が飛び出し、ヴェルへと飛ぶ。  
ヴェルはその内の一振り、風刃を掴み、軽く振るう。

それだけで突風が吹き、爆煙は一瞬の内に晴れ、魔鎧装の姿が確

認めるようになる。

グ…ガ…ッ！

その姿は既に魔神態ではなくなっていた。

全身の装甲は砕け、右足と左腕、右側頭部にほんの僅かに残っているだけ。

それ以外の部分は未来のバリアジャケットになっている。

「う…っ！」

「！ 未来か！？」

魔鎧装に自我を乗っ取られている筈の未来の呻き声にクレイが反応する。

そしてヴェルと共に駆け寄ろうとして。

「来るなっ！！！」

「っ！！！」

拒絶された。

「俺の意識が戻ってられるのは少しの間だけだ…！ 今も、少し気を抜いただけで魔鎧装に乗っ取られそうだ…！ 俺は、お前等を傷つけたくない！ だから…ぐっ！」

苦しそうに言葉を紡ぐ間にも魔鎧装の装甲は修復され、未来の意識はだんだんと失われていく。

それでも未来は耐え、意識が完全に失われないように抵抗する。

そして。

「だから…！ 俺を、殺せ！」

「な…っ！？」「

これ以上仲間を傷つけないから、未来は自分を殺すように言う。

その言葉に、二人はショックを受ける。

「何言ってるんだよ！」

「このままじゃ、やがて俺の意識は完全に魔鎧装に乗っ取られる…

！ そんな事になったら、俺はお前等を、仲間を傷つける事になる

！ そんなのは嫌だ！ だから！ …頼む。俺を殺してくれ…！」

涙を流しながら、未来は二人に頼む。

それに二人は怒ろつとして。

「何、馬鹿な事言ってるのよ！」

三人の頭上から声が降ってきた。

声を発したのはのぞみ。

その周りにはフェイト達、六課からの出動陣がいる。

「のぞみ…？」

「何が、仲間を傷つけないから殺してくれよ！ あんたの仲間はそんな簡単に仲間を見捨てるような奴なの！？ 違うでしょ！」

「そんなのわかってる！」

のぞみの言葉に未来は怒鳴る。

仲間達がそんな奴じゃない事ぐらい、わかってる。

それでも…

「それでも…！ 俺はお前等を傷つけないんだよ…！」

「あんなね…！」

未来の言葉に、のぞみは拳を強く握る。

「私達はある人を助ける為に来たのよ！ 傷つくのも覚悟の上で！  
なのに、私達を傷つけたくないから殺してくれ？ ふざけんじや  
ないわよ！ そんなの只の逃げじゃない！ 私達を理由にして、自  
分が傷つく事から逃げてるだけじゃない…！」

「そんな事…！」

「ない、なんて言わせないわよ！ だって本当の事じゃない！ 怖  
いんでしょ？ 私達を自分の手で傷つける事が！」

「っ…！」

未来を睨みつけ、のぞみはそう言い切る。

それに未来は言い返せない。

のぞみの言うとおり、自分の手でのぞみ達を傷つけるのが怖いから。  
ら。

「あんたは分かってない。あんたは私達を傷つけないから殺し

てくれって言うてるけど、それで私達が……私達の心がどれだけ傷つくか全然分かってない！ いい？ 体に負った傷なら時が経てば治る！ でもね！ 心に負った傷はいくら時が経っても治る事はないのよ！」

「のぞみ……」

「そうですよ！」

のぞみに続くようにセレナが涙を流しながら叫ぶ。

「お前……セレナか……？」

「そうです！ セレナ・マーテリアです！ せつかく再会できたのに……！ お願いですから、死ぬなんて言わないでくださいよお……！」

その瞳から大粒の涙を零し、セレナは俯く。  
そして、フェイト達も二人に続く。

「そうだよ！ そんな簡単に死ぬなんて言わないで！」

「未来様が死んだら、私達がどれだけ悲しむと思ってるんですか！？」

「未来さんが私達を庇って消えた時だって、とても悲しかったんですよ！？ そんな悲しみをまた味わわせるつもりなんですか！？」

「あなたね……こんなにもあなたの事を想ってる人がいるのに、まだ死ぬなんて言うの！？」

「フェイト…キリユウ…サラ…セラ…」

フェイト達の言葉に、未来は生きたいと思い始めた。  
しかし。

ドクンッ！

「ぐ…っ！」

そんな気持ちを奪おうとするかのように、魔鎧装が未来の自我を乗っ取るうと蝕んでいく。

すでに魔鎧装は未来のほとんどを覆っている。

未来の自我が表に出ていられなくなるのも時間の問題だろう。

「殺してくれ…！」

「っ！ あんた、まだそんな事言うの！？」

力を振り絞り、未来は言葉を紡ぐ。

それにのぞみは再度怒鳴るが、未来は耳を貸さない。

このまま魔鎧装に自我を乗っ取られてしまったらすぐにのぞみ達を傷つけようとするだろう。

今、のぞみ達は自分を説得しようとしており、戦う準備は出来ていない。

高確率でのぞみ達を傷つけてしまうだろう。

最悪、誰かを殺してしまうかもしれない。

そんなのは嫌だ。

そう思い、未来は自分を殺すように頼む。

それが、未来を完全に乗っ取る為に魔鎧装が植えつけた偽りの思いとは気づかずに。

「助かる方法もわかってない。第一、本当に助かるかどうかも分からない……」

普段の未来ならこんな弱音は吐かないだろう。

仲間達を信じ、生きる事を諦めないだろう。

しかし、魔鎧装に蝕まれた未来の心はそこまで弱っていた。

「それに、俺は一度消えた存在。お前等には二度と会えない筈だったんだ。それが、また会う事ができ、少しの間だが日常を送れた。それだけで、俺は十分なんだよ。だから……殺してくれ」

そう言っつて、未来の自我は魔鎧装に乗っ取られた。

そして、弱音を吐いた未来に、のぞみは完全にキレた。

「はやてちゃん、先に謝っておくね。ごめん」

「のぞみちゃん？ 何する気や？」

のぞみははやてに通信を開き、俯きながらそう言う。

突然の謝罪にははやては困惑し尋ねるが、のぞみはそれを無視して両の拳を自身の胸の前でぶつけ合う。

「後でいくらでも始末書書くからさ……」

両腕のノアからカートリッジが排出される。

その数、四。

「今はこのバカを、思いつきりぶん殴らせて！」

叫び、のぞみの体が白銀の魔力に包まれる。  
そして、バリアジャケットが再構成されていく。

『Full Drive!』

ノアの声が響き、のぞみを包む魔力が弾け飛ぶ。  
現れたのぞみの体は白銀の装甲に包まれていた。

「何が傷つけないよ…」

白い袖無しジャケットが消え、黒の半袖シャツが赤いインナーに  
変わり、ミニスカートの上から纏っている白銀のオーバースカート。

「何が十分なんだ、よ…」

更に、その上から装着されるは白銀の胸当て。

それだけでなく、同じく白銀の装甲がのぞみの肩、腰周り、脚に  
装着される。

「仲間の事を信じないで…」

胸当ての中心には赤い菱形の宝石がはめ込まれており、そこから  
全身の装甲に赤いラインが走る。

そして、両腕のノアが僅かにその形を変え、右のノアには炎の、  
左のノアには雷の紋様が刻まれている。

「何が…!」

炎の力を纏うのは赤く輝くガントレット、『ノア・インフェルノ』  
雷の力を纏うのは金色に輝くガントレット、『ライトニング・ノ』

ア

「殺してくれよー!!」

叫ぶと同時に、のぞみの体から凄まじい量の魔力が溢れる。

グルウ…!

「何の為にカコちゃんが身を挺してあんたを守ったと思ってんの！  
？ あんたに生きて欲しいからでしょうが！」

唸る魔鎧装・通常態に対し、のぞみは叫ぶ。

この声が未来に届いているかどうかはわからない。

それでも、届いていると信じて、のぞみは未来に声をかける。

「あなたの意識をもう一度引っ張り出す。そして、絶対にあなたに  
…」

言葉を区切り、のぞみは拳を構える。

それを見て、フェイト達も自身のデバイスを構える。

「生きるって言わせる!!」

ガアアアアアアアアッ!!

魔鎧装は咆哮をあげ、敵対するのぞみ達へと一気に駆け出した。

「私が行くわ！」

「私も行きます！」

「私も！ ヴェル兄達は援護お願い！」

突っ込んでくる魔鎧装に対し、真っ先にのぞみが飛び出す。

それに続くようにキリュウとサラも飛び出し、ヴェル達はその場で魔法を発動する。

「バルディッシュ！」

「ゾファイ！」

『 Load cartridge! 』

フェイトとセレナ、それぞれのデバイスである斧槍と銃からカトリッジが排出され、二人の周囲に金色のスフィアと茜色の光輪が現れる。

「プラズマランサー！」

「ギロチンショット！」

「ファイア！/シユート！」

同時に放たれる雷槍と光輪。

それはのぞみ達を追い越し、迫る魔鎧装に着弾する。

アアアアアアアア！！

しかし、魔鎧装はそれをものともせず突っ込んでくる。

「アグル、アローフォーム」

『All right. Arrow form』

セラはアグルをクローの付いたガントレットから弓に変え、つがえた矢を魔鎧装に向ける。

「天覇聖神流、弓術参之型、散」

放たれた五本の魔力矢。

それは当たる直前で拡散、魔鎧装の視界を埋め尽くすほどの大量の魔力矢となつて魔鎧装の動きを一瞬止める。

「ナイス、セラ！」

動きの止まった魔鎧装にサラは一気に距離を詰める。そして、魔鎧装に切りかかろうとコロナを振り上げ。

ガアッ！

そのがら空きの胴体へと、魔鎧装は左の拳を突き出す。普通ならかわせない一撃。それを見て、サラは“笑っていた”。

「天覇聖神流、舞術伍之型」

いつの間にか下ろされていた右のコロナを突き出された魔鎧装の左拳に当て、サラはその一撃を受け流す。

そのまま流れるように魔鎧装の左腕、右腕、左足、右足の関節を

斬りつけていく。

「氷舞」

そして、魔鎧装の背後に抜けた所でサラはポツリと呟く。  
同時、斬りつけられた魔鎧装の関節が凍りついた。

グウ……ッ！

関節が凍りついた事で魔鎧装は動きを封じられる。

「キリユウ姉！」

「はい！」

動けない魔鎧装へとキリユウが迫る。

コスモスの切っ先を魔鎧装へと向けたその構えから考えられる攻撃は突き。

「天覇聖神流、槍術式之型」

コスモスを構えたままキリユウは呟く。

次の瞬間、魔鎧装は吹き飛ばされていた。

「幻突」

吹き飛ばす魔鎧装の装甲には十の穴が空いていた。  
それは先ほどキリユウに突かれた事で空いた穴。  
動いたように見えなかったのはその動作があまりにも速かったか

ら。

つまり『突いて、引く』という動作を見えない程の速さでやった事になる。

それだけでも驚異的な速さなのに、キリユウはそれを十回も繰り返したのだ。

「十発、ですか。ちょっと調子悪いですね」

突きの構えを解いて、キリユウは魔鎧装を見据え、呟く。

“調子が悪くて”十発。

なんともデタラメな速さである。

『Sonic move!』

高速移動魔法で魔鎧装の吹き飛ばされる場所に先回りするのぞみ。

右のノアからカートリッジを排出し、腰溜めに構える。

「フレイム…!」

右のノアを包む炎が激しく燃え上がる。

吹き飛んでくる魔鎧装へと右腕を引き。

「インパクト!」

間合いに入ると同時に放たれる炎纏う拳!

その一撃は吸い込まれるように魔鎧装の鳩尾に叩き込まれ、爆発を起こす。

「まだ!」

更に、のぞみは魔鎧装に追撃をかける。

右正拳突き。

左回し蹴り。

裏拳。

左上段蹴り。

そして掌底。

「サンダー！」

掌底により僅かに距離が空いた隙にのぞみは左腕を引く。

ノアを雷が包み、バチバチと音が鳴る。

「インパクト!!!」

叫び、雷纏う拳が放たれる。

それは魔鎧装に叩き込まれると同時に。

雷が魔鎧装の体を貫いた。

「フェイトちゃん！」

「うん！」

声をかけ、のぞみは痺れて動けない魔鎧装をフェイトの方へと蹴り飛ばす。

「バルディッシュ！」

『Zamber Form!』

フェイトは魔鎧装へと駆けながらバルディッシュをザンバーフォームへと変える。

そしてカートリッジを二発排出する。

「はっ！」

すれ違いざまに魔鎧装を斬り、その勢いそのまま後ろに抜ける。

「トライデント！」

そして左腕に魔力を集めながら振り返り、魔鎧装に左腕を向ける。  
展開される魔法陣。

「スマツシャー！」

放たれる三つ又の砲撃。

それは真っ直ぐ突き進み、魔鎧装に収束。  
爆発を起こす。

「アグル、カートリッジロード」

『Load cartridge!』

セラは魔鎧装にアグルを向け、カートリッジを排出する。

「弓術き之型、破！」

放たれる巨大な魔力矢。

それは真っ直ぐ突き進み、爆煙に飛び込み。

ガ…ッ！

魔鎧装を的確に貫き、爆煙からはじき出す。

「舞術き之型！」

はじき出された先に回り込んでいたサラが魔鎧装にコロナを向ける。

「炎舞！」

コロナの刀身を炎が覆う。

サラは激しく舞いながら魔鎧装を斬っていく。

斬られた所からは炎が燃え上がり、魔鎧装の装甲を破壊していく。

「はっ！」

……ガアッ！

止め、とばかりにサラは両のコロナを重ねて突きを放つ。

それに対し、魔鎧装も右手に闇を集め突き出す。

炎を纏った剣と闇を纏った拳がぶつかり合い、衝撃波を発生させ、均衡する。

いや、僅かにサラの方が押しているようだ。

それを押し返そうと、魔鎧装は更に力を込める。

「……フッ」

同時にサラは力を抜き、体を横に滑らす。

押し返そうと込められた力は行き場を失い、魔鎧装の体は前めりになる。

その隙だらけの背中に、サラはコロナを上段から振り下ろす！

ガ……ッ！

「ミシリ、という音が鳴り、魔鎧装の体が逆くの字に曲がり吹き飛ぶ。」

吹き飛びながらも魔鎧装は右手に闇を集め、自分を吹き飛ばしたサラを攻撃しようとし。

「マルチショット！」

その四肢に、十字架型のスフィアが打ち込まれ動きを阻害される。

グウ……！

「ゾフィ、サードフォーム」

『All right・3rd form』

スフィアを放った人物、セレナがハンドガンからキャノン砲に変わったゾフィを魔鎧装に向ける。

砲身に環状魔法陣が展開され、魔力が集まる。

「エンシエントキャノン！」

放たれた茜色の砲撃は瞬く間に魔鎧装を呑み込み、吹き飛ばす。魔鎧装はそのまま抵抗せずに落下し。

『な………！？』

地面に広がる闇に、溶け込んだ。

「地面に……溶け込んだ……？」

「ちっ、どうやって攻撃すればいいの……よっ！」

『Flame buster!』

信じられない、といった風にフェイトが呟き、のぞみは舌打ちしながら地面に砲撃を放つ。

それは広がる闇に穴を空けるが、すぐに塞がれてしまった。

ダークネス・ニードル  
暗黒之針

空間に魔鎧装の音が響き、地面から闇でできた無数の針が飛び出す。

突然の攻撃にのぞみ達は驚きながらも、針を回避し、反撃しようとする。

しかし、反撃しようにも魔鎧装は闇の中。

その上、闇は約20km四方に広がっている為、闇の針はほぼ無尽蔵。

このままでは膠着状態が続き、未来の意識を引っ張り出す前に自我を失ってしまうかもしれない。

その考えから来る焦りに、ヴェルとクレイ以外は時折、死角から接近する針になかなか気づかず、ギリギリまで迫ってから避ける事になっている。

「……まずいな。焦っているせいで少し動きが鈍ってきている……」

「だな。どうにかして魔鎧装を闇から引きずり出さないと…」

クレイの言葉にヴェルは「仕方ない…」と呟き、炎刃を手取る。

「クレイ、キリユウ達全員にシールドを張れ」

「っ！ ……まさか、解放すんのか？」

「ああ、それが一番手っ取り早い」

「……わかった」

クレイが手を上げると、不死鳥之盾が動き、キリユウ達を球状の炎の盾が包む。

それを確認すると、ヴェルは針を避けながら炎刃を地面に投擲する。

投げられた炎刃は地面に到達すると同時に闇に呑み込まれる。

そして、それこそがヴェルの狙い。

「炎刃、解放」

ヴェルが言葉を紡ぎ、闇の中から凄まじい熱が放たれる。

それは上空にいるヴェル達にも感じられる程の熱。

ヴェルはそれを気にとめず、ツルギを体の前で立てる。

「炎龍、降臨」

瞬間。

火柱が上がった。

地面に広がる闇と同じ、約20km四方から上がる火柱が。

火柱は上空まで上がり、ヴェル達をも呑み込む。

普通ならこの炎によりヴェル達は焼け死ぬのだろうが、炎はヴェルを避け、のぞみ達もクレイが張ったシールドにより守られている為、焼け死ぬ事はない。

ただ、熱まで防ぐ事はできない為、のぞみ達は汗をかいている。

「以前よりも火力が上がってる…?」

「そうですね…。前見た時はせいぜい5kmでしたのに…」

「前見たのが10年前だったとはいえ、ここまで上がるとは…」

「流石、ヴェル兄さんだね…」

クレイ達、ヴェルの弟妹が火柱を見て驚きの声を上げる。

その間にも火柱は闇を燃やし尽くしていく。

やがて、闇が全て燃やし尽くされ、魔鎧装の姿が確認できるようになる。

底が見えない程の深く、広い穴の上に浮かぶ魔鎧装。

その装甲にはヒビが入り、所々未来のバリアジャケットが覗いている。

グルウ………!

「まだ、未来の自我は引つ張り出せないか………なら、炎龍!」

ヴェルの声に応じ、火柱が細くなりとある形となる。

それは龍。

炎を纏い、太く長い体を持つ龍。  
龍は魔鎧装を睨みながら、ヴェルの隣に移動する。

「「「りゅ、龍!?!」」」

初めてそれを見たのぞみ達が驚きの声をあげる。  
声には出していないがシグナムも驚いている。

「ああ、お前らは見るの初めてだったな。あれは兄貴の固有武装、八龍刃が一振り、炎刃を解放した姿、炎龍だ。元々俺ら兄妹の固有武装、第一段階は幻獣を封じ込めてその力を借りるものでな。力を解放することで幻獣を顕現させることが出来るんだ」

シールドを解きながら、クレイがのぞみ達に説明する。

「それじゃ、あんたやキリユウ達も顕現させられる訳?」

「いや、幻獣を顕現させることが出来るのは兄貴だけだ。顕現させるには強大な精神力と幻獣との心からの絆が必要でな。俺達ができるのはせいぜい武具の状態での解放ぐらいだ」

「へえ……」

ガアッ!

クレイの説明にのぞみが驚いていると、魔鎧装が叫び、突っ込んできた。

その全身に闇を纏い、自分自身を闇の矢として。  
それに対し、ヴェルは右手を上げる。

「炎龍、行け」

手が振り下ろされると同時に、炎龍が魔鎧装へ向け駆け出す。

グオオオオオオオオオオツ！！

ガアアアアアアアアツ！！

ぶつかり合う炎の龍と闇の矢。

凄まじい衝撃波を発生させながら、互いを貫こうと押し合う。

そして、敗れたのは魔鎧装。

纏った闇を炎に焼かれ、炎龍に噛みつかれ。

爆発。

爆発！

爆発ツ！！

次々と起こる爆発が魔鎧装の装甲を砕いていく。

グオオオオオオオオオオツ！！

一際大きな爆発が起き、炎龍は炎刃に戻り、ヴェルの手に収まる。

グルウ……！！

爆煙の中から姿を現す魔鎧装。

その装甲は頭部のみとなっている。

ガアツ！

装甲が残り僅かになるうとも、魔鎧装はヴェル達を殺そうと突っ込んでくる。

「まだ駄目か……。天覇聖……」

「私にやらして」

向かってくる魔鎧装に斬撃を放とうとしたヴェルを止め、のぞみが前に出る。

『Load cartridge!』

左右それぞれのノアから二発、計四発のカートリッジが排出される。

それぞれの拳に宿る炎と雷。

のぞみは右腕を引き、それに左腕を重ねる。

すると、左腕に宿る雷が右腕に移り、炎の上から雷が右腕を包む。

「いい加減……!!」

向かってくる魔鎧装にのぞみは駆ける。

未来を救いたいという想いを込めて、右腕を引く。

そして、轟音と共に烈火と稲妻を纏い、想いを込められた拳が放たれる!

「目え覚ませ! この馬鹿あああああ!!!」

天鳳、焰雷掌



せつて言うの!？」

「でも……!」

「助かる方法がわかってない? それなら探せばいい! 本当に助かるかどうかも分からない? 探してもしないでそんな事言うな!! それに、一度消えた存在? 少しの間日常を送れて十分? 折角戻ってこれたんなら、もっと生きようとしなさいよ!!」

その瞳に涙を溜め、今にも泣きそうになるのをこらえながらのぞみは言う。

許せない。

折角戻ってこれたのに、生きる事を諦めようとする未来が。

カコちゃんが身を挺してまで守った命を簡単に捨てようとする未来が。

のぞみはスーッと、大きく息を吸い、叫ぶ。

「諦めるな!」

「……っ!」

のぞみの言葉に、未来は小さい頃に父に言われた言葉を思い出した。

それは、父に剣術の鍛錬をつけてもらっていた時の事

とある家の庭で、二人の少年と男性が向かい合っている。

見た目六歳ぐらいであるう少年は両手で木刀を構え、緊張した面もちで男性を睨んでいる。

対する男性も右手に木刀を持ってはいるが、構えずにその切っ先は地面を向いている。

この二人こそ、当時六歳の未来とその父、日比野和樹だ。

「やあああつ！」

叫びながら、未来は自分より倍以上も背の高い和樹に飛びかかる。そして、大上段に構えた木刀で切りかかろうとして。

「ヒョイっ」と

「あうっ！」

しかし、容易く後ろに回り込まれてしまい、後ろ襟を掴まれ宙吊り状態になる。

「うう〜」

「気迫は良かったが、打ち込む時が隙だらけだぞ、未来」

「は〜い…」

先ほどの打ち込みの欠点を述べながら、未来を地面に降ろす。そしてまた、未来は和樹に向かっていった。

〜数十分後〜

「でやあああつ！」

今度は無理に高い位置を狙うのではなく、足を狙いバランスを崩しにいく未来。

真っ直ぐ向かってくるのを見て、和樹は苦笑する。

「甘い」

突っ込んでくる未来を和樹は跳躍し、飛び越える。

しかもご丁寧に空中で体を半回転させ、未来の方を向いて。

「っ！ はっ！」

「おおっ！」

背後に回り込まれ、このままでは攻撃を食らうと思った未来は木刀を地面に刺し、それを支点として倒立の要領で足を跳ね上げる。

思いもよらない攻撃に和樹は一瞬驚くが、上半身を僅かに引き、避ける。

その隙に未来は地面に降り、素早く和樹から距離を取る。

「はあ……はあ……！」

もうかれこれ一時間以上は手合わせしている為、未来は息がかなり荒くなってきている。

それでもこの歳で一時間以上も動いているのはこの鍛錬の賜物だろつ。

「今のは良かったぞ。危なく一撃もらう所だった」

「その割には……余裕そうだよな……」

「そりゃ、仮にもオーバーSランクだぞ？ 魔法無しとはいえ、まだまだお前には負けんよ」

笑いながら言う和樹に、未来は「む」<sup>〽</sup>と唸りながら木刀を構える。

呼吸を落ち着け、目の前の相手に集中する。

そして、木刀を正眼に構えたまま駆けよつとして。

「和樹さん、未来。もうすぐお夕飯できますから、そろそろ鍛錬を止めてお風呂入って下さいね？」

家の中から聞こえた少し間延びした声に集中力が切れ、未来は足下の石に躓き転んだ。

「大丈夫？ 未来」

それを見て、家の中から黒い髪をセミロングにしたエプロン姿の女性が出てくる。

この女性は日比野美穂、未来の母だ。

ちなみに、和樹と同じくオーバーSランクであり。

その上デバイスマスターの資格も持っており、メビウスリング、ガイア、ノアを作ったのも美穂である。

「む」。お母さん、急に出てこないですよ。折角集中してたのに」  
起き上がりながら、未来は美穂に文句を言う。

「こら。それはお前の集中力が足りなかったからだぞ。もっと集中すれば些細な事では集中力は途切れなくなる。それを母さんのせい

にするんじゃない」

「は〜い……。ごめんなさい、お母さん」

和樹の言葉に、未来は頭を下げる。

そんな未来の頭を美穂は撫でる。

「よしよし。未来はいい子ね〜」

「ふみゆ〜…」

未来は目を細め、気持ちよさそうにしながら頭を撫でられる。それを見て、和樹と美穂は微笑みを浮かべる。

「と、そろそろ飯だったな。よし、未来。最後にもう一度手合わせして今日の鍛錬を終わるぞ」

「うん！」

和樹の言葉に未来は美穂から離れ、木刀を構える。

そして、和樹との距離を一気に詰め、鳩尾を狙い木刀を突き出す。その切っ先に和樹は木刀を当て、軽く捻る事で受け流す。

そのまま未来の背後に回り込み、頭に左腕を伸ばす。

「っ！」

それに気づいた未来は体を前に投げ出し、前転。

起き上がりながら和樹の方に体を向ける。

軽くその場でリズムを取り、未来は和樹へと駆ける。

そして、突きを放つと見せかけて和樹の手前で左に方向を変える。そこに生えている樹の根元に置いてある石に足をかけ跳躍。樹を駆け上がりながら再び跳躍し、ばく宙しながら和樹の頭上を飛び越える。

「はっ！」

上手く着地の際の衝撃を和らげ、未来は和樹の背後から木刀を突き出す。

決まった！

和樹が動かないのを見て、未来はそう思った。しかし、その未来の思いはすぐに砕かれた。

「よっ！」

和樹はその場で跳躍し、突きを回避。ばく宙しながら未来の後ろに着地する。

「はい、お終い」

そう言いながら和樹は右手に持つ木刀で軽く未来の頭を叩いた。

「あゝ！ 今のは決まったと思ったのに〜！」

悔しそうに言いながら未来は地面に仰向けに倒れる。それに和樹は苦笑しながら近づき、起きあがらせる。

「鍛錬はお終い。軽くストレッチして風呂入るぞ」

「は〜い」

そして二人はストレッチを始め、美穂は家の中に戻っていった。

「ぎっぶ〜ん！」

「ちょっと待て」

日比野家、風呂場。

その湯船に飛び込もうとした未来の首が後ろから掴まれる。

それにより未来は湯船に飛び込む事ができず、この日何度目かの宙吊り状態になった。

「む〜！ 何すんの、お父さん！」

「湯船に浸かるのは体を洗ってからだ。泥だらけの体で入ったらお湯が汚れるだろ」

「は〜い……」

未来は渋々ながらも頷き、椅子に座り。

「と見せかけて！」

「いじり」

「わっ！」

再度飛び込もうとするが、和樹に足を払われ、その場に倒れた。ちなみに、頭はちゃんと受け止められている。

「体洗うぞ〜」

そう声をかけ、未来を洗い始める。

全身の泥を流してから、よく泡立てたタオルでゴシゴシと洗い、最後にシャワーで泡を洗い流す。

そして洗い終わった事を伝えるかのように未来の頭を軽く撫で、和樹は「お終い」と言う。

未来はすぐに立ち上がり。

「ぞつぶ〜ん！」

今度こそ、未来は湯船に飛び込み、水飛沫をあげる。

余談だが、この家。

ミッドチルダ郊外にある廃ペンションを買い取り、改築した為、数十人は泊まれるほどの広さがある。

その為、年末等の親族が集まる時は大抵この家に集まっている。そして、その広さは風呂場にも当てはまる。

今未来達が入っている十数人は入れる浴槽の他に、この日は掃除をしている為使えないが、露天風呂、薬湯、滝湯、さらにはサウナや砂風呂まであったりする。

「風呂で泳ぐなよ〜」

今にも泳ぎだしそうな未来に釘を刺し、和樹は自分の体を洗い始める。

それをぼんやりと眺めながら、未来は呟く。

「それにしても、お父さん強過ぎだよ。今までだってこれは決まっ  
たと思っても全部避けられるし。絶対勝てないよ……」

「……」

「痛っ！」

弱音を吐いて俯く未来の額に、泡を洗い流した和樹は苦笑しながらデコピンをくらわせる。

そして、湯船に入り未来と目を合わせる。

「すぐに諦めないのは長所だが、何回も失敗すると諦めるのはお前の悪い癖だぞ。お前が強くなりたいて思っようになったのはどうしてだった？」

和樹の言葉を聞いて、未来は自身の左腕を見る。

そこには、塞がってはいるがまだ真新しい一筋の斬られた痕があった。

「……大切な人を、守れるようになりたいから」

「そうだろ？ だったら勝てないなんて言っな。諦めたらそこで終わる。出来る事も出来なくなるぞ。……それとも、お前は大切な人を守る時に、相手に何回も負けたからって諦めるのか？」

「……うっん、諦めない」

和樹の言葉に、未来は下を向いていた顔を上げ、そう言う。

その瞳には、六歳とは思えない程の確固たる意志が宿っていた。

「ああ、諦めなければ、きっと神様が後押ししてくれる。だから諦めるな」

「うん！ 絶対に諦めない！」

「よし、だったらお父さんと約束してくれ。何事も決して諦めないって」

「約束する！ じゃあ、指切りだね！」

そう言っつて、未来は満面の笑みを浮かべながら小指を立てた右手を前に出す。

和樹は一瞬キョトンとするも、すぐに笑みを浮かべ、その指に自身の小指を重ねる。

「ああ、指切りだな」

「指切りげんまん、嘘ついたら針千本飲めます！ 指切った！」

指が離れた時、二人は満面の笑みを浮かべていた。

「……何、やってんだろうな、俺」

未来の胸ぐらを掴むのぞみの手に一粒の雫が落ちる。それは未来の瞳から流れる涙。

「未来……？」

「こんなにも、俺の事を助けようとしてくれてるのに……父さんと約束まで破って……生きる事を、諦めてた……」

涙を流しながら未来はそう呟く。

そして、のぞみの頬を撫で、その瞳から零れる涙を拭う。

「な……っ!」

突然の未来の行動にのぞみは驚き、頬を赤く染める。  
その際、胸ぐらを掴む手の力が僅かに緩んだ。

「ありがとう……。お前らのおかげで、大事な事を思い出せたよ……」

そう言って、未来はのぞみの肩に手を置き、押す。  
胸ぐらを掴んでいた腕は離れ、二人の距離が離れる。

「っ! 未来!?!」

「大丈夫。俺はもう生きる事を諦めない。俺も、自我を乗っ取られないように抵抗する」

未来の体から光が洩れる。

それはのぞみの前に集まり、人の形を取る。

光が消えると、そこにはルナがいた。

ただ、気を失っているようで、その瞳は閉ざされている。

「っ!」

落ちそうになるルナをのぞみは慌てて受け止め、未来の方を見る。未来の体は半分程まで魔鎧装に覆われており、その足元には転移魔法陣が展開されていた。

「ルナなら何か知ってるかもしれない。きっと役に立つ筈だ。……お前達の事、信じてるから。必ず助けしてくれるって、信じてるからお互い、頑張ろうな……」

そう言っつて、未来はその場から消えた。

「……ええ、絶対に助けてみせる。どんなに傷つこうと、絶対にあんたを」

未来が消えた場所を見ながら、のぞみはその決意をさらに固めた……。

後書きコーナー

のぞみ

「さて、未来？ この写真について何か言っことはある？」

未来

「いや、のぞみ？ もう後書きコーナー始まってんだが……」

のぞみ

「そんなのどうでもいいわ。それより、どんな言い訳を聞かせてくれるのかしら？」

未来

「いや、俺も全然覚えてないんだが……」

キリユウ

「それがどうしました？」

未来

「え？」

キリユウ

「覚えてようが覚えてなかるうが、カコ様にキスし、セラを抱きしめた事は事実ですよね？」

未来

「いや、だから……」

セラ

「あんたね……何、私の妹を抱きしめてんのよ……」

未来

「だあつ！ 少しは俺の話聞いてくれえ！」

ヴェル

「……あつちは当分終わりそうにないな」

クレイ

「だな。しかも……」

カコ

「お兄ちゃんと……キス……しちゃった……」

セラ

「未来さんに、抱きしめられた… / / / /」

ルナ

「はうゝ… / / / /」

クレイ

「こっちもこっちで当分戻ってこないだろうな…」

ヴェル

「唯一普通なのは…」

セレナ

「えっと…何故皆さんは未来様に詰め寄ったり、ぼーっとしてるのでしょうか？」

ヴェル

「セレナだけか…」

のぞみ

「それで、どんな言い訳をしてくれるのかしら？」

未来

「いや、だから覚えてないんだって。多分酔ったからだとは思ってんだが…。それに、俺なんかキスされたり抱きしめられたって嬉しくないだろ？むしろ、カコ達には謝りたいんだが…」

カコ・セラ・ルナ

「…え？」「」

クレイ

「あ、復活した」

カコ

「お兄ちゃん？ 今、なんて…？」

未来

「ん？ だから、俺なんかキスされたり抱きしめられたって嬉しくないだろ？ って言ったんだ。本当に悪かった。好きでもない奴にキスされたり抱きしめられたりして嫌だったろ？」

カコ・セラ・ルナ

「……………」

ヴェル

「固まったな」

クレイ

「だな。未来の鈍感さは相変わらずか…」

のぞみ

「今ので言い訳は終わり？ ならもういいわよね」

ノア

『Load cartridge』

未来

「だから待って！ カートリッジをロードすんな！ 腕下ろせ…  
…って、そっぴやお前ら、何でそんなに怒ってんだ？ 俺の事が好きって訳でもないだろっに」



ヴェル

「あゝ……未来も飛んだし、時間も来たからそろそろ終わるか」

一同（未来以外）

『また次回』

クレイ

「で、いつの間に!？」

終

第十七話 武神と守護神（後編）（後書き）

次回は夏休みの間に投稿したいな〜と、思っではいるんですが、ただ宿題が終わってないので無理そうです（汗）宿題を終わらせないと再びネット接続禁止になってしまうので（汗）それでは

## 第十八話 救う方法（前書き）

明けましておめでとございます！

約4ヶ月振りの更新、遅れて申し訳ございません。

高二の二期期がかなり忙しくて（汗

文化祭に中間テスト、三年の自由選択科目の決定と大まかな進路決定、その為の大学見学、修学旅行、期末テスト。

…… 本当に忙しかったです（涙

次回の更新も三年生の時に備えて書き溜めしながらの更新となるので遅れそうです。

三年生になったら受験に集中しようと思っているので、その為の書き溜めです、ご了承ください。

それではどうぞ！

## 第十八話 救う方法

機動六課、ブリーフィングルーム。

そこには今、はやて達隊長陣と教官陣、協力関係にあるヴェルとクレイ、そして、目覚めたルナがいた。

未来との戦闘から二日が経った。

その間、未来の姿は確認されていない。

戦いの傷を癒やしているのか、はたまた管理局がその姿を確認できていないのかはわからない。

どちらにせよ、いつまでも大人しくしているとは思えない。

見つかるのは時間の問題だろう。

「ほな、話してくれるか？」

「わかりました。それではお話しします。マスターの暴走の原因と救う方法を」

はやてに促されて、ルナは口を開いた。

「皆さんも既に気づいているとは思いますが、マスターの暴走の原因はカリバーンです」

「やっぱりか…」

「どうして暴走したか、教えてくれる？」

なのはの言葉にルナは頷き、ウィンドウを展開する。

「元々、魔鎧装はマスターを守る為に作られたプログラムでした」

ウィンドウに白銀の鎧が映る。

その鎧は色こそ違おうが、魔鎧装・通常態と全く同じものだった。

「マスターが憎しみや悲しみといった負の感情によって、戦えなくなった時、もしくは攻撃が単調になった時にマスターの命を守る…それが本来の魔鎧装でした。しかし、三代目のマスターの時に初めてこのプログラムが起動した時、バグが発生しました」

「バグ？」

「はい。そのバグによって、本来マスターの命を守る事を第一とするプログラムは書き換えられ、狂ったように戦闘を楽しむ戦闘狂になってしまいました。その上、マスターの負の感情を抑制するプログラムも破壊。それによって魔鎧装はマスターの負の感情のままに暴れるようになってしまいました…」

「……いくつか聞きたい事があるんだが、いいか？」

話を遮って、ヴェルが尋ねる。

それにルナは頷く。

「ガジェットとの戦闘、そして俺とクレイが魔鎧装と戦った時、こいつはその姿を変えた。速さ、力、防御、遠距離戦、近距離戦に特化した形態に。そして最後にはその全ての能力を持っていた上に、魔鎧装自体が意思を持っていた。これはどういう事だ？」

「……それは様々な状況に対処する為に作られたプログラムです。速さに特化した瞬迅態。力に特化した剛力態。守りに特化した防御

態。遠距離戦に特化した砲撃態。近距離戦に特化した剣戟態。ただ、本来は姿までとは変わりませんでした。それがバグに侵され、その形態に応じた姿に変わるようになりました。そして、そのおぞましい姿から異形態と呼ばれています。また、それら全ての特徴を持った異形態……それは恐らくバグにより作られた形態だと思われます。意思を持っていた、というのもバグによってできた戦闘狂としての意識が表に出てきたのでしょうか」

「……わかった。それで、未来を救うにはどうすればいい？」

ルナの答えに頷き、ヴェルが尋ねる。

同時に、その場にいる全員がルナを見つめた。

何人かは軽く身を乗り出している。

「……ただ、その方法をお話する前に言っておく事があります」

「……何？」

ルナの言葉にのぞみが尋ねる。

「この方法で必ずマスターを救えるというわけではありません。むしろ失敗する確立の方が高いです。それに、失敗したらもうマスターを救う事はできません。……それでもよろしいですか？」

『え……っ？』

その言葉に、カコ達は固まる。

数秒後、真っ先に我に帰ったのぞみが口を開いた。

「えっと……それだけ？」

「……それだけ、とは？」

「そんな事、とづくにわかってるわよ。それでも、私達はルナが知っている方法以外に未来を救う方法を知る手段が無い。だったら、どんなに可能性が低くても成功することを信じるしかない。それに、諦めなければ神様が後押ししてくれるのよ。」

ある人の受け売りだけどね、とウインクしてのぞみが言う。  
それにカコ達も微笑み頷いた。

「……そう、ですよね。諦めたらダメですよ。わかりました。……  
……それではマスターを救う方法をお教えします。」

そう言ってルナはウィンドウに魔鎧装を映す。

「まず最初に魔鎧装の鎧を全て砕きます。ここまでは以前にマスターが自我を取り戻した時と同じですが、私がユニゾンアウトした事で魔鎧装は自身の能力を制御する事が難しくなっています。それを補う為に制御プログラムが作られます。それが、鎧を破壊した際にマスターの胸部に現れる赤い結晶体がそのプログラムです。」

ウィンドウに表示されている魔鎧装の鎧が砕ける。

同時にその胸部に血のような赤い結晶体が現れる。

「この結晶体を破壊すれば、制御プログラムは失われ魔鎧装はその機能を停止します。ただ、それと同時に制御プログラムの再構築が始まります。十分もすれば完全に再構築されるでしょう。それを防ぐために、制御プログラムが破壊されると同時に私がマスターとユニゾンします。このプログラムはあくまで代替えの物、私がユニ

ゾンすれば当然私の方の制御が優先され、再構築は停止します。…とは言っても、魔鎧装は私を侵食しようとしてくるでしょう。なので私はユニゾンすると同時にマスターの精神世界へ入り、マスターの精神を起こします。精神世界では魔鎧装はその力を保つ為に暴走の原因であるバグをコアとし、姿を構成します。つまり精神世界で魔鎧装を破壊すれば、二度と暴走しなくなり、マスターは元に戻ります。……ただ、マスター一人で魔鎧装に勝たなくてはいけないので、勝率は限りなく低いです。それこそ1%もありません。今までの暴走したマスターも、ここで魔鎧装に勝てずにその自我を奪われ、仲間の手により殺されています……」

その言葉を聞いて、のぞみ達は再び沈黙する。

成功率 1%

そのあまりの低さに誰も口を開けなかった。

「……それでも」

一分程経った頃、のぞみが口を開いた。

「それでも私達は諦めない。成功率がどんなに低くても、1%でも成功する望みがあるなら。私達は未来を信じる。絶対に勝って、戻ってきてくれるって」

笑みを浮かべながら言うのぞみに釣られて、カコ達も笑みを浮かべる。

「にはやは、やっぱりのぞみちゃんは未来君が好きなんだね。心から好きじゃないとそこまで言えないよ」

「な、ななな何言ってるのよ、なのはちゃん！！ 未来の事なんて好きでもなんでも無いわよ！ー！」

なのはの言葉にのぞみは顔を真っ赤に染めて反論する。それを見て、その場にいる全員が笑った。

「わ、笑うなあー！ー！」

「……それで、今後はどうするの、はやてちゃん？」

頬を薄っすらと桜色に染めながら、のぞみが尋ねる。

「今までと変わらず、ヴェルさん達に探してもらいながらうちらも探す。そんで、どちらか一方が見つけたらもう一方に連絡、援護を頼む。それでええ？」

「うん、いいわよ」

はやての言葉に皆が頷く。  
カコを除いて。

「ん？ カコちゃん、何かあるん？」

「……あの、はやてさん。私もお兄ちゃんを助ける為の作戦に参加させて下さい」

その言葉に、その場の全員が驚いた。

それもそうだろう。

カコの怪我は治ってきてはいるものの、まだ完治はしていない。そんな状況で戦うのは、傷口が開く危険もある。

「でも、カコちゃん。まだ怪我が……」

「お願いします！ お兄ちゃんが暴走した私の所為でもあるんです！ 私があの時やらねければ……！ だから、お願いします！ 私もお兄ちゃんを助ける作戦に参加させて下さい！！」

「……はあ、しゃあない。参加してもええで」

「あ、ありが……」

「ただし！」

カコの言葉をはやてが遮る。

「フルドライブは禁止。それと後方支援だけや。ええな？」

「は、はい！ ありがとうございます！」

「ん、ええ返事や。あと、未来君が暴走したのはカコちゃんの所為やない。やから気にせんでええよ」

「……はいっ」

はやての言葉に、カコは笑顔で頷いた。  
自分の所為ではない。  
その言葉に救われたのだろう。

「これで会議は終わりだな。クレイ、行くぞ。さっさと未来を見つけないとな」

「そうだな」

そう言っつて、ヴェルとクレイはブリーフィングルームの出口に向かう。

その途中、妹達の所で立ち止まった。

「……固有武装の使用はお前達が決めていい。お前達の大切な人を助ける為だ。出し惜しみはするなよ」

「っ!! ……ありがとうございます、ヴェル兄様」

「ありがとね、ヴェル兄さん」

「べ、別に私はあいつの事なんか何とも思っつてないけど……ありがと」

妹達のお礼や、素直になれない言葉を聞いて、ヴェルは笑みを浮かべながらクレイを連れてブリーフィングルームを出た。

「それじゃ皆、各々のやる事に戻るか」

はやての言葉に皆は頷き、ブリーフィングルームを出た。

数日後、スカリエツティアジト

巨大なモニターの前でウーノが手元に開いた複数のウィンドウを操作している。

モニターにも複数のウィンドウが開かれており、ガジェットやロストログアの情報が表示されている。

「ウーノ、データの転送状況はどうだい？」

ウーノがウィンドウを操作していると、スカリエツティが部屋に入ってきた。

その左腕からは数本のコードが伸びており、左手に握られたテュルフィングに繋がっている。

「順調です。あと五分もすれば完了しますよ、ドクター」

「そうかい。……それにしても、私達を支援してくれるとは物好きな組織もあったものだね」

呟きながら、スカリエツティは手元に開いたウィンドウを操作し、モニターに新しく二つのウィンドウを開いた。

ウィンドウにはそれぞれ紅、橙、黄、緑、青、藍、紫　虹と同じ色の七つの珠、鋭い爪を持つ黒い手に掴まれた白の珠が映っている。

「生物兵器を造って提供するだけで資金だけでなくロストログアも

提供してくれるとはね……。まったく、何か裏があるんじゃないかと疑ってしまうよ」

「それを承知で支援を受けることにしたのではなかったのですか？」

「利用できるからね。さて、私は先に新しいアジトに行っているよ。ウーノ、データの転送が終わったらこのアジトの爆破を頼むよ」

「はい、ドクター」

そう言っただけでスカリエッティはモニターに開いた二つのウィンドウを閉じ、部屋を出ようとする。

その時、アラート音が鳴り響きモニターに『ALERT』と表示された。

「ウーノ、何事だい？」

「少々お待ちください。……どうやら侵入者のようですね。今モニターに映します」

言い終わると同時にモニターにアジト内の映像が表示される。

そこには黒い鎧　魔鎧装が映っていた。

「暴走したカリバーンの主か……。自我が残っていない状態でここを突き止めるとは、恐れ入るよ。でも、残念ながら今は相手している時間はないのね。ウーノ、ここに残っている全てのガジェットと一緒に彼を転送させてやってくれ」

「わかりました。転送先はどうしますか？」

「そうだね……。六課の隊舎にでも送ってくれたまえ。ちょっとし

たプレゼントだよ」

笑みを浮かべながらスカリエッティはそう言う。  
それにウーノは頷きウィンドウを操作する。

同時に魔鎧装の足下を中心に巨大な魔法陣が展開された。  
それに気付いた魔鎧装は右手のカリバーンを振り上げ、魔法陣を破壊しようとする。

「転送します」

しかし、それが振り下ろされる前に魔法陣は発動し、魔鎧装の姿は消えた。

「さて。ウーノ、ガジェットを転送したらここの爆破を頼むよ。私は新しいアジトに行ってカリバーンの主がどうなるか観察することにするよ」

「わかっていますよ、ドクター」

そしてスカリエッティは部屋を出て行き、ウーノは再びウィンドウを操作した。

( to be continued... )

第十九話 救う為の戦い（前編）（前書き）

今年度は受験なので、昨年度の間にかきたためしたものを予約投稿していこうと思います。

あ、でも感想の返信は多少遅れるかもしれませんが返すので、遠慮なくどうぞ（笑

それでは、本編をどうぞ

## 第十九話 救う為の戦い（前編）

それは魔鎧装が六課に転送される少し前の事。

機動六課、空間シミュレーター。

主に訓練に使われるその場所に、キリュウ達ウィルレイン三姉妹がいた。

「どうしたの、キリュウ姉？ 急に呼んだりして」

「この前の戦闘の時……私は痛感しました。以前より腕が鈍っている。と。……それはあなた達もそうでしょうか？」

目を閉じ、キリュウはサラとセラにそう問う。

その言葉に二人は俯き、そして頷いた。

「……確かに、私は前ほど上手く舞えなかった」

「私も同じ。……前の私なら、例え爆煙で姿が見えなくても急所を射抜けた筈」

「……これでは折角許可を頂けた固有武装を使っても意味がありません。早急に昔の感覚を思い出す為に……実践形式で特訓しますよ」

『Set up!』

言い終わると同時に、キリュウの体を光が包む。

バリアジャケットを纏ったキリュウはコスモスを構え、二人を見る。

「あなた達も早くバリアジャケットを展開しなさい。早くしないと、そのままでも行きますよ」

「わかってるわよ、キリユウ姉。行くわよ、セラ」

「うん、お姉ちゃん」

『『Set up!』』

キリユウの言葉にサラとセラもバリアジャケットを展開する。ただ、セラの手に握られているアグルの形状が普段の爪の付いたガントレットではない。前回の魔鎧装戦で見せた弓の形状だった。

「戦闘形式は二対二のバトルロイヤル形式でいいですね？」

「うん、いいよ」

二人の返答にキリユウは頷き、コスモスを低く構える。それに対し、二人も自らのデバイスを構え。

「「「っ!?!」」」

その瞬間、三人は大規模な転送魔法の反応を感じた。

「キリユウちゃん、サラちゃん、セラちゃん! すでに気付いてるかもしれないけど、六課近くの海上に大規模な転送反応が感じられたんや! すぐに司令室に来て!」

それと同時に三人にはやてからの通信が入る。

それを聞き、三人はバリアジャケットを解除し司令室へと向かった。

機動六課、司令部。

そこには隊長陣を始めに教官陣、FW陣がいた。そして、部屋にある巨大モニターには六課近くの海上が映っており、そこには巨大な魔方阵が展開されている。

「何よ、あれ……」

「軽く1kmはあるよ……?」

その巨大な魔法陣を見て、のぞみとカコが驚きの声を上げる。と、同時に魔法陣から一つの黒い物体 魔鎧装が出てきた。そしてその後を追うように大量のガジェットが出てくる。その数は軽く千はあるだろう。

「シャーリー！ ガジェットの総数は!？」

「はい! ……? 型332機、? 型326機、? 型187機、? 型265機、? 型58機! 計1168機です!」

シャーリーの言葉を聞き、はやて達はその数に驚く。以前、六課隊舎が襲撃を受けた時よりもはるかに多い。それだけの数が魔鎧装一人に向けられているのだ。

「シャーリー、ヴェルさん達に通信は!？」

「さつきからしてるんですが……繋がりません!」

「通信妨害……!?!」

その言葉ははやて達を驚かせる。  
一体、誰が何の目的で通信妨害するのか。  
だが、今はそれよりも目の前の事態に対処するのが先だ・

「ここは私達だけで対処します。スターズ1とライトニング1、それから教官陣はガジェット殲滅の後未来君の救出。ルナちゃんはカコちゃんについていて。スターズ2と4及びライトニング2と4とギンガは六課隊舎の守備や。六課に近づくガジェットを頼む。ほな、出動や！」

『了解！』

はやての指示に、その場の全員が一斉に走り出した。

ガアアアアアアアアアッ！！

機動六課から10kmほど離れた海上。

そこで魔鎧装は叫び声を上げる。

それは追いつめたスカリエッティに逃げられたことに対する怒りか。

しかし、そんなことは魔鎧装を囲むガジェットには関係ない。

叫び続ける魔鎧装へ向け、一斉にレーザーを放つ。

それを魔鎧装は上へ飛び回避、左腕に闇を集め。

ガアッ！

そして、真上に闇を放つ。

放たれたそれはすぐに分裂し、円状に自身を取り囲むガジェット

へと降り注ぐ！

爆！

円状に起きる爆発。

しかし、この程度で千機以上いるガジェット全てを破壊できる筈もない。グルウ………！

魔鎧装の口部に闇が集まり、球形を成し。

そして、一拍遅れて闇の奔流が放たれる！。

それは爆煙の一部を吹き飛ばし。

滅！

その周辺のガジェットを消し飛ばす！

同時に、爆煙の中からガジェット？型接近戦型と鳥型

ガジエ

ット？型が飛び出し。

ガアッ！

それに対し、魔鎧装も駆ける。

一機の接近戦型の懐に潜り込み、左手でどの胴体を貫き。

轟！

斬！

そのまま別の接近戦型へと投げ飛ばし、メビウスリングを振るう！

その一撃は、二機のガジェットどころか周囲の全てのガジェットを纏めて斬り伏せた。

爆！

起こる爆発。 それによって、魔鎧装の姿が爆煙に隠れる。

『……………』

先程まで爆音や轟音が響いていた海上が静寂に包まれる。

ガジェット達は警戒して爆煙には近づかない。

遠距離用武装を持っているガジェットが砲撃を放とうとして。

ダークネス・クラスター！

上空から幾つもの闇球が降り注ぐ。

それはガジェットを破壊しながら突き進み、炸裂。

大量の闇弾がガジェットの群れを内側から破壊する。

ガアア……………！

それを放ったのは当然魔鎧装。

短距離転移によって、爆煙の中から上空へと移動していたのだ。

カカ……………カカカカ……………カカカカカカカカ……………！

破壊する事を楽しむかのように、魔鎧装は笑いに似た声を上げる。

そして、魔鎧装は再び破壊する為に駆け出した。

視界の中で、再びガジェットが破壊される。

もう何度目だろうか。

自分の視界で、勝手に動く自分の腕が破壊の限りを尽くすのは。

くそ……！

それを見ながら、意識のみ残っている未来は何もできない悔しさに呻く。

それでも、未来は自分の体に止まれと命令を下す。

しかし、視界の中では変わらずガジェットを破壊している。

無駄なんだよ、そんな事

自分と同じ声で、そんな言葉が頭に響く。

それに対し、未来は反応しない。

無視し、再び止まれと命令を下す。

何度やっても無駄だ。それはお前の怒りだからな。いつまでも、いつまでも破壊を続ける

黙れ……

それは怒りの原因を破壊しても止まらない。原因に向いていた怒りは、その原因を生み出した世界へと向く

黙れ……！

世界へ向いた怒りは仲間にも向く。守りたかった者達に。その怒りはやがて、その守りたかった者達をも殺してしまう

黙れって言うてるだろ！！

頭に響く声に、未来は怒鳴る。

自分の声で言われるのだ、その怒りは他の誰かに言われるよりも激しいだろう。

しかし、それに対し頭に響く声は全く動じない。

おお、怖い怖い。だがいいのか？ そんなに怒って。魔鎧装は装着者の怒りや悲しみといった負の感情を糧に活動するんだぞ？ 特に怒りを糧にしてな

な……っ！？

言われて気付いた。

視界の中の魔鎧装の動きが激しくなっていることに。

『グルウウ……ッ！』

唸り、魔鎧装が両腕に魔力を集めるのが分かる。

その魔力量はどちらもなのはスターライトブレイカーと同等否、それ以上の魔力が込められている！

『ガアアアアアアアアアアッ！！！！』

それぞれの腕から放たれる闇の奔流。

それは今までの砲撃とは比較にならない程の威力だった。

それぞれ逆の方向に放たれた奔流は残っていたほとんどのガジエツトを飲み込み、破壊する。

ククククク、これでお前は自分で仲間達の勝率を下げたことになる。どうする？ 悔むか？ 怒るか？ だが、それさえも魔鎧装を

強化させることになるぞ？

っ……………！！

響く声に、未来は歯をギシリと鳴らす。

同時に、未来は視界に映る光景に違和感を感じ。

そして、すぐにその違和感の正体に気付いた。

……………なんで、こんなに高威力の魔法を連発できるんだ……………？

それが未来が感じた違和感。

今まで放たれた砲撃全てがSランクオーバー！

更には、全ての斬撃、打撃にもSランク相当の魔力が込められていて。

その総量は、明らかに未来の魔力量をオーバーしていた。

ククク、薄々感づいてはいるのだろうか？ お前の魔力が尽きた時、

魔鎧装が何を元に魔法を使っているか

声に言われ、未来は気付いた。

自分の中に 正確にはカリバーンの中に感じるいくつもの魔力に。

暴走したマスター達の……………リンカーコアか……………！！

惜しい。その解答じゃ70点って所だ

何……………？

本当に感じるのにはリンカーコアだけか？ もう一度よく感じてみ

る

未来は再びカリバーンの中に感じる魔力に集中する。  
そして気付いた。

リンカーコアとは違うものがあることに。

その魔力量が、リンカーコアよりもはるかに多いことに。

その正体に　　！

まさか……！

気付いたか。そう、それは魂だ。過去のマスター達の、な

未来はその言葉に歯を食い縛り、怒りを抑えようとする。

怒ってしまったら魔鎧装に力を与えてしまうから。

しかし、未来に怒りを抑える事はできなかった。

たくさんの人の人生を奪っておいて……！　死後までその魂を縛り  
付けるのか……！

許せない。

許せるはずがない。

両親を失い、それ以来人の死に対して敏感になっている未来に、  
そんな死者への冒瀆を。

カカカ、怒れ、怒れ！　怒れば怒るほど魔鎧装は強化される！

そして、いずれお前の精神は完全に乗っ取られる！

それがお前の目的か……！　でも、あいつらは絶対に負けない！  
必ず俺を救ってくれる！

ククク……。その自信がいつまで保つか、見物だな。見てみる。  
来たぞ、お前の仲間達が

その言葉の通り、視界の中にまだ小さいがのぞみ達が見えた。

さて、見せてもらおうか。お前の信じる仲間の力とやらを

「いた……。！ 行くわよ、みんな！」

その漆黒の体軀を見つけたのぞみが叫ぶ。

同時にのぞみ、フェイト、キリユウ、サラの接近戦組が速度を上げ、カコ、なのは、セレナ、セラの遠距離戦組は自身のデバイスを構える。

「デイベイイン……。バスタアアアア！！！」

煌

真っ先に放たれたのは桜色の砲撃。

それは残った数少ないガジェットを破壊しながら魔鎧装へと突き進む。

壁！

しかし、それは魔鎧装が展開した闇の壁によって防がれる。  
そのまま魔鎧装は砲撃をなのはに放とうとして。

「槍術壱之型、双閃！」

その背中の装甲が斬り裂かれた。  
斬撃を放ったのはキリュウ。

振り下ろした体勢からコスモスを構え直し、突きを放つ！

「四の型、裂震！」

撃！

放たれた突きは斬撃の跡に寸分変わらず決まり、しかし。  
その分厚い装甲を完全に貫く事はできなかった。

「っ！」

振り向きざま、魔鎧装はメビウスリングを横風ぎに振るう。  
それをキリュウは後ろに下がり、切っ先ギリギリの所で回避。

「弐之型、幻突！」

撃！

振り切った瞬間の隙を突き、神速の連続突きを人体の急所に放つ！

「13発っ！ まだまだ！」

撃！

幻突を放ち終わると同時に切っ先に魔力を込め、裂震を放つ。

その一撃は魔鎧装の装甲を貫くことはできないが、その衝撃によ  
って魔鎧装を吹き飛ばす。

その先にいるのはサラ。  
両手に握るコロナは風を纏っている！

「舞術参之型、風舞！」

最初の一撃で吹き飛ぶ魔鎧装を止め、続いて回転しながら斬り裂く。

その度にコロナが纏う風はかまいたちとなり、魔鎧装の全身を斬り裂く！

グウウ……ッ！ ガアアッ！！

しかし、魔鎧装もやられてばかりではない。

叫び、全身から闇を放出、怯んだサラを殴り飛ばす。

「くう……っ！」

ギリギリ風で防ぐことはできたが、サラは魔鎧装と離れてしまう。その隙に魔鎧装は右腕を掲げ闇球を作り、それをサラに放とうとして。

「弓術弑之型、流！」

飛来した魔力矢に右腕を射抜かれ、闇球は霧散してしまう。その直後に再び魔力矢が飛来し、魔鎧装の四肢を貫く。

「弓術伍之型、操」

矢を放った人物 セラが眩き、同時に魔鎧装の四肢が拘束される。



激しい爆発が起こり、魔鎧装の姿が見えなくなる。

「これなら、鎧を破壊できてなくても結構なダメージが……」

「っ！ 上よ！」

のぞみの言葉を遮り、サラが叫ぶ。

それに全員が上を見ると、そこには無傷ではないもののあれだけの砲撃を受けたにしてはダメージの軽い魔鎧装がいた。

「あれだけの砲撃を受けて、あの程度……？」

「……いえ、違います。見て下さい、魔鎧装の四肢の装甲が砕けています。おそらく、ダメージ覚悟で自分に向けて闇を放ち矢による拘束から逃れたのかと」

セラの言葉を聞いて、のぞみは両拳を叩き合わせる。

「やっぱり、リミッターを外した程度じゃ無理ね……」

焰

雷

叩き合わせた拳から焰と雷が溢れ。

それは瞬く間にのぞみの体を包む！

「ノア、フルドライブ」

『Full Drive!』

のぞみの体を白銀の光が包み、一瞬で新しい装甲を纏う。  
赤いラインが入った白銀の装甲を。

それを見て、キリユウはサラとセラに目を向ける。

「サラ、セラ。私達も……」

「わかってる。せつかくヴェル兄に固有武装の使用許可をもらったのに、使わないで救えなかった、なんて嫌だしね」

「それなら、早いうちから使って、確実に未来さんを救おう」

「そうですね……。では、行きますよ!」

「うん!」

三人は目を閉じ、口を開く。

未来を助ける。

その決意を言葉に込めて。

「固有武装、ファーストリミット第一制限解除……」

三人それぞれの背後の空間から光が溢れる。

キリユウの背後からは六つの、サラの背後からは二つの、セラの背後からは四つの光が。

「ユニコーン・スピア一角獣之槍、展開!」

キリユウの背後の光から現れたのは六本の槍。

金色の刃に白き柄の槍。

そして刃の中心には一角獣が刻まれている。

ユニコーンを宿した槍、それがキリユウの固有武装『一角獣之槍』

「塵扇、展開っ！」

サラの背後の光から現れたのは二つの扇。

一つは赤、一つは黒の扇。

そのどちらも薄っすらと霧のようなものに覆われている。

塵気楼に住む幻獣・塵を宿した扇、それがサラの固有武装『塵扇』

ペガサス・ボウ  
「天馬弓、展開」

セラの背後の光から現れたのは四つの弓。

翼の装飾が付いた、白い弓。

ペガサスを宿した弓、それがセラの固有武装『天馬弓』

「ゾフィ……私達も行きますよ」

『Yes, sir』

のぞみ達の姿を見て、セラも決意しゾフィに声をかける。

それに応え、ゾフィを中心に茜色の光の帯がセラナの体を包む。

「フル、ドライブ」

『Full Drive!』

光の帯がセラナの体に付着し、新たなバリアジャケットを成す。

深い蒼色のショートパンツに茜色のオーバースカート。

同じく蒼色の長袖インナーに白い袖無しジャケット。

胸の中心に入った白い大きな十字と円を組み合わせた紋様。

そして、その上から動きを阻害しない最低限の銀色の装甲を纏う。

「ネクサス、セットアップ」

『Set up!』

更にセレナは自身が持つもう一つのデバイスを展開。

腰の左右に二振りずつ、計四振りの鞘に納まった片刃の長刀が。腰の後ろに交差するように二振りの小太刀が現れる。

新型システム搭載型試験用アームデバイス『ネクサス』

技術開発部の部長であるセレナの母親が彼女の為に作ったデバイスである。

「なのはちゃん達も！ 今の魔鎧装は限定解除程度じゃ無理よ！」

いつ魔鎧装が動き出してもいいように、拳を構えながらのぞみが叫ぶ。

その言葉になのは達は迷う。

ブラスターモードとライオットザンバー。

なのはとフェイトのリミットブレイクフォームであり、最後の切り札。

それ故に術者への負担が大きい形態である。

だからこそその迷いだったが……その迷いは一瞬で晴れた。

「今は迷ってる場合じゃないね……」

「うん、絶対に未来を助けるって決めたのに……何を迷ってるんだろっね」

絶対に助ける。

その決意がなのは達の迷いを晴らした。  
それに、ゆりかごの時とは違いたくさんの仲間がいる。  
ならば短時間での決着が可能だろうし、負担もゆりかごの時より  
は軽くすむだろう。

『Blaster set』

『Sonic Drive』

桜色と金色。

二つの光が周囲の空間を染め上げ。

光が納まったそこには、周りに四機のブラスタースタービットを展開したなのはと真・ソニックフォームに身を包んだフェイトがそこにいた。

ガアアアアアアアアアアアアアアアアアツ！！

自身を取り囲む者達から放たれる魔力に反応してか、魔鎧装は叫び声を上げる。

同時に鎧の修復速度が上がり、その形状もより凶悪なものに変わっていく。

頭部の角、左腕の盾、右腕の鉤爪は禍々しいものに。

両肩の角が生えた盾は凶悪な二本の角に。

そして背中から新たに生えた四本の角。

禍々しく変化した鎧を纏い、魔鎧装はなのは達を睨む。

「高町なのは、レイジングハート・エクセリオン……」

「フェイト・テストロッサ・ハラオウン、バルディッシュ・アサル

ト……」

「日比野カコ、ガイア……」

「相原のぞみ、ノア……」

「セレナ・マーテリア、ゾフィ、ネクサス……」

「『神速』キリユウ・ウィルレイン……」

「『舞神』サラ・ウィルレイン……」

「『神弓』セラ・ウィルレイン……」

それぞれが自身のデバイスを魔鎧装に向ける。  
魔力を吹き上げながら、未来を救う為に。

『行きます！』

ガアアアアアアアツ！

そして、彼女達は魔鎧装とぶつかり合った。

「キャハハツ、遂に始まったね」

なのは達が魔鎧装と戦っている場所よりも更に数km離れた地点、  
その上空。

そこにその戦闘を眺めている一人の少女がいた。  
見た目十二、三歳程の、銀色の髪をショートカットにした少女が。

その身長に反した2mはある長刀を腰に差している。

「にしても、なんでリーダーはボクなんて選んだんだろ。ボクよりも諜報活動に長けた人いるのにさ。もし早めに通信妨害しておかなかったら、武神呼ばれて直ぐにバレてたのに」

そう呟く少女は雲に隠れていた。

それも普通の雲ではない。

微弱な魔力が含まれた雲である。

少女はこの雲によって自分の姿だけでなく魔力反応などの様々な反応を隠していた。

「それに、もしバレずにすんでも武神がいたら直ぐに終わっちゃうしね。それじゃ、カリバーンのデータが取れないよ」

少女の周りに展開される数十のウィンドウ。

その全てに魔鎧装のデータが表示されていた。

今まで放った全ての砲撃、斬撃のランクや、その装甲の強度などが。

「たくさんデータ取らせてもらっよ。我らがリーダーの為に、ね。キャハッ」

年相応の笑みを浮かべ、少女は戦闘を傍観を再開した。

第十九話 救う為の戦い（後編）（前書き）

本当は0時に投稿するつもりだったのですが、書き直し箇所が見つかり、そこを直していたらこんな時間になってしまいました（汗  
すいませんです。

それと今話、無駄に長いです（え

おそらく過去最高の文字数だと思います。

一万文字ぐらいの収めるつもりが気付いたら一万七千文字で（汗

どうしてこうなった

そんな今話ですが、楽しく呼んで頂けると嬉しいです。

それではどうぞ

## 第十九話 救う為の戦い（後編）

「移動術式之型、刹那！」

『Sonic move!』

最初に魔鎧装とぶつかったのは神速の持ち主。フェイトとキリュウの二人。それぞれ高速機動で魔鎧装の懐に潜り込み。

「はっ！」

「一之型、双閃！」

すれ違いざま、フェイトは両手に握るバルディッシュ、ライオットザンバー・スティングァーで。

キリュウは両手で握ったコスモスと周りに展開された一角獣之槍で。

魔鎧装の全身 特に四肢の関節を重点的に斬り裂く。

ガウウ………！

その分厚い装甲故に肉体が傷つくことはない。

しかし、いくら装甲が分厚くともその衝撃までは防げない。

全身に走る衝撃によるダメージに魔鎧装の動きが鈍る。

そして、その隙を見逃す者などいない、

「舞術漆之型！」

魔鎧装へ駆けるのはサラ。  
両手に握ったコロナと後ろに展開した扇は光に包まれている。

「光舞！」

魔鎧装に叩き込まれる光の舞い。

『闇』である魔鎧装の苦手とする『光』が、一撃ごとに魔鎧装へと流れ込み。

一撃が決まる度に魔鎧装の動きが鈍くなる。

ガア……ッ！

動きが鈍くなる中、魔鎧装は苦しみから逃れようとメビウスリングをサラに振るう。

しかし、その一撃はサラをすり抜けた。

……………！？

「はあっ！」

次の瞬間、いつの間にか魔鎧装の背後に回っていたサラが上段からコロナを振り下ろす。

サラの固有武装、扇。

扇を宿すその扇の能力の一つが、幻を作り出すというものである。サラは扇扇によって作り出した幻と寸分違わぬ動きをし、魔鎧装が斬りかかってきた瞬間に刹那で背後に回ったのだ。

ガアッ！？

メビウスリングを振り切った無防備になった魔鎧装の背中に光の一撃が決まった。

そして、その一撃を決めたサラは魔鎧装から距離を取ろうとする。魔鎧装はすぐさま体勢を整え、離れるサラを腕の鉤爪で切り裂こうとして。

「弓術壱之型、破！」

撃！

巨大な魔力矢が飛んできた。

突然のその攻撃に魔鎧装は反応できず、後頭部に直撃。唸りながら、矢の飛んできた方向を向き。

壁

その視界に映ったのは、まるで光の壁のような無数の魔力矢。

その矢、一本一本は大したダメージではないが、厄介なのはその量。

視界を埋め尽くす程の量の魔力矢が、絶え間なく魔鎧装へと降り注ぐ！

更に、ガードしようと展開した闇さえも魔力矢を圧縮することによって突破、懐で炸裂し、魔鎧装へとダメージを与える。

グウウ……ッ！

「参之型、散。お姉ちゃんはやらせないよ！」

そう言いながら、セラは手に持つアグルと展開した天馬弓から休む事なく魔力矢を放ち続ける。

放たれ続ける大量の魔力矢は、少しずつだが確実に魔鎧装の装甲を削っていく。

このままなら、魔鎧装の装甲を完全に破壊するのも時間の問題だろう。

ガアッ！

だが、魔鎧装は咆哮と同時に全身から闇を放出。

魔力矢を弾き、ダメージ覚悟で闇を纏いセラへと駆け上がる。

向かってくる魔鎧装にセラは矢を放ち続けるが、魔鎧装は構わない。

遂にはセラの元に辿り着き、メビウスリングを振り上げる！

「……………操」

しかし、それが振り下ろされる事はなかった。

魔鎧装の四肢を始め、その装甲の至る所に魔力矢が刺さっている。

それは先程の散による弾幕の中にセラが混ぜて放った弓術伍之型、操。

しかも、天馬弓を展開する前よりも込められた魔力量や矢の数は遥かに多く、そう簡単に破壊できるものではない。

「なのはさん！」

「うんっ！」

魔鎧装に更に魔力矢を撃ち込みながら距離を取り、セラはなのはに声をかける。

応えるなのはの周りにはいくつものスフィアが展開されている。

グルウ………！

それを見て魔鎧装は砲撃が来ると予想、魔力矢に拘束されながらも闇を自身の前面に展開し、壁とする。

だが、壁を展開されることなど、なのははわかっていた。

「レイジングハート！」

『All right, Strike Flame』

故に、なのはは盾を貫き砲撃を放つべく。

レイジングハートの側面からは六枚の翼を。

先端からは超高密度の半実体化魔力刃　ストライクフレームを展開する。

もはや桜色を越えた紅に近いそれをもって、魔鎧装へと突撃する！

「マニユーバS - S - Aツ………」

シューティングスターアサルト

『Charge!』

駆け出し、刹那の後に魔鎧装へと到達する。

展開されたストライクフレームが闇壁に激突、凄まじい衝撃を放ち拮抗。

しかし、超高密度まで圧縮され半実体化した魔力刃とただ展開されただけの闇壁では結果は決まりきっている。

魔力刃が闇壁を貫き。

「ストライク・スターズツッ！！　ファイアアアアアアツッ！！」

煌！

零距离で砲撃が放たれる！  
光を奔流は魔鎧装を飲み込み、海面へと叩きつけた。  
だが、誰も終わったとは思わない。  
真つ先へのぞみが魔鎧装のいるであろう場所へ駆け。

「っ!？」

突如感じた悪寒に体を捻る。

閃！

同時に、今までのぞみのいた場所を闇でできた刃が通り過ぎた。  
更には海中から闇槍や闇球、闇刃が放たれる。

放たれ続ける闇槍、闇球、闇刃、そして鞭のごとくしなりながら  
飛び交う海中から伸びた闇。

海中へ近づけさせない為という意図が容易にわかる。

「アクセセルシューター！」

「フォトンシューター！」

「弓術式之型、流！」

それらを迎撃する為に、なのは、カコ、セラがスフィアや魔力矢  
を放つ。

そして、迎撃をなのは達任せ、再度のぞみが海中の魔鎧装へと  
駆ける。

閃！

「ああもつつ！ 厄介ね！」

そんなのぞみに振るわれる闇。  
それをノアで受け流しながら、のぞみは更にスピードを上げる。

「ノア、カートリッジロード！ 出し惜しみしないで！」

『All right. Load cartridge!』

のぞみの声に応え、ノア・インフェルノからカートリッジが排出される。

その数、四。

『Flame impact! Type spread!』

「はあああああああああつー!!」

叫びと共に、炎纏う右拳を海面に叩きつける。  
しかし、その衝撃で波ができる以外は何も起こらない。  
だが、なのは達は気づいた。  
のぞみが拳を叩きつけた場所から広がっていく魔力に。

「バースト！/Burst!」

そして、のぞみとノア、その声が同時に響き。

爆！

海が爆発、海水が半球状に蒸発した。

フレイムインパクト、タイプスプレッド。

本来なら対個人用の技であるフレイムインパクトを、対集団用に変換した技。

拳に纏わせた魔力を炎に変換し殴りつけるのではなく、纏わせた魔力を叩き込んだ地点を中心に拡散、炎に変換することで広範囲の敵を殲滅できる。

のぞみはそれを利用し、海中に魔力を拡散、炎に変換し海水を蒸発させたのだ。

爆発は超高温の炎に触れたことによる水蒸気爆発である。

ガ……ア……

海中にいた魔鎧装は当然炎と爆発を諸にくらう。

しかし、拡散による威力の低下によりその装甲を砕くことはできなかった。

それでも、その動きは止まった。

「マルチショット！」

動きの止まった魔鎧装に十字架型のスフィアが撃ち込まれる。

それに続いて放たれた幾つものスフィアが魔鎧装の動きを止める。放つのはセレナ。

スフィアを撃ちながら、魔鎧装へ駆ける。

ガアッ！

だが、例えボロボロでも魔鎧装は抵抗を止めない、止める筈がない。

背中から生えた四本の角を切り離し、闇をワイヤーのように使っ

てセレナを迎え撃つ。

「ゾファイ！ モードリリース！」

『All right』

それに対しセレナはゾファイを待機形態に戻し、ネクサスを抜刀。角を弾き、次撃で角と魔鎧装を繋ぐ闇を断ち切る。それを繰り返し、遂には全ての闇が断たれ、角は消え去った。

『Sonic move!』

「はあっ！」

角を失い、攻撃する手段を失った魔鎧装にセレナは高速機動で接近。

両手に持つネクサスを魔鎧装の両肩の装甲に刺し、更にネクサスを二本抜刀、両腿の装甲にも突き刺す。

「ゾファイ、ソードフォーム！」

『All right. 3rd form』

そしてセレナはゾファイをソードフォーム、キャノン砲形態で展開。その砲口を魔鎧装へ向け。

「カートリッジロード！」

『Load cartridge. Thunder』

ゾフィと、魔鎧装に突き刺した四本のネクサスから金色のカートリッジを排出。

ネクサスが雷を纏い、それが繋がって巨大なX字を描く。

属性カートリッジ。

それがゾフィとネクサスから排出されたカートリッジの名称である。

技術開発部で開発されたこのカートリッジは、変換資質を持つ魔導師のデータを元に、変換資質を持たない魔導師に似たような力を与えるカートリッジである。

しかし、普通のカートリッジよりも使用者への負担が大きい上に生産性が悪い為、今の所は試験魔導師であるセレナしか所持していない。

「サンダー！」

ゾフィの先端にも、雷を纏った魔力球が生まれ。

その状態から更にカートリッジを二発排出。

魔力球が膨れ上がる。

「クロスツ！！！」

煌！

膨れ上がった魔力球から、雷を纏った茜色の光砲が放たれる。

X字を描く雷と光砲に魔鎧装は飲み込まれ。

しかし、次の瞬間。

爆！

膨大な量の魔力放出により、雷と光砲はかき消された。  
かき消したのは魔鎧装。

放出した魔力を纏い、セラへと突進。  
瞬く間に音速を超え、セラへと辿り着く。

『Protection!』

ぶつかり合うギリギリでセラはプロテクションを張り、受け止める。

そして天馬弓から破を一ヶ所に連射、魔鎧装が纏う魔力を削っていく。

グウウ………!

「弓術陸の型、奥義!」

魔力に穴が空くと同時に、アグルの弦を引き絞る。

番えられた魔力矢は二本。

膨大な魔力が込められたそれを、一気に解き放つ!

「双龍翔駆!」

撃!

解き放たれた魔力矢は空いた穴をくぐり抜け、その姿を龍へと変える。

二匹の龍は魔鎧装へと食らいつき、一気に押し切る!

ガア………!

「まだ終わらないよ」

呻く魔鎧装にセラはそう言い放ち、差し向けた右腕を振るった。その動きに合わせ、双龍はその巨体を振り向きを変える。その先にいるのはセラの双子の姉、サラ！

「舞術九之型、奥義……」

コロナを握った右腕を頭上に掲げ、蜃扇を握った左腕を魔鎧装へ向けた独特の構えを取り、サラは呟く。

コロナと蜃扇、その両方に大量の魔力を込めて。

「煌龍円舞っ！！」

煌

叫びと共にコロナを振り下ろす。

同時に、コロナから煌々と輝く龍が放たれた。

それは双龍によって運ばれてくる魔鎧装へと真っ直ぐ突き進み、直撃。

双龍と反応し、大爆発を起こした。

しかし、まだ終わっていない。

サラはコロナを待機形態に戻し、両手に蜃扇を握ると躊躇う事なく爆煙の中に飛び込んでいった。

撃！

閃！

そして、爆煙の中から轟音と閃光が発せられた次の瞬間、サラが飛び込んだ反対側から魔鎧装が吹き飛びながら現れる。それを追いかけ、爆煙の中から続いて現れるサラ。一瞬で魔鎧装に追いつき、両手に持つ屋扇を振るう！時には閉じた屋扇による激しい打撃を。時には開いた屋扇による流れるような斬撃を。

「はあっ！！」

叫び、サラは輝く左の屋扇を魔鎧装の胸に押し当て。

煌！

再び、輝く龍が放たれる！

龍は魔鎧装に食らいつき、止まらない。そのまま魔鎧装は海へとたたき落とされた。

「はあ……はあ……」

魔鎧装をたたき落としたサラは、肩で息をしながら落ちた場所を見る。

ここ数年使っていなかった舞術、それも奥義をいきなり使ったのである。

体力の消耗が激しいだろう。

「っ！」

しかし、戦闘はまだ終わらない。

サラは見た、魔鎧装が落ちた地点を中心に渦巻く海を。

ゴアアアアアアアアツ！！

響く咆哮。

同時に、海水が吹き飛び魔鎧装が現れる。

その姿は、のぞみ達を愕然とさせた。

「もう、鎧が再生してる……」

そう、あれだけの連撃を食らい、ボロボロになったにも関わらず、その装甲は完全に再生していた。

管制人格であるルナがいなくなった事により、異形態への変化は能力を制御しきれないためなくなった。

だが、その分の制御プログラムを再生に使う事ができるため、その再生速度は格段に上がっているのである。

『恐らく、制御プログラムを再生速度に使っているからだと思いま  
す』

のぞみが持っている待機形態のルナがそう言う。

その言葉に、のぞみは笑みを浮かべた。

「なら簡単ね。再生する前にぶっ壊せば済む話じゃない」

『え………！』

のぞみの言葉はルナを驚かせた。

確かにその言葉の通りだが、再生速度を超える速さで破壊するのがどれほど難しいか。

『そ、そんなの……!』

「無理、とは言わせないわよ。やらなきゃ未来は助けられないんだから」

『……………』

ルナは言い返せなかった。  
やらねば未来は助けられない。  
正にその通りだから。

「ルナ、私とユニゾン、できる?」

『え……? できるにはできますが……何故ですか?』

「より確実に鎧を破壊する為に、力を貸して欲しいの」

『……………マスターとのユニゾン程の強化は出来ませんが……それでもいいのなら』

ルナが最も強化することができるのはカリバーンのマスターである未来。

未来以外とのユニゾンもできるが、その強化は未来とのユニゾン程ではない。だが、そのぐらいのぞみも予測している。

「いいに決まってるでしょ。今は少しでも力が欲しいんだから」

『……………わかりました』

のぞみの言葉にルナはそう返し、いつもの姿に戻りのぞみの胸の前に浮かぶ。

伝わったから。

未来を救いたいという思いが、  
だから

「『ユニゾン、イン』」

二人が光に包まれる。

茶髪が銀髪に、そしてバリアジャケットも僅かにその形状を変える。

白銀の装甲からは赤いラインが消え、銀一色の鎧に。

「行くわよ、ルナ！」

『はい、のぞみさん！』

声をかけ合い、のぞみは魔鎧装へと駆ける。

魔鎧装を思いつきりぶん殴る為に。

未来を救う為に。

ガアアアアアアアアアツ!!!!

迫るのぞみに、魔鎧装は砲撃を放つ。

それにのぞみは止まらない。

むしろ、加速していく！

「ノア！」

『Load cartridge!』

ノア・インフェルノの装甲がスライドし、カートリッジを排出。

正面から砲撃に拳を叩きこむ！

「フレイム、インパクトオツ！！」

撃！

ぶつかり合う閻砲と炎纏う拳。

拮抗は一瞬。

威力が同じその一撃は、すぐに互いを相殺する。

「サンダー……！！」

同時に、魔鎧装はのぞみの左腕が雷を纏っているのを捉えた。

そして、落下していくカートリッジを。

それに気づいた時には、既にのぞみは目の前にいた。

左腕を引き絞り、すぐにでも拳を放てる体勢で！

「インパクトツ！！」

ガアツ！！

拳が放たれると同時に、魔鎧装もメビウスリングを振るう。

しかし、所詮は咄嗟に振るったもの。

魔鎧装が押されるのは当然であった。

が、一瞬でも拮抗できれば魔鎧には十分だった。

『のぞみさん、後ろです！』

「っ！！」

ルナの声に、のぞみは横に飛ぶ。

刹那、のぞみがいた場所を闇が通り抜けた。

魔鎧装の体から溢れる闇、それが刃となり後ろから襲いかかったのだらう。

「例え一瞬でも、鏑迫り合いは禁物ね……。ありがとう、ルナ」

『いえ、礼を言われる程のことではありませんよ』

油断なく魔鎧装へ視線を向けながら、のぞみは礼を言う。

その視線の先、魔鎧装は周囲に幾つもの闇球を浮かべていた。数十個はあるその闇球全てに、膨大な魔力が込められている。

「っ!?!」

『p r o t e c t i o n !』

次の瞬間、全ての闇球から砲撃が放たれる。

その内、真っ直ぐ自分へ向かってくる砲撃を、のぞみは咄嗟に障壁を展開する事で防ぐ。

しかし、所詮は咄嗟に展開した障壁。

すぐにひびが入る。

「くう……!!」

砲撃に耐えながら、のぞみは新たに二枚の障壁を展開、同時に最初の障壁が砕け散った。

ルナの補助もあって、すぐにひびが入るような事はない。

だが、一向に砲撃が止まる様子はない。

このままでは、障壁が破られるのも時間の問題だろう。

「ふ……！」

障壁を展開したまま、のぞみは横に飛ぶ。

砲撃を障壁で僅かに逸らす事によつて。

「みんなは……？」

砲撃は全方位に放たれていた。

防いでいるだろうが、それでも心配するのは当然だろう。

周りを見回し、全員が回避できている事を確認する。

それにほっとしながら、のぞみはすぐに気を引き締める。

まだ、戦闘は終わっていないから。

のぞみは未だに砲撃を放ち続ける魔鎧装へと向き直る。

やはり、砲撃が止む気配はない。

全て避けられているのに、何故？

そんなのぞみの疑問も次の瞬間には氷解した。

動き始めたのだ、闇球が。

魔鎧装の周りを、砲撃を放ち続けながら。

当然、闇球の動きに合わせて砲撃も動く。

ただ、動き自体は遅いため避けるのは容易い。

この程度の速さなら反撃できると、のぞみは右腕を構え。

「っ!？」

しかし、すぐにその考えは間違이었다事に気付いた。

一気に増したのだ、砲撃の速さが。

自身のすぐ横を通り過ぎた砲撃に冷や汗を流しながら、のぞみは

高速機動へと魔力を割く。

反撃をする隙はなくなった。

砲撃の速さに、避けるのが精一杯になってしまったから。

その上、近づこうにも魔鎧装の周りの闇球の密度から近づけない。

「槍術伍之型」

しかし、そんなことは神速の二つ名を持つキリュウには関係ない。高速で動く砲撃を最低限の動きで避けながら、一角獣之槍を構える。

その構えから予想される次の動作は投擲。

そう、近づけないのなら遠距離からピンポイントで攻撃を当てればいい！

「流星！」

轟！

投擲されると同時に、一角獣之槍は音速を超える。

白い軌跡を残しながら超高速で突き進むそれは、まさに流星の様

衝撃波によってソニックムーブを生じさせながら砲撃の隙間を縫い、魔鎧装へと辿り着く。

ガアッ！？

突然の衝撃。

思いもしなかったその反撃に魔鎧装は驚愕しながらも吹き飛びはしない。

しかし、砲撃は止んだ。

『Sonic move!』

ガ……ッ!?

その隙を見逃す程、甘い者はいない。

背後からの衝撃、それに続いて魔鎧装の全身が切り裂かれる。

それはキリユウと同じ神速と呼べるほどの速さを持つ者、フェイト。

高速機動魔法で魔鎧装の背後に回り込み、二刀を振るう。

超高速で動きながら魔鎧装の攻撃を避け、自身の攻撃は確実に当たっていく!

そして、止めとばかりに二刀を重ねる。

生まれるは大剣、重攻撃専用の形態であるライオットザンバー・カラミティ!

その巨大な魔力刃は例え魔鎧装の堅固な装甲であろうと、容易く切り裂ける!

「はぁあッ!」

烈昂の叫びと共に、大剣が振り下ろされる!

その轟撃は、魔鎧装が防御の為に展開した闇を容易に砕き、止まらない。

装甲をも破壊し、魔鎧装を海面へと吹き飛ばす。

グウ……!

「天覇聖神流、特式槍術」

吹き飛びながら、魔鎧装は装甲を再生させていく。

それを止める為に、キリュウは一角獣之槍を構え。  
そして、その姿が消える。

「白夜十字槍っ！！」

撃！

撃撃撃ッ！！

同時に声が響き渡り、魔鎧装に前後左右から白い閃光が突き刺さる！

その正体は一角獣之槍！

音速を超えた速さで、更に高速回転しながら魔鎧装の装甲を削っていく！

ガアアアアアッ！！

前後左右からの同時攻撃に装甲を砕かれ、魔鎧装は悲鳴を上げる。

天覇聖神流、特式。

それはウィルレイン家に伝わる総合武術流派、天覇聖神流の派生系。

各々が得意とする事　ヴェルならば武、クレイならば守り、キリュウならば速さ、サラならば舞、セラならば弓　と、各々の固有武装を組み合わせる事により生まれる技。

故に同じ特式でも使用者によって異なる技となるし、使用者以外には使うことができない技である。

白夜十字槍はキリュウが自身の神速と固有武装である一角獣之槍から生み出した技。

超音速で動いている状態での超音速の投擲。

それも伍之型、流星を超える速度な上での移動と投擲だ。

慣性により槍は移動と投擲の二つの速度を足した速度となり、更には高速回転をも加えているのだ。

槍一本の威力は流星を大きく上回る。

それが四本、衝撃を逃さないように投げられているのだから、その威力は想像を絶するだろう。

「トライデント……！」

「アーク……！」

未だ勢いの弱まらない一角獣之槍によって空中に固定されている魔鎧装の真上と真下で、フェイトとキリュウが魔力を集束させる。

バルディッシュを上段に構えたフェイトの下には雷を纏った金色の魔力球が展開され。

コスモスを腰だめに構えたキリュウは、コスモスの刃に魔力を込めていく。

「スマツシャーッ……！」

「ランスッ……！」

煌！

真上からは金色の砲撃が。

真下からは緑色の巨大な槍の刃を模した魔力が回転しながら放たれ。

光が魔鎧装を飲み込んだ……。

グ……！ まさか、ここまでやるとはな……！

言っただろ……あいつらは絶対に負けないって……

頭に響く声に、魔鎧装と視界を共有し、意識だけが残っている未来がそう返す。

今、魔鎧装の装甲は全て碎かれ、赤い結晶体が現れている。

残念なことに爆煙でのぞみ達には見えないだろうが、それでも装甲を全て碎かれたことは変わらない。

異常な再生速度故に、もう再生が開始されて赤い結晶体が隠れていくのを感じながら、未来は気持ち笑みを浮かべていた。

のぞみ達なら、必ず碎いてくれる。

そう、信じられるから。

そう思っていると、視界一杯に広がっていた爆煙が急に晴れていった。

自然に晴れるには早過ぎる。

そう思っていたが、すぐにその疑問は晴れた。

キリユウ……

キリユウが一角獣之槍を高速で回転させ、それによって生じた風で爆煙を吹き飛ばしていたのだ。

すでに赤い結晶体は装甲に覆われていて見えないが、ほとんどの装甲を失っている魔鎧装の姿は確認できただろう。

これなら……。

ククク……確かにこれなら鎧を全て碎かれるのも時間の問題だろうな……

頭に声が響くと同時に、視界が変わる。

その視界の中心に映っているのは一人の杖を構えた少女。

だがなあ！ 一人ぐらい道連れにするぐらい簡単なんだよお！！

っ！？

その少女 カコへ向かって、ボロボロの魔鎧装が駆けだす。

ぐんぐんと近づくのがわかる中、カコはガイアを構えて砲撃で迎え撃とうとする。

カコッ！！

「え……！？」

しかし、カコは突然動きを止めた。

集束させていた魔力も霧散してしまう。

カハハハッ！ お前が守りたかった奴もこれで死んだなあ！！

カコオオオオオオオッ！！

視界に映る全ての動きがスローになる。

右腕が伸びる。

カコの首へ真つすぐ。

驚いた表情をしながら、カコは避けようと思わない。

いや、既に避けられない距離まで迫っている。

そして、右腕に付いている鉤爪がカコの首を切り裂こうとして。

視界の端に、赤と金が映った。

それに気付くと同時に、魔鎧装の体は吹き飛んでいた。

何……！？

何が……？

頭に悔しさを含んだ声が響き、同時に嬉しさを含んだ眩きを未来は洩らす。

込められた感情は真逆だが、同じ意味の言葉。

そんな意思に込め魔鎧装が振り向くと、そこには右腕に焰を、左腕に雷を纏った少女　のぞみがいた。

その瞳には確かな怒りと少しの悲しみが含まれている。

「あなた……何、カコちゃんを傷付けようとしてんのよ……！カコちゃんは、あなたの大切な妹でしょうが……！」

のぞみ……

絞り出すようにそう言ったのぞみに、しかし未来は声をかける事が出来ない。

何を言っても、その声は届かないから。

「カコちゃんを傷付けたら……例え意識がなかったとしても、あなたは自分を責め続ける。そんなの、カコちゃんも、もちろん私達も望んでない。だから……」

そこで言葉を区切り、のぞみは拳を構える。

カコを守るために。

「絶対に、あなたにカコちゃんは傷付けさせない……！」

「絶対に、あんたにカコちゃんは傷付けさせない!!」

やられる直前で、魔鎧装を吹き飛ばしてくれたのぞみがそう叫ぶ。しかし、カコの意識はそれよりも前の出来事に向いていた。

カコッ!!

「お兄……ちゃん……?」

確かに、未来の言葉が聞こえたのだ。

幻聴なんかではなく、はっきりと。

故に、さっきは迎え撃とうとした時に動きが止まってしまったのだ。

「ノア!!」

『Load cartridge!』

のぞみが右腕を激しく燃え上がらせ、魔鎧装へと駆けていく。しかし、カコにはそれを見ていることしかできなかった。

「お兄ちゃん……」

それほどまでに、先程聞こえた声が気になっていた。今、未来は暴走していて意識はないと思っていた。しかし、もし意識だけは残っているとしたら?

「お兄……ちゃん……」

呟き、魔鎧装へと視線を向ける。

ボロボロになりながら、のぞみ達と激闘を繰り広げる魔鎧装。

未来の意識は残っているのだろうか。

のぞみ達との戦闘を見ながら、自分の体を動かせない事に憤りを感じているのだろうか。

「ガイア……」

『何でしょう、マスター』

のぞみが魔鎧装に拳を叩きこんだのが見えた。

なのはが桜色の光砲を放ったのが。

フェイトが金色の巨大な刃で装甲を切り裂いたのが。

キリウウが神速で駆け、突きを決めるのが。

サラが両手に握る扇に雷を纏わせて舞うのが。

セラが弓に番えた巨大な光矢で射るのが。

セレナが光輪で闇を撃ち抜くのが、見えた。

「フルドライブ、行ける？」

見ているしかない自分が嫌だった。

のぞみ達が未来を助けようと必死になっているのに、後方で支援だけしている自分が。

自分も一緒に戦いたい。

後ろからではなく、横に並んで。

『……マスター、フルドライブの使用は禁止されています。それに、マスターのフルドライブは高町一等空尉やハラウン執務官のオーバードライブほどではありませんが、普通のフルドライブよりも体への負担が大きいです。健康体ならともかく、今の状態で使うのは

……』

ガイアがそう言ってくる。

ガイアは未来の母に作ってもらった　もう、何年も一緒にいる愛機だ。

そんな愛機だからこそ、主の事を心配してフルドライブの使用を止めようとする。

傷付いてほしくないから。

自然と伝わってくる愛機の気持ちに、カコは思わず微笑む。

『第一、マスターがフルドライブを使わなくても魔鎧装の装甲は破壊されるではないですか』

「うん……わかってる。それでも、私はフルドライブを使いたい。

はやてさん達は否定してくれたけど……やっぱり、お兄ちゃんの暴走の責任は私にあると思う。なのに、遠くから支援するだけなんて

嫌だから」

『……わかりました』

長い時を共に過ごした愛機だからこそ、主を心配するしその気持ちもわかる。

だから、ガイアはフルドライブの使用に賛同した。

本当は使ってほしくない。

でも、使わなかったらカコは自分を絶対に許せなくなるから……。

『Full drive Setup』

光がカコを包む。

通信は既に切つてあるからはやての声が聞こえることはない。

のぞみ達の声は聞こえるが……意図的に聞かないでおく。

後で、怒られるだろうなあ。

そんな事を考えている間にも、ガイアとバリアジャケットは再構成されていく。

青いクリスタルに二対の翼が付いた形状のガイアは、四つの小太刀のような形状のものが峰を内側に向けて向かい合っている。

そして、小太刀ならば刃がある部分には小さいが翼状のものが付いている。

バリアジャケットもマントが消え、代わりに袖の無いジャケットが纏われる。

更には左腕にガントレットが装備され、両肩と腰の左右に軽い装甲が装着される。

《カコちゃん、何でフルドライブ使ってるの!?!》

「……やっぱり、お兄ちゃんの暴走の責任は私にあると思うんです。なのに、後ろから援護するだけなんて……そんなの、嫌なんです。だから、前に出て一緒に戦う為に……フルドライブを使いました」

念話を使って叫ぶのぞみに、カコはそう返す。

例え何を言われても、止まる気はない。

そんな決意が伝わったのだろう。

のぞみは溜め息を吐き、微笑みを浮かべる。

《……そういう事なら、今は何も言わない。でも、終わった後たっぷり説教してあげるからね》

「……はい!」

のぞみの言葉にカコは満面の笑みを浮かべ、答える。

そしてすぐに気を引き締め、ガイアを振りかぶる。  
展開される大量の空色のスフィア。  
その数、数百。

「フォトンシューター……ファイアッ!!」

輝!

一斉に放たれる光球群。

細かい操作はしない。

魔鎧装へと真つすぐ飛んでいくように操作するのみ。

それでも大量のスフィアによる“面”での攻撃は、魔鎧装に回避をさせない。

グウ……!!

魔鎧装は唸りながら、前面に闇の障壁を展開。

光球を防ぐことに専念する。

故に気付けなかった。

後ろから近づく者がいることに!

「ギロチンショット!」

いつの間にか魔鎧装の背後に回っていたセレナが光輪を放つ。

大量のスフィアを防いでいる魔鎧装には防げないし、避けれない。  
背中の装甲を砕かれながらも、魔鎧装はその衝撃に耐える。

「ネクサス!」



煌！

集めた闇が右腕ごと、空色の光に飲み込まれた。

予想もしなかった攻撃に驚きながら、魔鎧装はその場から離れる。同時に、魔鎧装のいた場所を先程と同じ空色のスフィアが通り過ぎた。

「まだだよ！」

カコの声と共にスフィアは方向転換し、魔鎧装へと飛ぶ。それを闇球を撃つことで迎撃し、魔鎧装は左腕に闇を溜め上空へと放つ。

ダークネス・クラスター！

そして分裂、カコ達に降り注ぐ！

「っ！」

あるいは防ぎ、あるいは避け。

カコ達は闇球に対処する。

その隙に魔鎧装は装甲を再生させていく。

しかし、その速度は先程までよりも遅くなっていた。完全に破壊された右腕の装甲の再生も遅い。

「槍術陸之型、奥義！」

だが、いくら遅くても再生されてる事に変わりはない。

再生を止める為、降り注ぐ闇球をくぐり抜けて魔鎧装の背後に回り込んだキリュウが緑色に輝くコスモスを構える。

「牙龍破碎槍！！」

放たれる突き。

巨大な牙のような魔力を纏ったその突きは魔鎧装の背中に叩きこまれ、その装甲を砕く。

更にキリュウはコスモスを回転させ、石突で魔鎧装を吹き飛ばす。

グウ……………！ ガア……………ガアアアアアアアアアアア！！

轟！

吹き飛ぶ魔鎧装の背中から闇が噴き出す。  
それはやがて三対の巨大な翼を形作った。

魔鎧装は二、三度羽ばたくと、翼から大量の闇球を放った。  
狙いもなく、ただがむしやらに放っているだけだが、魔鎧装に近づくと事はできなくなってしまった。

「くう……………っ！ 皆さん！」

「……………何、カコちゃん！」

闇球を避けながら、カコがのぞみ達に声をかける。

「魔鎧装の装甲を砕くのをお願いしていいですか！？ コアは私が砕きます！」

「出来るのね!?!」

のぞみが問う。

それにカコはしっかりと頷いた。

暴走の責任は自分にあるのだから、せめて止めの一撃は自分が決めたいから。

「……わかった。装甲を砕くのは私達に任せなさい!」

「はい!」

カコの返事を背中に受けながら、のぞみは左腕でプロテクションを三重展開。

闇球を防ぎながら、魔鎧装へと駆ける!

当然、近づくにつれて弾幕は濃くなる。

それでも、のぞみは駆け続ける!

「フレイム……!」

右腕のノアからカートリッジを排出。

既に一枚だけとなったプロテクションに魔力を注ぎながら、のぞみは速度を上げる。

そして弾幕の薄い魔鎧装の懐に潜り込み、プロテクションを解除。

「インパクトツ!!」

撃!

がら空きの腹部に、燃え盛る右腕を叩きこむ!

右腕は叩きこまれると同時に爆発、装甲を砕き、闇球も止んだ。

「式之型、流！」

そこに、のぞみの背後から魔力矢が飛来し魔鎧装を射抜く。それは魔鎧装の関節を貫き、その動きを阻害した。

「今です、のぞみさん！」

「ありがとう、セラ！」

魔力矢を射続けながら、セラが叫ぶ。それに応え、のぞみは左腕を引く。カートリッジが排出され、雷が左腕を覆う。

「サンダーインパクト！」

叫びと共に雷纏う左腕が魔鎧装に叩きこまれ。雷が魔鎧装の体を貫いた。

「……ガイア、シューティングフォーム」

『All right. Shooting form』

のぞみ達と魔鎧装の戦闘を視界に納めながら、カコはガイアをシューティングフォームへと変える。

弓の形状となるこのフォームは他のフォームよりも魔力の圧縮に優れており、一点集中の貫通力の高い攻撃を主としている。

弓の両端を繋ぐ魔力の弦を右腕で引き、魔力矢を作り出す。同時に弓の持ち手部分付近から四枚の魔力翼が展開された。

『Shinning blaster・Shooting mode  
Shinning arrow』

周囲に散布されている大量の魔力が矢へと集束していく。  
しかし、矢の大きさは変わらない。集束と同時に圧縮も行っているからだ。

「まだ……まだ……！」

更に両肩、両腰、左腕の装甲が展開し、そこから魔力翼が広がる。魔力矢を射る際の反動に耐える為の姿勢制御と身体強化の役割がある魔力翼が。

「まだ……！」

高密度に圧縮された魔力矢は既に空色を超えて蒼になっていた。

ただでさえ負担の大きいフルドライブの発動中に、同じく負担の大きい集束と圧縮。

そして展開した魔力翼による体への負担も大きく、万全の状態でないカコにその負担に耐えるのは難しい。

口の端からは血が流れ、両腕の指からも血が噴き出している。

その上傷口が開いたのか、カコの脇腹からはバリアジャケットの上からでもわかる程血が滲んでいる。

それでも集束と圧縮を止めないのは、この一撃でコアを砕きたいからだろう。

『マスター、もう十分です！ これ以上はマスターの体が壊れてしまいます！』

ガイアの悲鳴に近い叫びにカコはエへへと笑いながら、集束を止めない。

そして、自身の魔力が尽きるギリギリの所で漸く集束を止めた。

「準備、できました……！ いつでも、撃てます！」

「っ！ ……ええ！」

ポロポロのカコを見て辛そうに歯を食いしばり、のぞみは答える。それと同時に魔鎧装を殴り飛ばし、おまけとばかりにバインドで動きを封じてから距離を取る。

「なのはちゃん！」

「うん！」

のぞみの叫びになのはが答える。

その周りには四機のビットがあり、なのはが構えるレイジングハートと同じく魔鎧装へとその先端を向けていた。

既にその全ての先端には桜色の魔力球が展開されている！

「デイバイン……バスタアアアア……！！！」

煌！

かつて聖王のゆりかごを内部から撃ち抜いた時には劣るものの、それでも莫大な威力を誇る光砲が魔鎧装へと突き進む。

バインドで動きを封じられている魔鎧装に回避はできない上に、この光砲の前では防御も無駄。

魔鎧装は何の抵抗も出来ず、光砲に飲み込まれた。

グウ……ガア……！

光砲が止むと、ボロボロになった魔鎧装の姿が現れた。

既に装甲は頭部と胴体部分しか残っておらず、その残った装甲もひびだらけ。

あと一撃加えれば、砕け散るだろう。

「伍之型、操！」

その一撃を確実にする為、セラが魔鎧装の四肢を矢で射抜き動きを封じる。

動きの封じられた魔鎧装に、四方からフェイト、セレナ、キリユウ、サラが迫る。

「はあっ！」

「てやあっ！」

「双閃！」

「風舞！」

そして、すれ違いざまに自身のデバイスで魔鎧装を切り裂く。

フェイトは雷を纏った斬撃で。

セレナは属性カートリッジを用いた炎を纏った斬撃で。

キリユウは神速での連撃で。

サラは風を纏った扇による舞で。

魔鎧装の装甲を砕き、振り切った勢いそのまま魔鎧装から離れる。

同時に、装甲を全て砕かれた魔鎧装の胸部の前に赤い結晶体が現



砕けなかった。  
兄を……救えなかった。

「未来を守ったカコちゃんに責任があるのなら……あの場にいたのに何も出来なかった私にも、責任があるわよね」

そんな絶望しかけたカコの耳に、優しい言葉が届いた。

同時に、視界の中に白銀の装甲に身を包んだ女性が飛び込んだ。た。

その右腕には烈火、そして轟雷が宿っている　　！

「覇焰、雷神掌！！」

女性　のぞみの拳はコアに突き刺さったままの魔力矢に叩き込まれ、更に押し込む。

それだけではなく、拳を覆う炎と雷もコアに叩き込まれわけで。

砕！

ここまでやって、砕けぬ物などある筈もなく。

魔鎧装のコアは、跡形もなく砕け散った。

「ユニゾン・アウト！　ルナ、後は頼んだわよ！」

「はいっ！」

コアの再生が始まる前に、のぞみはルナとのユニゾンを解除。のぞみの体から飛び出したルナは真っ直ぐ未来へと飛んでいきユニゾンした。

同時に、未来は銀色に輝く球形の魔力に包まれた。

それを見たのぞみは、すぐにカコへ飛んでいき肩を支えた。それとほぼ同時に、カコのバリアジャケットは消失し白い教導隊の制服に変わる。

バリアジャケットの維持も難しい程魔力を消費したのだろう。

「すぐに、六課の医療室に連れて行くわよ！」

白い教導隊制服を血で赤く染めるカコを、のぞみは急いで六課へ運ぼうとする。

意識を保っているのが奇跡のような状態だから。

「待って……下さい……」

「っ！ カコちゃん!？」

のぞみのバリアジャケットの裾を、カコが弱々しく掴む。それにのぞみは驚き、その動きを止めた。

「せめて……最後まで、ここにいさせて下さい……」

「で、でも……」

「お願い……します……」

カコの目を見て、のぞみは黙ってしまう。その目に宿る確固とした意思を見たから。何を言っても、カコは引かない事が伝わったから。

「はぁ……わかったわよ」

「ありがとうございます……「ございます……」

笑顔で礼を言うカコに溜息を吐きながら、のぞみは左腕をカコのわき腹にかざす。

すると、腕が輝きだした。

「付け焼刃だけど……少しは治療魔法使えるから。これで、少しはマシになるでしょ」

小さい頃に親に言われて使えるようにした治療魔法がこんな所で役に立つなんて。

そんな事を思いながら、のぞみは腕をかざし続ける。  
すると、その腕に誰かの腕が重なった。

「昔はよく、兄さん達や姉さん、お姉ちゃんの怪我の治療をしてましたから……私も手伝いますよ」

腕を重ねながら、セラが笑顔でそう言う。

輝きは増し、カコの顔色が良くなってるのがわかる。

「のぞみさん……セラさん……ありがとうございます……」

「気にしないでいいわよ」

「はい、当然のことをしてるだけですから」

再び礼を言うカコに二人はそう返す。

そして、三人は未来の方へ視線を向ける。

いや、三人だけではない。

その場にいる全員が、未来へと視線を向けていた。

「カコちゃんがこんなになるまで頑張ったんだから……絶対戻って来なさいよ、未来……」

未来を見ながら、のぞみがそう呟く。

もう、自分達には祈る事しかできないから。

後は、未来自身の戦いだから。

未来が戻ってくる事を祈って、のぞみ達は目を閉じた……。

( t o b e c o n t i n u e d …… )

## 第十九話 救う為の戦い（後編）（後書き）

次話は久しぶりの未来の戦闘です。

久しぶりすぎて上手く書けるかは不安ですが、頑張ります。

今回は模試やら中間考査やらで執筆時間が取れない可能性が高いですが、なるべく六月中には更新するつもりです。

……最近になって携帯よりもPCの方が書きやすい事に気付きました（汗）

これなら最初っからPCで書けばよかつたなと後悔してます（笑）

それと前話から少し戦闘描写を変えてみました。

まだまだ下手ですが、下手は下手なりに頑張っているので気になった点があったらなんでもおっしゃって下さい。

誹謗中傷でないアドバイスはしっかりと受け入れ、自分の糧にしていくので。

それでは、また次回。

## 第二十話 精神世界での戦い（前書き）

時間はかかりましたが、なんとか書けました！

……ええ、またまたグダグダになりましたが（汗  
ちなみに中間の結果は壊滅（笑

七月一日からの期末はマジで頑張らないと（笑

なお、今回初めて次回予告に挑戦してみました。

下手ですが、今後も思いついた際は次回予告を載せることになるのでよろしく願います。

……あくまで思いついた時なので次回予告が載るのはかなり不定期になります（笑

## 第二十話 精神世界での戦い

「ここは…」

気がついた時、未来の視界に映ったのは地平線まで続く広い荒野だった。

以前夢に見たのと同じ荒野。

違うのは地面のあちこちにデバイスらしき武器が突き刺さっている事だろう。

刀、大剣、槍、斧、戟、弓、鎚、杖。

様々な武器が荒れた大地に突き刺さっている。

「なんで、こんな場所に……？ それに、体が動く……」

さっきまで魔鎧装と視界を共有するだけで、体を動かせなかったのに。

なのに今は自由に体を動かせる。

一瞬のぞみ達に助けられたのかと思っただが、それならこんな所にいる理由がない。

なら、ここはどこだ……？

「ここはマスターの精神世界です」

「っ！？」

後ろから聞こえた声が、その疑問に答える。

振り返ると、そこには自身の融合騎であるルナがいた。

「ルナ……？ 俺の精神世界って、どういう事だ？」

ルナの言葉に対し、未来は当然と言える疑問を問う。

いきなり、ここはあなたの精神世界ですと言われ、はいそうですかと納得できるような人間はいない。

そんな未来の問いに、ルナは真剣な表情で口を開いた。

「それも含め、マスターの暴走の原因についてお話します」

そしてルナはのぞみ達に喋った事と同じ事を語り出した。

本来の魔鎧装の事。

発生したバグの事。

そして、未来が元に戻る方法を。

「……ここ、マスターの精神世界で魔鎧装を倒せば元に戻る事ができます。逆に、もし負けたらマスターの精神は完全に破壊され、元に戻る事はありません」

「そうか……」

ルナの話聞き、未来は魔鎧装と視界を共有していた時の事を思い出す。

あの時、直接頭に響いてきた声。

ルナに聞いた異形態の人格とは少し違うが、それも魔鎧装の意志だったのだろう。

「マスター……」

「……大丈夫、俺は負けないさ。カコ達の頑張りを無駄にしたいくないしな」

不安げに自分を見上げてくるルナに未来はそう言い、その頭を撫でる。

頭を撫でられて、目を細めながら気持ちよさそうにするルナを見ながら、しかし未来の内心は不安で埋め尽くされていた。

使えるデバイスはカリバーンのみ、メビウスリングは使えない。

やはり共にいる時間の長いメビウスリングの方が使い慣れている分勝率は上がるし、カリバーンではフルドライブもオーバードライブも使用した事が無い。

はつきり言って、勝率は1%も無い 皆無だ。

負けないと言ったのも、ルナを安心させる為だった。

て、俺が弱気になってどうすんだよ。

ふるふると頭を振って、自身の弱気な考えを消す。

絶対に諦めるな。諦めなければ、きっと神様が後押ししてくれる

頭に浮かぶのは、のぞみの言葉で思い出した尊敬する父の言葉。諦めなければ、必ず勝機が見えてくる。

ガシャンッ

まるで未来が決意を確固とするのを待っていたかのように、背後から物音が聞こえた。

振り返らずともその正体はわかる。

「……ルナ、行くぞ」

「はい、マスター」

「ユニゾン・イン」

声を掛け、未来はカリバーンを展開すると同時にルナとユニゾン。その姿はカリバーンのみの展開故に、普段と違い黒いバリアジャケツトは展開されていない。

肩、胸、腰、足を覆っていた銀色の装甲も全身を包む鎧となっていた。

振り向くと同時にカリバーンを構える。

そこにいるのはカリバーンの銀色の鎧とは対照的な黒い鎧 魔鎧装。

「あれは……メビウスリング……？」

魔鎧装が握る剣を見て、未来は思わず呟いた。

色こそ漆黒に染まっているものの、その形状はどう見てもメビウスリングだった。

何故、こいつがメビウスリングを持っている？

そんな未来の疑問にルナが答えた。

「通常態の魔鎧装はその時のマスターの使う武器と同じものを作り出し、使います。あれも、闇で作り出したメビウスリングの偽物です」

「そういう事か……」

ルナの説明に納得し未来は改めて魔鎧装を見るが、魔鎧装は一向に構える気配がない。

腕を下げたまま、ただただ立っているだけ。

「構える気配がまるでない……？　なら……」

試しにスフィアを一つ展開、それを魔鎧装へと撃ち放つ。それを魔鎧装は避けようと防ごうともせず、直撃。しかし、その漆黒の装甲には傷一つ入っていなかった。

「見てはいたが、やっぱり硬いな……」

そう呟くと同時に、未来は駆け出していた。

カリバーンを両腕で握り、一気に魔鎧装との距離を詰める。

「はあっ！」

間合いに入ると同時にカリバーンを振り上げ、袈裟がけに振り下ろす。

その一撃は魔鎧装の胸部装甲に一筋の傷を付けるが、その傷は浅かった。

すぐに周りの装甲から闇が溢れ、その傷は再生された。

オオオオオオン……

「っ！？」

低く響く声と共に、魔鎧装が剣を振るった。

ただの振り上げ。

それを未来はカリバーンで受け止め、しかし。

その緩慢な動作からは予想できないほどの威力に、未来は吹き飛ばされた。

「ぐう……っ！」

吹き飛びながらもカリバーンを地面に突き刺し、削りながら勢いを止めていく。

そして、勢いが完全に止まると同時にカリバーンを抜き、再び駆けだした。

「ルナ、刀身の片側の刃にだけ魔力を圧縮してくれ」

『わかりました！』

未来の言葉に答え、ルナはカリバーンに流し込まれた魔力を操作する。

刀身の片側の刃だけに魔力を圧縮し、青く輝かせる。

普段なら刀身全体に魔力を纏わせるのだが、相手は堅固な装甲を持つ魔鎧装である。

長期戦になるのは必至であり、更にカートリッジも使えない。使えるのは自身の魔力だけ。

だから、魔力を節約し少ない魔力で確実にダメージを与えるしかない。

その為に未来は魔力を圧縮する事で威力を上げる事にしたのだ。

「しっ！」

鋭い呼気とともに、未来は加速。

魔鎧装と接触する直前で跳躍、更にちょうど片足が乗る程度の大さの魔方陣を展開、それを足場に再び跳躍する。

そして、体を捻り片側が青く輝くカリバーンに落下の勢いを上乗せし、振り下ろす！

撃！

「っ！」

しかし、その一撃は魔鎧装が掲げた剣によって受け止められ、僅かに傾けられた剣により勢いを横に逸らされ、魔鎧装の肩の装甲を切り裂いただけだった。

「ちっ！」

舌打ちし、未来は後方へ下がる。  
同時に、先程まで未来がいた場所を剣が通り過ぎた。

地面を滑りながら、未来は考える。  
何か手はないか、確実にダメージを与えられる方法はないか。

「……？」

反撃の糸口を掴む為に魔鎧装を睨んでいると、未来はある違和感を感じた。

魔鎧装と視覚を共有していた時の戦闘と何かが違う。  
そして、未来はすぐにその違和感に気づいた。

「肩の装甲が再生していない……？」

そう、再生していないのだ。

未来が切り落とした肩の角が。

切り落とされた先の角は地面に落ちたまま、肩の装甲から新しく角が生える様子もない。

「まさか……」

その様子を見て、未来はある“仮説”を立てる。そして、その仮説を確かめる為に動き出した。

「バーンスフィア！」

カリバーンを横風に振るい、十数個のスフィアを展開。スフィアとはいっても、魔力を節約した見かけだけのスフィアだが。

「ファイアツ！」

そんなスフィアでも利用価値はいくらでもある。スフィアを放ち、一拍おいてから未来は駆けだす。スフィアを自身の前方に配置しての突撃。そして、未来は魔鎧装の直前で、自らスフィアを切り裂いた。

爆

それにより起こったのは威力のない、爆煙のみを発生させる爆発。それは未来と魔鎧装を覆い、その姿を隠した。

グウ……

「はあっ！」

唸り、周りを見回す魔鎧装の背後の爆煙から未来が飛び出す。同時に振るうは青く輝くカリバーン。

突然の攻撃に魔鎧装は反応し切れず、背中を右腕の装甲を切り裂かれた。

「しっ！」

そして、その勢いのままに方向転換、振り向き様に胴体を切り裂き。

すぐに魔鎧装から距離を取り、睨みつける。  
視界に入るのは魔鎧装、そして再生していく右腕と胴体の傷。

「やっぱり……」

それを見て、未来は自身の仮説を確実なものとした。

笑みを浮かべ、カリバーンを構え直す。

自身の仮説が確実なものとなり、勝率は上がった。

だが、それでも低い事に変わりはない。

だから、更に勝率を上げる為に。

「ルナ…… オーバードライブ、使えるか？」

『……いえ、無理です。オーバードライブを使うにはカリバーンの機能はまだ完全ではありません。それに、もし機能が完全であつても今のマスターでは反動に耐えきれず確実に死亡してしまいます』

「そうか……」

そう呟く未来の笑みは消えていない。

オーバードライブを使えないであろう事は予想の範囲内だったから。

故に、未来はそれに類する力を解放する。

「なら、フルドライブを使うぞ」

『……わかりました』

フルドライブ。

オーバードライブには及ばないが、十分な力を誇るそれを未来は解放する。

未来がフルドライブを発動しようとしたのを見て、魔鎧装はそれを止める為に駆け、しかし。

「フルドライブ！」

煌！

辿り着く前に二人は光に包まれ。

魔鎧装はその光に弾かれた。

グウ……！

光が収まると、未来は僅かに変化した鎧を纏っていた。

未来の魔力光と同じ青いラインが走る銀色の鎧。

その左腕には盾のような装甲が追加されており、通常よりも重厚なものに。

逆に右腕からは装甲が減り、洗練されたものになっていた。

そして、カリバーン。

銀一色だったそれは、鏢に金の装飾が入り、刃にも金色のラインが走っている。

ガアアツ！！

叫びを上げ、魔鎧装が未来へと駆ける。  
駆けるその身に闇を纏い、漆黒の砲弾と化す。

真っ直ぐ突進してくる魔鎧装に、未来はカリバーンを腰溜めに構え。

接触する直前で、回転しながら右に移動。

「はっ！」

閃！

すれ違い様にカリバーンを振り抜き、魔鎧装の左腕を切り裂く。  
そこから右足を軸に逆回転、カリバーンを返し、振るう。  
しかし、二撃目は魔鎧装が加速した事によって空振りに終わる。

「うおおおおおおおっ！！！」

それでも未来は退かない。

こちらも加速、魔鎧装に追いつきカリバーンを振り下ろす！

それを魔鎧装は闇剣で受けるが、未来の勢いは止まらない。

上段、振り上げ、逆袈裟、突き、薙払い、袈裟斬り。

絶え間なく振るわれるカリバーンを魔鎧装は闇剣で受け、それでも受けきれなかった斬撃はその装甲に傷を入れていく。

グルウ……！！ ガアアアッ！！

これ以上は危険と判断したのか、魔鎧装は叫びを上げ、全身から闇を放出。

ギリギリでプロテクションを展開した未来は防げたものの、吹き

飛ばされた。

「くっ……」

ガアッ！

吹き飛んだ未来へ追撃をかけようと、魔鎧装は一気に距離を詰め、闇剣を振り上げる。

それに未来は不安定な体勢からカリバーンを振り上げ、受け止めようとして。

しかし、不安定な体勢では十分な力は出せず、再び吹き飛ぶ。

「ぐう……！」

それでも今度は上手く着地し、魔鎧装が追撃をかける前に自分から突っ込む。

一際強く輝くカリバーンを両手で握り、高速機動魔法を発動。

魔鎧装の正面ではなく、背後から振り下ろす！

撃！

「まだだっ！」

魔鎧装の背中の装甲を切り裂き、未来は更にカリバーンを振るう。まだ輝いているカリバーンを翻し、横薙ぎに魔鎧装の腕を斬りつけた。

そのまま更に斬りつけようとして。

「っ！」



「おおおおおおおおおおおおおおおおつ！」

裂昂の叫びと共にカリバーンが振り上げられ、魔鎧装の左腕を切り裂き。

未来はカリバーンの切っ先を魔鎧装に向け、構えた。

その構えから予想される次の動作は突き。

そして、未来は先端が青く輝くカリバーンを突き出した。

砕！

カリバーンが魔鎧装の左腕　その関節を貫く。

魔鎧装の堅固な装甲を貫いた事に未来は笑みを浮かべ、渾身の力を込めカリバーンを横に振り抜き。

「はあああああああああああああつ！！！」

ガ……！？

魔鎧装の左腕を切り落とした。

左腕を切り落とした未来はすぐに魔鎧装との距離を取る。

下手に追撃して一撃を貰わない為に。

「よし……！！！」

魔鎧装のある部分を見て、未来は笑みを深める。

その視線の先には魔鎧装　その“一向に再生する様子のない”

左腕があった。

この世界では魔鎧装の再生力は低下する。

それが、再生しない魔鎧装の方の角を見て未来が立てた仮説であ

った。

事実、傷付いた装甲の再生速度は落ちていた。とはいっても、未来には魔鎧装の堅固な装甲を一撃で切り落とせるとは思えなかった。

肩の角を切り落とせたのはただの装飾だったからで、これが腕や足だったら一撃では切り落とせなかっただろう。

では、どうすれば腕なども切り落とせるか。

そこで未来は一ヶ所を集中的に狙うことにした。

その事に気付かれないように他への攻撃も織り交ぜながら、確実に左腕を斬りつけていた。

もしも外の世界だったのならすぐに再生され意味を成さなかっただろうが、この世界では魔鎧装の再生力は落ちている。

だから未来は再生しきる前に次の一撃を叩きこみ、ダメージを蓄積していったのだ。

そして止めの突きからの薙ぎ払い。

たび重なる斬撃により脆くなっていた装甲をカリバーンは容易に貫き、魔鎧装の左腕を切り落とす。

「これなら勝てる……！」

魔力量の残りにもまだ余裕がある。

楽々とは行かないだろうが、これなら……。

そう考えながらカリバーンを構え魔鎧装を睨んでいると、魔鎧装が動き始めた。

動き始めた、とは言ってもこっちに向かってくるのではない。

地面に転がっている自身の左腕を拾い、切り落とされた断面に押し付けた。

轟！

「っ!？」

瞬間、魔鎧装の体から溢れだす闇、闇、闇。

それは瞬く間に魔鎧装を覆い隠し、闇が消えた時、魔鎧装の姿は変わっていた。

魔鎧装の異形態の中で最も速さに優れた形態　瞬迅態へと。

右腕が長刀ではなく装甲に覆われた普通の腕になっていたが、その特徴的な曲線を描いた装甲は確かに瞬迅態だった。

そして、切り落とされた左腕も繋がっていた。

おそらく、瞬迅態へ変化する際に放出した大量の闇で繋がったのだろう。

「ちっ……!」

舌打ちし、未来は戦略を考え直す。

四肢を切り落とし確実に魔鎧装の動きを封じてから止めの一撃を叩き込もうと考えていたが、これでは切り落としても変化の際に再生されてしまうだろう。

そうなると、一撃で勝負を決める必要がある。

その為には、自身が使える中でも最強の破壊力を持つ魔法を使う必要がある。

「まだ完全じゃないが……煌剣を使うか……」

煌剣。

それは未来にとっての切り札の中で、今の状態でも使えるもの。

まだ完全ではなく発動にも時間がかかるが、それでも今未来が使える全魔法の中で最大の威力を誇っている。

カリバーンに魔力を込め、すぐにでも駆けだせるように重心を前

に倒す。

そして、一気に駆けだそうとして。

その目の前に、魔鎧装が現れた。

「っ!？」

全く見えなかった。

予備動作も、近づいてくるまでの動きも。

未来は咄嗟にカリバーンを振るおうとするも、駆け出そうとしていた時に魔鎧装が現れた為に間に合わない。

跳ね上げられた魔鎧装の左足に顎を蹴り上げられ、宙に浮かぶ。

そこに魔鎧装からの更なる追撃、闇を纏った右拳で殴り飛ばされた。

撃!

「が……あ……!」

地面を跳ねながら吹き飛ばす未来。

やがて地面に転がった岩にぶつかり、漸くその勢いは止まった。

「うほっ、うほ……っ!」

咳と共に吐血し、苦しそうに顔を歪めながらも未来は立ち上がる。倒れたままではただの的にしかないから。

今の魔鎧装にとってはこの程度の距離は一瞬で詰められるのだから、それでも早く立ち上がるに越したことはない。

口に残った血を吐き捨て、カリバーンを振り上げる。

同時に展開する数十のスフィア。  
先程放った見かけだけのスフィアではない、しっかりと魔力の込められたスフィアだ。

「バーストスフィア、ファイアツ！」

振り下ろし、全てのスフィアを放つと同時に未来も駆ける。  
狙いは先程と同じく、爆発による爆煙で目隠しした上での死角からの奇襲。

グウ……

しかし、全てのスフィアが爆発する前に断ち切られた。  
魔鎧装が右手を変化させた長刀の一閃によって。

切られたスフィアは爆発することなく、ただの魔力粒子となり消えていった。

「ちっ！」

スフィアを無効化された事に舌打ちしつつ、未来はカリバーンを地面へ振るう。

舞い上がる砂塵。

それは魔鎧装を覆い、視界を奪った。

「おおおおおおおおおっ！！！」

背後からでも、横からでもない。

未来は足を強化することで高く跳び、魔鎧装がいるであろう場所にカリバーンを振り下ろす。

しかし、その場所に魔鎧装は居らず、空振りに終わり。

ゴアアツ！

「が……！」

その背後から殴り飛ばされた。

吹き飛びながらも、未来はカリバーンを振るい纏わせた魔力を斬撃として放つ。

が、それは魔鎧装が左腕に握っている短剣により消し飛ばされた。

グルウ……！

そして、魔鎧装の姿が再び変化していく。

頑強な四肢にバッファローのような角 剛力態だ。

ガアアツ！！

叫び、魔鎧装は横薙ぎに斧を振るう。

一閃、たったそれだけで、発生した衝撃波は地面を砕いた。

「く……っ」

自身に飛んできた破片から、未来は左腕に付いた盾状の装甲で顔を守る。

動きが止まった未来に対し魔鎧装は闇を纏わせた斧を高く振り上げ、地面に叩きつけた。

轟！

纏われていた闇と衝撃波が混ざり合い、地面を走る。

高速で地面を走るそれに、盾で顔を守っていた未来は反応が遅れ、既に避けられない距離まで近づいていた。

「っ！」

『プロテクションッ！』

障壁を張るのも間に合わないと判断した未来は衝撃に耐えようと盾を構えるが、接触するギリギリでルナが障壁を展開、迫る衝撃波を防いだ。

『マスター！ 今攻撃を受けては不利になるだけですよ！ 諦めないでー！』

「ああ……。ありがとな、ルナ！」

叱責するルナに礼を言い、カリバーンを構える。

相手は動きの鈍い剛力態だ。

ならば高速機動で翻弄すれば……。

そう考え、未来は高速機動魔法で魔鎧装の背後に回り込みカリバーンを横薙ぎに振るう。

だが、その一撃は剛力態の分厚い装甲に阻まれ大したダメージを与えられなかった。

「ちっ」

舌打ちすると同時に未来は跳躍、カリバーンを地面へと振るう。魔力を纏わせたその一撃は地面を抉り、魔鎧装の足元を砕いた。それにより魔鎧装はバランスを崩し、地面に倒れる。

グウ………！

「はあぁっ！！」

倒れた魔鎧装に未来は落下の勢いも加え、カリバーンを振り下ろす。

しかし、それでも魔鎧装の頑強な装甲を貫くことはできず、阻まれた。

そこに振るわれる、剛力態特有の巨大な斧。

未来はギリギリでカリバーンを引き戻し、斧を受け止めたが剛力態の力の前に吹き飛ばされてしまう。

「ぐっ………！」

呻きながらも、くるっと回転し着地。

地面を滑りながらスフィアを展開する。

しかし、スフィアは放たれる前に撃ち消された。

「な………！？」

その事に驚愕しながら、未来は魔鎧装へと視線を向ける。

視線の先、魔鎧装の姿は変わっていた。

右腕の大口径の砲身に、こちらに向けている左腕の十数の銃身砲撃態だ。

ガアッ！

咆哮と共に左腕の銃身から撃ち出される大量の閻弾。それを未来は横に跳び、避ける。

しかし、魔鎧装はその後を追って閻弾を撃ってくる。

これじゃあ、近づけない……！

そう思いながらも、未来は何とか魔鎧装に近づく手段がないか考  
える。

障壁で防ぎながら距離を詰める　ダメだ、間合いに入る前に障  
壁を破壊される。

砲撃を放ち、一瞬でも閻弾を止める　ダメだ、右腕からの閻砲  
で相殺される。

魔鎧装の閻が切れるのを待つ　ダメだ、その前にこっちの体力  
が切れる。

「くっ………！」

考える。

何かないか。

何か魔鎧装との距離を詰める手段はないか。

閻弾を避けながら、未来は魔鎧装へ視線を向け、気づいた。

魔鎧装の背中から溢れる閻が右腕の砲身に絡みついている事に。

グルウ………！

そして、魔鎧装は閻弾を撃ちながら閻が絡みついた砲身を未来に  
向けた。

砲口に閻が集まり、閻球を成す。

その間にも閻弾は放たれ続けている為、未来は魔鎧装に近づく事  
が出来ない。

ガアッ！

闇砲が放たれる。

真つすぐ突き進んでくるそれを、未来は避けようとして。

「っ！」

咄嗟に、背後にカリバーンを振るつた。

反射的に振るつたその一撃は、背後から迫っていた数個の闇弾を切り裂いた。

先程連射していた闇弾の内幾つかを操作し、未来を背後から狙ったのだらう。

ギリギリで反応し、闇弾を切り裂く事が出来たが

『マスターッ！ 砲撃が！！』

「っ！？ プロテクションッ！」

闇弾に気を取られていたせいで、既に避けられない距離まで迫っていた闇砲に未来は魔力障壁を展開する。

その数、五枚。

魔力は惜しまない。

むしろ、ギリギリまで魔力を使うのが未来の狙いだから。

破！

一枚目、二枚目は一秒と保たずに破られ。

壊！

三枚目、四枚目は一瞬で破られる事はなかったが、それでも闇砲

の前にはたった数秒で壊れ去り。

砕！

五枚目は今までの障壁よりは保ち、闇砲の勢いも削いだが十秒ほどで砕け散った。

「くっ……！」

展開した障壁を全て砕かれ、残った防御手段は左腕の盾のみ。使えるギリギリまでの魔力を込め、未来は闇砲を受け止める。

五枚の障壁で多少は勢いは削いだものの、それでもかなりの勢いが残る闇砲に未来は地面を削りながら後退する。

何とか数メートルで後退するのを止められたが、闇砲の威力の前に反撃する事はできない。

遂には、盾に罅が走り始めた。

だんだんと威力が減ってきてはいるが、反撃できるようになるまでは保たないだろう。

広がっていく罅に、未来は闇砲の直撃を覚悟し。

『Reflection!』

カリバーン、そして盾が輝き、闇砲を反射した。

反射された闇砲は魔鎧装へと突き進み、着弾。

轟音と共に爆煙が魔鎧装を覆った。

「今のは……？」

『……オーバードライブ時のカリバーンの機能の一つ、リフレクシオンです。本来ならまだ使えないのですが、おそらくマスターの意

志に込め、その力の一部を開放したのでしょー」

ルナの説明に、何故闇砲が反射できたのか理解した未来は爆煙を注視する。

爆煙が晴れた先、粉々に砕けた左腕を突き出した魔鎧装が確認できた。

左腕を犠牲に反射された闇砲を防いだのだ。

切り落とされたのではなく粉々に砕かれた事によって別の異形態に変化しない限りは再生できないだろう。

「……………ルナ、周囲の魔力散布状況は？」

『十分です。魔鎧装の間も転用できますよ』

「なら……………リングバインド！」

左腕を向けバインド魔法を発動、左腕を除いた魔鎧装の四肢を拘束する。

更に未来は左腕を掲げスフィアを五つ展開。  
通常よりも大きめのそれを槍状にする。

「見よう見まねだが……………！ ふっ！」

腕を振り下ろし、それに合わせスフィアが放たれる。

放たれた五つの青い閃光は魔鎧装の四肢に突き刺さり、魔鎧装の四肢を固定した。

これは未来がセラの弓術、操を見て真似した拘束術。

セラが突き刺した矢を空間に固定し拘束するのに対し、未来は操作式のスフィアを突き刺す事で拘束した。

「はああああ……っ！」

腰溜めに構えたカリバーンに、魔力を集束させる。周囲に散布した自身の魔力の他に魔鎧装の間までもが集束し、刀身が青く輝く。

更には自身に残されたありったけの魔力も注ぎ込んだ。この一撃で決着をつける為に。

『Shining Saver』

シャイニングセイバー。

それはカコが使う集束砲　シャイニングブレイカーの応用技にして、未来の切り札の一つ。

元々シャイニングブレイカーは未来の父である和樹が使う魔法であり、未来とカコはそれを教わったにすぎなかった。

それを元にカコは応用技、シューティングタイプを生み出し、未来も自身に向けた接近戦仕様に応用した技を作った。

それこそがシャイニングセイバー　別名、煌剣。

未だ改良の余地はあるものの、その威力はかなりのものである。

「シャイニング……！」

呟き、未来は魔鎧装へと駆け出した。

青く青く輝くカリバーンを手に、大切な人達と会う為に！

一気に距離を詰め、カリバーンを振り上げる！

「セイバアアアーツ……！」

煌！

裂昂の気合と共に、未来はカリバーンを振り下ろし。青き輝きが、拘束された魔鎧装を飲み込んだ……。

地平線まで続く荒野に立ち込める爆煙。それは未来と魔鎧装を覆い隠しており、どちらが勝ったのかわからない。

不気味な静けさの後、爆煙が晴れていく。やがて見えたのは 未来の背中、そして。

なかなか楽しませてくれたが……そろそろ終わりか

左腕一本で未来の首を掴み持ち上げ、その首筋に閻剣を突き付けた魔神態となった魔鎧装だった。

「ぐ……っ！ があ……っ！」

苦しそうに呻きながらも、未来はなんとか抜け出そうとする。しかし、渾身の一撃を放った後で思ったように体を動かせない。抜け出そうとすればすれほど、逆に体から力が失われていく。

無駄な抵抗だな……ふっ！

撃！

首を掴む腕を放され、宙に浮いた未来の鳩尾に魔鎧装の閻剣が叩き込まれる。

呻き声を上げる余裕もなく、未来は吹き飛ばす。  
地面を跳ね、数百メートルは吹き飛んだらうか。

「ぐ……！ ごほ……っ！」

咳と共に、血で地面が赤く染まった。

全身の鎧には罅が入り、全身から流れる血で銀色の鎧は赤くなっている。

意識が朦朧とし、視界がぼやける。

「く……！」

それでも、未来は近くの地面に突き刺さる大剣で体を支え立ちあがる。

例え魔力が尽きようとも。

例え傷だらけになろうとも。

未来は諦めず、魔鎧装へと立ち向かう。

ほう、その傷でもまだ立ちあがるか……

頭の上から掛けられた声に未来は顔を上げた。

目に入ったのは当然魔鎧装。

瞬迅態の特性も合わせ持つ魔神態にとってこの距離は一瞬で詰められる。

『っ！ プロテクション！』

無駄だ

未来を守る為、ルナは障壁を展開する。

しかし、闇剣の一振りで障壁は砕かれた。

もうその程度の抵抗しかできないか……。これ以上はいくらやっても楽しめそうにないな

闇剣が振り上げられる。

その刀身に渦巻くは漆黒の闇。

未来一人を消し飛ばすにはあまりに十分すぎる量の闇。

そして、闇剣が振り下ろされ。

眩い光が、未来の視界を覆った。

## 第二十話 精神世界での戦い（後書き）

仲間達の元に帰る為、切り札までを使い魔鎧装へと挑んだ未来。しかし、その切り札は魔鎧装には届かなかった。魔力が尽き、全身傷だらけになった未来へ魔鎧装の剣が振り下ろされる。

その時、金色の煌めきが未来を覆う

次回、第二十一話『グリッター』

想いの力が煌めきとなり

## 第二十一話 グリッター（前書き）

漸く書き終わりました〜。

定期テストがあり、高校最後の文化祭の準備があり、夏期講習があり……なかなか時間が取れず、ここまで時間がかかってしまいました（涙）

次回も時間がかかると思いますがよろしくお願いします。

さて、今回で暴走編は終了！

やっと未来が帰ってきます（笑）

ちなみに文字数は爆発してます（汗）

まさか、ここまで長くなるとは……（汗）

それではどうぞ！

## 第二十一話 グリッター

「え……？」

未来は目の前の光景が理解出来なかった。

闇渦巻く剣が振り下ろされ、斬られると思った瞬間。

地面に突き刺さる幾つもの武器から金色の光が溢れ、その光が魔鎧装に絡みつきその動きを止めたのだ。

ぐ……！ 何だ、これは！？

光から逃れようと魔鎧装がもがくが、一向に光は離れない。  
むしろ、ますます絡みついていく。

煌！

目の前の出来事に呆然としている未来が体を支えている大剣からも光が溢れた。

それは魔鎧装へと突き進み、激突。

それでも止まらず、魔鎧装を未来から遠ざけていく。

1000……500……1000……。

瞬く間に距離を開けていき、10kmは離れた所で魔鎧装吹き飛ばしてから未来の下へと戻ってきた。

「な……！？」

戻ってきた光は人の姿を取り、未来の前に立った。

……その姿に、未来は見覚えがあった。

かつて夢で見た大剣を持つ青年と魔鎧装との戦い。

その青年と全く同じ姿を目の前の光は形作った。

『……初めまして。僕はカリバーンの前マスター、ティトオ・エル  
トライトと言います』

「カリバーンの前マスター……？」

光 ティトオの言葉に未来は疑問符を浮かべる。

確かに魔鎧装は暴走したマスターの魂を取り込みエネルギーとして使う。

だが、取り込まれた魂に意識が残っているなんて事はあるのか……？

そんな未来の疑問に答えるかのように、ティトオは口を開いた。

『人は死んでも魂に少しは意識は残るんだよ。俗に言う前世みたいなね。ただ、ほとんどの人はその意識は残らない。残っていてもほんの少しだけ。……でも、僕の家にはある秘術が伝わっていてね。その秘術を使えば意識を魂に残す事ができるんだ。そして、魂に意識を残せた結果……』

「これは……!?!？」

ティトオが周りを示し、未来は気付いた。

未来を中心に回っている幾つもの光に。

地面に突き刺さる武器から光が溢れ、その数は百を越えている。

『これは歴代の暴走し、魔鎧装にその魂を取り込まれたマスター達の想いの光。……魂に意識を残せた事で、他の魂に残っている意識を呼び覚ます事が出来たんだ。転生する前の魂なら意識が残っている筈だと思ったからね。そして、呼び覚ました意識が他の意識を呼

び覚まし、その意識がまた他の意識を呼び覚まし……ついさつき、全ての取り込まれた魂に残っている意識を呼び覚ませた。ギリギリ間に合ってよかったよ』

テイトオはそこで話を区切ると『流石にその状態のままでは良くないね』と呟き、右腕を未来にかざした。

光が溢れ、未来を包む。

すると傷が治り、鎧も修復されていく。

魔力も戦う前の状態に戻っている。

その事に驚いている未来にテイトオは話を再開した。

『意識を呼び覚ました魂全てが次のマスター　つまり君に力を貸すと言っている。自分達の魂を解き放つてほしいから。そしてなにより、これ以上自分達と同じ状態の魂を増やしたくないから。……213もの魂がね』

「213……!?!」

その数に未来は驚愕した。

213もの魂が自分に力を貸してくれることに。

カリバーンのマスターが213人　いや、暴走していないマスターを含めるとそれ以上か　も存在していたことに。

『……元々カリバーンはマスターが亡くなったらすぐに新しいマスターの下に転移するように設定されています。そして、暴走したマスターは十年と経たず仲間に殺されています。中には一ヶ月ほどで亡くなったマスターも……』

「ルナ、それ以上は言わなくていい……」

『はい……』

罪悪感を感じているのだろう、辛そうに話すルナを未来は止める。未来はルナに責任があるとは思っていないし、それは歴代のカリバーンのマスターも同じだろうから。

そして、未来はルナの言葉にある疑問を感じた。

「じゃあ……ティトオ、あなたは少し前まで生きてたのか……？」

『いや、僕は60年は前の人間だよ。暴走した僕を仲間と兄弟が殺してくれた上、カリバーンに封印を施して虚数空間に封じてくれたんだ』

「仲間と兄弟が……」

『うん、魔鎧装との戦いに負けてしまって……。直前で意識が戻った時に暴走したら殺すよう頼んでおいたんだ』

「あんたも仲間達も……辛かっただろうに……」

『ああ、辛かったさ。……だからこそ、その辛さを君には味合わせたくないんだ』

それは魔鎧装に魂を取り込まれたカリバーンのマスター達全員の意思。

この負の連鎖を止めてほしいという願い。

その思いを受け取り、未来は大剣から手を離し真っ直ぐ立ち上がる。

今度こそ、魔鎧装を打ち倒す為に。

……アアアアアアアアアッ！！！！

遠くから魔鎧装の咆哮が聞こえてくる。

10kmは離れているにも関わらず、空気が震えているのがわかる。

高速で叩きつけられた為に時間がかかったようだが、ついに復活したのだらう。

距離はあるが……すぐに詰められるだらう。

『もう時間はないか……。未来、頼むよ。僕達を解放してくれ……。』

そう言い残すと、ティトオは再び光となって上空へと昇っていく。それに続くように未来の周りを回っていた光も上空へ昇っていく、ティトオの光を中心に渦を巻く。

そして、その輝きを増していき……。

煌！

一際眩い光を放つと真下へと真っ直ぐ突き進み、未来を覆った。

『Glitter energy, absorb』

未来が体の底から力が、魔力が湧いてくるのを感じていると、カリバーンからそんな声が響いた。

同時に、未来を包む鎧が銀から金へ変わり、その形状も僅かに変化した。

左腕も盾状の装甲は無くなり、代わりに指先まで覆ったナツクルに。

その形状はメビウスリング、ナツクルフォームに酷似している。

脚の装甲の膝部分及び胸部装甲の中心に金色のクリスタルが現れ、

そこから青いラインが走っている。

そして、背中から溢れる光が形作った金色の翼。羽ばたく度に金色の粒子が舞い、輝いている。

『Glitter form』

グリッターフォーム。

希望や勇気、願いといった想いの力を変換し自身の力とする形態。憎しみや悲しみといった負の感情を自身の力とする魔鎧装を闇とするなら、この形態はまさに光。

魔鎧装とは対称的な形態だ。

死に損ない共に力を与えられたか……。ククク、どうやらまだまだ楽しめるようだな

金色の装甲を纏い、同じく金色の翼を羽ばたかせる未来に魔鎧装は笑う。

人の命を何とも思っていない魔鎧装に未来は静かに怒った。

「…………絶対にお前を倒す。仲間達の下に帰る為に…………マスター達の魂を解放する為に…………！」

やれるものなら、な…………

互いに武器を構え、対峙する。

未来は右腕のカーバーンを、魔鎧装は両刃剣と斧剣を構え。

轟！

二人の姿が霞むと同時に、光と闇が衝突した。

「はあっ！」

黄金の軌跡を描きながらカリバーンが振り下ろされる。

光の剣となったそれとぶつかり合うのは闇に覆われた斧剣。

Sランクを超える一撃同士がぶつかり合い、衝撃波を生む。

地面を球形に削るそれにどちらも怯まず、魔鎧装は両刃剣を、未  
来はナツクルに包まれた左拳を振るい。

撃！

再び衝撃波を生む。

剣と剣、剣と拳がぶつかり合う度に衝撃波が生じ地面が削れてい  
く。

宙に浮かびながらも互いの武器をぶつけ合う。

「グリッター……！」

ダークネス……！

未来の拳が一際輝き、魔鎧装の両刃剣に闇が集まる。

拳が引かれ、両刃剣が振り上げられ。

「フィスト！」

スラッシュ！

撃！

再びぶつかり合う。

一段と威力が上がったその一撃はまたも互角。

しかし生じた衝撃波の威力は跳ねあがり、互いを吹き飛ばした。

「く……っ！」

ハハハ……ッ！

呻く未来とは対称的に魔鎧装は笑う。

かつてこの空間で戦ったどのマスターよりも強い未来に歓喜して。

未来は光翼を、魔鎧装は闇翼と剣翼を羽ばたかせ、同時に高速機動を開始。

その姿が霞み、光と闇の軌跡を残しながらぶつかり合う。

一瞬の衝突を数回繰り返し、二人は正面からぶつかった。

魔鎧装は両刃剣と斧剣を交差させ、両手で振るわれたカリバーンを防ぐ。

「おおおおおおおおおっ！！！」

叫び、未来はカリバーンを押し込もうとする。

しかし二人の力はほぼ互角、拮抗したまま動く気配はない。

拮抗した状態を何とかしようと、未来は脚を振るう。

膝を、金色のクリスタルを魔鎧装の腹部に押し付け。

煌！

光が放たれ、魔鎧装を吹き飛ばす。

強烈な一撃は魔鎧装の装甲に罅を入れた。

ク……！ ハアッ！

翼を羽ばたかせ体勢を整えると、魔鎧装は闇翼と剣翼を大きく広げる。

同時に放たれる大量の闇弾と闇剣。

音速を突破したそれを、未来は光翼で自身を包み防いだ。

「くう……！」

しかし、敵の弾幕が濃すぎる為に反撃できない。

光翼がそう簡単に破られるとは思っていないが……これでは勝つ事も出来ない。

そこで未来は光翼を勢いよく広げ衝撃波を放つと同時に魔力放出。闇剣と闇弾を弾き、弾かれたそれが新たに打ち出された闇剣と闇弾を撃ち落とす。

そしてできた一瞬の隙に未来は光翼を纏い、魔鎧装へと突撃する。それを阻まんと放たれた闇剣と闇弾は全て光翼に弾かれ未来へは届かず、その勢いを減らすことすらできない。

チ……ッ！

舌打ちし、魔鎧装は斧剣の切っ先を突き出し突撃。

闇翼と剣翼を纏う事で劣っている勢いを補い、更には回転を加え威力を増し。

刹那の後、二人はぶつかった。

轟！

轟音を響かせながら、二人は退かない。

高速で回転する魔鎧装に対し、未来は接触している一点に光を集  
中させ突き進む！

勢いでは勝っているのだから！

……甘いな

「え……？ がっ!？」

しかし、未来は突然の上からの衝撃に弾き飛ばされた。

地面に叩きつけられる未来。

叩きつけられる直前で見たのは魔鎧装の五つの尾がうねっている  
光景だった。

私の武器は無数にある……このように、な！

そう言い放つと同時に魔鎧装の背中の無数の棘が未来へ放たれた。  
まるでミサイルのように火を噴き、未来へ迫る。

「く……!」

迫る棘から逃れる為に未来は空へと飛ぶが、棘はそれを追尾。

幾ら飛んでも追尾してくる棘に未来は逃げるのを止め、カリバー  
ンを構える。

迫る棘を見据え、腰溜めに構えたカリバーンの刀身に光を集束さ  
せる。

「はっ!」

煌!

振るわれたカリバンの軌跡から光が放射状に放たれる。  
それは棘を飲み込み。

爆！

「っ……！？」

未来の予測を遥かに超える爆発を起こした。

いや、正確には未来の予測を遥かに超える爆煙を発生させる  
爆発、だ。

大分距離があるにも関わらず、爆煙は未来を飲み込んだ。

爆煙に覆われ、視界を奪われた未来は周囲を警戒する。

前からか、後ろからか……横からか。

「っ！」

撃！

警戒する未来の真横から触手が襲いかかる。

未来はカリバンの弾き

「が……！？」

同時に背後から別の触手による攻撃を受けた。

光翼により多少は勢いを削げたが、それでも十分な威力を持った  
それに未来は吹き飛ばされ。

「ぐっ！？」

吹き飛ぶ先から再び触手が襲いかかった。

今度はカリバーンで受け止める事ができたとはいえ、不安定な体勢で受け止めた為にやはり吹き飛んでしまう。

吹き飛ぶ度に襲いかかる触手。

爆煙が晴れば反応速度も上がり次々と襲いかかる触手に対応できらるうが……闇を混ぜているのだろうか、光翼を羽ばたかせても一向に晴れる気配はない。

「なら……これなら！」

光翼を一段と強く羽ばたかせ、光を含ませた風を放つ。

すると爆煙に混ざっている闇は光に相殺され、爆煙は晴れた。

姿の見える魔鎧装に未来は高速機動で一気に近づく。

「グリッタースラッシュ！」

斬！

連続で振るわれるは光纏う刃。

振り下ろし、薙ぎ払い、振り上げ、逆袈裟斬り。

それに合わせるように振るわれる魔鎧装の闇剣とぶつかり合い、その度に光と闇が舞い散る。

「グリッター……！」

剣を引き、刀身に十撃分以上の光を集束させる。

集束した光は円錐状になり、更に高速回転を開始。

回転している光とその構えから導き出される次の動作は　突き。

「ランスッ！」

穿！

放たれる、その名の通り突撃槍ランスのような光を纏ったカリバーン。回転しているその突きは魔鎧装に直撃。胸部装甲を穿ち、吹き飛ばした。

カハハハハハ……なかなか楽しませてくれるじゃないか

胸に風穴を開けたまま、魔鎧装は笑う。

そして胸部装甲に開いた穴を再生しようとして。

しかし、いくら闇を込めても穴の周りの装甲に吸収されるばかりで再生することができない。

クハハハ……そういう事か

本当に、楽しませてくれる。

魔鎧装は直接再生させる事を放棄し、周りの装甲を増幅させ穴を覆うと闇剣を構えた。

どうやらその光で付けられた傷は再生できないようだ……。だが、だからこそ楽しめる！

「っ！？」

撃！

そう言い放つと同時に魔鎧装は駆け出した。

未来はギリギリで闇剣を受け止め、鏢迫り合いとなる。  
だが、突進による勢いがついている分、次第に未来が押され始めた。

カハハ……その程度か？　なら、想いの力とやらも大したことないな。お前もかつてのマスター達も、ただの屑だ

「っ！　てめえ……！！」

魔鎧装の言葉に、沸々と怒りが沸いてくる。

次第に未来が魔鎧装を押し返し始めた。

「はあああああっ！！」

轟！

そのまま闇剣を弾き、カリバーンを振り下ろす。

その一撃は魔鎧装を吹き飛ばし、地面に叩きつけた。

未来は纏っている光が僅かだが濁っている事に未来は気付かなかった。

『マスター！　相手の挑発に乗らないでください！　怒りも負の感情なんです、それでは想いの力である光の力を十分に引き出せませんよ！』

「っ！！」

ルナの言葉に、怒りに任せて魔鎧装へ追撃をかけようとしていた未来は動きを止める。

ルナの言う通りだ……昔も怒りに任せて動いて、後悔したじゃないか……。

未来がカリバーンを構え直すと、光の濁りが消えた。

怒りに……負の感情に囚われては光の本来の力を引き出せないから。

ちっ、余計な事を……

『マスターを負の感情に囚われさせたりはしません……絶対に』

それは未来の暴走を止められなかった事への後悔も含まれているのだろっ言葉。

自分自身への誓いを込め、ルナはそう言い放った。

ならば……今までの今までマスターと同じように殺して次を待つだけだ！

叫び、魔鎧装は肩から生える触手を未来へ伸ばす。

しかし、未来はカリバーンを振るい難なく触手を切り落とした。

そして魔鎧装との距離を詰めようとして。

フッ！

「な……っ!?」

突然魔鎧装の尾が地面から飛び出した。

未来はそれを避ける事が出来ず、拘束されてしまう。

カリバーンを使い尾を切り裂こうにも腕まで拘束されている為、それもできない。

ならば、と光弾で尾を破壊しようと光翼を広げ光弾を展開するが

無駄だ

砲

「っ……っ！」

放たれた闇砲によって光翼を撃ち抜かれ、光弾が霧散してしまう。  
更に絞め付けが強くなり、未来を苦しめる。

「が……あ……っ！」

『マスター……っ！ ブレード、展開！』

斬

呻く未来を助ける為、ルナは左腕の甲から光刃を展開。  
同時に尾が切り裂かれ、未来の拘束が解かれた。  
解放された未来は今度こそ魔鎧装との距離を詰め

何……っ！？

接触する直前でその姿が消えた。

そして、未来が現れたのは魔鎧装の背後。  
狙うは残った四つの尾！

「グリッタースラッシュ！」

斬！

振るわれる光を刀身に纏ったカリバーン。

それは残った尾全てを切り飛ばし、更に魔鎧装の二対四枚の翼のうち闇翼を一枚切り裂いた。

これで厄介な触手と尾は封じられ、機動力を削ぐ事もできた。

そう判断し、未来は下手に追撃して反撃を食らうのを警戒し後ろへ下がる。

「グリッター！」

かといって、攻撃を中断する気はない。

光翼から溢れる光を自身の前に集め、巨大な光球を作り出す。

「バーストツ！」

弾！

光球が放たれ、魔鎧装へ突き進む。

その速度は正に光。

瞬く間に魔鎧装へと辿り着き、爆発。

更に爆煙に光翼から光弾を連射し追撃をかける。

カハハ……そうだ！ もっと力を見せてみる！

そんな声が聞こえると同時に爆煙の中から無数の棘が放たれた。

棘は光弾を撃ち落とし、途切れた隙に魔鎧装が爆煙から飛び出してきた。

そして背中中の棘をあえて爆発させ、加速する。

「っ……！」

加速の勢いを加えた突進。  
しかし未来はそれに反応し、僅かに体を動かし回避。  
魔鎧装の斧剣の側面に左腕を押し当てる。

「グリッターブラスト！」

砕！

未来の狙いは武器の破壊。  
流石の斧剣も真横からの砲撃には耐えきれず、中ほどから先を破壊されてしまった。

やるな……だが！

斧剣を捨て、魔鎧装は回転しながら両刃剣を振るう。  
その一撃は砲撃を放った反動により体勢を僅かに崩した未来の腹部に叩き込まれた。  
鎧に罅が入り、地面へと吹き飛ばされる。

「く……！」

吹き飛びながらも未来は一回転し地面に着地。  
地面を砕きつつ、光翼を羽ばたかせ再び空へ上がった。  
そして、カリバーンを構える。

「すう……はぁ……」

深呼吸をし、全身に光を行き渡らせる。

光翼も一対の巨大な翼ではなく、三対のより高速機動に特化した翼に変化した。

その分光弾は連射できなくなったが、魔鎧装に通じないなら意味はない。

ククク……勝負に出るのか。それも面白い

「そんな事言っていられるのも……」

笑う魔鎧装に未来は光翼で自身を包み、同時にその姿は光となって消えた。

「今のうちだ」

次の瞬間に未来が現れたのは魔鎧装の背後。

振り向き様にカリバーンを振り上げ、残ったもう一枚の闇翼を切り落とした。

ほう……。ハッ！

轟！

魔鎧装でさえ反応できない速度で動いた未来に、魔鎧装は感心したように息を洩らし全身から闇を放出。

だが、それは光翼を纏った未来には通じず、何の意味も成さなかった。

そして、開いていく光翼の中に魔鎧装は光球が作られているのを見た。

「グリッターバースト！」

近距離で光球が放たれ、魔鎧装が吹き飛ばされる。

ギリギリで剣翼を羽ばたかせ地面には叩きつけられるのを防ぎ、魔鎧装は未来を見据える。

動きがよくなってきた。

おそらく、グリッターの光の扱いに慣れてきたのだろう。

カハハハ……

魔鎧装が笑みをこぼす。

光にここまで力があるとはな。

魔鎧装自身、負の感情を力とするため闇こそが力の源と考えていたが……想いの力、光の強さを見て、その考えを改めた。

光も闇に匹敵する力の源である、と。

だが、やはり闇こそが最強。貴様を殺し、その事を証明しよう……！

そう呟くと、魔鎧装の装甲が変化し始めた。

変化、とは言っても別の異形態へと変わるわけではない。

魔神態のまま、その姿をより戦闘に特化したものへと変えていく。

残った一対の剣翼は闇翼へと変化し、小さくなった。

大量の棘は一ヶ所に集まり背中の中ほどから生える、先端に爪を持った長大な尾に。

肩や腕に付いていた盾は消え去り、機動力を上げる。

左腕は未来と同じようにガントレット　未来のものよりも禍々しいが　に変化。

右腕に握る両刃の闇剣もその刀身を伸ばし、片刃の大剣へと変化した。

これで今のお前にも対抗できる……まさか、お前を倒す為だけに新しい姿になるとは思いもしなかったぞ

闇剣の切っ先を未来へ向けながら魔鎧装はそう言い放った。  
同時に、その姿が消える。

「っ!？」

未来は咄嗟にカリバーンを前へ振り上げた。

何もない空間に振り上げられたそれはしかし、空振ることなく何かとぶつかり合った。

ほう、この速さに反応するか

ぶつかり合ったのは魔鎧装が振り下ろした闇剣。

先程の未来と同等か、それ以上の速さで一気に距離を詰め闇剣を振り下ろしたのだろう。

それを未来はグリッターにより強化された感覚で反応し、合わせるようにカリバーンを振り上げたのだ。

右腕で持った剣で鋸迫り合いながら、未来と魔鎧装は同時にもう片方の腕を突き出した。

それぞれ光と闇を纏った拳がぶつかり合い、衝撃で互いを吹き飛ばす。

そして宙空に浮かびながら睨みあうも、次の瞬間には再びぶつかり合った。

アアッ!

「っ……っ！」

横薙ぎに振るわれる魔鎧装の尾。

それを未来は左腕で受け止めたが、ミシッと骨が軋むのがわかった。

未来はそれを気にせずにかリバーンを振り上げる。

だが、それは魔鎧装の左腕によって受け止められた。

「おおお……っ！」

アアア……っ！

互いに互いの動きを封じながらも、相手を押し返そうと腕に力を込める。

だが、状態は拮抗したまま変わらない。

やがて同時に離れ、距離を取ると未来は光球を、魔鎧装は数個の闇弾を展開した。

「グリッターバースト！」

「ダークネスショット！」

放たれる光球と闇弾。

闇弾は一つに集まる事で闇球と化し、光球とぶつかり合い、互いに消滅した。

が、その時には既にどちらも次の動作に入っていた。

未来は光を纏ったかリバーンを構え、魔鎧装は大量の空を覆

い隠す程の量の闇弾を展開した。

どちらもデタラメな速さを誇っており、スフィアや砲撃でさえも光速とまでは行かないが、音速を遙かに越えている。

故に、コンマ一秒でも早く、先に動いた方の攻撃が決まる。

弾！

一瞬。

ほんの一瞬だが、魔鎧装の闇弾が先に放たれた。

放たれた闇弾はやはり集まり、大量の闇球となり未来へと降り注ぐ！

しかし、未来は気にせず駆け出した。

『Glittering shield』

駆け出すと同時に未来の体を金色の光が覆う。

光は降り注ぐ闇球を弾き、結果未来の速度を落とす事すらできなかった。

グリタリングシールド。

未来を覆った光の正体であり、グリッターの光を高圧縮させる事でかなりの防御力を誇る光の盾である。

この光ならば、闇球程度なら容易に弾く事ができる。

「グリッター！」

闇球を物ともせず、未来は魔鎧装の懐へ潜り込んだ。

同時にグリタリングシールドに使われていた光をカリバーンに込める。

光を纏ったカリバーンの輝きは、グリッタースラッシュを遙かに

越えている。

「セイバアアア……ッ！」

斬！

カリバーンが振り下ろされる。

だが、魔鎧装は斬られる前にギリギリで後ろへ下がりを避けた。それに対応し、未来はカリバーンを返し振り上げる。

二撃目は避け切れず、魔鎧装は左腕を切り落とされた。

ぐう………！

撃！

左腕を切り落とされながらも、魔鎧装は闇剣を振り上げた。

カリバーンを振りきったばかりの未来にはそれを避ける事も防ぐ事もできず、胴体の装甲を切り裂かれた。

幸い肉体までは届かなかったが……胸部装甲を破壊された為、もう胴体に攻撃を食らう事は出来なくなった。

「っ………！」

魔鎧装の胴体を蹴り飛ばし、未来は距離を取った。

そして、未来はカリバーンを腰溜めに構え、魔鎧装は闇剣を上段に構えた。

今の未来と魔鎧装はほぼ互角。

実力は拮抗しており、少しでも気を抜けばやられるだろう。

それでも、俺は勝つ。勝って、みんなの所に帰るんだ……！

煌！

ゲウ………！

そんな未来の想いに応え、その体を覆う光の輝きが増す。

その輝きは闇である魔鎧装の装甲を焦がし、動きを止めた。

「おおおおおおおおおおおおつ……！！！」

叫びを上げ、未来は駆け出した。

一瞬の後に魔鎧装へと辿り着き、カリバーンを振り下ろす。

斬撃は魔鎧装の胴体を切り裂いたが、傷付けただけで倒す事はできなかった。

グ………！！ ガアアアアアアアアツ！！

轟！

「っ………！」

そして、至近距離で闇の放出を食らってしまった。

魔鎧装の体から溢れ出した闇は先程までよりも強力で、グリタリングシールドを展開していなかった未来には防ぐ事などできなかった。

直撃し、吹き飛ばす未来。

そんな未来に、続けて襲いかかったのは魔鎧装の尾。

首に巻きつき、ギリギリと締め付ける。

「か……は……っ！」

クハハハ……一瞬ヒヤツとしたが、これで終わりだな

苦しげに呻く未来の首に、笑いながら魔鎧装が闇剣を突きつける。首を締め付けられている為、思ったように力が入らない未来は抵抗しようにもできない。

しかし、未来はうつすらと笑みを浮かべていた。

……？ 何故、お前は笑っている？

魔鎧装が問うが、未来は答えない。笑みを浮かべたまま黙っている。

答える気はないか……まあいい。お前はここで死ぬのだからな  
そう言い放ち、魔鎧装が闇剣を横薙ぎに振るおうとした、その瞬間。

斬

左右から飛来した光の斬撃が魔鎧装の尾を切り落とした。

何……！？

「はあっ！」

予想外の事態に戸惑い動きの鈍った魔鎧装に、自由になった未来はカリバーンを振り上げる。

その一撃は魔鎧装の闇翼を一枚切り落とし、更に未来はカリバー



地面に倒れる未来に、笑いながら魔鎧装が襲いかかる。  
勢いをつけて落下してきた魔鎧装はその勢いのまま未来へとぶつ  
かった。

撃！

「かは……っ！」

そして、未来の左腕に魔鎧装は闇剣を突きたてた。  
ずぶり、という音がし、血が溢れる。

魔鎧装はそのまま左腕を切り落とすと、更に未来の胸部を踏みつ  
けた。

「があああ……っ！」

腕を切り落とされた事と踏みつけられた事による痛み未来は呻  
く。

腕を切り落とされた痛みだけでも気を失ってもおかしくないのに、  
更に踏みつけられても意識を保っていられるのは仲間の元へ帰ると  
いう想い故。

しかし、いくら意識を保っているとはいってもこの状況を打開で  
きる策は思いつかない。

否、考える余裕もない。

カハハ……カハハハハハ

笑いながら未来を踏みつける魔鎧装の体から闇が溢れる。

魔鎧装には溢れた闇を操作する気は微塵もなく、闇はただ魔鎧装  
の背後で蠢いている。

撃！

「がああっ！」

一際強く未来を踏みつけると、魔鎧装は空へ飛んだ。そして、溢れる闇を大きく広げ。

穿！

「あああっ！！！」

闇から幾つもの槍が伸び、未来の体に突き刺さった。それも、わざわざ急所以外の場所に。

「あ…… あああ……っ！」

カハハハハハハハハ！！

あまりの激痛に、もはや叫びすら上げられない未来。そんな未来を見て、魔鎧装は更に笑う。今の魔鎧装にはもはや戦いを楽しむという意思は残っていないかった。

あるのはただ相手を殺すという事のみ。それも真綿で絞めるようにじっくりと苦しめて殺すという意味だけだった。

『マスター……！ 今、傷を治します！』

激痛のせいで思ったように光を操作できない未来に代わり、ルナが光を傷口に集める。

切り落とされた左腕は無理だが、それ以外の傷なら治す事ができる。

「あり……がとな……」

『喋らないで下さい……！』

段々と痛みが引いていくのを感じながら、未来は礼を言った。そんな未来にルナはそう言う。いくら治療しているとはいっても、まだまだ危険な状態だから。

ガアアアアアアアアアアアアアッ！！！！

未来の治療をしていると、魔鎧装が叫びを上げ急降下してきた。それに対し、ルナは光を集中させ盾を作り出す。光を圧縮させたその盾の硬度はグリタリングシールド並み。当然、魔鎧装の蹴りは光の盾に防がれた。

『はああ………！』

魔鎧装を受け止めた状態でルナは光を操作し、魔鎧装の左足を覆った。

魔鎧装は慌てて距離を取ろうとするが、間に合わない。光は一際眩く輝くと。

爆！

爆発し、魔鎧装の左足を消し飛ばした。更にルナは光球を作り出し、放つ。光球は魔鎧装の腹部に直撃し、吹き飛ばした。

『邪魔はさせません……！』

そう言い放つとルナは未来治療を再開した。

既に傷口は塞がっており、あとは切り落とされた左腕のみ。

流星に再生させる事はできないが、光を集中させ痛みを取り除く事はできる。

「もう十分だ。ありがとな、ルナ」

『いえ、これが私の役目ですから』

カリバーンを支えにして立ち上がると、未来は魔鎧装が吹き飛んだ方向に視線を向ける。

そこには宙に浮いた魔鎧装が闇を蠢かせていた。

アアア……………アアアアアアアアアアアアアアアアアッ！！  
！

轟！

咆哮。

ただそれだけで魔鎧装の周囲の地面は碎け、空気を振るわせる。

並の人間なら気を失う程の叫びをもともせず、未来は駆け出した。

同時にルナは光を操作し、数個の光弾を放つ。

光弾は蠢く闇に突き刺さり、爆発。

何かの形を成そうとしていた闇を霧散させた。

ルナは先程までは光の細かい操作だけで戦闘には直接的には参加

していなかった。

だが、それでは魔鎧装に勝つのは難しいと判断、ルナも直接戦闘に参加する事になった。

「おおおおおおおおおっ！！」

魔鎧装の懐に潜り込み、カリバーンを振り上げる。

光を纏った斬撃は魔鎧装の胴体を切り裂き、更に未来は一回転。勢いを乗せたカリバーンを横薙ぎに振るった。

グウ……！ アアッ！

胴体への連撃を食らいながらも、魔鎧装は闇剣を振るった。

大上段から振り下ろされるそれを未来は僅かに後ろに下がる事で避けようとする。

しかし、闇剣は峰から闇を吹き出し、加速。

闇剣の切っ先が頭部 顔面の左側をかすった。

かすっただけとはいえ、頭部 それも左目を斬られてしまった。視界の左側が見えなくなる。

「く……っ！」

斬られながらも、未来はカリバーンを振り上げた。

左目を斬られたことにより狙いは僅かにずれたが、魔鎧装の左側頭部を切り裂く。

更に、振り上げられたカリバーンの切っ先が弧を描き、袈裟懸けに振り下ろされる。

だが、それは同じく弧を描いて振り上げられた闇剣とぶつかり合い、衝撃でお互いを吹き飛ばした。

ガアアアアッ！！

「ぐ……っ！」

すぐさま魔鎧装との距離を詰めようとするが、魔鎧装が吐いた闇を諸に食らってしまった。

その衝撃に吹き飛びながらも、未来はカリバーンを振り上げ光の斬撃を放つ。

斬撃は闇を斬りぬけ、魔鎧装の装甲に輝を入れた。

更に、斬撃の後を追うように光球も叩き込まれた。

未来が斬撃を放ったすぐ後にルナが放ったその光球は輝を広げる。

「はっ！」

アアッ！

弾！

そして、未来と魔鎧装はほぼ同時に光弾と闇弾を連射した。

魔鎧装は背後で蠢く闇から、未来は残った四枚の光翼から放つ。

放たれた光弾と闇弾は互いにぶつかり相殺する。

「おおおおおおおおおっ！」

叫びを上げ、未来はカリバーンを上段に構え駆け出した。

刀身に光を纏わせ、一気に振り下ろす。

同じく振り上げられた闇剣とぶつかり、鏝迫り合いとなる。

カハハハハ……！！

「く……っ！」

不気味な笑みを浮かべ、魔鎧装はカリバーンを弾いた。そして刃を返し、未来の首へと振り下ろす。

『Glittering shield!』

対し、未来はグリタリングシールドを部分的に展開。闇剣を防ぐと同時に光を纏った左足を跳ね上げる。

撃！

未来の膝が魔鎧装の腹部に叩き込まれた。

更に、膝部分が輝き砲撃が放たれる。

魔鎧装の腹部に穴が空き、その体が揺れる。

しかし、それを無視し魔鎧装は闇剣に闇を込めた。

ピシッと、部分的に展開したグリタリングシールドに輝が入る。

「っ!？」

未来は咄嗟に頭を下げる。

その直後に頭上を闇剣が通過した。

少しでも頭を下げるのが遅かったら首を跳ね飛ばされていただろう。

「はあっ！」

斬！

空振りした事でがら空きになった魔鎧装の腹部に、カリバーンを

横薙ぎに振るう。

金色の軌跡を残しながら、カリバーンは魔鎧装の腹部を一字に切り裂いた。

そこから未来は流れるような動きで振り上げる。

その一撃は先程の一撃と相まって魔鎧装の胴体に十字の傷を残した。

アアアアアッ!!

轟!

更に追撃をかけようとした瞬間、十字の傷から闇が噴き出した。闇は未来を飲み込み、一気に地面へと叩きつけ、硬化。未来を闇の中に閉じ込めた。

グウウ……!!

魔鎧装の右腕が掲げられ、闇剣を中心に闇が渦巻き長大な槍となる。

引き絞られた闇槍の切っ先が向いているのは未来が閉じ込められた闇!

魔鎧装の右腕がうねり、闇槍が投擲される。

轟!

投擲された闇槍は一瞬で音速を超え、衝撃波を発生させながら突き進む。

それと同時に、硬化した闇を突き破り光球が現れた。

光球は闇槍とぶつかり合うも、大量の闇が込められた闇槍の威力に押され消え去った。

だが、光球により僅かに進路がずれ、闇槍は何もない地面を穿っただけだった。

煌！

未来を閉じ込めた闇に輝が広がり、そこから光が洩れる。

そして、内側から闇が破壊され、輝くカリバーンを振り上げた未来が現れた。

グルウウ……！ ガアアアアアアアアアアツ！！

轟！

魔鎧装が咆哮し、その周りを闇が渦巻く。

その量は今までよりも多く、魔鎧装が扱える全ての闇であるように思えた。

闇は魔鎧装の周りを渦巻きながら掲げられた闇剣へと集まっっていく。

おそらく、この一撃で決めるつもりなのだろう。

魔鎧装に集まる闇から放たれる力の余波だけで地面が割れ、多数の岩が浮かび上がる。

現実世界ならば星一つを破壊できる程の闇が、闇剣に込められていく。

「……ルナ、グリッターの光を全てカリバーンに集める。……耐えられるか？」

『大丈夫です。必ず、皆さんの所へ帰りましょう！』

「……ああ！」

未来はカリバーンをまるで居合いのように構える。  
同時に、その刀身に光が集まった。

光翼に使っていた光やグリタリングシールドに使っていた光など、  
全ての光を集める。

激しい余波を生み出しながら集まる闇とは正反対に、光は静かに  
集まっていく。

やがて、全ての光と闇がそれぞれの剣に込められた。

全てを照らすかのように煌めく光を纏った剣と、全てを飲み込む  
かのような深い闇を纏った剣。

相反する二振りの剣を手に、未来と魔鎧装は睨み合う。

未来は居合い、魔鎧装は上段で剣を構えたまま、動かない。

カツ

「ッ  
！」

ガアッ！

宙に浮かんだ岩から地面に欠片が落ちた音が響くと同時に、両者  
は駆け出した。

既に飛ぶ事さえできない両者は宙に浮かんだ岩を足場に、相手と  
の距離を詰めていく。

「グリツタアアアア………！！！」

ダークネス………ッ！！

互いを間合いに入れると同時に二人は動いた。  
魔鎧装は闇剣を振り下ろし、未来はカリバーンを振り上げる！

「カリバアアアアアアアアアアアアアアアアツ！！！」

ブレエエエエエエエエエエドツ！！！！

戟！

煌！

轟！

光と闇がぶつかり合い、激しい光と衝撃波が発生する。

未来と魔鎧装を中心に衝撃波が広がり、地面が砕け散った。

闇剣と煌剣の威力はほぼ互角。

接触部分から飛び散る光と闇が互いの体を傷つける中、両者は  
退かない。

鏢迫り合いのまま、相手を叩き潰そうと更に力を込める！

ガアアアアアアアアアアアアアアアツ！！！！

叫びと同時に、魔鎧装が押し始めた。

振り上げよりも振り下ろしの方が体重を乗せられる分、力を込め  
やすい。

未来が押されるのも当然と言えるだろう。  
しかし。

「おおおおおおおおおおおおおつ！！！！！！！！」

咆哮。

同時に未来の体から更なる光が溢れた。

未来の仲間の下へ戻るといふ想いと、カリバーンのマスター達の想いが、更なる光を生み出したのだ。

想いが力の源であるが故に可能な更なる力の開放。

それにより煌剣は更に煌めき、闇剣に輝を入れた。

遂には、煌剣が魔鎧装を闇剣ごと切り裂き

そして、未来の精神世界は光に包まれた……。

青空の下、のぞみ達は球形の魔力に包まれた未来を見ていた。

最初は銀色だった魔力球は、一度黒に染まった。

その時は未来は負けたのか……と絶望しそうになったが、次の瞬間金色に変わった。

その暖かい光に希望を取り戻し、のぞみ達は未来を信じた。  
必ず帰ってくる。

煌！

『え………？』

魔力球の内側 未来から眩い光が放たれる。

先程の暖かい光に酷似したその眩い光に、のぞみ達は思わず目をつぶった。

そんなのぞみ達の耳に届いたのは 何かが碎ける音。

同時に光が収まっていき、のぞみ達は未来へ視線を向けた。

「あ………」

のぞみ達の視界に入ったのは収まっていく光　その中心にいる  
未来。

その身を包むのは魔鎧装の黒い鎧ではなく、銀色の装甲。  
それが意味するのは未来が魔鎧装に勝ったという事。

「っ……………」

閉じられていた未来の目が開かれる。  
それを見て、のぞみ達は駆け出した。  
何人かは瞳に涙を溜めていた。

「お兄ちゃん!!」

「お、おい!？」

真っ先に未来に抱きついたのはカコ。  
未来は思わず文句を言いそうになるが、瞳から涙を溢れさせてい  
るカコを見て何も言えなくなった。

「よかった……………よかったよう……………!!」

「……………」

抱きつきながら涙を流すカコの背中を、未来は無言でなでた。  
まだ二人が幼い頃に泣くカコをなだめた時と同じように。

「ごめんな……………本当に、ごめん……………」

背中をなでながら謝る未来に、カコは首を横に振った。

お兄ちゃんは何も悪くない、悪くないよ。

そう言いたいのが、口から洩れるのは嗚咽ばかり。

そんなカコに未来は軽く笑みを浮かべ、次の瞬間に後ろから頭を叩かれた。

「あんたは悪くないわよ。目の前で家族が傷つけられれば誰だって怒る。あんたが暴走したのだってカリバーンのバグが原因だし、誰も悪くないわよ。しいて言うなら悪いのはスカリエツティね」

叩いたのはのぞみだった。

瞳の隅に涙を浮かべながら、それでも泣かずにカコの言いたい事を代わりに言った。

見ると、その場にいる全員が頷いている。

「……みんな、ありがとう」

微笑みを浮かべ、未来は礼を言った。

その次の瞬間、突然未来の体が落ち始めた。

「っ！？ お兄ちゃん！？」

「未来！？」

少しは魔力が回復したカコが慌てて未来を支える。

それでも支えきれずにゆっくりと落下していくのをのぞみが支え、やっと落下は収まった。

そして、未来の顔を覗いてみると。

「すう……すう……」

静かに寝息を立てる未来を見て、のぞみ達は固まった。暴走している間、未来はほとんど寝ていなかったのだ、肉体的にも精神的にも限界だったのだろう。

「……ありがとな……すう……」

「……くすっ」

寝言でも礼を言う未来に、のぞみ達は笑みを浮かべた。そして、未来をしつかりと支える。

「それじゃ、六課に戻りましょ。未来の精密検査もしないといけなし、カコちゃんの治療もしないかね」

そう言って、のぞみ達は未来を支えながら六課へと飛んでいった。

( t o b e c o n t i n u e d …… )

## 第二十一話 グリッター（後書き）

魔 鎧 装 自 重 し る

暴走編を執筆してる最中に何度も思ったことです（笑）

当初の予定では異形態すら登場する予定はありませんでした（笑）

それが、書いてるうちにどんどんパワーアップしていった（笑）

もう魔鎧装は書きたくない（笑）

それでは、また次回でお会いしましょう！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9104g/>

---

魔法少女リリカルなのは Brave

2011年8月22日16時18分発行